

RL78 ファミリ

Renesas Flash Driver RL78 Type11

ユーザーズマニュアル

ルネサスマイクロコンピュータ
RL78 / L23

本資料に記載の全ての情報は本資料発行時点のものであり、ルネサス エレクトロニクスは、予告なしに、本資料に記載した製品または仕様を変更することがあります。
ルネサス エレクトロニクスのホームページなどにより公開される最新情報をご確認ください。

ご注意書き

- 本資料に記載された回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報は、半導体製品の動作例、応用例を説明するものです。回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報を使用する場合、お客様の責任において、お客様の機器・システムを設計ください。これらの使用に起因して生じた損害（お客様または第三者いずれに生じた損害も含まれます。以下同じです。）に関し、当社は、一切その責任を負いません。
 - 当社製品または本資料に記載された製品データ、図、表、プログラム、アルゴリズム、応用回路例等の情報の使用に起因して発生した第三者の特許権、著作権その他の知的財産権に対する侵害またはこれらに関する紛争について、当社は、何らの保証を行うものではなく、また責任を負うものではありません。
 - 当社は、本資料に基づき当社または第三者の特許権、著作権その他の知的財産権を何ら許諾するものではありません。
 - 当社製品を組み込んだ製品の輸出入、製造、販売、利用、配布その他の行為を行うにあたり、第三者保有の技術の利用に関するライセンスが必要となる場合、当該ライセンス取得の判断および取得はお客様の責任において行ってください。
 - 当社製品を、全部または一部を問わず、改造、変更、複製、リバースエンジニアリング、その他、不適切に使用しないでください。かかる改造、変更、複製、リバースエンジニアリング等により生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
 - 当社は、当社製品の品質水準を「標準水準」および「高品質水準」に分類しており、各品質水準は、以下に示す用途に製品が使用されることを意図しております。
標準水準： コンピュータ、OA 機器、通信機器、計測機器、AV 機器、家電、工作機械、パーソナル機器、産業用ロボット等
高品質水準： 輸送機器（自動車、電車、船舶等）、交通制御（信号）、大規模通信機器、金融端末基幹システム、各種安全制御装置等
当社製品は、データシート等により高信頼性、Harsh environment 向け製品と定義しているものを除き、直接生命・身体に危害を及ぼす可能性のある機器・システム（生命維持装置、人体に埋め込み使用するもの等）、もしくは多大な物的損害を発生させるおそれのある機器・システム（宇宙機器と、海底中継器、原子力制御システム、航空機制御システム、プラント基幹システム、軍事機器等）に使用されることを意図しておらず、これらの用途に使用することは想定していません。たとえ、当社が想定していない用途に当社製品を使用したことにより損害が生じても、当社は一切その責任を負いません。
 - あらゆる半導体製品は、外部攻撃からの安全性を 100%保証されているわけではありません。当社ハードウェア/ソフトウェア製品にはセキュリティ対策が組み込まれているものもありますが、これによって、当社は、セキュリティ脆弱性または侵害（当社製品または当社製品が使用されているシステムに対する不正アクセス・不正使用を含みますが、これに限りません。）から生じる責任を負うものではありません。当社は、当社製品または当社製品が使用されたあらゆるシステムが、不正な変更、攻撃、ウイルス、干渉、ハッキング、データの破壊または窃盗その他の不正な侵入行為（「脆弱性問題」といいます。）によって影響を受けないことを保証しません。当社は、脆弱性問題に起因またはこれに関連して生じた損害について、一切責任を負いません。また、法令において認められる限りにおいて、本資料および当社ハードウェア/ソフトウェア製品について、商品性および特定目的との合致に関する保証ならびに第三者の権利を侵害しないことの保証を含め、明示または黙示のいかなる保証も行いません。
 - 当社製品をご使用の際は、最新の製品情報（データシート、ユーザーズマニュアル、アプリケーションノート、信頼性ハンドブックに記載の「半導体デバイスの使用上の一般的な注意事項」等）をご確認の上、当社が指定する最大定格、動作電源電圧範囲、放熱特性、実装条件その他指定条件の範囲内でご使用ください。指定条件の範囲を超えて当社製品をご使用された場合の故障、誤動作の不具合および事故につきましては、当社は、一切その責任を負いません。
 - 当社は、当社製品の品質および信頼性の向上に努めていますが、半導体製品はある確率で故障が発生したり、使用条件によっては誤動作したりする場合があります。また、当社製品は、データシート等において高信頼性、Harsh environment 向け製品と定義しているものを除き、耐放射線設計を行っておりません。仮に当社製品の故障または誤動作が生じた場合であっても、人身事故、火災事故その他社会的損害等を生じさせないよう、お客様の責任において、冗長設計、延焼対策設計、誤動作防止設計等の安全設計およびエージング処理等、お客様の機器・システムとしての出荷保証を行ってください。特に、マイコンソフトウェアは、単独での検証は困難なため、お客様の機器・システムとしての安全検証をお客様の責任で行ってください。
 - 当社製品の環境適合性等の詳細につきましては、製品個別に必ず当社営業窓口までお問合せください。ご使用に際しては、特定の物質の含有・使用を規制する RoHS 指令等、適用される環境関連法令を十分調査のうえ、かかる法令に適合するようご使用ください。かかる法令を遵守しないことにより生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
 - 当社製品および技術を国内外の法令および規則により製造・使用・販売を禁止されている機器・システムに使用することはできません。当社製品および技術を輸出、販売または移転等する場合は、「外国為替及び外国貿易法」その他日本国および適用される外国の輸出管理関連法規を遵守し、それらの定めるところに従い必要な手続きを行ってください。
 - お客様が当社製品を第三者に転売等される場合には、事前に当該第三者に対して、本ご注意書き記載の諸条件を通知する責任を負うものいたします。
 - 本資料の全部または一部を当社の文書による事前の承諾を得ることなく転載または複製することを禁じます。
 - 本資料に記載されている内容または当社製品についてご不明な点がございましたら、当社の営業担当者までお問合せください。
- 注 1. 本資料において使用されている「当社」とは、ルネサス エレクトロニクス株式会社およびルネサス エレクトロニクス株式会社が直接的、間接的に支配する会社をいいます。
- 注 2. 本資料において使用されている「当社製品」とは、注 1 において定義された当社の開発、製造製品をいいます。

(Rev.5.0-1 2020.10)

本社所在地

〒135-0061 東京都江東区豊洲3-2-24（豊洲フォレシア）

www.renesas.com

お問合せ窓口

弊社の製品や技術、ドキュメントの最新情報、最寄の営業お問合せ窓口に関する情報などは、弊社ウェブサイトをご覧ください。

www.renesas.com/contact/

商標について

ルネサスおよびルネサスロゴはルネサス エレクトロニクス株式会社の商標です。すべての商標および登録商標は、それぞれの所有者に帰属します。

© 2025 Renesas Electronics Corporation. All rights reserved.

製品ご使用上の注意事項

ここでは、マイコン製品全体に適用する「使用上の注意事項」について説明します。個別の使用上の注意事項については、本ドキュメントおよびテクニカルアップデートを参照してください。

1. 静電気対策

CMOS 製品の取り扱いの際は静電気防止を心がけてください。CMOS 製品は強い静電気によってゲート絶縁破壊を生じることがあります。運搬や保存の際には、当社が出荷梱包に使用している導電性のトレーやマガジンケース、導電性の緩衝材、金属ケースなどを利用し、組み立て工程にはアースを施してください。プラスチック板上に放置したり、端子を触ったりしないでください。また、CMOS 製品を実装したボードについても同様の扱いをしてください。

2. 電源投入時の処置

電源投入時は、製品の状態は不定です。電源投入時には、LSI の内部回路の状態は不確定であり、レジスタの設定や各端子の状態は不定です。外部リセット端子でリセットする製品の場合、電源投入からリセットが有効になるまでの期間、端子の状態は保証できません。同様に、内蔵パワーオンリセット機能を使用してリセットする製品の場合、電源投入からリセットのかかる一定電圧に達するまでの期間、端子の状態は保証できません。

3. 電源オフ時における入力信号

当該製品の電源がオフ状態のときに、入力信号や入出力プルアップ電源を入れないでください。入力信号や入出力プルアップ電源からの電流注入により、誤動作を引き起こしたり、異常電流が流れ内部素子を劣化させたりする場合があります。資料中に「電源オフ時における入力信号」についての記載のある製品は、その内容を守ってください。

4. 未使用端子の処理

未使用端子は、「未使用端子の処理」に従って処理してください。CMOS 製品の入力端子のインピーダンスは、一般に、ハイインピーダンスとなっています。未使用端子を開放状態で動作させると、誘導現象により、LSI 周辺のノイズが印加され、LSI 内部で貫通電流が流れたり、入力信号と認識されて誤動作を起こす恐れがあります。

5. クロックについて

リセット時は、クロックが安定した後、リセットを解除してください。プログラム実行中のクロック切り替え時は、切り替え先クロックが安定した後に切り替えてください。リセット時、外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックで動作を開始するシステムでは、クロックが十分安定した後、リセットを解除してください。また、プログラムの途中で外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックに切り替える場合は、切り替え先のクロックが十分安定してから切り替えてください。

6. 入力端子の印加波形

入力ノイズや反射波による波形歪みは誤動作の原因になりますので注意してください。CMOS 製品の入力がノイズなどに起因して、 V_{IL} (Max.) から V_{IH} (Min.) までの領域にとどまるような場合は、誤動作を引き起こす恐れがあります。入力レベルが固定の場合はもちろん、 V_{IL} (Max.) から V_{IH} (Min.) までの領域を通過する遷移期間中にチャタリングノイズなどが入らないように使用してください。

7. リザーブアドレス（予約領域）のアクセス禁止

リザーブアドレス（予約領域）のアクセスを禁止します。アドレス領域には、将来の拡張機能用に割り付けられている リザーブアドレス（予約領域）があります。これらのアドレスをアクセスしたときの動作については、保証できませんので、アクセスしないようにしてください。

8. 製品間の相違について

型名の異なる製品に変更する場合は、製品型名ごとにシステム評価試験を実施してください。同じグループのマイコンでも型名が違えば、フラッシュメモリ、レイアウトパターンなどの相違などにより、電気的特性の範囲で、特性値、動作マージン、ノイズ耐量、ノイズ輻射量などが異なる場合があります。型名が異なる製品に変更する場合は、個々の製品ごとにシステム評価試験を実施してください。

このマニュアルの使い方

- 対象者** このユーザーズマニュアルは、RL78/L23 マイクロコントローラのフラッシュ・メモリを操作するシステムを開発するユーザを対象としています。
- 目的** このユーザーズマニュアルは、RL78/L23 マイクロコントローラのフラッシュ・メモリの書き換えを行うために使用する Renesas Flash Driver (RFD) RL78 Type11 の機能を理解していただくことを目的としています。
- 構成** このマニュアルは、大きく分けて次の内容で構成しています。
1. 概要
 2. システム構成
 3. RFD RL78 Type11 API 関数
 4. フラッシュ・メモリ・シーケンサ操作
 5. サンプル・プログラム
 6. RFD RL78 Type11 サンプル・プロジェクトの作成
- 読み方** このマニュアルを読むにあたっては、電気、論理回路、マイクロコントローラ、C 言語とアセンブラの一般的な知識を持つことを想定しています。
- RL78/L23 のハードウェア機能を理解するために、RL78/L23 製品のユーザーズマニュアルを参照してください。
- 凡例**
- データ表記の重み : 左が上位桁、右が下位桁
- アクティブ・ロウの表記 : $\overline{\text{xxx}}$ (端子、信号名称に上線)
- 注 : 本文中につけた注の説明
- 注意 : 気をつけて読んでいただきたい内容
- 備考 : 本文の補足説明
- 数の表記 : 2 進数...xxxx または xxxxB
10 進数...xxxx
16 進数...XXXXH または 0xXXXX
- 2 の累乗を示す単位の表記(アドレス空間、メモリ容量)
- : K (キロ) $2^{10} = 1024$
M (メガ) $2^{20} = 1024^2$
- 関連資料** 関連資料は暫定版の場合がありますが、この資料では「暫定」の表示をしておりません。あらかじめご了承ください。

No	Document Title	Document Number
1	RL78/L23 ユーザーズマニュアル ハードウェア編	R01UH1082JJ
2	E1/E20/E2エミュレータ, E2エミュレータLite ユーザーズマニュアル別冊 (RL78接続時の注意事項)	R20UT1994JJ
3	RL78用 Renesas Flash Driver, EEPROM Emulation Software 対象MCUリスト	R20UT5631JJ

目次

略語	8
専門用語	9
1 概要	11
1.1 製品概要	11
1.1.1 目的	11
1.2 製品内容	11
1.3 製品の特長	12
1.4 動作環境	13
1.5 注意事項	14
1.6 C コンパイラ定義	16
2 システム構成	19
2.1 ファイル構成	19
2.1.1 フォルダ構成	19
2.1.2 ファイル・リスト	20
2.2 RL78/L23 リソース	23
2.2.1 メモリ・マップ	23
2.2.2 ブロックイメージ	24
2.2.3 レジスタ一覧(フラッシュ・メモリ・シーケンサ操作関連)	25
2.2.4 フラッシュ動作モード	26
2.3 RFD RL78 Type11 使用リソース	27
2.3.1 RFD RL78 Type11 使用時のセクション	27
2.3.2 API 関数のコード・サイズとスタック・サイズ	29
3 RFD RL78 Type11 API 関数	31
3.1 RFD RL78 Type11 API 関数 一覧	31
3.1.1 共通フラッシュ制御 API 関数	31
3.1.2 コード・フラッシュ制御 API 関数	32
3.1.3 データ・フラッシュ制御 API 関数	33
3.1.4 エクストラ領域制御 API 関数	34
3.1.5 フック関数	35
3.2 データ型定義	36
3.2.1 データ型	36
3.2.2 グローバル変数	37
3.2.3 列挙型	38
3.2.4 マクロ定義	39
3.3 API 関数仕様	48
3.3.1 共通フラッシュ制御 API 関数仕様	49
3.3.2 コード・フラッシュ制御 API 関数仕様	59

3.3.3	データ・フラッシュ API 制御関数仕様	72
3.3.4	エクストラ領域制御 API 関数仕様	85
3.3.5	フック関数仕様	106
4	フラッシュ・メモリ・シーケンサ操作	114
4.1	フラッシュ・メモリ制御モードの設定	114
4.1.1	特定シーケンス実行手順	115
4.1.2	非書き換えモードからコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順	116
4.1.3	非書き換えモードからデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順	116
4.1.4	非書き換えモード移行手順	116
4.2	フラッシュ・メモリ・シーケンサ用レジスタのクリア	117
4.3	フラッシュ・メモリ・シーケンサの動作周波数設定	118
4.4	フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンド	119
4.4.1	概要	119
4.4.2	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンド	120
4.4.3	エクストラ領域シーケンサ・コマンド	125
4.4.4	フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドの終了判定手順	130
4.4.5	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの強制終了手順	131
4.5	ブート・スワップ / バンク・スワップ機能	132
4.5.1	概要	132
4.5.2	ブート・スワップ機能	132
4.5.3	バンク・スワップ機能	136
4.6	フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能	140
4.6.1	概要	140
4.6.2	フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能の動作	140
4.6.3	フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能の操作	141
4.7	コード・フラッシュ・プログラミング・モード中の割り込み	143
4.7.1	概要	143
4.7.2	割り込み分岐先を変更した場合の動作	143
4.7.3	割り込み分岐先を変更する場合の操作	145
4.8	フラッシュ領域書き換え時のコマンドの実行例	146
4.8.1	コード・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行例	146
4.8.2	データ・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行例	147
4.8.3	エクストラ領域書き換え時のコマンド実行例	148
4.8.4	バンク・プログラミング時のコマンド実行例	149
5	サンプル・プログラム	150
5.1	ファイル構成	150
5.1.1	フォルダ構成	150
5.1.2	ファイル・リスト	151
5.2	データ型定義	154
5.2.1	列挙型	154

5.2.2	マクロ定義	154
5.3	サンプル・プログラム関数	155
5.3.1	コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム	156
5.3.2	データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム	160
5.3.3	エクストラ領域書き換え制御サンプル・プログラム	164
5.3.4	バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラム	167
5.3.5	共通フラッシュ制御サンプル・プログラム	178
5.4	サンプル・プログラム関数仕様	183
5.4.1	コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様	183
5.4.2	データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様	185
5.4.3	エクストラ領域書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様	187
5.4.4	バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラム関数仕様	189
5.4.5	共通サンプル・プログラムの関数仕様	192
6	RFD RL78 Type11 サンプル・プロジェクトの作成	195
6.1	CC-RL コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成	195
6.1.1	サンプル・プロジェクト作成例	196
6.1.2	対象フォルダと対象ファイルの登録例	199
6.1.3	ビルド・ツールの設定	204
6.1.4	デバッグ・ツールの設定	221
6.2	IAR コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成	223
6.2.1	サンプル・プロジェクト作成例	224
6.2.2	対象フォルダと対象ファイルの登録例	226
6.2.3	統合開発環境の設定	231
6.2.4	リンカ設定ファイル(.icf)の設定	236
6.2.5	オンチップ・デバッグの設定	239
6.3	LLVM コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成	240
6.3.1	サンプル・プロジェクト作成例	240
6.3.2	対象フォルダと対象ファイルの登録	244
6.3.3	ビルド・ツールの設定	250
6.3.4	オプション・バイトの設定	254
6.3.5	デバッグ・ツールの設定	255
6.3.6	注意事項	256
6.4	デバイス変更に伴う設定	257
6.4.1	CC-RL コンパイラ環境の設定	259
6.4.2	IAR Embedded Workbench(IAR コンパイラ)を使用する場合の変更箇所	263
6.4.3	LLVM コンパイラを使用する場合の変更箇所	270
6.4.4	サンプル・プログラムの変更箇所(コンパイラ共通)	273
7	改定記録	275
7.1	本版で改定された主な箇所	275

略語

用語	説明
RFD	Renesas Flash Driver (ルネサス・フラッシュ・ドライバ)
API	Application Program Interface. (アプリケーション・プログラム・インタフェース)
BGO	Background operation. データ・フラッシュ書き換え中に、プログラム・メモリ内の命令実行が可能。
FSW	Flash Shield Window (フラッシュ・シールド・ウィンドウ) セルフ・プログラミング実行時に、指定したウィンドウ範囲、またはウィンドウ範囲以外のフラッシュ領域の書き込みおよび消去を禁止にする機能です。
RAM	Random Access Memory ランダムにアクセスできる揮発性メモリ。プログラム実行中に変更する値を保持するメモリです。
ROM	Read Only Memory 不揮発性メモリ。内容変更することができないメモリです。コード・フラッシュ・メモリをROMと表現する場合があります。

専門用語

用語	説明
コード・フラッシュ・メモリ	アプリケーション・コードや定数データを格納するフラッシュ・メモリ ※本文中で、"CF"と略す場合があります。
データ・フラッシュ・メモリ	データを格納するフラッシュ・メモリ ※本文中で、"DF"と略す場合があります。
エクストラ領域	コンフィギュレーション設定領域、セキュリティ設定領域、ブロック保護設定領域、ブート・スワップ設定領域の総称
フラッシュ・メモリ・シーケンサ	RL78マイクロコントローラにはフラッシュ・メモリ制御用の専用回路が搭載されています。本書ではこの回路のことをフラッシュ・メモリ・シーケンサと呼びます。フラッシュ・メモリ・シーケンサに、コード・フラッシュ領域、またはデータ・フラッシュ領域を書き換える「コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ」とエクストラ領域を書き換える「エクストラ領域シーケンサ」の総称です。
フラッシュ・メモリ制御モード	フラッシュ・メモリ・シーケンサの書き換え可否状態(モード)を示します。 - コード・フラッシュ・プログラミング・モード(Code flash programming mode) - データ・フラッシュ・プログラミング・モード(Data flash programming mode) - 非書き換えモード(Non-programmable mode)
コード・フラッシュ・プログラミング・モード	Code flash programming mode コード・フラッシュ・メモリ(および、エクストラ領域)を書き換え可能な状態(モード)を指します。
データ・フラッシュ・プログラミング・モード	Data flash programming mode データ・フラッシュ・メモリを書き換え可能な状態(モード)を指します。
非書き換えモード	Non-programmable mode フラッシュ・メモリ(および エクストラ領域)を書き換え不可の状態(モード)を指します。
セルフ・プログラミング	外部のフラッシュ・プログラミング・ツールを使用せず、ユーザ・プログラムを実行して、フラッシュ・メモリの書き換えを行うこと。
シリアル・プログラミング	外部のフラッシュ・プログラミング・ツールを使用し、フラッシュ・メモリの書き換えを行うこと。
ブート領域	ブート領域は、アドレス 00000H から始まるブート・クラスタ・サイズで示されるサイズを持つ領域。
ブート・クラスタ 0/1	ブート・クラスタはブート・スワップをするためのブロック群で、0/1どちらか片方がブート領域に配置されます。ブート・クラスタ・サイズは、フラッシュ・メモリ・プログラマにより設定できます。 ブート・クラスタのサイズ設定については、対象デバイスのユーザズマニュアルを参照してください。 物理領域名： (ブート・クラスタ・サイズ = 16KB、BTFLG = 1での起動時の例) ブート・クラスタ0 [00000H - 03FFFFH] ブート・クラスタ1 [04000H - 07FFFFH]

ブート・スワップ	ブート・クラスタ0とブート・クラスタ1を置換します。
バンク・プログラミング機能	コード・フラッシュ・メモリのユーザ領域を2つのバンク領域に分け、片方のバンク領域(起動バンク)でユーザ・プログラムを実行しながらもう片方のバンク領域(書き換えバンク)のプログラムを更新します。
バンク・プログラミング・モード	バンク・プログラミング機能を実行するためのフラッシュ・メモリを書き換えるモードを指します。
起動バンク	バンク・プログラミング機能時に、コード・フラッシュ・メモリのユーザ領域を2つのバンク領域に分けた前半のユーザ・プログラムを実行する側のバンク領域。
書き換えバンク	バンク・プログラミング機能時に、コード・フラッシュ・メモリのユーザ領域を2つのバンク領域に分けた後半の書き換える側のバンク領域。
バンク・スワップ機能	起動バンクと書き換えバンクを置換します。

1 概要

1.1 製品概要

Renesas Flash Driver(RFD) RL78 Type11 は、RL78/L23 のフラッシュ・メモリ内のデータを書き換えるためのソフトウェアです。

1.1.1 目的

本書の目的は、RFD RL78 Type11 に関する情報を記述することです。

1.2 製品内容

RFD RL78 Type11 の API 関数をユーザ・プログラムから呼び出すことにより、コード・フラッシュ・メモリ、またはデータ・フラッシュ・メモリの内容を書き換えることができます。

RFD RL78 Type11 は、以下を含んでいます。

- ・本ユーザズマニュアル
- ・RL78/L23 のデータ・フラッシュ・メモリとコード・フラッシュ・メモリを操作する RFD のソース・コード・ファイル。
- ・データ・フラッシュ・メモリ、コード・フラッシュ・メモリ、エクストラ領域の内容を消去、書き込みするサンプル・プログラム。

1.3 製品の特長

RFD RL78 Type11 は、フラッシュ・メモリ制御回路用コマンドの処理フローに基づいて、フラッシュの書き換え操作を行います。それぞれの API は、1 つ、もしくは複数の関数で構成されており、各関数とユーザで行う処理を組み合わせることで実現します。これは、ユーザ・アプリケーションに依存する処理、例えばタイムアウト処理のように、タイムアウト値がユーザ・アプリケーション・プログラムの実行条件によって異なるケースがあり、柔軟に対応できるよう、このような構成を採用しています。

ユーザ・アプリケーションが、RFD RL78 Type11 の API 関数を使ってフラッシュ・メモリを操作するときのイメージを図 1-1 に示します。

RFD RL78 Type11 では、複数の API 関数とユーザ・プログラムで行うべき処理を組み合わせる処理の例をサンプル・プログラムとして提供しています。フラッシュ操作処理をアプリケーションに組み込む際は、このサンプル・プログラムを参考にしてください。

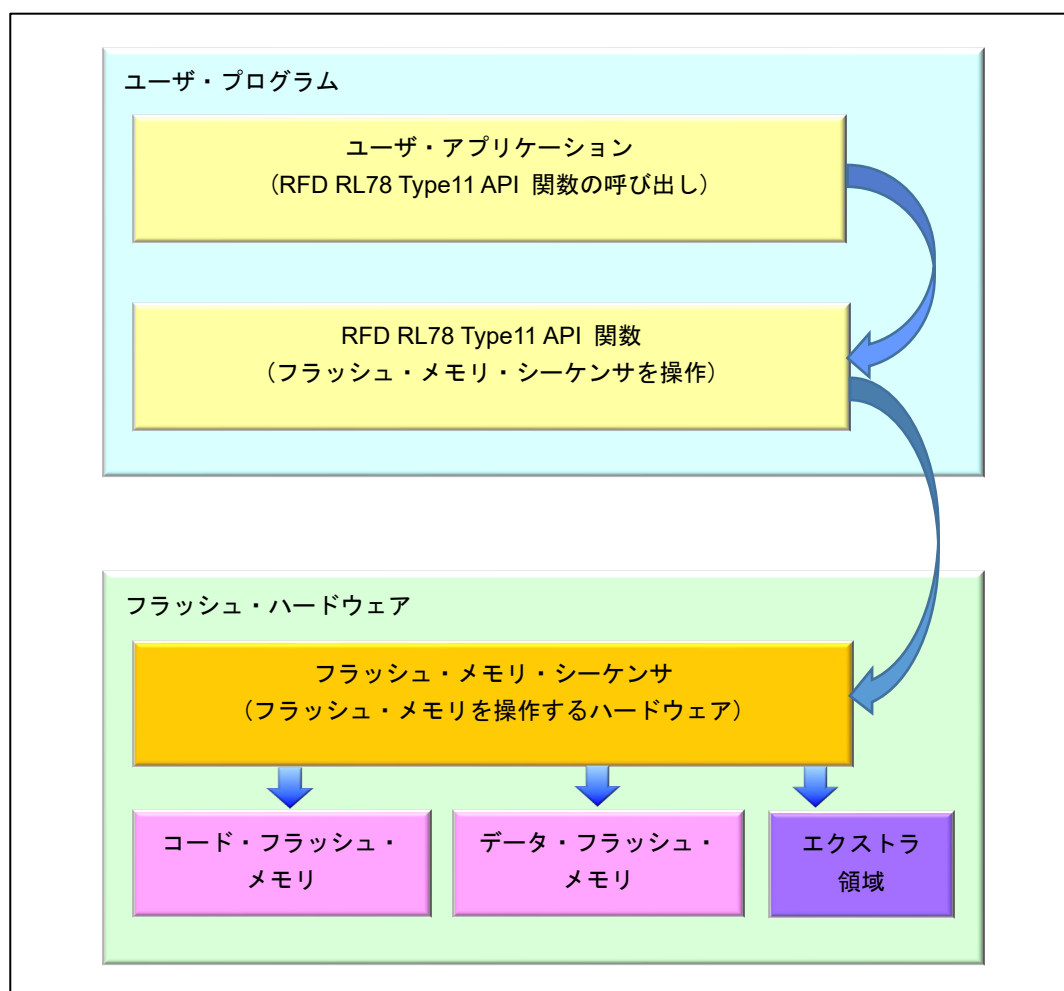


図 1-1 RFD RL78 Type11 の API 関数を使ったフラッシュ・メモリの操作イメージ

1.4 動作環境

- ホスト・マシン

動作環境は、ホスト・マシンには依存しませんが、C コンパイラ・パッケージ、デバッガおよび、エミュレータが動作する環境が必要となります。（RFD RL78 Type11 の開発は Windows10 Enterprise で実施）

- C コンパイラ・パッケージ

RFD RL78 Type11 の対象の C コンパイラ・パッケージを表 1-1 に示します。

表 1-1 対象の C コンパイラ・パッケージ

パッケージ	統合開発環境	メーカー	バージョン
CC-RL コンパイラ	CS+, e ² studio	Renesas Electronics	V1.15 以降
IAR コンパイラ	IAR Embedded Workbench [®] for Renesas RL78	IAR システムズ [®]	V5.10.3 以降
LLVM コンパイラ	e ² studio	(オープンソースソフトウェア)	V17.0.1.202412 以降

注) 統合開発環境、およびコンパイラは、対象デバイスをサポートしている必要があります。

- エミュレータ

動作確認したエミュレータを表 1-2 に示します。

表 1-2 動作確認したエミュレータ

エミュレータ	メーカー
E2 エミュレータ	Renesas Electronics
E2 エミュレータ Lite	Renesas Electronics

- ターゲット MCU

RL78/L23

- Renesas Flash Driver(RFD) RL78 Type11

本資料に対応している RFD RL78 Type11 パッケージを表 1-3 に示します。

表 1-3 RFD RL78 Type11 パッケージ

パッケージ	メーカー	パッケージ・バージョン
RFD RL78 Type11	Renesas Electronics	V1.00

1.5 注意事項

(1) コード・フラッシュ/エクストラ領域の書き換え操作

コード・フラッシュ/エクストラ領域を書き換え操作する場合は、実行するプログラムをRAMに配置してください。但し、バンク・プログラミング・モードでコード・フラッシュ書き換え操作する場合は、実行するプログラムをROMに配置してください。

(2) データ・フラッシュ領域を操作する場合の前提条件

データ・フラッシュ領域を操作する前に、必ず、データ・フラッシュ・コントロール・レジスタ (DFLCTL レジスタ) の DFLEN ビット [bit0] = 1 (データ・フラッシュのアクセス許可) に設定しておく必要があります。

(3) フラッシュ・メモリ書き換え操作中のプログラム実行

RL78/L23 のセルフ・プログラミングは、フラッシュ・メモリ・シーケンサを使用し、フラッシュ・メモリの書き換えを制御します。フラッシュ・メモリの書き換えが可能な"フラッシュ・メモリ制御モード"では、操作対象のフラッシュ・メモリは参照できなくなります。但し、バンク・プログラミング・モード中は、起動バンクのみ参照可能です。

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードでは、コード・フラッシュ・メモリを参照することができません。コード・フラッシュ・プログラミング・モード中に実行するROM(コード・フラッシュ・メモリ)上のRFD RL78 Type11の関数、ユーザ・プログラム、およびそれぞれの参照データは、事前にRAMへコピーして、RAM上で実行、参照する必要があります。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モードでは、データ・フラッシュ・メモリを参照することができません。データ・フラッシュ・プログラミング・モード中に参照するデータは、事前にRAMへコピーして、RAM上で参照する必要があります。

(4) セルフ・プログラミング中のクロック条件

セルフ・プログラミング中は、高速オンチップ・オシレータを動作させておく必要があります。

中速オンチップ・オシレータは停止(MIOEN = 0)させ、メイン・オンチップ・オシレータ・クロック(fOCO)は高速オンチップ・オシレータを選択(MCM1 = 0)してください。また、セルフ・プログラミングを実行する場合は、メイン・システム・クロックを使用し、X1 発振回路、または、高速オンチップ・オシレータを選択してください。中速オンチップ・オシレータやサブシステム・クロックでセルフ・プログラミングを実行することはできません。

※セルフ・プログラミング中のクロック設定については、対象となるRL78マイクロコントローラのユーザーズマニュアルを参照してください。

(5) オンチップ・デバッガでセルフ・プログラミングのデバッグをする場合の注意事項

オンチップ・デバッガでセルフ・プログラミングのデバッグをする場合、デバッグ実行時にRAMの先頭アドレスから128byteの領域を使用するため、この領域を空けてください。それと同時に、ご使用の開発環境がCS+, e² studio の場合は、デバッガでフラッシュのセルフ・プログラミングを行う設定をしておく必要があります。

- ・CS+の設定例：プロジェクトの"RL78 E2 [Lite](デバッグ・ツール)"から"接続用設定"タブを選択、"フラッシュ"の「Flashのセルフ・プログラミングを行う」を「はい」に設定します。
- ・e² studio の設定例：プロジェクトの"プロパティ"から"実行/デバッグ設定"を選択し、対象の"HardwareDebug"設定を編集します。"Debugger"タブを選択後、"Connection Settings"タブを選択し、表示された「フラッシュのセルフ・プログラミングを行う」を「はい」に設定します。

(6) CC-RL コンパイラ使用時に ROM から RAM への転送処理を実行する場合の注意事項

CC-RL コンパイラ使用時に main 関数から Sample_INITSCT_xxxx 関数を呼び出しています (xxxx = CodeFlash, DataFlash, Extra or BankSwap)。この関数は、RFD RL78 Type11 が RAM で使用するプログラムとデータを ROM から RAM へコピーする処理を実行します。

但し、この処理を CC-RL コンパイラ機能で cstart.asm ファイル内のスタートアップ・ルーチンで実行する場合(初期化テーブルを利用した RAM 領域セクションの初期化処理【V1.12 以降】)、下記設定が必要です。

- リンカで"-ram_init_table_section"を指定。
 - **アセンブル・オプション**のマクロを定義する欄に"**__USE_RAM_INIT_TABLE**"を指定。
- ※詳細は CC-RL コンパイラ、及び開発環境のユーザーズマニュアルを参照してください。

この時、Sample_INITSCT_xxxx 関数の ROM から RAM へコピーする処理が重複する為、"コンパイラ・オプション"で同じ[定義マクロ]を指定して、Sample_INITSCT_xxxx 関数の処理を無効化する必要があります。

- **コンパイラ・オプション**のマクロを定義する欄に"**__USE_RAM_INIT_TABLE**"を指定。

(7) バンク・スワップ実行後にオンチップ・デバッグ接続する場合の注意事項

バンク・スワップを実行し、バンク 0 とバンク 1 が入れ替わった状態で書き換えバンク側のオプション・バイトとオンチップ・デバッグ・セキュリティ ID が書かれていない状態では、オンチップ・デバッグを接続できなくなります。バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御実行、デバッグ切断後、再接続でのプログラムダウンロードで書き換えバンク側のオプション・バイトとオンチップ・デバッグ・セキュリティ ID を消去しないように、各統合開発環境を設定しておく必要があります。

- ・ CS+の設定例：プロジェクトの"RL78 E2 [Lite](デバッグ・ツール)"から"ダウンロード・ファイル設定"タブを選択、"ダウンロード"の「ダウンロード・モードの選択」で「データ優先」を選択します。
- ・ e² studio(CC-RL)の設定例：プロジェクトの"プロパティ"から"実行/デバッグ設定"を選択し、対象の"HardwareDebug"設定を編集します。"Debugger"タブを選択後、"Connection Settings"タブを選択し、表示された"フラッシュ"項目の「起動時にフラッシュ ROM を消去」を「いいえ」に設定します。
- ・ IAR(Embedded Workbench)の設定例："E2 Lite ハードウェア設定"画面で、"次の ID チェックの前にフラッシュを消去"のチェックを外します。
- ・ e² studio(LLVM)の設定例：
デバッグ・モニタ領域を 0xff で充填する記述を追加します。(*.ld ファイル、vects.c ファイル)

- *.ld ファイル：

```
.debug_monitor 0xCE : AT(0xCE)
{
    KEEP(*(.debug_monitor))
}> OCDSTAD
```

- vects.c ファイル：

```
const unsigned char Debug_Monitor[] __attribute__((section (".debug_monitor"))) = {
    0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff, 0xff
};
```

※もし、誤って書き換えバンク側のオプション・バイトとオンチップ・デバッグ・セキュリティ ID が消去され、デバッグの起動に問題が生じる場合は、専用フラッシュ・メモリ・プログラムで消去(消去オプションで"チップ消去"を選択)を実行、チップを初期状態に戻して、最初からやり直してください。

1.6 C コンパイラ定義

RFD RL78 Type11 のヘッダ・ファイル(r_rfd_compiler.h)に記述する対象コンパイラの定義を示します。

コンパイラごとに異なる記述が必要なため、使用しているコンパイラを"r_rfd_compiler.h"ファイルで認識し、対象のコンパイラ用の定義を使用します。

- ・ C コンパイラの定義

- CC-RL コンパイラの定義 :

- "__CCRL__"が定義されている場合

- #define COMPILER_CC (1)

- IAR コンパイラ :

- "__IAR_SYSTEMS_ICC__"が定義されている場合

- #define COMPILER_IAR (2)

- LLVM コンパイラの定義:

- "__llvm__"が定義されている場合

- #define COMPILER_LLVM (3)

<r_rfd_compiler.h ファイル内の記述>

```
/* Compiler definition */
#define COMPILER_CC      (1)
#define COMPILER_IAR    (2)
#define COMPILER_LLVM   (3)

#if defined (__llvm__)
    #define COMPILER COMPILER_LLVM
#elif defined (__CCRL__)
    #define COMPILER COMPILER_CC
#elif defined (__IAR_SYSTEMS_ICC__)
    #define COMPILER COMPILER_IAR
#else
    /* Unknown compiler error */
    #error "Non-supported compiler."
#endif

/* Compiler dependent definition */
#if (COMPILER_CC == COMPILER)
    #define R_RFD_FAR_FUNC                __far
    #define R_RFD_NO_OPERATION            __nop
    #define R_RFD_DISABLE_INTERRUPT      __DI
    #define R_RFD_ENABLE_INTERRUPT      __EI
    #define R_RFD_GET_PSW_IE_STATE      __get_psw
    #define R_RFD_IS_PSW_IE_ENABLE(u08_psw_ie_state) (0u != ((u08_psw_ie_state) & 0x80u))
#elif (COMPILER_IAR == COMPILER)
    #define R_RFD_FAR_FUNC                __far_func
    #define R_RFD_NO_OPERATION            __no_operation
    #define R_RFD_DISABLE_INTERRUPT      __disable_interrupt
    #define R_RFD_ENABLE_INTERRUPT      __enable_interrupt
    #define R_RFD_GET_PSW_IE_STATE      __get_interrupt_state
    #define R_RFD_IS_PSW_IE_ENABLE(u08_psw_ie_state) (0u != ((u08_psw_ie_state) & 0x80u))
#elif (COMPILER_LLVM == COMPILER)
    #define R_RFD_FAR_FUNC                __far
    #define R_RFD_NO_OPERATION            __nop
    #define R_RFD_DISABLE_INTERRUPT      __DI
    #define R_RFD_ENABLE_INTERRUPT      __EI
    #define R_RFD_GET_PSW_IE_STATE      (uint8_t)__builtin_rl78_pswie
    #define R_RFD_IS_PSW_IE_ENABLE(u08_psw_ie_state) (0u != (u08_psw_ie_state))
#else
    /* Unknown compiler error */
    #error "Non-supported compiler."
#endif
```

・ C コンパイラ・オプション

以下に、動作確認した C コンパイラ・オプションを示します。

- [CC-RL(CS+)]

Major compile options:

-cpu=S3 -g -g_line -lang=c99

- [IAR(Embedded Workbench)]

Major compile options:

--core s3 --calling_convention v2 --code_model far --data_model near -e -OI --no_cse --no_unroll --no_inline
--no_code_motion --no_tbaa --no_cross_call --no_scheduling --no_clustering --debug

- [LLVM(e² studio)]

Major compile options:

-Og -ffunction-sections -fdata-sections -fdiagnostics-parseable-fixits -Wunused -Wuninitialized -Wall
-Wmissing-declarations -Wconversion -Wpointer-arith -Wshadow -Waggregate-return -g -mcpu=s3

2 システム構成

2.1 ファイル構成

2.1.1 フォルダ構成

RFD RL78 Type11 のフォルダ構成を図 2-1 に示します。

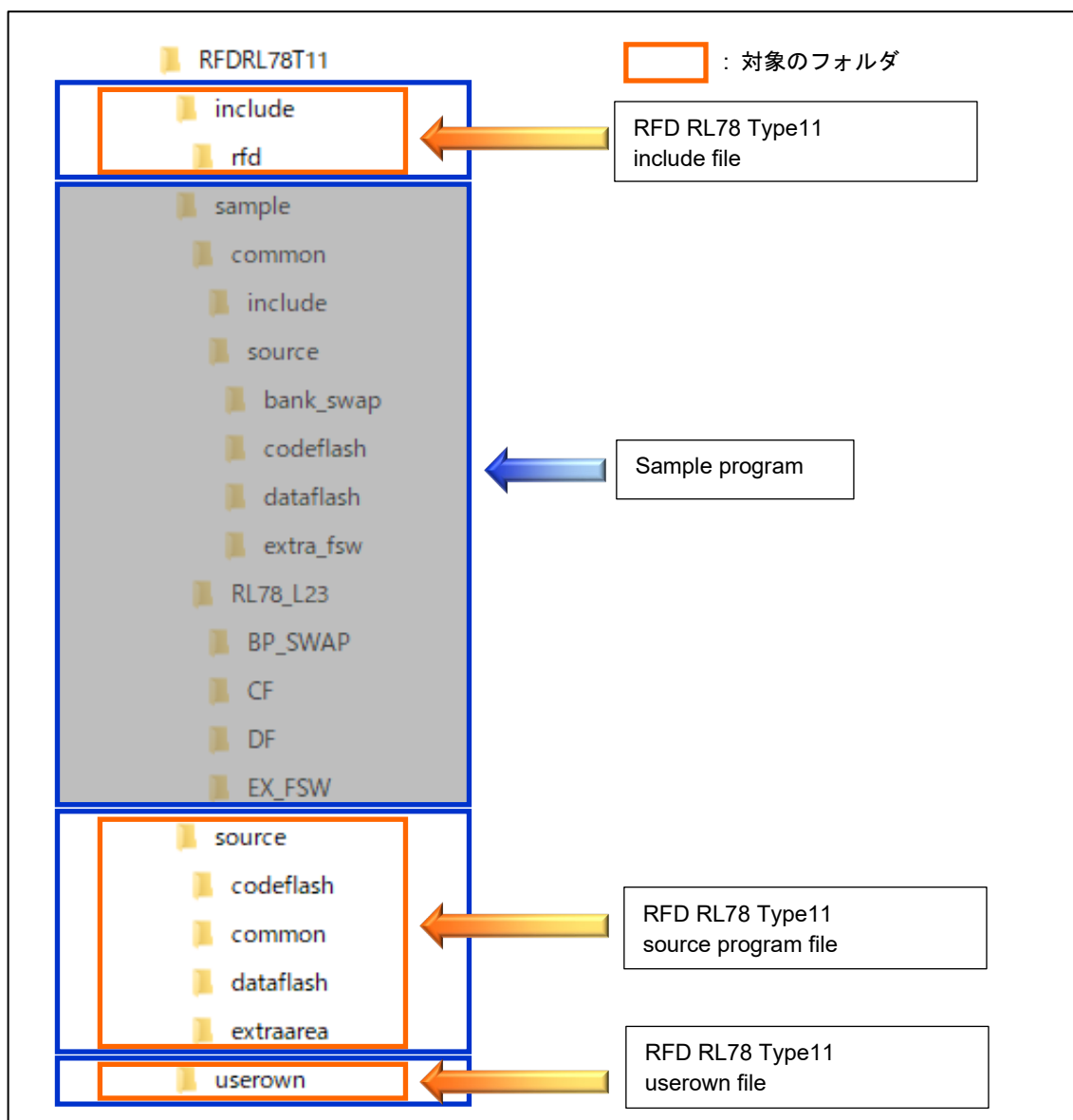


図 2-1 RFD RL78 Type11 のフォルダ構成(Folder Structure)

注) 図 2-1 では RL78/L23 を使用する場合の例を記載しています

サンプル用フォルダについては、「5.1.1 フォルダ構成」をご確認ください。

2.1.2 ファイル・リスト

2.1.2.1 ソース・ファイル・リスト

"source\common\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 2-1 に示します。

表 2-1 "source\common\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_common_api.c	フラッシュ・メモリ操作の共通設定 API 関数ファイル
2	r_rfd_common_control_api.c	フラッシュ・メモリ操作の共通コマンド制御 API 関数ファイル
3	r_rfd_common_get_api.c	フラッシュ・メモリ操作の共通情報取得 API 関数ファイル

"source\codeflash\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 2-2 に示します。

表 2-2 "source\codeflash\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_code_flash_api.c	コード・フラッシュ・メモリ制御 API 関数ファイル
2	r_rfd_code_flash_control_api.c	コード・フラッシュ・メモリ操作のコマンド制御 API 関数ファイル

"source\dataflash\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 2-3 に示します。

表 2-3 "source\dataflash\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_data_flash_api.c	データ・フラッシュ・メモリ制御 API 関数ファイル
2	r_rfd_data_flash_control_api.c	データ・フラッシュ・メモリ操作のコマンド制御 API 関数ファイル

"source\extraarea\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 2-4 に示します。

表 2-4 "source\extraarea\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_extra_area_api.c	エクストラ領域制御 API 関数ファイル
2	r_rfd_extra_area_security_api.c	エクストラ領域のセキュリティ機能制御 API 関数ファイル
3	r_rfd_extra_area_control_api.c	エクストラ領域操作のコマンド制御 API 関数ファイル
4	r_rfd_extra_extension_api.c	即時スワップ実行機能 API 関数ファイル

"userown"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 2-5 に示します。

表 2-5 "userown"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_common_userown.c	RFD RL78 Type11 内でユーザ処理を実施するためのフック関数ファイル
2	r_rfd_code_flash_userown.c	RFD RL78 Type11 内のコード・フラッシュ・メモリ書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数ファイル
3	r_rfd_data_flash_userown.c	RFD RL78 Type11 内のデータ・フラッシュ・メモリ書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数ファイル
4	r_rfd_extra_area_userown.c	RFD RL78 Type11 内のエクストラ領域書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数ファイル

2.1.2.2 ヘッダ・ファイル・リスト

"include\rfd"フォルダ内のプログラム・ヘッダ・ファイルを表 2-6 に示します。

表 2-6 "include\rfd"フォルダ内プログラム・ヘッダ・ファイル

No	ヘッダ・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd.h	共通ヘッダ・ファイルを記述したファイル。 RFD RL78 Type11 使用時にインクルードする必要があるファイル
2	r_rfd_compiler.h	RFD RL78 Type11 で使用するコンパイラごとに異なる定義等を記述したファイル
3	r_rfd_memmap.h	RFD RL78 Type11 で使用するセクションを記述するためのマクロを定義したファイル
4	r_rfd_device.h	RFD RL78 Type11 で使用するハードウェア固有のマクロを定義したファイル
5	r_rfd_types.h	RFD RL78 Type11 で使用する変数の型を定義したファイル
6	r_typedefs.h	RFD RL78 Type11 で使用するデータの型を定義したファイル

"include"フォルダ内のプログラム・ヘッダ・ファイルを表 2-7 に示します。

表 2-7 "include"フォルダ内プログラム・ヘッダ・ファイル

No	ヘッダ・ファイル名	概略(Summary)
1	r_rfd_common_api.h	フラッシュ・メモリ操作の共通設定 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
2	r_rfd_code_flash_api.h	コード・フラッシュ・メモリ制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
3	r_rfd_common_control_api.h	フラッシュ・メモリ操作の共通コマンド制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
4	r_rfd_common_get_api.h	フラッシュ・メモリ操作の共通情報取得 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
5	r_rfd_extra_extension_api.h	フラッシュ・メモリ操作の共通拡張機能 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
6	r_rfd_common_userown.h	ユーザ処理を実施するためのフック関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
7	r_rfd_data_flash_api.h	データ・フラッシュ・メモリ制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
8	r_rfd_extra_area_api.h	エクストラ領域制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
9	r_rfd_extra_area_security_api.h	エクストラ領域のセキュリティ機能制御 API 関数プロトタイプ宣言を定義したファイル
10	r_rfd_code_flash_control_api.h	コード・フラッシュ・メモリ操作のコマンド制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
11	r_rfd_data_flash_control_api.h	データ・フラッシュ・メモリ操作のコマンド制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
12	r_rfd_extra_area_control_api.h	エクストラ領域操作のコマンド制御 API 関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
13	r_rfd_code_flash_userown.h	RFD RL78 Type11 内のコード・フラッシュ・メモリ書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
14	r_rfd_data_flash_userown.h	RFD RL78 Type11 内のデータ・フラッシュ・メモリ書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル
15	r_rfd_extra_area_userown.h	RFD RL78 Type11 内のエクストラ領域書き換えでユーザ処理を実施するためのフック関数のプロトタイプ宣言を定義したファイル

2.2 RL78/L23 リソース

2.2.1 メモリ・マップ

RL78/L23 のコード・フラッシュ:CF (1 ブロック:2Kbyte)、データ・フラッシュ:DF (1 ブロック:256byte)、RAM のメモリ・マップを表 2-8 に示します。

表 2-8 コード・フラッシュ、データ・フラッシュ、RAM のメモリ・マップ

RL78	デバイス型名	コード・フラッシュ:CF	RAM
L23	R7F100LxE (x=F,G,J,L)	64Kbyte (00000H-0FFFFH)	16Kbyte (FBF00H-FFEFFFH)
	R7F100LxG (x=F,G,J,L,M,P)	128Kbyte (00000H-1FFFFH)	16Kbyte (FBF00H-FFEFFFH)
	R7F100LxJ (x=F,G,J,L,M,P)	256Kbyte (00000H-3FFFFH)	32Kbyte (F7F00H-FFEFFFH)
	R7F100LxL (x=F,G,J,L,M,P)	512Kbyte (00000H-7FFFFH)	32Kbyte (F7F00H-FFEFFFH)
	データ・フラッシュ:DF	8Kbyte (F1000H-F2FFFFH) RL78/L23 共通	

2.2.2 ブロックイメージ

RL78/L23 のコード・フラッシュ(CF)、データ・フラッシュ(DF)のブロックイメージの例を図 2-2、図 2-3 に示します。

R7F100LxE (コード・フラッシュ 64Kbyte)

0FFFFH	CF:ブロック 01FH (2Kbyte)
0F800H	
0F7FFH	CF:ブロック 01EH (2Kbyte)
0F000H	
0EFFFH	
01000H	
00FFFH	CF:ブロック 001H (2Kbyte)
00800H	
007FFH	CF:ブロック 000H (2Kbyte)
00000H	

R7F100LxL (コード・フラッシュ 512Kbyte)

7FFFFH	CF:ブロック 0FFH (2Kbyte)
7F800H	
7F7FFH	CF:ブロック 0FEH (2Kbyte)
7F000H	
7EFFFH	CF:ブロック 0FDH (2Kbyte)
7E800H	
7E7FFH	
01000H	
00FFFH	CF:ブロック 001H (2Kbyte)
00800H	
007FFH	CF:ブロック 000H (2Kbyte)
00000H	

図 2-2 コード・フラッシュ のブロックイメージ

R7F100LxE / R7F100LxL (データ・フラッシュ 8Kbyte)

F2FFFH	DF:ブロック 01FH (256 byte)
F2F00H	
F2EFFH	DF:ブロック 01EH (256 byte)
F2E00H	
F2DFFH	
F1200H	
F11FFH	DF:ブロック 001H (256 byte)
F1100H	
F10FFH	DF:ブロック 000H (256 byte)
F1000H	

図 2-3 データ・フラッシュのブロックイメージ

2.2.3 レジスタ一覧(フラッシュ・メモリ・シーケンサ操作関連)

RFD RL78 Type11 が使用する RL78/L23 内蔵レジスタの一覧を表 2-9 に示します。

表 2-9 RFD RL78 Type11 使用 RL78/L23 内蔵レジスタ一覧

Base	Offset	Register Name	Size	Function name / Note
F0000H	90H	DFLCTL	1byte	データ・フラッシュ・コントロール・レジスタ
	AAH	FLMODE	1byte	フラッシュ動作モード選択レジスタ
	ABH	FLMWRP	1byte	フラッシュ動作モード・プロテクト・レジスタ
	B0H	FLSEC	2byte	フラッシュ・セキュリティ・フラグ・モニタ・レジスタ
	B2H	FLFSWS	2byte	フラッシュ FSW モニタ・レジスタ S
	B4H	FLFSWE	2byte	フラッシュ FSW モニタ・レジスタ E
	B6H	FSSET	1byte	フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ
	B7H	FSSE	1byte	フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタ
	C0H	PFCMD	1byte	フラッシュ・プロテクト・コマンド・レジスタ
	C1H	PFS	1byte	フラッシュ・ステータス・レジスタ
	FFH	VECTCTRL	1byte	割り込みベクタ移動許可レジスタ
F0200H	C0H	FLPMC	1byte	フラッシュ・プログラミング・モード・コントロール・レジスタ
	C1H	FLARS	1byte	フラッシュ領域選択レジスタ
	C2H	FLAPL	2byte	フラッシュ・アドレス・ポインタ・レジスタ L
	C4H	FLAPH	1byte	フラッシュ・アドレス・ポインタ・レジスタ H
	C5H	FSSQ	1byte	フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ
	C6H	FLSEDL	2byte	フラッシュ・エンド・アドレス・ポインタ・レジスタ L
	C8H	FLSEDH	1byte	フラッシュ・エンド・アドレス・ポインタ・レジスタ H
	C9H	FLRST	1byte	フラッシュ・レジスタ初期化レジスタ
	CAH	FSASTL	1byte	フラッシュ・メモリ・シーケンサ・ステータス・レジスタ L
	CBH	FSASTH	1byte	フラッシュ・メモリ・シーケンサ・ステータス・レジスタ H
	CCH	FLWL	2byte	フラッシュ・ライト・バッファ・レジスタ L
	CEH	FLWH	2byte	フラッシュ・ライト・バッファ・レジスタ H
	F0400H	80H	FLSIVC0	2byte
82H		FLSIVC1	2byte	割り込みベクタ変更レジスタ 1

2.2.4 フラッシュ動作モード

(1) RL78/L23 のフラッシュ動作モードごとの動作周波数範囲

RL78/L23 のフラッシュ動作モードごとの動作周波数範囲を表 2-10 に示します。

表 2-10 RL78/L23 のフラッシュ動作モードごとの動作周波数範囲

電源電圧 (V_{DD})	フラッシュ動作モード	動作周波数
$1.8\text{ V} \leq V_{DD} \leq 5.5\text{ V}$	HS (高速メイン) モード	1 MHz ~ 32 MHz
	LS (低速メイン) モード	1 MHz ~ 24 MHz
$1.6\text{ V} \leq V_{DD} < 1.8\text{ V}$	HS (高速メイン) モード	1 MHz ~ 2 MHz
	LS (低速メイン) モード	1 MHz ~ 2 MHz

注) LP (低消費メイン) モードでのフラッシュ書き換えはできません。

2.3 RFD RL78 Type11 使用リソース

2.3.1 RFD RL78 Type11 使用時のセクション

2.3.1.1 コード・フラッシュ書き換え時のセクション

コード・フラッシュを書き換える"コード・フラッシュ・プログラミング・モード"では、コード・フラッシュが参照できなくなります。プログラム領域に該当するセクションは、予めROMからRAMへ転送しておき、RAMでプログラムを実行する必要があります。また、RAM配置の初期値付きグローバル変数(RFD_DATA)は、対象のコンパイラの指示に従い、初期値をROMからコピーしておく必要があります。

コード・フラッシュ書き換え時に使用するセクションと配置の一覧を表 2-11 に示します。

表 2-11 コード・フラッシュ書き換え時のセクション

セクション名	内容	配置
RFD_CMN	共通フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_CF	コード・フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	RAM
RFD_DATA	初期値付きグローバル変数のデータ・セクション	RAM
SMP_CF	コード・フラッシュ制御 サンプル関数のプログラム・セクション	RAM

バンク・プログラミング時書き換えバンクを書き換える場合、プログラム領域に該当するセクションは、起動バンク(ROM)へ配置します。RAM配置の初期値付きグローバル変数(RFD_DATA)は、対象のコンパイラの指示に従い、初期値をROMからコピーしておく必要があります。

バンク・プログラミングで書き換えバンクを書き換える時のセクションと配置の一覧を表 2-12 に示します。

表 2-12 バンク・プログラミング時に書き換えバンクを書き換える時のセクション

セクション名	内容	配置
RFD_CMN	共通フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_CF	コード・フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_DATA	初期値付きグローバル変数のデータ・セクション	RAM
SMP_CF	コード・フラッシュ制御 サンプル関数のプログラム・セクション	ROM
SMP_BPS	バンク・スワップ後のプログラム・コード	ROM

2.3.1.2 データ・フラッシュ書き換え時のセクション

RAM 配置の初期値付きグローバル変数(RFD_DATA)は、対象のコンパイラの指示に従い、初期値を ROM からコピーしておく必要があります。

データ・フラッシュ書き換え時に使用するセクションと配置の一覧を表 2-13 に示します。

表 2-13 データ・フラッシュ書き換え時のセクション

セクション名	内容	配置
RFD_CMN	共通フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_DF	データ・フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_DATA	初期値付きグローバル変数のデータ・セクション	RAM
SMP_DF	データ・フラッシュ制御 サンプル関数のプログラム・セクション	ROM

2.3.1.3 エクストラ領域書き換え時のセクション

エクストラ領域を書き換える"コード・フラッシュ・プログラミング・モード"では、コード・フラッシュが参照できなくなります。プログラム領域に該当するセクションは、予め ROM から RAM へ転送しておき、RAM でプログラムを実行する必要があります。また、RAM 配置の初期値付きグローバル変数(RFD_DATA)は、対象のコンパイラの指示に従い、初期値を ROM からコピーしておく必要があります。

エクストラ領域書き換え時に使用するセクションと配置の一覧を表 2-14 に示します。

表 2-14 エクストラ領域書き換え時のセクション

セクション名	内容	配置
RFD_CMN	共通フラッシュ制御 API 関数のプログラム・セクション	ROM
RFD_EX	エクストラ領域制御 API 関数のプログラム・セクション	RAM
RFD_DATA	初期値付きグローバル変数のデータ・セクション	RAM
SMP_EX	エクストラ領域制御 サンプル関数のプログラム・セクション	RAM

2.3.2 API 関数のコード・サイズとスタック・サイズ

RFD RL78 Type11 の API 関数が使用するコード・サイズとスタック・サイズを表 2-15 に示します。

表 2-15 RFD RL78 Type11 の API 関数が使用するコード・サイズとスタック・サイズ

API 関数名	コード・サイズ(Bytes)			スタック・サイズ(Bytes)		
	CC-RL	IAR	LLVM	CC-RL	IAR	LLVM
R_RFD_Init	19	21	18	4	4	4
R_RFD_SetDataFlashAccessMode	15	18	17	4	4	4
R_RFD_ChangeInterruptVector	62	84	68	12	14	12
R_RFD_RestoreInterruptVector	49	66	51	10	10	10
R_RFD_ForceReset	2	2	2	4	4	4
R_RFD_GetSecurityAndBootFlags	6	6	6	4	4	4
R_RFD_GetFSW	46	77	49	10	12	8
R_RFD_EraseCodeFlashReq	34	43	36	4	4	4
R_RFD_WriteCodeFlashReq	28	58	44	4	6	6
R_RFD_BlankCheckCodeFlashReq	34	43	36	4	4	4
R_RFD_SetCFProgrammingMode	60	77	65	10	10	10
R_RFD_SetCFNonProgrammableMode	79	79	74	12	12	12
R_RFD_CheckCFProgrammingMode	10	13	12	4	4	4
R_RFD_CheckCFNonProgrammableMode	11	14	13	4	4	4
R_RFD_CheckCFSeqEndStep1	13	24	13	4	6	4
R_RFD_CheckCFSeqEndStep2	8	19	10	4	6	4
R_RFD_GetCFSeqErrorStatus	8	8	8	4	4	4
R_RFD_ClearCFSeqRegister	11	10	8	4	4	4
R_RFD_ForceStopCFSeq	5	6	5	4	4	4
r_rfd_cf_wait_count	19	19	19	6	6	6
R_RFD_EraseDataFlashReq	26	41	32	4	4	4
R_RFD_WriteDataFlashReq	20	27	23	4	6	6
R_RFD_BlankCheckDataFlashReq	34	76	38	6	12	6
R_RFD_SetDFProgrammingMode	60	77	65	10	10	10
R_RFD_SetDFNonProgrammableMode	79	79	74	12	12	12
R_RFD_CheckDFProgrammingMode	10	13	12	4	4	4
R_RFD_CheckDFNonProgrammableMode	11	14	13	4	4	4
R_RFD_CheckDFSeqEndStep1	13	24	13	4	6	4
R_RFD_CheckDFSeqEndStep2	8	19	10	4	6	4
R_RFD_GetDFSeqErrorStatus	8	8	8	4	4	4
R_RFD_ClearDFSeqRegister	11	10	8	4	4	4
R_RFD_ForceStopDFSeq	5	6	5	4	4	4
r_rfd_df_wait_count	19	19	19	6	6	6
R_RFD_SetExtraEraseProtectReq	26	31	26	4	4	4
R_RFD_SetExtraWriteProtectReq	26	31	26	4	4	4
R_RFD_SetExtraBootAreaProtectReq	26	31	26	4	4	4
R_RFD_SetExtraBootAreaReq	52	82	76	4	6	4

R_RFD_SetExtraFSWProtectReq	29	38	28	4	4	4
R_RFD_SetExtraFSWReq	39	43	43	6	4	8
R_RFD_SetExtraSoftwareReadProtectAreaReq	39	43	43	6	4	8
R_RFD_SetBootAreaImmediately	16	21	18	4	4	4
R_RFD_SetExtraProgrammingMode	60	77	65	10	10	10
R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode	79	79	74	12	12	12
R_RFD_CheckExtraProgrammingMode	10	13	12	4	4	4
R_RFD_CheckExtraNonProgrammableMode	11	14	13	4	4	4
R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1	13	24	13	4	6	4
R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2	6	19	8	4	6	4
R_RFD_GetExtraSeqErrorStatus	8	8	8	4	4	4
R_RFD_ClearExtraSeqRegister	11	10	8	4	4	4
r_rfd_extra_wait_count	19	19	19	6	6	6
R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection	9	9	11	4	4	4
R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection	11	10	9	4	4	4
R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection	9	9	11	4	4	4
R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection	11	10	9	4	4	4
R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection	9	9	11	4	4	4
R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection	11	10	9	4	4	4
R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection	9	9	11	4	4	4
R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection	11	10	9	4	4	4

3 RFD RL78 Type11 API 関数

3.1 RFD RL78 Type11 API 関数 一覧

3.1.1 共通フラッシュ制御 API 関数

RFD RL78 Type11 の共通フラッシュ制御 API 関数一覧を表 3-1 に示します。

表 3-1 RFD RL78 Type11 共通フラッシュ制御 API 関数一覧

	API 関数名	概要
1	R_RFD_Init	引数で指定された周波数をフラッシュ・メモリ・シーケンサに設定し、RFD RL78 Type11 の初期化を行います。
2	R_RFD_SetDataFlashAccessMode	引数で指定されたデータ・フラッシュへのアクセスの許可、または、禁止を設定します。
3	R_RFD_ChangeInterruptVector	全ての割り込みの飛び先を、引数で指定された RAM アドレスに変更します。
4	R_RFD_RestoreInterruptVector	RAM に変更された割り込みの飛び先を、標準の割り込みベクタ・アドレスに戻します。
5	R_RFD_ForceReset	CPU の内部リセットを発生させます。
6	R_RFD_GetSecurityAndBootFlags	セキュリティ・フラグ(各プロテクト・フラグ)とブート領域切り替えフラグの情報を取得します。
7	R_RFD_GetFSW	フラッシュ・シールド・ウィンドウの範囲、フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域、プロテクト・フラグを取得します。

3.1.2 コード・フラッシュ制御 API 関数

RFD RL78 Type11 のコード・フラッシュ制御 API 関数一覧を表 3-2 に示します。

表 3-2 RFD RL78 Type11 コード・フラッシュ制御 API 関数一覧

	API 関数名	概要
1	R_RFD_EraseCodeFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュの消去(1 ブロック)を開始します。
2	R_RFD_WriteCodeFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュの書き込み(4byte)を開始します。
3	R_RFD_BlankCheckCodeFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュのブランク・チェック(1 ブロック)を開始します。
4	R_RFD_SetCFProgrammingMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。
5	R_RFD_SetCFNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
6	R_RFD_CheckCFProgrammingMode	フラッシュ・メモリ制御モードがコード・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します。
7	R_RFD_CheckCFNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。
8	R_RFD_CheckCFSeqEndStep1	起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。
9	R_RFD_CheckCFSeqEndStep2	フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。
10	R_RFD_GetCFSeqErrorStatus	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。
11	R_RFD_ClearCFSeqRegister	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。
12	R_RFD_ForceStopCFSeq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。
13	r_rfd_cf_wait_count	1 カウントで 1μsec として、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループで Wait します。

3.1.3 データ・フラッシュ制御 API 関数

RFD RL78 Type11 のデータ・フラッシュ制御 API 関数一覧を表 3-3 に示します。

表 3-3 RFD RL78 Type11 データ・フラッシュ制御 API 関数一覧

	API 関数名	概要
1	R_RFD_EraseDataFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュの消去(1ブロック)を開始します。
2	R_RFD_WriteDataFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュの書き込み(1byte)を開始します。
3	R_RFD_BlankCheckDataFlashReq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュのブランク・チェック(指定バイト数)を開始します。
4	R_RFD_SetDFProgrammingMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをデータ・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。
5	R_RFD_SetDFNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをデータ・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
6	R_RFD_CheckDFProgrammingMode	フラッシュ・メモリ制御モードがデータ・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します。
7	R_RFD_CheckDFNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。
8	R_RFD_CheckDFSeqEndStep1	起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。
9	R_RFD_CheckDFSeqEndStep2	フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。
10	R_RFD_GetDFSeqErrorStatus	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。
11	R_RFD_ClearDFSeqRegister	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。
12	R_RFD_ForceStopDFSeq	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。
13	r_rfd_df_wait_count	1カウントで1μsecとして、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループでWaitします。

3.1.4 エクストラ領域制御 API 関数

RFD RL78 Type11 のエクストラ領域制御 API 関数一覧を表 3-4 に示します。

表 3-4 RFD RL78 Type11 エクストラ領域制御 API 関数一覧

	API 関数名	概要
1	R_RFD_SetExtraEraseProtectReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブロック消去禁止フラグの書き込みを開始します。
2	R_RFD_SetExtraWriteProtectReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、書き込み禁止フラグの書き込みを開始します。
3	R_RFD_SetExtraBootAreaProtectReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。
4	R_RFD_SetExtraBootAreaReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域切り替えフラグの書き込みを開始します。
5	R_RFD_SetExtraFSWProtectReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。
6	R_RFD_SetExtraFSWReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、引数で指定されたフラッシュ・シールド・ウィンドウの範囲と領域制御の書き込みを開始します。
7	R_RFD_SetExtraSoftwareReadProtectAreaReq	エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・リード・プロテクション領域と、プロテクト・フラグの書き込みを開始します。
8	R_RFD_SetBootAreaImmediately	[ブート・スワップ機能で使用する場合] 引数で指定されたブート・クラスタを、ブート領域に即時設定します。 [バンク・スワップ機能で使用する場合] 引数で指定されたバンクを、起動バンクに即時設定します。
9	R_RFD_SetExtraProgrammingMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。
10	R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
11	R_RFD_CheckExtraProgrammingMode	フラッシュ・メモリ制御モードがコード・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します
12	R_RFD_CheckExtraNonProgrammableMode	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。
13	R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1	起動したエクストラ領域シーケンサの動作終了を確認します。
14	R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2	フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。
15	R_RFD_GetExtraSeqErrorStatus	エクストラ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。
16	R_RFD_ClearExtraSeqRegister	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。
17	r_rfd_extra_wait_count	1 カウントで 1μsec として、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループで Wait します。

3.1.5 フック関数

RFD RL78 Type11 のフック関数一覧を表 3-5 に示します。

表 3-5 RFD RL78 Type11 フック関数一覧

	API 関数名	概要
1	R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。
2	R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。
3	R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。
4	R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。
5	R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。
6	R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。
7	R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。
8	R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。

3.2 データ型定義

3.2.1 データ型

RFD RL78 Type11 のデータ型定義一覧を表 3-6 に示します。

表 3-6 RFD RL78 Type11 データ型定義一覧

Macro value	Type	Description
int8_t	signed char	1byte signed integer
uint8_t	unsigned char	1byte unsigned integer
int16_t	signed short	2byte signed integer
uint16_t	unsigned short	2byte unsigned integer
int32_t	signed long	4byte signed integer
uint32_t	unsigned long	4byte unsigned integer
bool	unsigned char	Boolean (false:0 / true:1)

補足：これらのデータ型は C 言語規格 C99 以降では標準整数型として stdint.h と stdbool.h に定義されています。

3.2.2 グローバル変数

RFD RL78 Type11 で使用するグローバル変数を以下に示します。

(1) g_u08_change_interrupt_vector_flag

型 / 名称	uint8_t g_u08_change_interrupt_vector_flag
初期値	0x00 (R_RFD_VALUE_U08_INIT_VARIABLE)
説明	R_RFD_ChangeInterruptVector 関数の実行フラグ - R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_ON : 0x55u - R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_OFF : 0x00u
定義ファイル	r_rfd_common_api.c

(2) g_u08_cpu_frequency

型 / 名称	uint8_t g_u08_cpu_frequency
初期値	0x00 (R_RFD_VALUE_U08_INIT_VARIABLE)
説明	CPU 動作周波数 [RL78/L23:1~32(MHz)] - (CPU 動作周波数 - 1) の値 : 0x00u-0x1Fu(0-31)
定義ファイル	r_rfd_common_api.c

(3) sg_u08_xx_psw_ie_state

型 / 名称	static uint8_t sg_u08_psw_ie_state static uint8_t sg_u08_cf_psw_ie_state static uint8_t sg_u08_df_psw_ie_state static uint8_t sg_u08_extra_psw_ie_state
初期値	0x00 (R_RFD_VALUE_U08_INIT_VARIABLE)
説明	PSW の割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避/復帰するための保存データ - 割り込み禁止 : 0x00u - 割り込み許可 : 0x80u
定義ファイル	r_rfd_common_userown.c r_rfd_code_flash_userown.c r_rfd_data_flash_userown.c r_rfd_extra_area_userown.c

注) 初期値ありグローバル変数へ代入する初期値を ROM 上の Data セクションから RAM へコピーする処理はユーザが行う必要があります。

3.2.3 列挙型

- e_rfd_df_access (列挙変数名 : e_rfd_df_access_t)

データ・フラッシュのアクセス制御

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_DISABLE	0x00	データ・フラッシュ・アクセス禁止
R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_ENABLE	0x01	データ・フラッシュ・アクセス許可

- e_rfd_boot_cluster (列挙変数名 : e_rfd_boot_cluster_t)

ブート・クラスタ番号

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1	0x00	ブート・クラスタ 1
R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0	0x01	ブート・クラスタ 0

- e_rfd_fsw_mode (列挙変数名 : e_rfd_fsw_mode_t)

フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE	0x00	インサイド・シールド
R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE	0x01	アウトサイド・シールド

- e_rfd_protect (列挙変数名 : e_rfd_protect_t)

プロテクト ON/OFF

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_ENUM_PROTECT_ON	0x00	プロテクト・オン
R_RFD_ENUM_PROTECT_OFF	0x01	プロテクト・オフ

- e_rfd_ret (列挙変数名 : e_rfd_ret_t)

戻り値

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_ENUM_RET_STS_OK	0x00	正常終了
R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY	0x01	実行中
R_RFD_ENUM_RET_ERR_PARAMETER	0x10	パラメータ・エラー
R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED	0x11	モード不一致エラー

3.2.4 マクロ定義

3.2.4.1 RFD グローバル・データ設定用マクロ

- 16bit/8bit データ・マスク用マクロ

データの指定サイズ外の bit を 0 で AND してマスクします。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_8BIT	0xFFu	8bit マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_16BIT	0xFFFFu	16bit マスク値

- データ 16bit/8bit シフト用マクロ

32bit のデータを 16bit/8bit シフト、16bit のデータを 8bit シフトします。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_SHIFT_8BIT	8u	8bit シフト値
R_RFD_VALUE_U08_SHIFT_16BIT	16u	16bit シフト値

- g_u08_change_interrupt_vector_flag グローバル・データ用マクロ

割り込みの飛び先を ROM 上のベクタテーブルで指定しているか RAM の特定アドレスかを示します。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_ON	0x55u	R_RFD_ChangeInterruptVector関数実行済、 割り込みの飛び先は RAM アドレス
R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_OFF	0x00u	R_RFD_ChangeInterruptVector関数実行未、 割り込みの飛び先は ROM 上ベクタテーブル

- 初期値設定用マクロ

グローバル変数の初期値を定義。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_INIT_VARIABLE	0x00u	グローバル変数の初期値
R_RFD_VALUE_U08_INIT_FLAG	0x00u	Flag の初期値

3.2.4.2 RL78/L23 内蔵レジスタ、エクストラ領域設定用マクロ

- DFLCTL(データ・フラッシュ・コントロール・レジスタ)用マクロ

データ・フラッシュへのアクセス許可/禁止を設定します。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_DFLCTL (対象ビット[DFLEN] : R_RFD_REG_U01_DFLCTL_DFLEN)

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U01_DFLCTL_DATA_FLASH_ACCESS_DISABLE	0u	データ・フラッシュのアクセス禁止
R_RFD_VALUE_U01_DFLCTL_DATA_FLASH_ACCESS_ENABLE	1u	データ・フラッシュのアクセス許可

- FLARS(フラッシュ領域選択レジスタ)用マクロ

アクセスの対象領域を指定する。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FLARS

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA	0x00u	ユーザ領域指定
R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA	0x01u	エクストラ領域指定

- FSSQ(フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ)用マクロ 1

フラッシュ・メモリ・シーケンサ起動時の各コマンドを定義。

[bit7] SQST : シーケンサの動作開始/停止ビットです。SQST=1 でシーケンサは動作開始します。

[bit2-0] SQMD2-0 : フラッシュ・メモリ・シーケンサの各コマンド

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FSSQ

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_WRITE	0x81u	フラッシュ・メモリの書き込みコマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_BLANKCHECK_CF	0x83u	コード・フラッシュ・メモリのブランク・チェック・コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_BLANKCHECK_DF	0x8Bu	データ・フラッシュ・メモリのブランク・チェック・コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_ERASE	0x84u	フラッシュ・メモリの消去コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_CLEAR	0x00u	フラッシュ・メモリ・シーケンサ動作設定のクリア用設定値

- FSSQ(フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ)用マクロ 2

フラッシュ・メモリ・シーケンサ強制停止ビットの設定値を定義。

[bit6] FSSTP: シーケンサの強制停止ビットです。FSSTP=1 でシーケンサを強制停止します。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U01_FSSQ_FSSTP

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U01_FSSQ_FSSTP_ON	1u	フラッシュ・メモリ・シーケンサ強制停止用設定ビット値

- FSSE(フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタ)用マクロ

エクストラ領域シーケンサ起動時の各コマンドを定義。

[bit7]ESQST: シーケンサの動作開始/停止ビットです。ESQST=1 でシーケンサは動作開始します。

[bit3-0]ESQMD3-0: エクストラ領域シーケンサの各コマンド

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_FSSE

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FSSE_FSW	0x81u	フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能の設定コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SOFTWARE_READ	0x86u	フラッシュ・リード・プロテクション領域の設定コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SECURITY_FLAG	0x87u	セキュリティ・フラグの設定コマンド
R_RFD_VALUE_U08_FSSE_CLEAR	0x00u	エクストラ領域シーケンサ動作設定のクリア用設定値

- PFCMD(フラッシュ・プロテクト・コマンド・レジスタ)用マクロ

特定のレジスタへの書き込み動作に対してプロテクションを施すために使用するレジスタへ入力する固定値。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_PFCMD

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_PFCMD_SPECIFIC_SEQUENCE_WRITE	0xA5u	フラッシュ・メモリ・シーケンサの特定シーケンスでのプロテクション解除値

- PFS(特定シーケンス処理時のエラー)用マクロ

[bit0] FPRERR: 特定シーケンス処理時のエラーです。FPRERR =1 でプロテクション・エラーです。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_PFS

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_PFS_FPRERR	0x01u	特定シーケンス実行中のプロテクション・エラー比較値

- FLPMC(フラッシュ・プログラミング・モード・コントロール・レジスタ)用マクロ

フラッシュ・プログラミング・モードと非書き換えモードの移行制御に必要な値を定義。

[bit4] EEEMD: データ・フラッシュ・メモリの制御モードを操作するビットです。EEEMD=1 でデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行します。

[bit3] FWEDIS: コード・フラッシュの消去/書き込みの許可/禁止をソフトウェア的に制御するビットです。コード・フラッシュの書き込み/消去には FWEDIS=0 を設定しておく必要があります。

[bit1] FLSPM: コード・フラッシュ・メモリの制御モードを操作するするビットです。FLSPM=1 でコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行します。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FLPMC

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_ENABLE	0x00u	フラッシュ・メモリ・シーケンサが非実行、割り込みの飛び先は RAM [R_RFD_ChangeInterruptVector 関数実行済]
R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_DISABLE	0x08u	フラッシュ・メモリ・シーケンサが非実行、割り込みの飛び先は ROM 上ベクタテーブル [R_RFD_ChangeInterruptVector 関数実行未]
R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_CODE_FLASH_PROGRAMMING	0x02u	コード・フラッシュ・プログラミング・モード
R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_DATA_FLASH_PROGRAMMING	0x10u	データ・フラッシュ・プログラミング・モード
R_RFD_VALUE_U08_MASK0_FLPMC_FWEDIS	0xF7u	FWEDIS ビット判定用マスク値

- FSASTH(フラッシュ・メモリ・シーケンサ・ステータス・レジスタ: High 8bit)用マクロ

フラッシュ・メモリ・シーケンサ(エクストラ領域シーケンサ、またはコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ)の終了ステータスを定義。

[bit7] ESQEND: エクストラ領域シーケンサの終了ステータスです。ESQEND=1 でシーケンサは動作完了です。ESQST ビットのクリアでクリアされます。

[bit6] SQEND: コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの終了ステータスです。SQEND=1 でシーケンサは動作完了です。SQST ビットのクリアでクリアされます。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FSASTH

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_FSASTH_SQEND	0x40u	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの終了比較値
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_FSASTH_ESQEND	0x80u	エクストラ領域シーケンサの終了比較値

- FSASTL(フラッシュ・メモリ・シーケンサ・ステータス・レジスタ: Low 8bit)用マクロ

フラッシュ・メモリ・シーケンサ(エクストラ領域シーケンサ、またはコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ)終了時のエラー・ステータス・マスク値を定義。

[bit5] ESEQER: エクストラ領域シーケンサのエラーです。ESEQER =1 でシーケンサ・エラーです。

[bit4] SEQER: コード/データ・フラッシュ領域シーケンサのエラーです。SEQER =1 でシーケンサ・エラーです。

[bit3] BLER: ブランク・チェック・コマンドのエラーです。BLER =1 でブランク・エラーです。

[bit1] WRER: 書き込みコマンドのエラーです。WRER =1 で書き込みエラーです。

[bit0] ERER: ブロック消去コマンドのエラーです。ERER =1 で消去エラーです。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_FSASTL

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_FSASTL_ERROR_FLAG	0x3Bu	フラッシュ・メモリ・シーケンサ(エクストラ領域シーケンサ、またはコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ)終了時のエラー・ステータス・マスク値

- FSSET(フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ)用マクロ 1

ブート・スワップ指定、テンポラリ・ブート・スワップ設定、もしくはそれ以外の bit を 0 で AND してマスクします。

[bit7] TMSPPMD: ブート・スワップ指定。TMSPPMD=0 でブート・スワップはエクストラ領域の情報に従います。

TMSPPMD=1 でブート・スワップは TMBTSEL ビットに従います。

[bit6] TMBTSEL: テンポラリ・ブート・スワップ設定。TMBTSEL=0 でブート領域にブート・クラスタ 0 を指定。TMBTSEL=1 でブート領域にブート・クラスタ 1 を指定。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_FSSET

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_MASK0_FSSET_TMSPPMD_AND_TMBTSEL	0x3Fu	ブート・スワップ指定、テンポラリ・ブート・スワップ設定をマスク
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_FSSET_TMSPPMD_AND_TMBTSEL	0xC0u	ブート・スワップ指定、テンポラリ・ブート・スワップ設定以外をマスク
R_RFD_VALUE_U08_MASK1_FSSET_TMSPPMD	0x80u	ブート・スワップ指定以外をマスク
R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_0	0x80u	テンポラリ・ブート・スワップ、ブート・クラスタ 0 の設定値
R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_1	0xC0u	テンポラリ・ブート・スワップ、ブート・クラスタ 1 の設定値

- FSSET(フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ)用マクロ 2

フラッシュ・メモリ・シーケンサの動作周波数範囲、FSSET レジスタ設定値変換用補正值(-1)。

[bit4-0] FSET4-0 : FSSET レジスタ用に変換した CPU 動作周波数を入力します。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FSSET

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FREQUENCY_LOWER_LIMIT	1u	入力可能最小動作周波数(1MHz)
R_RFD_VALUE_U08_FREQUENCY_UPPER_LIMIT	32u	入力可能最大動作周波数(32MHz)
R_RFD_VALUE_U08_FREQUENCY_ADJUST	1u	FSSETレジスタ設定値変換用補正值(-1)

- VECTCTRL(割り込みベクタ移動許可レジスタ)用マクロ

セルフ・プログラミング実行中、発生した割り込みの分岐を ROM のベクタ・アドレスか RAM の指定アドレスへ切り替える場合のレジスタ設定値を定義。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_VECTCTRL

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_VECTCTRL_OFF	0x00u	割り込みごとにROM上のベクタ・アドレスへ分岐する場合のレジスタ設定値
R_RFD_VALUE_U08_VECTCTRL_ON	0x01u	全ての割り込みをユーザが指定したRAM上のアドレスへ分岐する場合のレジスタ設定値

- FLRST(フラッシュ初期化レジスタ)用マクロ

エクストラ領域シーケンサ/フラッシュ・メモリ・シーケンサ・レジスタの初期化実行を設定する値を定義。

[bit0] FLRST : FLRST(bit)=1 で、エクストラ領域シーケンサ/フラッシュ・メモリ・シーケンサ・レジスタの初期化を実行します。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U08_FLRST

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U08_FLRST_ON	0x01u	シーケンサ・レジスタの初期化実行設定値
R_RFD_VALUE_U08_FLRST_OFF	0x00u	シーケンサ・レジスタの初期化非実行設定値

- FLFSWS/FLFSWE (フラッシュ FSW モニタ・レジスタ START/END) 用マクロ

FSW の設定状態取得、および設定用のマスク値を定義。

FLFSWE[bit15] FSWC : FSW 対象領域が設定されます。FSWC=0 で inside、FSWC=1 で outside 設定です。

FLFSWE[bit8-0] : FSW エンド・ブロック番号+1

FLFSWS[bit15] FSPR : FSW の書き換えを禁止します。FSPR=0 で書き換え禁止設定です。

FLFSWS[bit8-0] : FSW スタート・ブロック番号

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U16_FLFSWE / R_RFD_REG_U16_FLFSWS

(1) FSW の設定状態取得用のマスク値を定義。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_FLFSW_BLOCK_NUMBER	0x01FFu	ブロック番号設定マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_FLFSWE_FSWC	0x8000u	FSW対象領域設定マスク値(FSWC)
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_FLFSWS_FSPR	0x8000u	書換え禁止設定マスク値(FSPR)

(2) FSW 設定用のマスク値を定義。

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_FSW_PROTECT_FLAG	0x7FFFu	FSW プロテクト設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_FSW_CONTROL_FLAG	0x7FFFu	FSW 領域設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_FSW_EXCEPT_BLOCK_INFO	0xFE00u	FSW ブロック指定用マスク値

- FLAPH/FLAPL, FLSEDH/FLSEDL (フラッシュ・アドレス・ポインタ・レジスタ HIGH/LOW) 用マクロ

(1) データ・フラッシュ・メモリ消去 (1 ブロック:256byte)、ブランク・チェック用の先頭/終了アドレスを定義。

FLAPH[bit3-0]: FLAP19-16 は、データ・フラッシュ・メモリ領域の先頭上位アドレス設定値。0x0F 固定値。

FLAPL[bit15-0]: FLAP15-0 は、データ・フラッシュ・メモリ領域の先頭下位アドレス設定値。

FLSEDH[bit3-0]: EWA19-16 は、データ・フラッシュ・メモリ領域の終了上位アドレス設定値。0x0F 固定値。

FLSEDL[bit15-0]: EWA15-0 は、データ・フラッシュ・メモリ領域の終了下位アドレス設定値。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_FLAPH / R_RFD_REG_U16_FLAPL

R_RFD_REG_U08_FLSEDH / R_RFD_REG_U16_FLSEDL

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_DATA_FLASH_ADDR_LOW	0x1000u	データ・フラッシュ領域先頭の下位アドレス設定値(16bit)
R_RFD_VALUE_U08_DATA_FLASH_ADDR_HIGH	0x0Fu	データ・フラッシュ領域先頭の上位アドレス設定値(8bit)
R_RFD_VALUE_U16_DATA_FLASH_BLOCK_ADDR_END	0x00FFu	データ・フラッシュ・ブロック終了の下位アドレス設定値(16bit)
R_RFD_VALUE_U08_DATA_FLASH_SHIFT_LOW_ADDR	8u	ブロック番号からデータ・フラッシュ領域オフセット算出用下位アドレス・シフト値

(2) コード・フラッシュ・メモリ消去、ブランク・チェック (1 ブロック:2Kbyte) 用の先頭/終了アドレスを定義。

FLAPH[bit3-0]: FLAP19-16 は、コード・フラッシュ・メモリ領域の先頭上位アドレス設定値。

FLAPL[bit15-0]: FLAP15-0 は、コード・フラッシュ・メモリ領域の先頭下位アドレス設定値。

FLSEDH[bit3-0]: EWA19-16 は、コード・フラッシュ・メモリ領域の終了上位アドレス設定値。

FLSEDL[bit15-0]: EWA15-0 は、コード・フラッシュ・メモリ領域の終了下位アドレス設定値。

対象レジスタ定義: R_RFD_REG_U08_FLAPH / R_RFD_REG_U16_FLAPL

R_RFD_REG_U08_FLSEDH / R_RFD_REG_U16_FLSEDL

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_CODE_FLASH_BLOCK_ADDR_LOW	0x001Fu	コード・フラッシュ・ブロック先頭の下位アドレス・マスク値(16bit)
R_RFD_VALUE_U16_CODE_FLASH_BLOCK_ADDR_HIGH	0x01E0u	コード・フラッシュ・ブロック先頭の上位アドレス・マスク値(16bit -> シフト後下位 8bit のみ使用)
R_RFD_VALUE_U16_CODE_FLASH_BLOCK_ADDR_END	0x07FFu	コード・フラッシュ・ブロック終了の下位 2KByte 単位のアドレス設定値(16bit)
R_RFD_VALUE_U08_CODE_FLASH_SHIFT_LOW_ADDR	11u	ブロック番号からコード・フラッシュ領域オフセット算出用下位アドレス・シフト値
R_RFD_VALUE_U08_CODE_FLASH_SHIFT_HIGH_ADDR	5u	ブロック番号からコード・フラッシュ領域オフセット算出用上位アドレス・シフト値

(例) ブロック番号: 107 -> 0x006B

R_RFD_VALUE_U16_CODE_FLASH_BLOCK_ADDR_LOW: 0x000B -> 0x5800 (11 ビット左へシフト)

R_RFD_VALUE_U16_CODE_FLASH_BLOCK_ADDR_HIGH: 0x0060 -> 0x0003 (5 ビット右へシフト)

ブロック先頭アドレス: 0x0003_5800

- FLSEC(フラッシュ・セキュリティ・フラグ・モニタ・レジスタ)用マクロ
 エクストラ領域設定データ、セキュリティモニタ用マスク・データを定義。

[bit12] WRPR : 書き込み禁止フラグ。WRPR=0 で書き込み禁止。

[bit10] SEPR : ブロック消去禁止フラグ。SEPR=0 でブロック消去禁止。

[bit9] BTPR

ブート・スワップ設定 : ブロック(ブート領域)書き換え禁止フラグ。

BTPR=0 でブート領域の書き換え禁止。

バンク・スワップ設定 : 起動バンク切り替え禁止フラグ。

BTPR=0 で起動バンクの切り替えを禁止。

[bit8] BTFLG : ブート領域切り替えフラグ。

ブート・スワップ設定 : BTFLG = 0、ブート領域は、ブート・クラスタ 1。

BTFLG = 1、ブート領域は、ブート・クラスタ 0。

バンク・スワップ設定 : BTFLG = 0、起動バンクは、バンク 1。

BTFLG = 1、起動バンクは、バンク 0。

対象レジスタ定義 : R_RFD_REG_U16_FLWH, R_RFD_REG_U16_FLWL, R_RFD_REG_U16_FLSEC

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_ERASE_PROTECT_FLAG	0xFBFFu	ブロック消去禁止設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_WRITE_PROTECT_FLAG	0xEFFFu	書き込み禁止設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_BOOT_CLUSTER_PROTECT_FLAG	0xFDFFu	ブート領域書き換え禁止設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_BOOT_FLAG	0xFEFFu	ブート領域切り替えフラグ設定、モニタ用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_BOOT_FLAG	0x0100u	ブート領域切り替えフラグ・モニタ用マスク値

- フラッシュ・リード・プロテクション・エクストラ領域データ設定用マクロ
 エクストラ領域設定用マスク・データを定義。

フラッシュ・リード・プロテクション設定領域 :

[bit31] SWPR : フラッシュ・リード・プロテクション設定領域の変更禁止を指定します。SWPR=0 で書き換え禁止設定です。

[bit24-16] : フラッシュ・リード・プロテクション・エンド・ブロック番号

[bit8-0] : フラッシュ・リード・プロテクション・スタート・ブロック番号

対象レジスタ定義 : 無し(エクストラ領域設定のみ)

Symbol Name	Value	Description
R_RFD_VALUE_U16_MASK0_SW_READ_PROTECT_FLAG	0x7FFFu	フラッシュ・リード・プロテクション設定用マスク値
R_RFD_VALUE_U16_MASK1_SW_READ_EXCEPT_BLOCK_INFO	0xFE00u	フラッシュ・リード・プロテクション・ブロック指定用マスク値

3.3 API 関数仕様

この章では、Renesas Flash Driver (RFD) RL78 Type11 の API 関数の詳細仕様について説明します。

RFD RL78 Type11 の API 関数を使用して、フラッシュ・メモリの書き換えを実施する上での前提条件があります。この前提条件と異なる条件で RFD RL78 Type11 の API 関数を使用した場合、各関数の動作が不定となる可能性がありますので、ご注意ください。

《前提条件》

- ・ R_RFD_Init()関数は、全ての RFD 関数を使用する前に、1 回実行してください。
- ・ セルフ・プログラミング実行中は、高速オンチップ・オシレータを起動しておく必要があります。RFD RL78 Type11 の全ての API 関数は、高速オンチップ・オシレータが起動している状態で実行してください。
- ・ データ・フラッシュを操作する場合、データ・フラッシュへのアクセスを許可した状態で RFD RL78 Type11 の API を実行してください。データ・フラッシュへのアクセス許可方法については、対象となる RL78 マイクロコントローラのユーザーズマニュアルを参照してください。

以下に API 関数仕様の記述例を示します。

《API 関数仕様の記述例》

Information

Syntax	この関数を C 言語で記述されたプログラムから呼び出す際の書式を示します。	
Reentrancy	再帰可否 : Reentrant (再帰可能)、または Non-Reentrant (再起不可)。	
Parameters (IN)	この関数の引数 (入力)。	引数 [値、範囲、引数の意味等]
Parameters (IN/OUT)	この関数の引数 (入出力)。	引数 [値、範囲、引数の意味等]
Parameters (OUT)	この関数の引数 (出力)。	引数 [値、範囲、引数の意味等]
Return Value	この関数からの戻り値の型 (列挙型、ポインタ等)	戻り値の列挙子 (定数) : 値 [定数の意味 : 詳細説明]
		戻り値の列挙子 (定数) : 値 [定数の意味 : 詳細説明]
Description	機能概要	
Preconditions	事前条件の概要	
Remarks	特記事項	

動作概要 :

この関数の機能概要を示します。

備考 :

この関数の使用条件や制限事項を示します。

3.3.1 共通フラッシュ制御 API 関数仕様

RFD RL78 Type11 の共通フラッシュ制御関数を示します。

3.3.1.1 R_RFD_Init

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_Init(unit8_t i_u08_cpu_frequency);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	unit8_t i_u08_cpu_frequency	CPU 動作周波数 [1~32(MHz)]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了 : 周波数が範囲内] R_RFD_ENUM_RET_ERR_PARAMETER : 0x10 [パラメータ・エラー : 周波数が範囲外]
Description	引数で指定された周波数をフラッシュ・メモリ・シーケンサに設定し、RFD RL78 Type11 の初期化を行います。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	全ての RFD 関数を使用する前に、1 回実行してください。	

動作概要 :

- ・ R_RFD_ChangeInterruptVector() の実行フラグ(g_u08_change_interrupt_vector_flag)を初期化(0x00:未実行)します。
- ・ 引数(CPU 動作周波数)が 1~32(MHz)の範囲内であることを確認し、範囲内であれば、CPU 動作周波数 -1 を (g_u08_cpu_frequency)に設定します。

備考 :

- ・ セルフ・プログラミング実行中は、高速オンチップ・オシレータを起動しておく必要があります。高速オンチップ・オシレータが起動している状態で、本関数を実行してください。
※RFD RL78 Type11 では、高速オンチップ・オシレータの起動やチェックは行っていません。
- ・ 引数(i_u08_cpu_frequency)には、実際に CPU が動作する周波数の値の小数点以下を切り上げた整数値を設定します。(例 : CPU が動作する周波数が 4.5MHz の場合は、初期化関数で 5 を設定してください)
CPU の動作周波数を 4 MHz 未満で使用する場合は、1 MHz, 2 MHz, 3 MHz を使用することができます。その際、整数値でない周波数(1.5MHz など)は使用できません。
引数(i_u08_cpu_frequency)に設定する周波数は、フラッシュ書き換え時、実際に CPU が動作する周波数であり、必ずしも高速オンチップ・オシレータの周波数を設定するということではありません。
- CPU 動作周波数と異なる値を指定した場合、その後の動作は不定となります。その際、フラッシュの書き換えが完了した場合でも、データの値、及びその後の保持期間を満たすことができない可能性があります。
※CPU 動作周波数の範囲については、対象となる RL78 マイクロコントローラのユーザーズマニュアルを参照してください。

- ・非書き換えモード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.1.2 R_RFD_SetDataFlashAccessMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetDataFlashAccessMode (e_rfd_df_access_t i_e_df_access);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	e_rfd_df_access_t i_e_df_access	データ・フラッシュのアクセス制御 R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_ENABLE : 0x01 [データ・フラッシュ・アクセス許可] R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_DISABLE : 0x00 [データ・フラッシュ・アクセス禁止]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	引数で指定されたデータ・フラッシュへのアクセスの許可、または、禁止を設定します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・引数(i_e_df_access)が R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_DISABLE の場合、DFLEN(DFLCTL の bit0)='0' (R_RFD_VALUE_U01_DFLEN_DATA_FLASH_ACCESS_DISABLE) データ・フラッシュ・アクセス禁止状態を設定します。
- ・引数(i_e_df_access)が R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_ENABLE の場合、DFLEN(DFLCTL の bit0)='1' (R_RFD_VALUE_U01_DFLEN_DATA_FLASH_ACCESS_ENABLE) データ・フラッシュ・アクセス許可状態を設定します。
- ・セットアップ時間をウエイトします。(セットアップ時間: 250nsec) セットアップ時間のウエイト完了後、データ・フラッシュへのアクセスが可能となります。

備考 :

- ・引数(i_e_df_access)に R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_DISABLE、R_RFD_ENUM_DF_ACCESS_ENABLE の値以外を指定した場合、DFLEN(DFLCTL の bit0)='0' (R_RFD_VALUE_U01_DFLEN_DATA_FLASH_ACCESS_DISABLE) データ・フラッシュ・アクセス禁止状態を設定します。
- ・非書き換えモード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.1.3 R_RFD_ChangeInterruptVector

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_ChangeInterruptVector (uint32_t i_u32_interrupt_vector_addr);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_interrupt_vector_addr	割り込み先アドレス [RAM アドレス]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	全ての割り込みの飛び先を、引数で指定された RAM アドレスに変更します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・全ての割り込みの飛び先を、引数(i_u32_interrupt_vector_addr)で指定された RAM アドレスに変更します。
 - 特定シーケンスを実行し、FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3]を'0'(FLPMC=0x00)に設定します。
 - 引数(i_u32_interrupt_vector_addr)の値を割り込みベクタ変更レジスタ(FLSIVC0/ FLSIVC1)に設定します。
 - 割り込みベクタ移動許可レジスタを特定アドレス(RAM 上)へ分岐する設定にします(VECTCTRL = 0x01 [R_RFD_VALUE_U08_VECTCTRL_ON])。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。
- ・本関数の実行フラグ(g_u08_change_interrupt_vector_flag)を実行済 (R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_ON : 0x55)に設定します。

備考 :

- ・引数(i_u32_interrupt_vector_addr)に RAM アドレス以外を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みが発生した場合、その後の動作は不定となります。
- ・非書き換えモード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

・ RAM 上に配置する割り込み関数の定義例

R_RFD_ChangeInterruptVector 関数の引数には、RAM 上に配置した割り込み関数のアドレスを指定します。また、R_RFD_ChangeInterruptVector 関数を使用すると全ての割り込み機能の飛び先が RAM の指定アドレス上へ変更されます。R_RFD_ChangeInterruptVector 関数実行後は割り込みが発生しても、割り込みベクタテーブルで指定されたアドレスには飛ばず、全ての割り込みが本関数で指定された RAM のアドレスへ分岐するようになります。複数の割り込み要因があり、それぞれ異なる処理を実行したい場合は、割り込み関数内で割り込み要因を判別する必要があります。

RAM 上での割り込み発生時に SFR (割り込み要求フラグ) を参照することにより割り込み要因を判別できませんが、割り込み要求フラグは自動的にクリアされないため、判別後は割り込み要求フラグをクリア (0 を設定) するようにしてください。

ここでは、対象コンパイラ使用時の RAM 上に配置する割り込み関数のプロトタイプ宣言、関数定義、関数呼び出しの記載例を示します。

- CC-RL コンパイラ

```
プロトタイプ宣言   : #pragma interrupt Xxxxx;
                   : __far void Xxxxx(void);
関数定義           : __far void Xxxxx(void){}
関数呼び出し      : R_RFD_ChangeInterruptVector((uint32_t)((void (__far *) (void)) Xxxxx));
```

- IAR コンパイラ

```
プロトタイプ宣言   : __interrupt void Xxxxx(void);
関数定義           : __interrupt void Xxxxx(void){}
関数呼び出し(V4.21以降) : R_RFD_ChangeInterruptVector((uint32_t)((__far unsigned char *) &Xxxxx));
                   (V5.10以降) : R_RFD_ChangeInterruptVector ((uint32_t)((void (__far_func *) (void)) Xxxxx));
```

注) 割り込み関数を RAM 上に配置することで下記のような"warning"が出力されますが、問題ないことを確認しています。また、統合開発環境 IAR Embedded Workbench のプロジェクトのオプションから、C/C++コンパイラ-追加オプションを選択して表示されるコマンドラインオプション入力欄に「--diag_suppress=Ta030,Be006」を入力することで警告を抑止できますが、他の"warning"も出力されなくなる可能性があるため開発完了時に設定することを推奨します。

"warning"の例 :

```
[Ta030]: Note that this function's segment 'SMP_CF' must be placed in near code memory.
[Be006]: possible conflict for segment/section "SMP_CF".
```

- LLVM コンパイラ

```
プロトタイプ宣言   : __far void Xxxxx(void) __attribute__((interrupt));
関数定義           : __far void Xxxxx(void){}
関数呼び出し      : R_RFD_ChangeInterruptVector((uint32_t)((void (__far *) (void)) Xxxxx));
```

注) "Xxxxx"は、割り込み関数名。

3.3.1.4 R_RFD_RestoreInterruptVector

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_RestoreInterruptVector (void);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	RAM に変更された割り込みの飛び先を、標準の割り込みベクタ・アドレスに戻します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・R_RFD_ChangeInterruptVector()関数により、RAM 上へ切り替えられた割り込み分岐アドレスを、元の ROM 上の割り込みテーブルへ戻します。
 - 特定シーケンスを実行し、FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3]を'1'(FLPMC=0x08)に設定します。
 - 割り込みベクタ移動許可レジスタを ROM 上の割り込みベクタテーブル分岐の設定に戻します(VECTCTRL = 0x00[R_RFD_VALUE_U08_VECTCTRL_OFF])。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。
- ・本関数の実行フラグ(g_u08_change_interrupt_vector_flag)を未実行 (R_RFD_VALUE_U08_SET_FWEDIS_FLAG_OFF:0x00)に設定します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みが発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・非書き換えモード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.1.5 R_RFD_ForceReset

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ForceReset(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	CPU の内部リセットを発生させます。	
Preconditions	-	
Remarks	-	

動作概要：

- ・意図的に不正命令(0xFF)の命令コードを実行し、CPU の内部リセットを発生させます。

備考：

- ・CPU の内部リセットが発生するため、この関数以降の処理は実行されません。
- ・FFH の命令コードによる内部リセット（不正命令の実行による内部リセット）については、対象となる RL78 マイクロコントローラのユーザーズマニュアルを参照してください。
- ・本関数によるリセットは、オンチップ・デバッグ・エミュレータによるエミュレーションでは発生しません。

3.3.1.6 R_RFD_GetSecurityAndBootFlags

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_GetSecurityAndBootFlags (uint16_t __near * onp_u16_security_and_boot_flags);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	uint16_t __near * onp_u16_security_and_boot_flags	セキュリティ・フラグ(各プロテクト・フラグ)とブート領域切り替えフラグの情報を格納する変数へのポインタ
Return Value	N/A	
Description	セキュリティ・フラグ(各プロテクト・フラグ)とブート領域切り替えフラグの情報を取得します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・セキュリティ・フラグ(各プロテクト・フラグ)とブート領域切り替えフラグの情報を示す FLSEC レジスタの値(16bit)を読み出し、引数ポインタ(onp_u16_security_and_boot_flags)が示す変数に格納します。

備考 :

- ・取得するセキュリティ・フラグとブート領域切り替えフラグ情報 : FLSEC レジスタ bit15-0
 - [bit15-13] : -
 - [bit12] WRPR : 書き込み禁止フラグ
 - [bit11] : -
 - [bit10] SEPR : ブロック消去禁止フラグ
 - [bit9] BTPR : ブート領域書き換え禁止フラグ
 - [bit8] BTFLG : ブート領域切り替えフラグ
 - [bit7-4] : -
 - [bit3] SWPR : フラッシュ・リード・プロテクション・フラグ
 - [bit2-0] : -
- ・本関数で取得できる(BTFLG)[bit8]に関して、(0)はブート・クラスタ 1、(1)はブート・クラスタ 0 を示します。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、正しい値を取得できない可能性があります。

3.3.1.7 R_RFD_GetFSW

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_GetFSW (uint16_t __near * onp_u16_start_block_number, uint16_t __near * onp_u16_end_block_number, e_rfd_fsw_mode_t __near * onp_e_fsw_mode, e_rfd_protect_t __near * onp_e_protect_flag);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	uint16_t __near * onp_u16_start_block_number	スタート・ブロック番号を格納する変数へのポインタ
	uint16_t __near * onp_u16_end_block_number	エンド・ブロック番号+1 を格納する変数へのポインタ
	e_rfd_fsw_mode_t * onp_e_fsw_mode	フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域の情報を格納する変数へのポインタ
	e_rfd_protect_t * onp_e_protect_flag	プロテクト・フラグの情報を格納する変数へのポインタ
Return Value	N/A	
Description	フラッシュ・シールド・ウィンドウの範囲、フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域、プロテクト・フラグを取得します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フラッシュ・シールド・ウィンドウのスタート・ブロック、エンド・ブロック+1、フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域、プロテクト・フラグを示す FLFSWS(16bit), FLFSWE(16bit)レジスタの値を読み出し、各引数ポインタが指す変数に格納します。

- 各引数ポインタが指す変数の値(出力) :

*onp_u16_start_block_number : スタート・ブロック(FLFSWS[bit8-0]へ設定、[bit15-9]は0でマスク)

*onp_u16_end_block_number : エンド・ブロック+1 (FLFSWE[bit8-0]へ設定、[bit15-9]は0でマスク)

*onp_e_fsw_mode : フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域(FLFSWE[bit15:FSWC])の値の出力値。

1:R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE (アウトサイド・シールド)

0:R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE (インサイド・シールド)

*onp_e_protect_flag : プロテクト・フラグ(FLFSWS[bit15:FSPR])の値の出力値

1:R_RFD_ENUM_PROTECT_OFF(シールド・ウィンドウ・プロテクト OFF)

0:R_RFD_ENUM_PROTECT_ON (シールド・ウィンドウ・プロテクト ON)

備考 :

- ・デバイスの初期状態で、本関数を実行すると、onp_u16_start_block_number = 511, onp_u16_end_block_number = 511 を取得します。

- ・コード／データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、正しい値を取得できない可能性があります。

3.3.2 コード・フラッシュ制御 API 関数仕様

RFD RL78 Type11 のコード・フラッシュ操作関数を示します。

3.3.2.1 R_RFD_EraseCodeFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_EraseCodeFlashReq(uint16_t i_u16_block_number);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint16_t i_u16_block_number	消去対象ブロック番号[0~511] 例:RL78/L23 では、MAX 512KB[0~255]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュの消去(1 ブロック)を開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュ・メモリの消去する 1 ブロック (2Kbyte) のアドレスを設定します。
 - 引数(i_u16_block_number)の消去対象ブロック番号から、コード・フラッシュ・メモリのスタート・アドレスとエンド・アドレス (1 ブロック分 : 2Kbyte) を計算し、FLAPL/H と FLSEDL/H へ設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_ERASE :0x84 を設定し、消去を開始します。
(SQST[bit7] = 1, SQMD[bit2-0] = 4[0b100], 他の bit は 0)

備考 :

- ・引数(i_u16_block_number)は 16bit の上位 7bit を無効とした下位 9bit を使用します。デバイスに実装されているコード・フラッシュ・ブロック数の範囲内の値であることが前提条件です。範囲外の値を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・デバイスによってコード・フラッシュのサイズが異なるため、使用可能な最大ブロック番号は、対象デバイスのユーザーズマニュアルで確認してください。

3.3.2.2 R_RFD_WriteCodeFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_WriteCodeFlashReq (uint32_t i_u32_start_addr, uint8_t __near * inp_u08_write_data);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_start_addr	書き込み対象スタート・アドレス (4byte 境界) [コード・フラッシュ領域のアドレス]
	uint8_t __near * inp_u08_write_data	書き込みデータ変数へのポインタ [ポインタが指す書き込みデータは 4byte]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュの書き込み (4byte)を開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュ・メモリの書き込みアドレスと書き込みデータ (4byte)を設定します。
 - 引数(i_u32_start_addr)の書き込み対象のコード・フラッシュ・スタート・アドレスを FLAPL/H レジスタに設定します。
 - 引数ポインタ(inp_u08_write_data)が指す変数(コード・フラッシュの書き込みデータ)の値(4byte)を FLWL/H レジスタに設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_WRITE:0x81 を設定し、書き込みを開始します。
(SQST[bit7] = 1, SQMD[bit2-0] = 1[0b001], 他の bit は 0)

備考 :

- ・引数(i_u32_start_addr)は 32bit の上位 8bit を 0x00 でマスクした下位 24bit を使用します。デバイスに実装されているコード・フラッシュ領域の範囲内の 4byte 境界のアドレスであることが前提条件です。範囲外の領域や 4byte 境界以外のアドレスを指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・引数(inp_u08_write_data)は、入力が 8bit データへのポインタです。このポインタを更新しながら継続して使用する場合、コード・フラッシュの書き込み単位 4byte ずつ更新する必要があるため、ご注意ください。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.2.3 R_RFD_BlankCheckCodeFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_BlankCheckCodeFlashReq (uint16_t i_u16_block_number);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint16_t i_u16_block_number	ブランク・チェック対象ブロック番号[0~511] 例:RL78/L23 では、MAX 512KB[0~255]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュのブランク・チェック(1ブロック)を開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、コード・フラッシュ・メモリのブランク・チェックする 1 ブロック(2Kbyte)のアドレスを設定します。
 - 引数(i_u16_block_number)のブランク・チェック対象ブロック番号から、コード・フラッシュ・メモリのスタート・アドレスとエンド・アドレス(1 ブロック分 : 2Kbyte)を計算し、FLAPL/H と FLSEDL/H へ設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_BLANKCHECK_CF:0x83 を設定し、ブランク・チェックを開始します。
(SQST[bit7] = 1, MDCH[bit3] = 0, SQMD[bit2-0] = 3[0b011], 他の bit は 0)

備考 :

- ・引数(i_u16_block_number)は 16bit の上位 7bit を無効とした下位 9bit を使用します。デバイスに実装されているコード・フラッシュ・ブロック数の範囲内の値であることが前提条件です。範囲外の値を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・デバイスによってコード・フラッシュのサイズが異なるため、使用可能な最大ブロック番号は、対象デバイスのユーザーズマニュアルで確認してください。

3.3.2.4 R_RFD_SetCFProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetCFProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー](指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_CODE_FLASH_PROGRAMMING を設定、コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。
- ・R_RFD_Init 関数実行時に設定された、"g_u08_cpu_frequency"を FSSET レジスタに設定します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへは、非書き換えモードから遷移してください。

3.3.2.5 R_RFD_SetCFNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetCFNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー](指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ引数で非書き換えモード値を設定、コード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
- ・モード移行時 Wait(10μs)を実施します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ (g_u08_change_interrupt_vector_flag)の値により、FLPMC レジスタの値を設定します。
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x00(未実行)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_ENABLE : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] (割り込みは、ROM 上の割り込みベクタで分岐)
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x55(実行済)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_DISABLE : 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0] (割り込みは、RAM 上の指定アドレスへ分岐)
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。

3.3.2.6 R_RFD_CheckCFProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckCFProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードがコード・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・FLPMC レジスタの値を読み出し、その値がコード・フラッシュ・プログラミング・モードのレジスタ値と等しいかを確認します。
- コード・フラッシュ・プログラミング・モード : 0x02[FLSPM(FLPMC の bit1) = 1]

備考 :

- ・R_RFD_SetCFProgrammingMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.2.7 R_RFD_CheckCFNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckCFNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ FLPMC レジスタの値を読み出し、その値が非書き換えモードのレジスタ値と等しいかを確認します。
 - 非書き換えモード : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] or 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0]

備考 :

- ・ R_RFD_SetCFNonProgrammableMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.2.8 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckCFSeqEndStep1(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ・コマンド動作中]
Description	起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後に実行してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckCFSeqEndStep2() を実行してください。	

動作概要 :

- ・ 起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作が終了[SQEND(FSASTH の bit6) = 1]したかどうかを確認します。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作が終了していた場合、フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ(FSSQ)へ 0x00 を設定して SQST[bit7] をクリアし、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。終了していなかった場合は、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・ 戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。
- ・ 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckCFSeqEndStep2() を実行してください。

3.3.2.9 R_RFD_CheckCFSeqEndStep2

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckCFSeqEndStep2(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了 : シーケンサ動作終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ動作中]
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。	
Preconditions	関数 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後に実行してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ(FSSQ)へ 0x00 を設定したことにより、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの動作が全て終了[SQEND(FSASTH の bit6) = 0]したかどうかを確認します。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの動作が終了していた場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。
終了していなかった場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・R_RFD_CheckCFSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。

3.3.2.10 R_RFD_GetCFSeqErrorStatus

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_GetCFSeqErrorStatus (uint8_t __near * onp_u08_error_status);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	uint8_t __near * onp_u08_error_status	発生したエラー情報を格納する変数へのポインタ
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要：

- ・ FSASTL レジスタの値(8bit)を読み出し、bit5-0 の値を引数ポインタ(onp_u08_error_status)が示す変数に格納します。

※bit7,6,2 は固定値(0)を設定する。

取得するエラー情報（FSASTL レジスタ bit 5-0 内の 5bit）

- [bit5 : エクストラ領域シーケンサ・エラー]
- [bit4 : コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー]
- [bit3 : ブランク・チェック・コマンド・エラー]
- [bit1 : 書き込みコマンド・エラー]
- [bit0 : 消去コマンド・エラー]

備考：

- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、正しい値を取得できません。

3.3.2.11 R_RFD_ClearCFSeqRegister

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ClearCFSeqRegister(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	R_RFD_CheckCFSeqEndStep2()実行後に、本関数を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュ初期化レジスタ[FLRST]に 0x01 を設定した後、FLRST レジスタに 0x00 を設定します。対象レジスタがクリアされます。
- 対象となるコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタ：
FLAPH/L, FLSEDH/L, FLWH/L, FLARS, FSSQ, FSSE

備考：

- ・本関数を実行しても、フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドにより発生したエラー情報(FSASTL レジスタ)はクリアされません。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.2.12 R_RFD_ForceStopCFSeq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ForceStopCFSeq(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後(コマンド実行中、シーケンサ動作中)に使用してください。 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1()により、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK が返る前(シーケンサ動作終了前)に使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckCFSeqEndStep1()を使用してください。	

動作概要：

- ・ ブランク・チェック、消去コマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中に FSSQ レジスタの FSSTP[bit6]に'1'を設定し、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。

備考：

- ・ 本関数は、コマンドを**緊急時**に強制停止させたい場合のみ使用してください。
- ・ ブランク・チェック、消去コマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中にのみ使用してください。
- ・ 消去コマンド中に本関数を実行した場合は、対象領域をもう一度消去してください。
- ・ ブランク・チェック、消去以外のコマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中、及びエクストラ領域シーケンサ動作中は本関数を実行しないでください。使用した場合、その後の動作は不定になります。(書き込みコマンド中に本関数を実行した場合は、書き込みデータが不定となります。)
- ・ 本関数は、コマンド実行状態が不定のときは実行できません。
- ・ 本関数使用后、強制停止したコマンドによりエラーが発生する場合がありますが、コマンドが終了していない可能性があるため、エラー・フラグを参照しないでください。

3.3.2.13 r_rfd_cf_wait_count

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void r_rfd_cf_wait_count(uint8_t i_u08_count);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint8_t i_u08_count	Wait する時間(1 カウントで 1μsec:1~255)
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	1 カウントで 1μsec として、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループで Wait します。	
Preconditions	-	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ g_u08_cpu_frequency (CPU 動作周波数 - 1) の値に 1 を足して、CPU 動作周波数値に戻します。
- ・ 指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数を算出、ソフトウェアループを実行します。

[指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数]

$$= [(周波数値[\text{MHz}] \times (\text{カウント}[\mu\text{s}])) / (\text{ループの実行サイクル:}8[\text{サイクル}]) + 1$$

例) 周波数値:32[MHz]、カウント:10[μs]の場合

$$\text{Wait する時間(カウント}[\mu\text{s}]) \text{のソフトウェアループ回数} = (32[\text{MHz}] \times 10[\mu\text{s}] / 8[\text{サイクル}]) + 1$$

(切り捨て計算で Wait 時間未満にならないよう、1 回加算されています。)

$$= 41[\text{回}]$$

$$\text{本関数実行時間} = 1/32[\text{MHz}] \times 8[\text{サイクル}] \times 41[\text{回}] = 10.25[\mu\text{s}]$$

備考 :

- ・ Wait 範囲は 1~255μs までで、ループ以外の処理のオーバーヘッドは Wait 時間に含まれていません。

3.3.3 データ・フラッシュ API 制御関数仕様

RFD RL78 Type11 のデータ・フラッシュ制御関数を示します。

3.3.3.1 R_RFD_EraseDataFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_EraseDataFlashReq(uint8_t i_u08_block_number);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint8_t i_u08_block_number	消去対象ブロック番号[0~63] 例:RL78/L23 では、MAX 8KB[0~31]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュの消去(1 ブロック)を開始します。	
Preconditions	データ・フラッシュ・アクセス許可状態(DFLEN = 1)で使用してください。 データ・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュ・メモリの消去する 1 ブロック (256byte) のアドレスを設定します。
 - 引数(i_u08_block_number)の消去対象ブロック番号から、データ・フラッシュ・メモリのスタート・アドレスとエンド・アドレス (1 ブロック分 : 256byte) を計算し、FLAPL/H と FLSEDL/H へ設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_ERASE :0x84 を設定し、消去を開始します。
(SQST[bit7] = 1, SQMD[bit2-0] = 4[0b100], 他の bit は 0)

備考：

- ・引数(i_u08_block_number)は 8bit の上位 2bit を無効とした下位 6bit を使用します。デバイスに実装されているデータ・フラッシュ・ブロック数の範囲内の値であることが前提条件です。範囲外の値を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・アクセス禁止状態で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・デバイスによってコード・フラッシュのサイズが異なるため、使用可能な最大ブロック番号は、対象デバイスのユーザーズマニュアルで確認してください。

3.3.3.2 R_RFD_WriteDataFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_WriteDataFlashReq (uint32_t i_u32_start_addr, uint8_t __near * inp_u08_write_data);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_start_addr	書き込み対象スタート・アドレス [データ・フラッシュ領域のアドレス]
	uint8_t __near * inp_u08_write_data	書き込みデータ変数へのポインタ [ポインタが指す書き込みデータは 1byte]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュの書き込み(1byte)を開始します。	
Preconditions	データ・フラッシュ・アクセス許可状態(DFLEN = 1)で使用してください。 データ・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュ・メモリの書き込みアドレスと書き込みデータ(1byte)を設定します。
 - 引数(i_u32_start_addr)の書き込み対象のデータ・フラッシュ・スタート・アドレスを FLAPL/H レジスタに設定します。
 - 引数ポインタ(inp_u08_write_data)が指す変数(データ・フラッシュの書き込みデータ)の値(1byte)を FLWL レジスタの下位 8bit に設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_WRITE:0x81 を設定し、書き込みを開始します。
(SQST[bit7] = 1, SQMD[bit2-0] = 1[0b001], 他の bit は 0)

備考 :

- ・引数(i_u32_start_addr)は 32bit の上位 8bit を 0x00 でマスクした下位 24bit を使用します。デバイスに実装されているデータ・フラッシュ領域の範囲内であることが前提条件です。範囲外の領域を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・アクセス禁止状態で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.3.3 R_RFD_BlankCheckDataFlashReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_BlankCheckDataFlashReq (uint32_t i_u32_start_addr, uint16_t i_u16_blankcheck_length);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_start_addr	ブランク・チェック対象スタート・アドレス [データ・フラッシュ領域のアドレス]
	uint16_t i_u16_blankcheck_length	ブランク・チェック対象データ数
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュのブランク・チェック(指定バイト数)を開始します。	
Preconditions	データ・フラッシュ・アクセス許可状態(DFLEN = 1)で使用してください。 データ・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュの書き換え領域をコード/データ・フラッシュ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_USER_AREA:0x00 (EXA [bit0] = 0)
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動し、データ・フラッシュ・メモリのブランク・チェックするスタート・アドレスとエンド・アドレスを設定します。
 - 引数(u32_start_addr)のブランク・チェック対象のデータ・フラッシュ・スタート・アドレスを FLAPL/H レジスタに設定します。
 - エンド・アドレス(開始アドレス+指定バイト数)を計算し、FLSEDL/H に設定します。
- ・FSSQ レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSQ_BLANKCHECK_DF:0x8B を設定し、ブランク・チェックを開始します。
(SQST[bit7] = 1, MDCH[bit3] = 1, SQMD[bit2-0] = 3[0b011], 他の bit は 0)

備考：

- ・ブロックをまたがって指定することはできません。1ブロックの範囲内で指定してください。
- ・引数(i_u32_start_addr)は 32bit の上位 8bit を 0x00 でマスクした下位 24bit を使用します。デバイスに実装されているデータ・フラッシュ領域の範囲内であることが前提条件です。範囲外の領域を指定した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・アクセス禁止状態で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.3.4 R_RFD_SetDFProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetDFProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー](指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをデータ・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_DATA_FLASH_PROGRAMMING を設定、データ・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。
- ・R_RFD_Init 関数実行時に設定された、"g_u08_cpu_frequency"を FSSET レジスタに設定します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モードへは、非書き換えモードから遷移してください。

3.3.3.5 R_RFD_SetDFNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetDFNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー] (指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをデータ・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定 (禁止[DI]/許可[EI]) を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ引数で非書き換えモード値を設定、データ・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
- ・モード移行時 Wait(10μs)を実施します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定 (禁止[DI]/許可[EI]) を復帰します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・(g_u08_change_interrupt_vector_flag)の値により、FLPMC レジスタの値を設定します。
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x00(未実行)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_ENABLE : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] (割り込みは、ROM 上の割り込みベクタで分岐)
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x55(実行済)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_DISABLE : 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0] (割り込みは、RAM 上の指定アドレスへ分岐)
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。

3.3.3.6 R_RFD_CheckDFProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckDFProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードがデータ・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・FLPMC レジスタの値を読み出し、その値がデータ・フラッシュ・プログラミング・モードのレジスタ値と等しいかを確認します。
- データ・フラッシュ・プログラミング・モード : 0x10[EEEMD(FLPMC の bit4) = 1]

備考 :

- ・R_RFD_SetDFProgrammingMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.3.7 R_RFD_CheckDFNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckDFNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ FLPMC レジスタの値を読み出し、その値が非書き換えモードのレジスタ値と等しいかを確認します。
 - 非書き換えモード : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] or 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0]

備考 :

- ・ R_RFD_SetDFNonProgrammableMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.3.8 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckDFSeqEndStep1(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ・コマンド動作中]
Description	起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後に実行してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckDFSeqEndStep2() を実行してください。	

動作概要 :

- ・ 起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作が終了[SQEND(FSASTH の bit6) = 1]したかどうかを確認します。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作が終了していた場合、フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ(FSSQ)へ 0x00 を設定して SQST[bit7] をクリアし、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。終了していなかった場合は、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・ 戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。
- ・ 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckDFSeqEndStep2() を実行してください。

3.3.3.9 R_RFD_CheckDFSeqEndStep2

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckDFSeqEndStep2(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了 : シーケンサ動作終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ動作中]
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。	
Preconditions	関数 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後に実行してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ(FSSQ)へ 0x00 を設定したことにより、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの動作が全て終了[SQEND(FSASTH の bit6) = 0]したかどうかを確認します。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの動作が終了していた場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。
終了していなかった場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・R_RFD_CheckDFSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。

3.3.3.10 R_RFD_GetDFSeqErrorStatus

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_GetDFSeqErrorStatus (uint8_t __near * onp_u08_error_status);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	uint8_t __near * onp_u08_error_status	発生したエラー情報を格納する変数へのポインタ
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要：

- ・ FSASTL レジスタの値(8bit)を読み出し、bit5-0 の値を引数ポインタ(onp_u08_error_status)が示す変数に格納します。

※bit7,6,2 は固定値(0)を設定する。

取得するエラー情報 (FSASTL レジスタ bit 5-0 内の 5bit)

- [bit5 : エクストラ領域シーケンサ・エラー]
- [bit4 : コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー]
- [bit3 : ブランク・チェック・コマンド・エラー]
- [bit1 : 書き込みコマンド・エラー]
- [bit0 : 消去コマンド・エラー]

備考：

- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、正しい値を取得できません。

3.3.3.11 R_RFD_ClearDFSeqRegister

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ClearDFSeqRegister(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。	
Preconditions	データ・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	R_RFD_CheckDFSeqEndStep2()実行後に、本関数を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュ初期化レジスタ[FLRST]に 0x01 を設定した後、FLRST レジスタに 0x00 を設定します。対象レジスタがクリアされます。
- 対象となるコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタ：
FLAPH/L, FLSEDH/L, FLWH/L, FLARS, FSSQ, FSSE

備考：

- ・本関数を実行しても、フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドにより発生したエラー情報(FSASTL レジスタ)はクリアされません。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・データ・フラッシュ・プログラミング・モード以外で、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.3.12 R_RFD_ForceStopDFSeq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ForceStopDFSeq(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサを起動するコマンド開始後(コマンド実行中、シーケンサ動作中)に使用してください。 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1()により、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK が返る前(シーケンサ動作終了前)に使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckDFSeqEndStep1()を使用してください。	

動作概要：

- ・ ブランク・チェック、消去コマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中に FSSQ レジスタの FSSTP[bit6]に'1'を設定し、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作を強制停止します。

備考：

- ・ 本関数は、コマンドを**緊急時**に強制停止させたい場合のみ使用してください。
- ・ ブランク・チェック、消去コマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中にのみ使用してください。
- ・ 消去コマンド中に本関数を実行した場合は、対象領域をもう一度消去してください。
- ・ ブランク・チェック、消去以外のコマンドのコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ動作中、及びエクストラ領域シーケンサ動作中は本関数を実行しないでください。使用した場合、その後の動作は不定になります。(書き込みコマンド中に本関数を実行した場合は、書き込みデータが不定となります。)
- ・ 本関数は、コマンド実行状態が不定のときは実行できません。
- ・ 本関数使用后、強制停止したコマンドによりエラーが発生する場合がありますが、コマンドが終了していない可能性があるため、エラー・フラグを参照しないでください。

3.3.3.13 r_rfd_df_wait_count

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void r_rfd_df_wait_count(uint8_t i_u08_count);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint8_t i_u08_count	Wait する時間(1 カウントで 1μsec:1~255)
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	1 カウントで 1μsec として、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループで Wait します。	
Preconditions	-	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ g_u08_cpu_frequency (CPU 動作周波数 - 1) の値に 1 を足して、CPU 動作周波数値に戻します。
- ・ 指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数を算出、ソフトウェアループを実行します。

[指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数]

$$= [(周波数値[\text{MHz}] \times (\text{カウント}[\mu\text{s}])) / (\text{ループの実行サイクル:}8[\text{サイクル}]) + 1$$

例) 周波数値:32[MHz]、カウント:10[μs]の場合

$$\text{Wait する時間(カウント}[\mu\text{s}]) \text{のソフトウェアループ回数} = (32[\text{MHz}] \times 10[\mu\text{s}] / 8[\text{サイクル}]) + 1$$

(切り捨て計算で Wait 時間未満にならないよう、1 回加算されています。)

$$= 41[\text{回}]$$

$$\text{本関数実行時間} = 1/32[\text{MHz}] \times 8[\text{サイクル}] \times 41[\text{回}] = 10.25[\mu\text{s}]$$

備考 :

- ・ Wait 範囲は 1~255μs までで、ループ以外の処理のオーバーヘッドは Wait 時間に含まれていません。

3.3.4 エクストラ領域制御 API 関数仕様

RFD RL78 Type11 のエクストラ領域制御関数を示します。

3.3.4.1 R_RFD_SetExtraEraseProtectReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraEraseProtectReq(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブロック消去禁止フラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、ブロック消去禁止フラグの書き込みを開始します。
- FLSEC レジスタを読み出し、現在設定されている BTFLG[bit8]の値を反映、SEPR[bit10]を'0'(ブロック消去禁止)にして FLWL レジスタに設定するとともに、0xFFFF を FLWH レジスタに設定します。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SECURITY_FLAG :0x87 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 7[0b111], 他の bit は 0)

備考：

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.2 R_RFD_SetExtraWriteProtectReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraWriteProtectReq(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、書き込み禁止フラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、書き込み禁止フラグの書き込みを開始します。
- FLSEC レジスタを読み出し、現在設定されている BTFLG[bit8]の値を反映、WRPR[bit12]を'0'(書き込み禁止)にして FLWL レジスタに設定するとともに、0xFFFF を FLWH レジスタに設定します。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SECURITY_FLAG :0x87 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 7[0b111], 他の bit は 0)

備考 :

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.3 R_RFD_SetExtraBootAreaProtectReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraBootAreaProtectReq(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。
- FLSEC レジスタを読み出し、現在設定されている BTFLG[bit8]の値を反映、BTPR[bit9]を'0'(書き込み禁止)にして FLWL レジスタに設定するとともに、0xFFFF を FLWH レジスタに設定します。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SECURITY_FLAG :0x87 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 7[0b111], 他の bit は 0)

備考 :

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.4 R_RFD_SetExtraBootAreaReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraBootAreaReq (e_rfd_boot_cluster_t i_e_boot_cluster);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	e_rfd_boot_cluster_t i_e_boot_cluster	ブート・クラスタ番号(バンク番号) R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0 : 0x01 [ブート・クラスタ 0 (バンク 0)] R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1 : 0x00 [ブート・クラスタ 1 (バンク 1)]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域切り替えフラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・本関数実行で BTFLG が書かれた直後にブート・スワップせず、リセット実行後にブート・スワップするように設定します。
- FSSET レジスタと FLSEC レジスタを読み出します。

[ブート・スワップ機能で使用する場合]

- FSSET レジスタの TMSPMD[bit7]が'0'の時のみ、TMSPMD[bit7]に'1'を設定すると同時に現在設定されている FLSEC レジスタの BTFLG[bit8]で指定されているブート・クラスタの状態を、FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に反映します。

TMSPMD = 0 / 1 : ブート・スワップはエクストラ領域の情報(BTFLG)に従う / ブート・スワップは TMBTSEL に従う

BTFLG = 0 / 1 : ブート領域はブート・クラスタ 1 / ブート領域はブート・クラスタ 0

TMBTSEL = 0 / 1 : ブート領域はブート・クラスタ 0 / ブート領域はブート・クラスタ 1

[バンク・スワップ機能で使用する場合]

- FSSET レジスタの TMSPMD[bit7]が'0'の時のみ、TMSPMD[bit7]に'1'を設定すると同時に現在設定されている FLSEC レジスタの BTFLG[bit8]で指定されている起動バンクの状態を、FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に反映します。

TMSPMD = 0 / 1 : バンク・スワップはエクストラ領域の情報(BTFLG)に従う / バンク・スワップは TMBTSEL に従う

BTFLG = 0 / 1 : 起動バンクはバンク 1 / 起動バンクはバンク 0

TMBTSEL = 0 / 1 : 起動バンクはバンク 0 / 起動バンクはバンク 1

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、ブート領域切り替えフラグの書き込みを開始します。
引数(i_e_boot_cluster)により指定されるブート・クラスタ(バンク)を FLSEC レジスタの BTFLG[bit8]に該当するビットに設定した値を FLWL レジスタに設定するとともに、R_RFD_VALUE_U08_MASK1_16BIT (0xFFFF)を FLWH レジスタに設定します。
 - R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1 が指定された場合:
FLWL レジスタに R_RFD_VALUE_U16_MASK0_BOOT_FLAG (0xFEFF)を設定します。
 - R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0 が指定された場合:
FLWL レジスタに R_RFD_VALUE_U08_MASK1_16BIT (0xFFFF)を設定します。
- ・ FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SECURITY_FLAG :0x87 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 7[0b111], 他の bit は 0)

備考 :

- ・引数(i_e_boot_cluster)は、正しい値(列挙型 : e_rfd_boot_cluster_t)であることが前提条件です。引数(i_e_boot_cluster)に R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0、R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1 の値以外を指定した場合、R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0 を設定します。
 - [ブート・スワップ機能で使用する場合]
ブート・クラスタを 16Kbyte に設定した場合の例
ブート領域に設定したブート・クラスタ : 00000H~03FFFH(ブート領域)に配置されます。
ブート領域に設定しなかったブート・クラスタ : 04000H~07FFFH(ブート領域の直後)に配置されます。
 - [バンク・スワップ機能で使用する場合]
バンク・サイズを 256Kbyte に設定した場合の例
起動バンクに設定したバンク : 00000H~3FFFFH に配置されます。
起動バンクに設定しなかったバンク : 40000H~7FFFFH(書き換えバンク)に配置されます。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.5 R_RFD_SetExtraFSWProtectReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraFSWProtectReq (void);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)。
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止フラグの書き込みを開始します。
 - FLFSWS レジスタを読み出した値の予約ビット[bit14-9]を'1'に、FSPR[bit15]を'0'(書き換え禁止)にして FLWL レジスタに設定します。
 - FLFSWE レジスタを読み出した値の予約ビット[bit14-9]を'1'にして FLWH レジスタに設定します。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_FSW : 0x81 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 1[0b001], 他の bit は 0)

備考：

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.6 R_RFD_SetExtraFSWReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraFSWReq (uint16_t i_u16_start_block_number, uint16_t i_u16_end_block_number, e_rfd_fsw_mode_t i_e_fsw_mode);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	uint16_t i_u16_start_block_number	スタート・ブロック番号 例:RL78/L23 では、Max. 512Kbyte[0~255]
	uint16_t i_u16_end_block_number	エンド・ブロック番号+1 例:RL78/L23 では、Max. 512Kbyte[1~256]
	e_rfd_fsw_mode_t i_e_fsw_mode	フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域 R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE : 0x00 [インサイド・シールド] R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE : 0x01 [アウトサイド・シールド]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、引数で指定されたフラッシュ・シールド・ウィンドウの範囲と領域制御の書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)。
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・シールド・ウィンドウのスタート・ブロック番号、エンド・ブロック番号+1、フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域の書き込みを開始します。
 - 引数(i_u16_start_block_number)の FSWS(フラッシュ・シールド・ウィンドウ・スタート・ブロック・アドレス)レジスタに該当するブロック番号を FLWL レジスタへ設定します。この時、ブロックアドレス以外のビット[bit15-9]は'1'に設定されています。
 - 引数(i_u16_end_block_number)の FSWE(フラッシュ・シールド・ウィンドウ・エンド・ブロック・アドレス)レジスタに該当するブロック番号を FLWH レジスタへ設定します。この時、ブロックアドレス以外のビット[bit15-9]は'1'に設定し、引数(i_e_fsw_mode)が R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE (インサイド・シールド:0x00)の場合にのみ、FSWC に該当する[bit15]を'0'が設定されます。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_FSW : 0x81 を設定し、書き込みを開始します。
(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 1[0b001], 他の bit は 0)

備考 :

- ・ 設定されるブロック番号は、引数の 16bit のうち、[bit15-9]を無効とした[bit8-0]が設定されます。(最大 511)
- ・ 引数は(`i_u16_start_block_number`) < (`i_u16_end_block_number`) となるように指定してください。
- ・ 引数 `i_u16_end_block_number` には、設定したいウィンドウ範囲のエンド・ブロック番号+1 を指定してください。
(例)
 - ブロック 12 からブロック 15 の 4 ブロックの範囲をシールドする場合[インサイド・シールド]:
`i_u16_start_block_number = 12, i_u16_end_block_number = 16`
`i_e_fsw_mode = R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE [0x00]`
 - ブロック 12 からブロック 15 の 4 ブロックの範囲外をシールドする場合[アウトサイド・シールド]:
`i_u16_start_block_number = 12, i_u16_end_block_number = 16`
`i_e_fsw_mode = R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE [0x01]`
- ・ 引数(`i_e_fsw_mode`)に `R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE`, `R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE` の値以外を指定した場合、アウトサイド・シールド(`R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE`)を設定します。
- ・ 本関数は、フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止フラグが許可状態(`FSPR = 1`)であることが前提条件です。フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止フラグが禁止状態(`FSPR = 0`)で、本関数を実行した場合は、エクストラ領域シーケンサ・エラー(`FSASTL`)[bit5]となり、引数に設定した値に変更されません。
- ・ コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・ デバイスによってコード・フラッシュのサイズが異なるため、使用可能な最大ブロック番号は、対象デバイスのユーザーズマニュアルで確認してください。

3.3.4.7 R_RFD_SetExtraSoftwareReadProtectAreaReq

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetExtraSoftwareReadProtectAreaReq (uint16_t i_u16_start_block_number, uint16_t i_u16_end_block_number, e_rfd_protect_t i_e_protect_flag);	
Reentrancy	Non-reentrant	
Parameters (IN)	uint16_t i_u16_start_block_number	スタート・ブロック番号 例:RL78/L23 では、Max. 512Kbyte[0~255]
	uint16_t i_u16_end_block_number	エンド・ブロック番号 例:RL78/L23 では、Max. 512Kbyte[0~255]
	e_rfd_protect_t i_e_protect_flag	プロテクト・フラグ許可/禁止 R_RFD_ENUM_PROTECT_OFF : 0x01 [書き換え許可] R_RFD_ENUM_PROTECT_ON : 0x00 [書き換え禁止]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・リード・プロテクション領域と、プロテクト・フラグの書き込みを開始します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	本関数実行後 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1()を実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュの書き換え領域をエクストラ領域に設定します。
FLARS レジスタ = R_RFD_VALUE_U08_FLARS_EXTRA_AREA:0x01 (EXA [bit0] = 1)。
- ・エクストラ領域シーケンサを起動し、フラッシュ・リード・プロテクション領域のスタート・ブロック番号、エンド・ブロック番号、プロテクト・フラグの許可、または禁止の書き込みを開始します。
 - 引数(i_u16_start_block_number)の LOW Addr(フラッシュ・リード・プロテクション設定・スタート・ブロック・アドレス)レジスタに該当するブロック番号以外のビット[bit15-9]を'1'にして、FLWL レジスタに設定します。
 - 引数(i_u16_end_block_number)の UP Addr(フラッシュ・リード・プロテクション設定・エンド・ブロック・アドレス)レジスタに該当するブロック番号以外のビット[bit15-9]を'1'にした後、引数(i_e_protect_flag)が R_RFD_ENUM_PROTECT_ON (書き換え禁止:0x00)の場合にのみ、SWPR[bit15]を'0'にして、FLWH レジスタに設定します。
- ・FSSE レジスタに R_RFD_VALUE_U08_FSSE_SOFTWARE_READ : 0x86 を設定し、書き込みを開始します。(ESQST[bit7] = 1, ESQMD[bit2-0] = 6[0b110], 他の bit は 0)

備考：

- ・ 設定されるブロック番号は、引数の 16bit のうち、[bit15-9]を無効とした[bit8-0]が設定されます。(最大 511)
- ・ 引数は($i_u16_start_block_number$) \leq ($i_u16_end_block_number$) となるように指定してください。
- ・ 引数 $i_u16_end_block_number$ (エンド・ブロック番号)には、設定したいウィンドウ範囲のエンド・ブロックを指定してください。(FSW と異なり、"エンド・ブロック番号+1"ではありません。)
(例)
 - ブロック 12 からブロック 15 の 4 ブロックの範囲を指定する場合：
 $i_u16_start_block_number = 12, i_u16_end_block_number = 15$
- ・ 引数($i_e_protect_flag$)に R_RFD_ENUM_PROTECT_OFF, R_RFD_ENUM_PROTECT_ON の値以外を指定した場合、書き換え許可(R_RFD_ENUM_PROTECT_OFF)を設定します。
- ・ 本関数は、フラッシュ・リード・プロテクション・フラグが許可状態(SWPR = 1)であることが前提条件です。フラッシュ・リード・プロテクション・フラグが禁止状態(SWPR = 0)で、本関数を実行した場合は、エクストラ領域シーケンサ・エラー(FSASTL)[bit5]となり、引数に設定した値に変更されません。
- ・ コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・ コード／データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・ デバイスによってコード・フラッシュのサイズが異なるため、使用可能な最大ブロック番号は、対象デバイスのユーザーズマニュアルで確認してください。

3.3.4.8 R_RFD_SetBootAreaImmediately

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_SetBootAreaImmediately (e_rfd_boot_cluster_t i_e_boot_cluster);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	e_rfd_boot_cluster_t	ブート・クラスタ番号(バンク番号)
	i_e_boot_cluster	R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0 : 0x01 [ブート・クラスタ 0 (バンク 0)] R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1 : 0x00 [ブート・クラスタ 1 (バンク 1)]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	[ブート・スワップ機能で使用する場合] 引数で指定されたブート・クラスタを、ブート領域に即時設定します。 [バンク・スワップ機能で使用する場合] 引数で指定されたバンクを、起動バンクに即時設定します。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

[ブート・スワップ機能で使用する場合]

- ・ユーザが引数(i_e_boot_cluster)で指定したブート・クラスタ番号の指定値を FSSET レジスタの TMBTSEL [bit6] に設定すると共に TMSPMD[bit7]に'1'を設定し、即時に対象のブート・クラスタをブート領域へ配置します。
 - 引数(i_e_boot_cluster)に"R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0"を指定:
FSSET に"R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_0(0x80u) | (g_u08_cpu_frequency)"を設定します。
 - 引数(i_e_boot_cluster)に"R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1"を指定:
FSSET に"R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_1(0xC0u) | (g_u08_cpu_frequency)"を設定します。

[バンク・スワップ機能で使用する場合]

- ・ユーザが引数(i_e_boot_cluster)で指定したバンク番号の指定値を FSSET レジスタの TMBTSEL [bit6]に設定すると共に TMSPMD[bit7]に'1'を設定し、即時に対象のバンクを起動バンクへ配置します。
 - 引数(i_e_boot_cluster)に"R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_0"を指定:
FSSET に"R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_0(0x80u) | (g_u08_cpu_frequency)"を設定します。
 - 引数(i_e_boot_cluster)に"R_RFD_ENUM_BOOT_CLUSTER_1"を指定:
FSSET に"R_RFD_VALUE_U08_FSSET_BOOT_CLUSTER_1(0xC0u) | (g_u08_cpu_frequency)"を設定します。

備考 :

[ブート・スワップ機能で使用する場合]

- ・引数(i_e_boot_cluster)に範囲外の値を設定した場合、ブート・クラスタ 0 をブート領域(00000H~03FFFFH : ブート・クラスタ・サイズを 16Kbyte 設定時)に配置します。
- ・ブート領域に設定しなかったブート・クラスタは、ブート領域の直後の(0x04000~0x07FFF : ブート・クラスタ・サイズを 16Kbyte 設定時)に配置されます。
- ・CPU リセットを行うと、本関数の実行に依存せず、FLSEC レジスタのブート領域切り替えフラグ (BTFLG)[bit0]の値に対するクラスタがブート領域に設定されます。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

[バンク・スワップ機能で使用する場合]

- ・引数(i_e_boot_cluster)に範囲外の値を設定した場合、バンク 0 を起動バンク(00000H~3FFFFH : バンク・サイズを 256Kbyte 設定時)に配置します。
- ・起動バンクに設定しなかったバンクは、書き換えバンク(0x40000~0x7FFFF : バンク・サイズを 256Kbyte 設定時)に配置されます。
- ・CPU リセットを行うと、本関数の実行に依存せず、FLSEC レジスタのブート領域切り替えフラグ (BTFLG)[bit0]の値に対するバンクが起動バンクに設定されます。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.9 R_RFD_SetExtraProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetExtraProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー](指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードへ変更後、CPU 動作周波数の値を設定します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_CODE_FLASH_PROGRAMMING を設定、コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。
- ・R_RFD_Init 関数実行時に設定された、"g_u08_cpu_frequency"を FSSET レジスタに設定します。

備考 :

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection()]の呼び出しから [R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへは、非書き換えモードから遷移してください。

3.3.4.10 R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー](指定モードへ設定されなかった)
Description	フラッシュ・メモリ・シーケンサをコード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要：

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection()]を呼び出し、それまでの割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を退避すると共に、割り込みを禁止に設定します。
- ・FLPMC レジスタ値(l_u08_set_flpmc_value)へ引数で非書き換えモード値を設定、コード・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモードへ移行します。
- ・モード移行時 Wait(10μs)を実施します。
- ・フック関数[R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection()]を呼び出し、割り込み設定(禁止[DI]/許可[EI])を復帰します。

備考：

- ・フック関数[R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection()]の呼び出しから[R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection()]の呼び出しまでは、本関数の割り込み禁止区間です。割り込みを許可してこの区間で割り込みを発生させた場合、その後の動作は不定となります。
- ・(g_u08_change_interrupt_vector_flag)の値により、FLPMC レジスタの値を設定します。
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x00(未実行)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_ENABLE : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] (割り込みは、ROM 上の割り込みベクタで分岐)
 - R_RFD_ChangeInterruptVector()実行フラグ = 0x55(実行済)
 - FLPMC = R_RFD_VALUE_U08_FLPMC_MODE_NONPROGRAMMABLE_FWEDIS_DISABLE : 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0] (割り込みは、RAM 上の指定アドレスへ分岐)
- ・R_RFD_Init 関数を実行せずに本関数を実行した場合、RFD の各書き換え処理が正常に実施されても、そのデータの値は保証の対象外となります。RFD RL78 Type11 を使用する場合、全ての RFD 関数を使用する前に、必ず、R_RFD_Init()関数を 1 回実行してください。

3.3.4.11 R_RFD_CheckExtraProgrammingMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckExtraProgrammingMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードがコード・フラッシュ・プログラミング・モードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ FLPMC レジスタの値を読み出し、その値がコード・フラッシュ・プログラミング・モードのレジスタ値と等しいかを確認します。
- コード・フラッシュ・プログラミング・モード : 0x02[FLSPM(FLPMC の bit1) = 1]

備考 :

- ・ R_RFD_SetExtraProgrammingMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.12 R_RFD_CheckExtraNonProgrammableMode

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckExtraNonProgrammableMode(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x11 [モード不一致エラー]
Description	フラッシュ・メモリ制御モードが非書き換えモードであるかどうかを確認します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ FLPMC レジスタの値を読み出し、その値が非書き換えモードのレジスタ値と等しいかを確認します。
 - 非書き換えモード : 0x08[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 1] or 0x00[FWEDIS(FLPMC の bit3) = 0]

備考 :

- ・ R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode()以外でフラッシュ・メモリ・シーケンサのモードを設定した場合、本関数は正しく動作しない可能性があります。
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.13 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ・コマンド動作中]
Description	起動したエクストラ領域シーケンサの動作終了を確認します。	
Preconditions	エクストラ領域シーケンサを起動するコマンド開始後に実行してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2() を実行してください。	

動作概要 :

- ・ 起動したエクストラ領域シーケンサの動作が終了[ESQEND(FSASTH の bit7) = 1]したかどうかを確認します。
- ・ エクストラ領域シーケンサの動作が終了していた場合、フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタ (FSSE)へ 0x00 を設定して ESQST[bit7] をクリアし、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。
終了していなかった場合は、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・ 戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・ Extra 領域シーケンサを起動するコマンド開始後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。
- ・ 本関数で R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を確認後、関数 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2() を実行してください。

3.3.4.14 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_rfd_ret_t R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_rfd_ret_t	R_RFD_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了 : シーケンサ動作終了] R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY : 0x01 [シーケンサ動作中]
Description	フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタのクリアにより、コマンド動作が終了したかどうかを確認します。	
Preconditions	関数 R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後に使用してください。	
Remarks	戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。	

動作概要 :

- ・フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタ(FSSE)へ 0x00 を設定したことにより、エクストラ領域シーケンサ・コマンドの動作が全て終了[ESQEND(FSASTH の bit7) = 0]したかどうかを確認します。
- ・エクストラ領域シーケンサ・コマンドの動作が終了していた場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK を返します。終了していなかった場合、R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY を返します。

備考 :

- ・戻り値が R_RFD_ENUM_RET_STS_BUSY である間は、本関数を再度実行してください。
- ・R_RFD_CheckExtraSeqEndStep1() で、R_RFD_ENUM_RET_STS_OK 確認後以外で、本関数を実行した場合、正常に動作しません。

3.3.4.15 R_RFD_GetExtraSeqErrorStatus

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_GetExtraSeqErrorStatus (uint8_t __near * onp_u08_error_status);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	uint8_t __near * onp_u08_error_status	発生したエラー情報を格納する変数へのポインタ
Return Value	N/A	
Description	エクストラ領域シーケンサ・コマンドにより、発生したエラー情報を取得します。	
Preconditions	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で、本関数を実行してください。	
Remarks	-	

動作概要：

- FSASTL レジスタの値(8bit)を読み出し、bit5-0 の値を引数ポインタ(onp_u08_error_status)が示す変数に格納します。

※bit7,6,2 は固定値(0)を設定する。

取得するエラー情報 (FSASTL レジスタ bit 5-0 内の 5bit)

[bit5 : エクストラ領域シーケンサ・エラー]

[bit4 : コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー]

[bit3 : ブランク・チェック・コマンド・エラー]

[bit1 : 書き込みコマンド・エラー]

[bit0 : 消去コマンド・エラー]

備考：

- コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンド実行中に、本関数を実行した場合、正しい値を取得できません。

3.3.4.16 R_RFD_ClearExtraSeqRegister

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_ClearExtraSeqRegister(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタをクリアします。	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサのコマンドを実行していない状態で使用してください。	
Remarks	R_RFD_CheckExtraSeqEndStep2()実行後に、本関数を実行してください。	

動作概要：

- ・フラッシュ初期化レジスタ[FLRST]に 0x01 を設定した後、FLRST レジスタに 0x00 を設定します。対象レジスタがクリアされます。
- 対象となるコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ制御を行うレジスタ：
FLAPH/L, FLSEDH/L, FLWH/L, FLARS, FSSQ, FSSE

備考：

- ・本関数を実行しても、フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドにより発生したエラー情報(FSASTL レジスタ)はクリアされません。
- ・コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ、エクストラ領域シーケンサ実行中に、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード以外で、本関数を実行した場合、その後の動作は不定となります。

3.3.4.17 r_rfd_extra_wait_count

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void r_rfd_extra_wait_count(uint8_t i_u08_count);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint8_t i_u08_count	Wait する時間(1 カウントで 1μsec:1~255)
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	1 カウントで 1μsec として、入力されたパラメータ値の時間をソフトウェアループで Wait します。	
Preconditions	-	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ g_u08_cpu_frequency (CPU 動作周波数 - 1) の値に 1 を足して、CPU 動作周波数値に戻します。
- ・ 指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数を算出、ソフトウェアループを実行します。

[指定した Wait する時間(カウント[μs])のソフトウェアループ回数]

$$= [(周波数値[\text{MHz}] \times (\text{カウント}[\mu\text{s}])) / (\text{ループの実行サイクル:}8[\text{サイクル}]) + 1$$

例) 周波数値:32[MHz]、カウント:10[μs]の場合

$$\text{Wait する時間(カウント}[\mu\text{s}]) \text{のソフトウェアループ回数} = (32[\text{MHz}] \times 10[\mu\text{s}] / 8[\text{サイクル}]) + 1$$

(切り捨て計算で Wait 時間未満にならないよう、1 回加算されています。)

$$= 41[\text{回}]$$

$$\text{本関数実行時間} = 1/32[\text{MHz}] \times 8[\text{サイクル}] \times 41[\text{回}] = 10.25[\mu\text{s}]$$

備考 :

- ・ Wait 範囲は 1~255μs までで、ループ以外の処理のオーバーヘッドは Wait 時間に含まれていません。

3.3.5 フック関数仕様

RFD RL78 Type11 のフック関数を示します。

3.3.5.1 R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理の前に、割り込みを禁止する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・割り込みの禁止/許可状態を取得し、PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ(sg_u08_psw_ie_state)へ退避します。
- ・割り込み禁止マクロ命令[R_RFD_DISABLE_INTERRUPT]を実行します。

備考 :

- ・割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の前に実行し、クリティカル・セクション終了後、R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection 関数を実行してください。

3.3.5.2 R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_ExitCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理終了後、割り込み状態を復帰する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ (sg_u08_psw_ie_state) の状態により、割り込み許可マクロ命令を実行します。

sg_u08_psw_ie_state の値:

- 0x00[bit7 = 0 : 割り込み禁止]の場合 : 何も実行しません。
- 0x80[bit7 = 1 : 割り込み許可]の場合 : 割り込み許可マクロ命令[R_RFD_ENABLE_INTERRUPT]を実行して、割り込み許可状態(EI)へ復帰します。

備考 :

- ・ R_RFD_HOOK_EnterCriticalSection 関数実行後、割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の終了後に実行します。

3.3.5.3 R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理の前に、割り込みを禁止する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・割り込みの禁止/許可状態を取得し、PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ(sg_u08_cf_psw_ie_state)へ退避します。
- ・割り込み禁止マクロ命令[R_RFD_DISABLE_INTERRUPT]を実行します。

備考 :

- ・割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の前に実行し、クリティカル・セクション終了後、R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection 関数を実行してください。

3.3.5.4 R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_ExitCFCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理終了後、割り込み状態を復帰する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ (sg_u08_cf_psw_ie_state) の状態により、割り込み許可マクロ命令を実行します。

sg_u08_cf_psw_ie_state の値:

- 0x00[bit7 = 0 : 割り込み禁止]の場合 : 何も実行しません。
- 0x80[bit7 = 1 : 割り込み許可]の場合 : 割り込み許可マクロ命令[R_RFD_ENABLE_INTERRUPT]を実行して、割り込み許可状態(EI)へ復帰します。

備考 :

- ・ R_RFD_HOOK_EnterCFCriticalSection 関数実行後、割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の終了後に実行します。

3.3.5.5 R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理の前に、割り込みを禁止する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ 割り込みの禁止/許可状態を取得し、PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ(sg_u08_df_psw_ie_state)へ退避します。
- ・ 割り込み禁止マクロ命令[R_RFD_DISABLE_INTERRUPT]を実行します。

備考 :

- ・ 割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の前に実行し、クリティカル・セクション終了後、R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection 関数を実行してください。

3.3.5.6 R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_ExitDFCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理終了後、割り込み状態を復帰する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ (sg_u08_df_psw_ie_state) の状態により、割り込み許可マクロ命令を実行します。

sg_u08_df_psw_ie_state の値:

- 0x00[bit7 = 0 : 割り込み禁止]の場合 : 何も実行しません。
- 0x80[bit7 = 1 : 割り込み許可]の場合 : 割り込み許可マクロ命令[R_RFD_ENABLE_INTERRUPT]を実行して、割り込み許可状態(EI)へ復帰します。

備考 :

- ・ R_RFD_HOOK_EnterDFCriticalSection 関数実行後、割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の終了後に実行します。

3.3.5.7 R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	割り込み許可フラグ(IE)の状態を退避し、割り込み禁止命令を実行します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理の前に、割り込みを禁止する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ 割り込みの禁止/許可状態を取得し、PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ (sg_u08_extra_psw_ie_state)へ退避します。
- ・ 割り込み禁止マクロ命令[R_RFD_DISABLE_INTERRUPT]を実行します。

備考 :

- ・ 割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の前に実行し、クリティカル・セクション終了後、R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection 関数を実行してください。

3.3.5.8 R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC void R_RFD_HOOK_ExitExtraCriticalSection (void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	N/A	
Description	退避されていた割り込み許可フラグ(IE)の状態を復帰します。	
Preconditions	割り込み禁止状態で実行する処理終了後、割り込み状態を復帰する場合に実行します。	
Remarks	-	

動作概要 :

- ・ PSW の割り込み許可フラグ(IE)の保存データ (sg_u08_extra_psw_ie_state) の状態により、割り込み許可マクロ命令を実行します。

sg_u08_extra_psw_ie_state の値:

- 0x00[bit7 = 0 : 割り込み禁止]の場合 : 何も実行しません。
- 0x80[bit7 = 1 : 割り込み許可]の場合 : 割り込み許可マクロ命令[R_RFD_ENABLE_INTERRUPT]を実行して、割り込み許可状態(EI)へ復帰します。

備考 :

- ・ R_RFD_HOOK_EnterExtraCriticalSection 関数実行後、割り込み禁止状態で実行する必要がある処理(クリティカル・セクション)の終了後に実行します。

4 フラッシュ・メモリ・シーケンサ操作

4.1 フラッシュ・メモリ制御モードの設定

フラッシュ・メモリ・シーケンサの特定シーケンスを実行することで、フラッシュ・メモリ制御モードをコード・フラッシュ、およびデータ・フラッシュを書き換え可能な状態へ設定することが可能です。

- コード・フラッシュ(および、エクストラ領域) 書き換え可能状態：
コード・フラッシュ・プログラミング・モード(Code flash programming mode)
- データ・フラッシュ 書き換え可能状態：
データ・フラッシュ・プログラミング・モード(Data flash programming mode)
- フラッシュ・メモリ(および エクストラ領域) 書き換え不可状態：
非書き換えモード(Non-programmable mode)

本操作の対象関数：R_RFD_SetCFProgrammingMode, R_RFD_SetCFNonProgrammableMode,

R_RFD_SetDFProgrammingMode, R_RFD_SetDFNonProgrammableMode,

R_RFD_SetExtraProgrammingMode, R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モード、およびデータ・フラッシュ・プログラミング・モードへは、非書き換えモードから移行してください。
- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードからデータ・フラッシュ・プログラミング・モードへ直接モードを移行しないでください。また、データ・フラッシュ・プログラミング・モードからコード・フラッシュ・プログラミング・モードへ直接モードを移行しないでください。
- ・非書き換えモードへは、移行しているフラッシュ・メモリ制御モードに対応した移行手順で移行してください。

注) データ・フラッシュ領域を操作する場合の前提条件は、既にデータ・フラッシュ・コントロール・レジスタ(DFLCTL レジスタ)のDFLEN ビット[bit0] = 1(データ・フラッシュのアクセス許可)に設定されていることです。

4.1.1 特定シーケンス実行手順

以下の特定シーケンスで書き込み動作を行った場合のみ、フラッシュ・プログラミング・モード・コントローラ・レジスタ (FLPMC レジスタ) への書き込みが有効になり、各モードへの移行が可能になります。

手順	特定シーケンス (プログラム処理)
ステップ 1:	PFCMD レジスタへ特定値(=0xA5)を書き込む。
ステップ 2:	FLPMC レジスタへ設定したい値を書き込む。
ステップ 3:	FLPMC レジスタへ設定したい値の反転値を書き込む。
ステップ 4:	FLPMC レジスタへ設定したい値を書き込む。

- ・ 特定シーケンスは FLRST レジスタの FLRST[bit0] = 0、かつフラッシュ・メモリ・シーケンサが停止中の場合に実行可能です。
- ・ 特定シーケンスでは、ステップ 1、2、3、4 の間で他のメモリやレジスタへの書き込み動作を行った場合や割り込みが発生した場合、特定レジスタ (FLPMC レジスタ) への書き込みは行われず、プロテクション・エラーが発生し、フラッシュ・ステータス・レジスタ (PFS レジスタ) のステータス・フラグ (FPRERR[bit0]) が '1' にセットされます。PFS レジスタの FPRERR[bit0] は、リセット、または次の特定シーケンス開始時にクリアされます。

PFCMD レジスタ (リセット時:不定) :

7	6	5	4	3	2	1	0
REG7	REG6	REG5	REG4	REG3	REG2	REG1	REG0
W	W	W	W	W	W	W	W

- フラッシュ・プロテクト・コマンド・レジスタ (PFCMD レジスタ) は、書き込み専用のレジスタで、読み出し値は不定となります。

FLPMC レジスタ (リセット時:0x08) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	EEEMD	FWEDIS	0	FLSPM	0
R/W	R/W	R	R/W	R/W	R	R/W	R

PFS レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	0	0	0	FPRERR
R	R	R	R	R	R	R	R

4.1.2 非書き換えモードからコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップ 2, 4 FLPMC レジスタ設定値(0x02) EEEMD[bit4] = 0, FWEDIS[bit3] = 0, FLSPM[bit1] = 1 ・ステップ 3 FLPMC レジスタ反転値(0xFD)
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x02	
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xFD	
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x02	

4.1.3 非書き換えモードからデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップ 2, 4 FLPMC レジスタ設定値(0x10) EEEMD[bit4] = 1, FWEDIS[bit3] = 0, FLSPM[bit1] = 0 ・ステップ 3 FLPMC レジスタ反転値(0xEF)
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x10	
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xEF	
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x10	

4.1.4 非書き換えモード移行手順

コード・フラッシュ・プログラミング・モード、またはデータ・フラッシュ・プログラミング・モードから非書き換えモード移行手順実施後、一定の Wait 時間を経過してからプログラミング・モード対象となっていたフラッシュ・メモリを読み出すことができますようになります。

(1) 割り込みベクタを RAM アドレスへ変更していない場合

R_RFD_ChangeInterruptVector 関数を未実行、もしくは R_RFD_RestoreInterruptVector 関数を実行し、割り込み発生時に ROM 上の割り込みベクタが示すアドレスへ分岐する状態に戻す場合(初期状態)の移行手順です。

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップ 2, 4 FLPMC レジスタ設定値(0x08) EEEMD[bit4] = 0, FWEDIS[bit3] = 1, FLSPM[bit1] = 0 ・ステップ 3 FLPMC レジスタ反転値(0xF7)
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x08	
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xF7	
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x08	

ステップ 5: 10 μ s Wait 後、対象となっていたフラッシュ・メモリの読み出しが可能となります。

(2) 割り込みベクタを RAM アドレスへ変更されている場合

R_RFD_ChangeInterruptVector()関数を実行されており、割り込みの分岐先が RAM 上の指定アドレスへ変更されている場合の移行手順です。

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップ 2, 4 FLPMC レジスタ設定値(0x00) EEEMD[bit4] = 0, FWEDIS[bit3] = 0, FLSPM[bit1] = 0 ・ステップ 3 FLPMC レジスタ反転値(0xFF)
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x00	
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xFF	
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x00	

ステップ 5: 10 μ s Wait 後、対象となっていたフラッシュ・メモリの読み出しが可能となります。

4.2 フラッシュ・メモリ・シーケンサ用レジスタのクリア

フラッシュ初期化レジスタ (FLRST レジスタ) の FLRST ビットをセットすることで、対象レジスタをクリアします。

クリア対象レジスタ : FLAPH, FLAPL, FLSEDH, FLSEDL, FLWH, FLWL, FLARS, FSSQ, FSSE

本操作の対象関数 : R_RFD_ClearSeqRegister

《操作方法》

- ・ FLRST ビットを'1'にします。(FLRST レジスタに 0x01 を書き込みます。)
- ・ 1 サイクル以上待ちます。(NOP 命令等)
- ・ FLRST ビットを'0'にします。(FLRST レジスタに 0x00 を書き込みます。)

注) FSSQ レジスタの SQST ビットが'0'、かつ FSSE レジスタの ESQST ビットが'0'の場合(フラッシュ・メモリ・シーケンサが停止中)に限り FLRST ビットの操作が可能です。それ以外では FLRST ビットを操作できません(書き込みが無効です)。

FLRST レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	0	0	0	FLRST
R	R	R	R	R	R	R	R/W

4.3 フラッシュ・メモリ・シーケンサの動作周波数設定

R_RFD_Init 関数で設定された FSSET レジスタ用の値(g_u08_cpu_frequency)をフラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ(FSSET)の FSET[bit4-0]へ設定します。

CPU が動作する周波数の値の小数点以下を切り上げた整数値を設定します。(例：CPU が動作する周波数が 4.5MHz の場合は、初期化関数で 5 を設定してください)

CPU の動作周波数を 4 MHz 未満で使用する場合は、1 MHz, 2 MHz, 3 MHz を使用することができます。その際、整数値でない周波数(1.5MHz など)は使用できません。

本操作の対象関数：R_RFD_Init, R_RFD_SetCFProgrammingMode, R_RFD_SetCFNonProgrammableMode,
R_RFD_SetDFProgrammingMode, R_RFD_SetDFNonProgrammableMode,
R_RFD_SetExtraProgrammingMode, R_RFD_SetExtraNonProgrammableMode

《操作方法》

- ・フラッシュ・メモリ制御モードを「コード・フラッシュ・プログラミング・モード」、または「データ・フラッシュ・プログラミング・モード」へ移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、
「4.1.2 非書き換えモードからコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順」、
「4.1.3 非書き換えモードからデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順」を参照してください。
- ・フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ(FSSET)を読み出し、TMSPMD[bit7],TMBTSEL[bit6]の値を保持、[bit5]を'0'、CPU の動作周波数[1~32(MHz)]の値を FSET にあたる[bit4-0]へ設定し、その値を FSSET レジスタへ書き込みます。

注) コード・フラッシュ・プログラミング・モード、またはデータ・フラッシュ・プログラミング・モードのとき、FSSET レジスタの FSET[bit4-0]は書き込みが有効です。それ以外では FSSET レジスタの FSET[bit4-0]を操作できません(書き込みが無効です)。

フラッシュ・メモリ・シーケンサを使用して、コード/データ・フラッシュ・メモリ、またはエクストラ領域へ、書き換え等の操作を実行する場合、FSSET レジスタの FSET へ CPU の動作周波数を設定しておく必要があります。

CPU の動作周波数が正しく設定されていない状態での書き換え動作は不定となり、書かれたデータは保証されませんので、ご注意ください。(書き込み直後のフラッシュ・メモリのデータ値が期待値通りであっても、その値の保持期間を保証できません。)

FSSET レジスタ(リセット時:0x00):

7	6	5	4	3	2	1	0
TMSPMD	TMBTSEL	0	FSET4	FSET3	FSET2	FSET1	FSET0
R/W	R/W	R	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

4.4 フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンド

4.4.1 概要

RL78/L23のフラッシュ・メモリ・シーケンサは、コード・フラッシュ領域、またはデータ・フラッシュ領域を書き換えるコード/データ・フラッシュ領域シーケンサとエクストラ領域を書き換えるエクストラ領域シーケンサがあります。それぞれの領域を書き換えるには、各シーケンサのコマンドを実行する必要があります。また、「1.5 注意事項」の「(3)フラッシュ・メモリ書き換え操作中のプログラム実行」を参照、ご理解いただいた上で、フラッシュ・メモリ・シーケンサのコマンドを実行してください。

4.4.1.1 書き換え領域の選択

フラッシュ領域選択レジスタ (FLARS レジスタ)により、コード/データ・フラッシュ領域の書き換え時はユーザ領域を選択、エクストラ領域の書き換え時はエクストラ領域を選択する必要があり、FLARS レジスタの EXA[bit0]を操作して、書き込む領域を選択します。FLRST レジスタの FLRST[bit0] = 1 の期間中は、EXA ビットへの書き込みができません。

FLARS レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	0	0	0	EXA
R	R	R	R	R	R	R	R/W

EXA = 0 (リセット時)/1 : ユーザ領域選択/エクストラ領域選択

4.4.2 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンド

コード/データ・フラッシュ領域の書き換えは、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの専用コマンドを使用します。コマンドの発行は、フラッシュ・メモリ・シーケンサ制御レジスタ(FSSQ)の SQMD2-0[bit2-0] へ対象のコマンド番号を入力するとともに、SQST[bit7]を'1'に設定します。

FSSQ レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
SQST	FSSTP	0	0	MDCH	SQMD2	SQMD1	SQMD 0
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの専用コマンドを表 4-1 に示します。

表 4-1 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサの専用コマンド

SQMD2-0	MDCH 設定値	機能(専用コマンド)
		コマンドの説明
1H	CF:0	書き込み
	DF:0	FLAPH/FLAPLレジスタで指定されるフラッシュ・メモリのアドレスに、FLWH/FLWLレジスタで指定したデータを書き込みます。 ・コード・フラッシュ(1ワード[4byte])書き込み:FLWH/FLWLレジスタへ設定。 ・データ・フラッシュ(1byte)書き込み:FLWLレジスタのFLW7-0[bit7-0]へ設定。
3H	CF:0	ブランク・チェック
	DF:1	FLAPH/FLAPLレジスタで指定されるアドレスからFLSEDH/FLSEDLレジスタで指定されるアドレスまでのブランク・チェックを行います。ブランク・チェックする対象のフラッシュ・メモリにより、FSSQレジスタのMDCH[bit3]の設定値が異なります。コード・フラッシュではMDCH[bit3] = 0、データ・フラッシュではMDCH[bit3] = 1を設定しておく必要があります。
4H	CF:0	ブロック消去
	DF:0	FLAPH/FLAPLレジスタで指定されるブロック先頭アドレスからFLSEDH/FLSEDLレジスタで指定されるブロック終了アドレスまでのブロック消去を行います。
その他の値	-	設定禁止

※CF : コード・フラッシュ・メモリ・アクセス時

DF : データ・フラッシュ・メモリ・アクセス時

・ FLAPH/FLAPL レジスタ (フラッシュ・アドレス・ポインタ・レジスタ)

FLAPH レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	FLAP 19	FLAP 18	FLAP 17	FLAP 16
R	R	R	R	R/W	R/W	R/W	R/W

FLAPL レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
FLAP 15	FLAP 14	FLAP 13	FLAP 12	FLAP 11	FLAP 10	FLAP 9	FLAP 8
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W
7	6	5	4	3	2	1	0
FLAP 7	FLAP 6	FLAP 5	FLAP 4	FLAP 3	FLAP 2	FLAP 1	FLAP 0
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

・ FLWH/FLWL レジスタ (フラッシュ・ライト・バッファ・レジスタ)

FLWH レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
FLW 31	FLW 30	FLW 29	FLW 28	FLW 27	FLW 26	FLW 25	FLW 24
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W
7	6	5	4	3	2	1	0
FLW 23	FLW 22	FLW 21	FLW 20	FLW 19	FLW 18	FLW 17	FLW 16
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

FLWL レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
FLW 15	FLW 14	FLW 13	FLW 12	FLW 11	FLW 10	FLW 9	FLW 8
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W
7	6	5	4	3	2	1	0
FLW 7	FLW 6	FLW 5	FLW 4	FLW 3	FLW 2	FLW 1	FLW 0
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

※データ指定時は、各ビットの機能ごとに設定方法が異なるため、注意が必要です。

- ・ FLSEDH/FLSEDL レジスタ (フラッシュ・エンド・アドレス指定レジスタ)

FLSEDH レジスタ (リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	EWA 19	EWA 18	EWA 17	EWA 16
R	R	R	R	R/W	R/W	R/W	R/W

FLSEDL レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
EWA 15	EWA 14	EWA 13	EWA 12	EWA 11	EWA 10	EWA 9	EWA 8
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W
7	6	5	4	3	2	1	0
EWA 7	EWA 6	EWA 5	EWA 4	EWA 3	EWA 2	EWA 1	EWA 0
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

4.4.2.1 コード・フラッシュ領域書き換えの操作

コード・フラッシュ領域の書き換えは、フラッシュ・メモリ制御モードをコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行後、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドを実行します。各コマンド実行に必要な指定アドレスやデータをあらかじめ該当レジスタに設定してから、コマンドを開始する必要があります。

コード・フラッシュ領域書き換え時の消去ブロック単位/書き込み単位

- 消去ブロック単位 : 2Kbyte
- 書き込み単位 : 1ワード[4byte]

本操作の対象関数 : R_RFD_EraseCodeFlashReq, R_RFD_WriteCodeFlashReq,
R_RFD_BlankCheckCodeFlashReq

《操作方法》

対象コマンドは、コード・フラッシュのブロック消去、書き込み、ブランク・チェックです。

- ・ **コード・フラッシュ・プログラミング・モード**に移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.2 非書き換えモードからコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順」を参照してください。
- ・ FLARS レジスタ = 0x00(EXA[bit0] = 0) : 「**ユーザ領域選択**」を設定します。
- ・ 各コマンド実行前に、対象レジスタへ指定データを設定します。

(1) ブロック消去

FLAPH/FLAPL レジスタ : コード・フラッシュ・メモリのブロック先頭アドレス (例:0x002000)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : コード・フラッシュ・メモリのブロック終了アドレス (例:0x0027FF)

(2) 書き込み:1ワード[4byte]単位のため、アドレスは、[bit1-0]が'0'の4の倍数を設定する必要があります。

FLAPH/FLAPL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの先頭アドレス (例:0x002000)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : ALL'0',または未設定 (例:0x000000)

FLWH/FLWL レジスタ : 書き込むデータ (1ワード[4byte])

(3) ブランク・チェック:1ワード[4byte]単位のため、アドレスは、[bit1-0]が'0'の4の倍数を設定する必要があります。

FLAPH/FLAPL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの先頭アドレス (例:0x002000)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの終了アドレス (例:0x0027FF)

※1ワード[4byte]のみブランク・チェックする場合は、FLAPH/FLAPL = FLSEDH/FLSEDL を設定します。

- ・ FSSQ の SQMD2-0[bit2-0]へ対象コマンド番号を入力するとともに、SQST[bit7]を'1'に設定します。

ブロック消去 : 0x84、書き込み : 0x81、ブランク・チェック : 0x83

- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了を待ちます。コマンドの完了待ち手順は、「4.4.4.1 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順」を参照してください。

- ・ コマンド実行後の処理

コマンド処理を継続する場合 :

コード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行したまま、対象レジスタのデータを更新して同一コマンド実行や、他のコード・フラッシュ領域書き換えコマンドを実行することも可能です。

コマンド処理を完了する場合 :

非書き換え・モードに移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.4 非書き換えモード移行手順」を参照してください。

4.4.2.2 データ・フラッシュ領域書き換えの操作

データ・フラッシュ領域の書き換えは、フラッシュ・メモリ制御モードをデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行後、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドを実行します。各コマンド実行に必要な指定アドレスやデータをあらかじめ該当レジスタに設定してから、コマンドを開始する必要があります。

データ・フラッシュ領域書き換え時の消去ブロック単位/書き込み単位

- 消去ブロック単位 : **256byte**
- 書き込み単位 : **1byte**

本操作の対象関数 : R_RFD_EraseDataFlashReq, R_RFD_WriteDataFlashReq,
R_RFD_BlankCheckDataFlashReq

《操作方法》

対象コマンドは、データ・フラッシュのブロック消去、書き込み、ブランク・チェックです。

- ・ **データ・フラッシュ・プログラミング・モード**に移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.3 非書き換えモードからデータ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行する手順」を参照してください。
- ・ FLARS レジスタ = 0x00(EXA[bit0] = 0) : 「**ユーザ領域選択**」を設定します。
- ・ 各コマンド実行前に、対象レジスタへ指定データを設定します。

(1) ブロック消去

FLAPH/FLAPL レジスタ : データ・フラッシュ・メモリのブロック先頭アドレス (例:0x0F1400)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : データ・フラッシュ・メモリのブロック終了アドレス (例:0x0F14FF)

(2) 書き込み:1byte

FLAPH/FLAPL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの先頭アドレス (例:0x0F1101)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : ALL'0'、または未設定 (例:0x000000)

FLWH/FLWL レジスタ : 書き込むデータを設定(0x00000000-0x000000FF) FLW7-0[bit7-0]のみ有効です。

(3) ブランク・チェック

FLAPH/FLAPL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの先頭アドレス (例:0x0F1400)

FLSEDH/FLSEDL レジスタ : 対象のフラッシュ・メモリの終了アドレス (例:0x0F14FF)

※1byteのみブランク・チェックする場合は、FLAPH/FLAPL = FLSEDH/FLSEDL を設定します。

- ・ FSSQ の SQMD2-0[bit2-0]へ対象コマンド番号を入力するとともに、SQST[bit7]を'1'に設定します。
ブロック消去 : 0x84、書き込み : 0x81、ブランク・チェック : **0x8B (MDCH[bit3] = 1:DF の場合のみ)**
- ・ コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了を待ちます。コマンドの完了待ち手順は、「4.4.4.1 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順」を参照してください。
- ・ コマンド実行後の処理

コマンド処理を継続する場合 :

データ・フラッシュ・プログラミング・モードに移行したまま、対象レジスタのデータを更新して同一コマンド実行や、他のデータ・フラッシュ領域書き換えコマンドを実行することも可能です。

コマンド処理を完了する場合 :

非書き換え・モードに移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.4 非書き換えモード移行手順」を参照してください。

4.4.3 エクストラ領域シーケンサ・コマンド

エクストラ領域の書き換えは、フラッシュ・メモリ制御モードをコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行後、エクストラ領域シーケンサの専用コマンドを使用します。コマンドの発行は、フラッシュ・エクストラ領域シーケンサ制御レジスタ(FSSE)のESQMD3-0[bit3-0]へ対象のコマンド番号を入力するとともに、ESQST[bit7]を'1'に設定します。

FSSE レジスタ(リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
ESQST	0	0	0	ESQMD3	ESQMD2	ESQMD1	ESQMD0
R/W	R	R	R	R/W	R/W	R/W	R/W

エクストラ領域シーケンサの専用コマンドを表 4-2 に示します。

表 4-2 エクストラ領域シーケンサの専用コマンド

ESQMD3-0	機能(専用コマンド)
	コマンドの説明
1H	エクストラ領域書き込み(FSW関連データのプログラミング)
	FLWH/FLWLレジスタで指定したデータを書き込みます。FSW、FSWコントロール、FSWプロテクション・フラグの設定を行います。FSWプロテクション・フラグが設定されている場合(FSPR=0)、本コマンドは実行できません。実行した場合シーケンサ・エラー(FSASTLレジスタ・ESEQER=1)になります。
6H	エクストラ領域書き込み(フラッシュ・リード・プロテクション領域、プロテクション・フラグのプログラミング)
	FLWH/FLWLレジスタで指定したデータを書き込みます。フラッシュ・リード・プロテクション領域、プロテクション・フラグの設定を行います。プロテクション・フラグが設定されている場合(SWPR=0)、本コマンドは実行できません。実行した場合シーケンサ・エラー(FSASTLレジスタ・ESEQER=1)になります。
7H	エクストラ領域書き込み(セキュリティ・フラグとブート領域切り替えフラグのプログラミング)
	FLWH/FLWLレジスタで指定したデータを書き込みます。セキュリティ・フラグとブート領域切り替えフラグの設定を行います。セキュリティ・フラグは、現フラグに対して禁止の設定のみ可能です。ブート・プロテクトが設定されている場合(BTPR=0)、ブート領域切り替えフラグは設定できません。
その他の値	設定禁止

4.4.3.1 エクストラ領域の書き換えの操作

エクストラ領域の書き換えは、フラッシュ・メモリ制御モードをコード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行後、エクストラ領域シーケンサ・コマンドを実行します。各コマンド実行に必要なデータをあらかじめ該当レジスタに設定してから、コマンドを開始する必要があります。

エクストラ領域書き換え時の書き込み単位

- 書き込み単位 : 1 ワード[4byte]

※消去コマンド、消去単位はありません。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetExtraEraseProtectReq, R_RFD_SetExtraWriteProtectReq,
R_RFD_SetExtraBootAreaProtectReq, R_RFD_SetExtraBootAreaReq,
R_RFD_SetExtraFSWProtectReq, R_RFD_SetExtraFSWReq,
R_RFD_SetExtraSoftwareReadProtectAreaReq

《操作方法》

対象コマンドは、エクストラ領域データの書き込みです。

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.2 コード・フラッシュ・プログラミング・モード移行手順」を参照してください。
- ・FLARS レジスタ = 0x01(EXA[bit0] = 1) : 「**エクストラ領域選択**」を設定します。
- ・コマンド実行前に FLWH/FLWL レジスタへ 1 ワード[4byte]のデータを指定します。FLWH/FLWL レジスタの各ビット(FLW31-FLW0)は、対象のエクストラ領域データの[EX bit31-0]に対応します。

FLWH レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
FLW 31	FLW 30	FLW 29	FLW 28	FLW 27	FLW 26	FLW 25	FLW 24
7	6	5	4	3	2	1	0
FLW 23	FLW 22	FLW 21	FLW 20	FLW 19	FLW 18	FLW 17	FLW 16

FLWL レジスタ (リセット時:0x0000) :

15	14	13	12	11	10	9	8
FLW 15	FLW 14	FLW 13	FLW 12	FLW 11	FLW 10	FLW 9	FLW 8
7	6	5	4	3	2	1	0
FLW 7	FLW 6	FLW 5	FLW 4	FLW 3	FLW 2	FLW 1	FLW 0

※データ指定時は、各ビットの機能ごとに設定方法が異なるため、注意が必要です。

- ・書き込む領域はコマンドで指定し、FSSE の SQMD3-0[bit3-0]へ対象コマンド番号を入力するとともに、ESQST[bit7]を '1' に設定します。
 - (1)FSW 関連データのプログラミング:0x81
 - (2)フラッシュ・リード・プロテクション領域、プロテクション・フラグのプログラミング:0x86
 - (3)セキュリティ・フラグとブート領域切り替えフラグのプログラミング:0x87
- ・エクストラ領域シーケンサ・コマンドの完了を待ちます。コマンドの完了待ち手順は、「4.4.4.2 エクストラ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順」を参照してください。

・コマンド実行後の処理

コマンド処理を継続する場合：

コード・フラッシュ・プログラミング・モードに移行したまま、対象レジスタのデータを更新して同一コマンド実行や、他のエクストラ領域書き換えコマンドを実行することも可能です。

コマンド処理を完了する場合：

非書き換え・モードに移行します。移行手順は「4.1.1 特定シーケンス実行手順」、および「4.1.4 非書き換えモード移行手順」を参照してください。

4.4.3.2 エクストラ領域シーケンサ・コマンドの設定データ

エクストラ領域の書き込みは、変更しないデータも含めて1ワード[4byte]単位で行います。対象コマンドごとに示すエクストラ領域データの[EX bit31-0]を FLWH/FLWL レジスタの[FLW31-FLW0]へ設定してからコマンドを実行します。

(1)FSW 関連データのプログラミング

以下のエクストラ領域データの[EX bit31-0]を FLWH/FLWL レジスタの[FLW31-FLW0]へ設定します。

EX bit 31	EX bit 30	EX bit 29	EX bit 28	EX bit 27	EX bit 26	EX bit 25	EX bit 24
FSWC	-	-	-	-	-	-	FSWE8
EX bit 23	EX bit 22	EX bit 21	EX bit 20	EX bit 19	EX bit 18	EX bit 17	EX bit 16
FSWE7	FSWE6	FSWE5	FSWE4	FSWE3	FSWE2	FSWE1	FSWE0
EX bit 15	EX bit 14	EX bit 13	EX bit 12	EX bit 11	EX bit 10	EX bit 9	EX bit 8
FSPR	-	-	-	-	-	-	FSWS8
EX bit 7	EX bit 6	EX bit 5	EX bit 4	EX bit 3	EX bit 2	EX bit 1	EX bit 0
FSWS7	FSWS6	FSWS5	FSWS4	FSWS3	FSWS2	FSWS1	FSWS0

- FSWE8-0[bit24-16]は、ウィンドウ範囲の[エンド・ブロック] +1 です。

- FSWC[bit31]は、シールド領域を設定します。

FSWC = 0 / 1(出荷時): シールド領域はウィンドウ範囲の**内側** / シールド領域はウィンドウ範囲の**外側**

- FSWS8-0[bit8-0]は、ウィンドウ範囲の[スタート・ブロック]です。

- FSPR[bit15]は、FSW 書き換え禁止を設定します。

FSPR = 0 / 1(出荷時): FSW 設定の書き換え**禁止** / FSW 設定の書き換えを**許可**

(2)フラッシュ・リード・プロテクション領域、プロテクション・フラグのプログラミング

以下のエクストラ領域データの[EX bit31-0]を FLWH/FLWL レジスタの[FLW31-FLW0]へ設定します。

EX bit 31	EX bit 30	EX bit 29	EX bit 28	EX bit 27	EX bit 26	EX bit 25	EX bit 24
SWPR	-	-	-	-	-	-	UPAddr8
EX bit 23	EX bit 22	EX bit 21	EX bit 20	EX bit 19	EX bit 18	EX bit 17	EX bit 16
UPAddr7	UPAddr6	UPAddr5	UPAddr4	UPAddr3	UPAddr2	UPAddr1	UPAddr0
EX bit 15	EX bit 14	EX bit 13	EX bit 12	EX bit 11	EX bit 10	EX bit 9	EX bit 8
-	-	-	-	-	-	-	LOWAddr8
EX bit 7	EX bit 6	EX bit 5	EX bit 4	EX bit 3	EX bit 2	EX bit 1	EX bit 0
LOWAddr7	LOWAddr6	LOWAddr5	LOWAddr4	LOWAddr3	LOWAddr2	LOWAddr1	LOWAddr0

- UPAddr8-0[bit24-16]は、フラッシュ・リード・プロテクション領域の[エンド・ブロック]です。

- LOWAddr8-0[bit8-0]は、フラッシュ・リード・プロテクション領域の[スタート・ブロック]です。

- SWPR[bit31]は、フラッシュ・リード・プロテクション設定領域の変更禁止を指定します。

SWPR = 0 / 1(出荷時): フラッシュ・リード・プロテクション設定領域の変更**禁止** / フラッシュ・リード・プロテクションの設定領域の変更**許可**

(3)セキュリティ・フラグとブート領域切り替えフラグのプログラミング

以下のエクストラ領域データの[EX bit31-0]をFLWH/FLWLレジスタの[FLW31-FLW0]へ設定します。

EX bit 31	EX bit 30	EX bit 29	EX bit 28	EX bit 27	EX bit 26	EX bit 25	EX bit 24
1	1	1	1	1	1	1	1
EX bit 23	EX bit 22	EX bit 21	EX bit 20	EX bit 19	EX bit 18	EX bit 17	EX bit 16
1	1	1	1	1	1	1	1
EX bit 15	EX bit 14	EX bit 13	EX bit 12	EX bit 11	EX bit 10	EX bit 9	EX bit 8
1	1	1	WRPR	1	SEPR	BTPR	BTFLG
EX bit 7	EX bit 6	EX bit 5	EX bit 4	EX bit 3	EX bit 2	EX bit 1	EX bit 0
1	1	1	1	1	1	1	1

- WRPR[bit12]は、シリアル・プログラミング・モードでの書き込み禁止を設定します。

WRPR = 0 / 1 (出荷時) : シリアル・プログラミング・モードでの書き込みを**禁止**/書き込みを**許可**

- SEPR[bit10]は、シリアル・プログラミング・モードでのブロック消去禁止を設定します。

SEPR = 0 / 1 (出荷時) : シリアル・プログラミング・モードでのブロック消去を**禁止**/ブロック消去を**許可**

- BTPR[bit9]は、シリアル/セルフ・プログラミング両方でのブート領域の書き換え禁止を設定します。

BTPR = 0 / 1 (出荷時) : ブート領域の書き換え**禁止**/ブート領域の書き換えを**許可**

- BTFLG[bit8]は、TMSPM = 0[ブート・スワップはエクストラ領域のブート領域切り替えフラグ(BTFLG)に従う]の場合のブート領域に設定するブート・クラスタを制御します。

BTFLG = 0 / 1 (出荷時) : ブート領域はブート・クラスタ **1** / ブート領域はブート・クラスタ **0**

- 注意**
- BTFLG を書き換える場合、その他の全てのビットは'1'を設定してください。
 - BTFLG 以外のセキュリティ・フラグを'0'(禁止)に書き換える場合、BTFLG(読み込んだ値と同じ値を設定)を除き、その他の全てのビットは'1'を設定してください。
 - WRPR=0(禁止)に設定した場合、シリアル・プログラミング・モードのチップ消去コマンドを実行した場合のみ、WRPR=1(許可)にすることができます。

※但し、以下のいずれかの禁止が設定されている場合は、シリアル・プログラミング・モードのチップ消去コマンドを実行できません。

- ・ SEPR = 0 (ブロック消去禁止)
- ・ BTPR = 0 (ブート領域書き換え禁止)
- ・ IFPR = 0 (プログラマ・OCD 接続禁止)

4.4.4 フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドの終了判定手順

RL78/L23 で起動したフラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドを終了する場合、特定の終了判定手順を実行する必要があります。

フラッシュ・メモリ・シーケンサ・コマンドの終了判定では、FSASTH レジスタの ESQEND[bit7]、または SQEND[bit6]を参照、"1"にセットされたことを確認して、コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンド、及びエクストラ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順を実施します。終了判定実施後、コマンドごとのエラーの発生有無を FSASTL レジスタのエラービット(BLER[bit3], WRER[bit1], ERER[bit0])で確認します。

FSASTH レジスタ (リセット時:0x00 / 0x04) :

7	6	5	4	3	2	1	0
ESQEND	SQEND	0	0	0	x	0	0
R	R	R	R	R	R	R	R

FSASTL レジスタ (リセット時:0x00 / 0x80) :

7	6	5	4	3	2	1	0
MBTSEL	MOPEN	ESEQER	SEQER	BLER	0	WRER	ERER
R	R	R	R	R	R	R	R

注) ブート・フラグ・モニタ・ビット(MBTSEL[bit7])は、エクストラ領域のブート領域切り替えフラグ (BTFLG[bit8])の反転値が反映されます。

4.4.4.1 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順

《終了判定手順》

- (1) コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンド起動後、FSASTH レジスタの SQEND[bit6]が自動的にセットされるまで待ちます。
- (2) FSASTH レジスタの SQEND[bit6]のセット確認後、FSSQ レジスタの SQST[bit7] をクリアします。
- (3) FSASTH レジスタの SQEND[bit6]が自動的にクリアされるまで待ち、クリアされたら終了します。

4.4.4.2 エクストラ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順

《終了判定手順》

- (1) エクストラ領域シーケンサ・コマンド起動後、FSASTH レジスタの ESQEND[bit7]が自動的にセットされるまで待ちます。
- (2) FSASTH レジスタの ESQEND[bit7]のセット確認後、FSSE レジスタの ESQST[bit7] をクリアします。
- (3) FSASTH レジスタの ESQEND[bit7]が自動的にクリアされるまで待ち、クリアされたら終了します。

4.4.5 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの強制終了手順

コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンド実行中、コマンドを強制的に完了しなければならない非常事態が発生した場合、コマンドを強制停止することができます。

※エクストラ領域シーケンサ・コマンド実行中は、コマンドを強制終了することができません。

《強制終了手順》

- (1) 「4.4.4.1 コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの終了判定手順」"(1)"のコマンド起動後から"(2)"の FSSQ レジスタの SQST[bit7] をクリアする前までに、FSSQ レジスタの FSSTP[bit6]=1 に設定することで、起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドを強制停止します。
- (2) FSASTH レジスタの SQEND[bit6]のセット確認後、FSSQ レジスタの SQST[bit7] と FSSTP[bit6]をクリアします。
- (3) FSASTH レジスタの SQEND[bit6]が自動的にクリアされるまで待ち、クリアされたら終了します。

FSSQ レジスタ(リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
SQST	FSSTP	0	0	MDCH	SQMD2	SQMD1	SQMD 0
R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

4.5 ブート・スワップ / バンク・スワップ機能

4.5.1 概要

ベクタ・テーブル・データ、プログラムの基本機能、およびセルフ・プログラミングを実行するブート・プログラムを配置しているブート領域の書き換え中に、電源の瞬断、外部要因によるリセットの発生などにより書き換えが失敗した場合、書き換え中のデータが破壊され、その後のリセットによるユーザ・プログラムの再スタートや、再書き込みができなくなります。この問題を回避するための機能がブート・スワップ機能、及びバンク・スワップ機能です。

4.5.2 ブート・スワップ機能

ブート・スワップ機能では、ブート領域であるブート・クラスタ0とブート・スワップ対象領域であるブート・クラスタ1を置換します。書き換え処理を行う前に、あらかじめ新しいブート・プログラムをブート・クラスタ1に書き込んでおきます。このブート・クラスタ1とブート・クラスタ0をスワップし、ブート・クラスタ1をブート領域にします。これによって、ブート領域の書き換え中に電源の瞬断が発生しても、次のリセット・スタートは元のブート・プログラムが書き込まれているブート・クラスタ0から実行され、再度書き換えを実施することができます。

ブート領域	リセット・ベクタを含む00000Hから始まる論理領域で、BTBLSビットの設定値によってサイズが異なります。
ブート・クラスタ0/1	<p>ブート・クラスタは BTBLSビットの設定値によって決まるサイズのブロック群で、その片方がブート領域(ブート・クラスタ0)に配置されます。</p> <p>RL78/L23の BTBLSビットの設定値によって決まるサイズの例を以下に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - BTBLS = 00H : ブート・クラスタ・サイズ : 2KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x007FF]/ブート・クラスタ1 [0x00800 – 0x00FFF] - BTBLS = 01H : ブート・クラスタ・サイズ : 4KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x00FFF]/ブート・クラスタ1 [0x01000 – 0x01FFF] - BTBLS = 02H : ブート・クラスタ・サイズ : 8KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x01FFF]/ブート・クラスタ1 [0x02000 – 0x03FFF] - BTBLS = 03H : ブート・クラスタ・サイズ : 16KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x03FFF]/ブート・クラスタ1 [0x04000 – 0x07FFF] - BTBLS = 04H : ブート・クラスタ・サイズ : 32KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x07FFF]/ブート・クラスタ1 [0x08000 – 0x0FFFF] - BTBLS = 05H : ブート・クラスタ・サイズ : 64KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x0FFFF]/ブート・クラスタ1 [0x10000 – 0x1FFFF] - BTBLS = 06H : ブート・クラスタ・サイズ : 128KB ブート・クラスタ0 [0x00000 – 0x1FFFF]/ブート・クラスタ1 [0x20000 – 0x3FFFF]

注) BTBLS ビットの設定には、専用フラッシュ・メモリ・プログラマを使用してください。また、BTBLS ビット設定時は、同時に BAPR ビットを0に設定する必要があります。

ブート・スワップを実行後、ブート・クラスタ0とブート・クラスタ1の論理アドレスが入れ替わります。BTPR=1、かつコード・フラッシュ・プログラミング・モード、またはデータ・フラッシュ・プログラミング・モードのとき、FSSETレジスタのTMSPMD[bit7]とTMBTSEL[bit6]は書き込みが有効です。それ以外ではFSSETレジスタのTMSPMD[bit7]とTMBTSEL[bit6]を操作できません(書き込みが無効です)。

4.5.2.1 ブート・スワップ機能の動作

ブート・スワップ機能の動作は、フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ(FSSET)の TMSPMD[bit7]の値によりエクストラ領域のブート領域切り替えフラグ(BTFLG)、または FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に従います。

- TMSPMD[bit7]が'0'の時(リセット時)、ブート領域はエクストラ領域の BTFLG に従います。

BTFLG = 0 / 1 (出荷時) : ブート領域はブート・クラスタ **1** / ブート領域はブート・クラスタ **0**

- TMSPMD[bit7]が'1'の時、ブート領域は FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に従います。

TMBTSEL = 0 (リセット時) / 1 : ブート領域はブート・クラスタ **0** / ブート領域はブート・クラスタ **1**

FSSET レジスタ(リセット時:0x00):

7	6	5	4	3	2	1	0
TMSPMD	TMBTSEL	0	FSET4	FSET3	FSET2	FSET1	FSET0
R/W	R/W	R	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

4.5.2.2 ブート・スワップ機能の操作

ブート・スワップ機能の操作には、「リセット後にブート・スワップを実行」する方法と「即時ブート・スワップを実行」する方法があります。

注意 : FSSET レジスタを書き込む場合(TMSPMD ビット、TMBTSEL ビットを操作する場合)、FSSET レジスタの FSET4-0(CPU の動作周波数)の値を破壊しないよう、FSSET レジスタを書き込む前に FSSET レジスタを読み出し、その値を反映して FSSET レジスタに書き込んでください。

FSSET レジスタに正しい CPU の動作周波数が設定されていない場合、フラッシュ・メモリ・シーケンサの動作は不定となり、書き換えられたフラッシュ・メモリの値は保証されませんのでご注意ください。

4.5.2.3 リセット後にブート・スワップ実行

BTFLG が書かれた直後にブート・スワップせず、リセット後にブート・スワップを実行します。

※BTPR=0 の場合、TMSPMD ビットの設定、エクストラ領域書き込みによる BTFLG の設定が共にできないため、ブート・スワップを実行できません。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetExtraBootAreaReq

《操作方法》

(1) TMSPMD ビット = 0 (BTFLG に従う) の場合 :

- ・ FLSEC レジスタの BTFLG ビットを読み出します。

a) FLSEC レジスタの BTFLG ビット=0 の場合 :

- ・ TMSPMD ビットに'1' (TMBTSEL に従う)、TMBTSEL ビットに'1'を設定します。

- ・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(ブート領域に設定するブート・クラスタを指定します。

FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

- ・ リセット操作を実行後にブート・スワップし、指定ブート・クラスタのリセット・ベクタへ分岐します。

b) FLSEC レジスタの BTFLG ビット=1 の場合 :

- ・ TMSPMD ビットに'1' (TMBTSEL に従う)、TMBTSEL ビットに'0'を設定します。

- ・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(ブート領域に設定するブート・クラスタを指定します。

FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

- ・ リセット操作を実行後にブート・スワップし、指定ブート・クラスタのリセット・ベクタへ分岐します。

(2) TMSPMD ビット = 1 (TMBTSEL に従う) の場合 :

- ・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(ブート領域に設定するブート・クラスタを指定します。

FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

- ・ リセット操作を実行後にブート・スワップし、指定ブート・クラスタのリセット・ベクタへ分岐します。

4.5.2.4 即時ブート・スワップ実行

指定されたブート・クラスタを、ブート領域に即時設定(ブート・スワップ)します。

※BTPR=0の場合、TMSPMDビットの設定ができないため、ブート・スワップを実行できません。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetBootAreaImmediately

《操作方法》

(1) TMSPMDビット=0(BTFLGに従う)の場合 :

- ・FSASTレジスタのMBTSELビットを読み出し、その値をFSSETレジスタのTMBTSELビットに設定します。

a) TMBTSELビット=1の場合 :

- ・TMSPMDビットに'1'(TMBTSELに従う)、TMBTSELビットに'0'を設定します。ブート・スワップが即時実行されます。

b) TMBTSELビット=0の場合 :

- ・TMSPMDビットに'1'(TMBTSELに従う)、TMBTSELビットに'1'を設定します。ブート・スワップが即時実行されます。

(2) TMSPMDビット=1(TMBTSELに従う)の場合 :

a) TMBTSELビット=1の場合 :

- ・TMBTSELビットに'0'を設定します。ブート・スワップが即時実行されます。

b) TMBTSELビット=0の場合 :

- ・TMBTSELビットに'1'を設定します。ブート・スワップが即時実行されます。

4.5.3 バンク・スワップ機能

バンク・スワップ機能では、起動バンク(バンク 0)と書き換えバンク(バンク 1)を置換します。書き換え処理を行う前に、あらかじめ新しいバンク・プログラムをバンク 1 に書き込んでおきます。このバンク 1 とバンク 0 をスワップし、バンク 1 が起動バンク側に設定されます。これによって、書き換えバンクの書き換え中に電源の瞬断が発生しても、次のリセット・スタートは元のブート・プログラムが書き込まれている起動バンクから実行され、再度書き換えを実施することができます。

起動する領域	リセット・ベクタを含む 00000H から始まる論理領域です。
バンク設定	<p>バンク・スワップ設定(BTBLSビット)の値は、デバイスにより異なる場合があります。また、バンク・スワップ設定可否もデバイスにより異なります。</p> <p>必ず、対象デバイスのユーザーズマニュアルを参照して、ご確認ください。</p> <p>RL78/L23(R7F100LxL)のバンク・スワップ設定例を以下に示します。</p> <p>- BTBLS = 07H : バンク・サイズ : 256KB (R7F100LxL)</p> <p>バンク0 [0x00000 – 0x3FFFF]</p> <p>バンク1 [0x40000 – 0x7FFFF]</p>

注) BTBLS ビットの設定には、専用フラッシュ・メモリ・プログラムを使用してください。また、BTBLS ビット設定時は、同時に BAPR ビットを 0 に設定する必要があります。

バンク・スワップを実行後、バンク 0 とバンク 1 の論理アドレスが入れ替わります。

BTBPR=1、かつコード・フラッシュ・プログラミング・モード、またはデータ・フラッシュ・プログラミング・モードのとき、FSSET レジスタの TMSPPMD[bit7]と TMBTSEL[bit6]は書き込みが有効です。それ以外では FSSET レジスタの TMSPPMD[bit7]と TMBTSEL[bit6]を操作できません(書き込みが無効です)。

4.5.3.1 バンク・スワップ機能の動作

バンク・スワップ機能の動作は、フラッシュ・メモリ・シーケンサ初期設定レジスタ(FSSET)の TMSPMD[bit7]の値によりエクストラ領域の起動バンク切り替えフラグ(BTFLG)、または FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に従います。

- TMSPMD[bit7]が'0'の時(リセット時)、起動バンクはエクストラ領域の BTFLG に従います。

BTFLG = 0 / 1(出荷時) : 起動バンクはバンク **1** / 起動バンクはバンク **0**

- TMSPMD[bit7]が'1'の時、ブート領域は FSSET レジスタの TMBTSEL[bit6]に従います。

TMBTSEL = 0(リセット時) / 1 : 起動バンクはバンク **0** / 起動バンクはバンク **1**

FSSET レジスタ(リセット時:0x00):

7	6	5	4	3	2	1	0
TMSPMD	TMBTSEL	0	FSET4	FSET3	FSET2	FSET1	FSET0
R/W	R/W	R	R/W	R/W	R/W	R/W	R/W

4.5.3.2 バンク・スワップ機能の操作

バンク・スワップ機能の操作には、「リセット後にバンク・スワップを実行」する方法と「アクティブ・バンク・スワップ(即時バンク・スワップ)を実行」する方法があります。

注意 : FSSET レジスタを書き込む場合(TMSPMD ビット、TMBTSEL ビットを操作する場合)、FSSET レジスタの FSET4-0(CPU の動作周波数)の値を破壊しないよう、FSSET レジスタを書き込む前に FSSET レジスタを読み出し、その値を反映して FSSET レジスタに書き込んでください。

FSSET レジスタに正しい CPU の動作周波数が設定されていない場合、フラッシュ・メモリ・シーケンサの動作は不定となり、書き換えられたフラッシュ・メモリの値は保証されませんのでご注意ください。

4.5.3.3 リセット後にバンク・スワップを実行

BTFLG が書かれた直後にバンク・スワップせず、リセット後にバンク・スワップを実行します。

※BTPR=0 の場合、TMSPMD ビットの設定、エクストラ領域書き込みによる BTFLG の設定が共にできないため、バンク・スワップを実行できません。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetExtraBootAreaReq

《操作方法》

(1) TMSPMD ビット = 0(BTFLG に従う)の場合 :

・ FLSEC レジスタの BTFLG ビットを読み出します。

a) FLSEC レジスタの BTFLG ビット=0 の場合 :

・ TMSPMD ビットに'1' (TMBTSEL に従う)、TMBTSEL ビットに'1'を設定します。

・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(起動バンクに設定するバンクを指定します。FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

・ リセット操作を実行後にバンク・スワップし、指定バンクのリセット・ベクタへ分岐します。

b) FLSEC レジスタの BTFLG ビット=1 の場合 :

・ TMSPMD ビットに'1' (TMBTSEL に従う)、TMBTSEL ビットに'0'を設定します。

・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(起動バンクに設定するバンクを指定します。FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

・ リセット操作を実行後にバンク・スワップし、指定バンクのリセット・ベクタへ分岐します。

(2) TMSPMD ビット = 1(TMBTSEL に従う)の場合 :

・ **エクストラ領域**の BTFLG を書き込みます。(起動バンクに設定するバンクを指定します。FSSE レジスタの ESQMD = 7H)

・ リセット操作を実行後にバンク・スワップし、指定バンクのリセット・ベクタへ分岐します。

4.5.3.4 アクティブ・バンク・スワップ(即時バンク・スワップ)を実行

指定されたバンクを、起動バンク(0x00000~)に即時設定(バンク・スワップ)します。

※BTPR=0の場合、TMSPMDビットの設定ができないため、バンク・スワップを実行できません。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetBootAreaImmediately

《操作方法》

(1) TMSPMDビット=0(BTFLGに従う)の場合 :

- ・FSASTレジスタのMBTSELビットを読み出し、その値をFSSETレジスタのTMBTSELビットに設定します。

a) TMBTSELビット=1の場合 :

- ・TMSPMDビットに'1'(TMBTSELに従う)、TMBTSELビットに'0'を設定します。バンク・スワップが即時実行されます。

b) TMBTSELビット=0の場合 :

- ・TMSPMDビットに'1'(TMBTSELに従う)、TMBTSELビットに'1'を設定します。バンク・スワップが即時実行されます。

(2) TMSPMDビット=1(TMBTSELに従う)の場合 :

a) TMBTSELビット=1の場合 :

- ・TMBTSELビットに'0'を設定します。バンク・スワップが即時実行されます。

b) TMBTSELビット=0の場合 :

- ・TMBTSELビットに'1'を設定します。バンク・スワップが即時実行されます。

4.6 フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能

4.6.1 概要

フラッシュ・シールド・ウィンドウ(FSW)機能は、指定したウィンドウ範囲以外の書き込みおよび消去を、セルフ・プログラミング時のみ禁止にするセキュリティ機能です。FSW 機能のウィンドウ範囲は、スタート・ブロックとエンド・ブロック+1 で指定します。更に、フラッシュ・シールド領域をウィンドウの内側と外側のどちらかに指定する「シールド領域設定」(FSWC ビット)と FSW 設定の書き換えを禁止する「フラッシュ・シールド・ウィンドウ設定の変更禁止」(FSPR ビット)を設定することができます。

4.6.2 フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能の動作

FSW 機能の動作は、フラッシュ FSW モニタ・レジスタ(FLFSWE / FLFSWS)の値により決定し、FLFSWE / FLFSWS の値は、エクストラ領域に書込まれた FSW 用の情報が反映されます。FSW の設定を変更する場合、エクストラ領域シーケンサで FSW 設定用のエクストラ領域へ設定データを書き込みます。

FLFSWE レジスタ(リセット時、またはエクストラ領域書き込み時に**対象のエクストラ領域の値が反映**):

15	14	13	12	11	10	9	8
FSWC	0	0	0	0	0	0	FSWE8
R	R	R	R	R	R	R	R
7	6	5	4	3	2	1	0
FSWE7	FSWE6	FSWE5	FSWE4	FSWE3	FSWE2	FSWE1	FSWE0
R	R	R	R	R	R	R	R

FLFSWS レジスタ(リセット時、またはエクストラ領域書き込み時に**対象のエクストラ領域の値が反映**):

15	14	13	12	11	10	9	8
FSPR	0	0	0	0	0	0	FSWS8
R	R	R	R	R	R	R	R
7	6	5	4	3	2	1	0
FSWS7	FSWS6	FSWS5	FSWS4	FSWS3	FSWS2	FSWS1	FSWS0
R	R	R	R	R	R	R	R

- FLFSWE レジスタの FSWE[bit8-0]は、ウィンドウ範囲のエンド・ブロック番号+1 を指定します。

- FLFSWE レジスタの FSWC[bit15]は、シールド領域設定を制御します。

FSWC = 0 / 1(出荷時): シールド領域はウィンドウ範囲の**内側** / シールド領域はウィンドウ範囲の**外側**

- FLFSWS レジスタの FSWS[bit8-0]は、ウィンドウ範囲のスタート・ブロック番号を指定します。

- FLFSWS レジスタの FSPR[bit15]は、FSW 書き換え禁止を設定します。

FSPR = 0 / 1(出荷時): FSW 設定の書き換え**禁止** / FSW 設定の書き換えを**許可**

4.6.3 フラッシュ・シールド・ウィンドウ機能の操作

4.6.3.1 フラッシュ・シールド・ウィンドウの設定

フラッシュ・シールド・ウィンドウの領域設定(FSW 領域設定)では、ウィンドウ範囲の外側をシールドする"アウトサイド・シールド"(FSWC = 1)と、ウィンドウの内側をシールドする"インサイド・シールド"(FSWC = 0)を切り替えることができます。

本操作の対象関数 : R_RFD_SetExtraFSWReq

《操作方法》

・ **エクストラ領域**の FSWE, FSWC, FSWs を書き込みます。(FSSE レジスタの ESQMD = 1H)

FSWE : FSW のウィンドウ範囲のエンド・ブロック番号+1

FSWC : シールド領域設定

FSWC = 1(出荷時) / 0:アウトサイド・シールド / インサイド・シールド

FSWS : FSW のウィンドウ範囲のスタート・ブロック番号

※FSPR、および予約ビット[bit14-9]は'1'に設定してください。FSPR = 0 の状態での書き換えはできません。

FSWS = FSWE を設定した場合、FSWC の値に関わらず、コード・フラッシュ・メモリの全領域が書き換え許可となります。

FSPR : FSW 書き換え禁止制御

(1)アウトサイド・シールド(FSWC = 1)

例) 対象デバイス : R7F100LPL

スタート・ブロック : 03H, エンド・ブロック+1 : 06H を指定

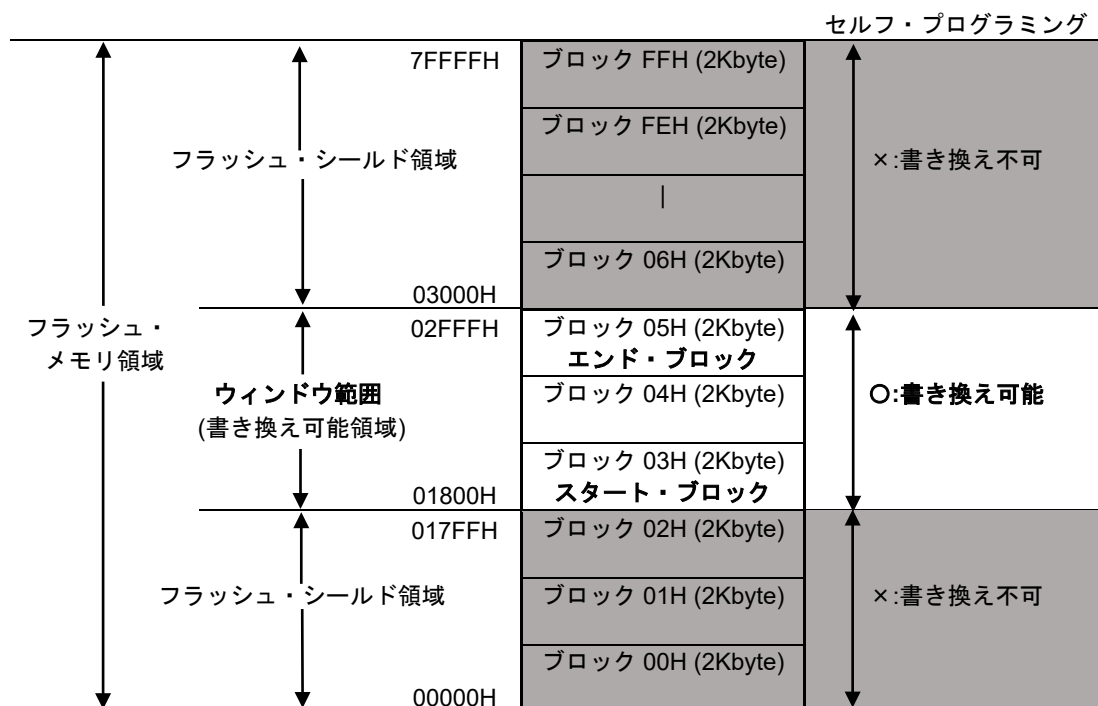


図 4-1 FSW の設定例(アウトサイド・シールド)

(2)インサイド・シールド(FSWC = 0)

例) 対象デバイス : R7F100LPL

スタート・ブロック : 03H, エンド・ブロック+1 : 06H を指定

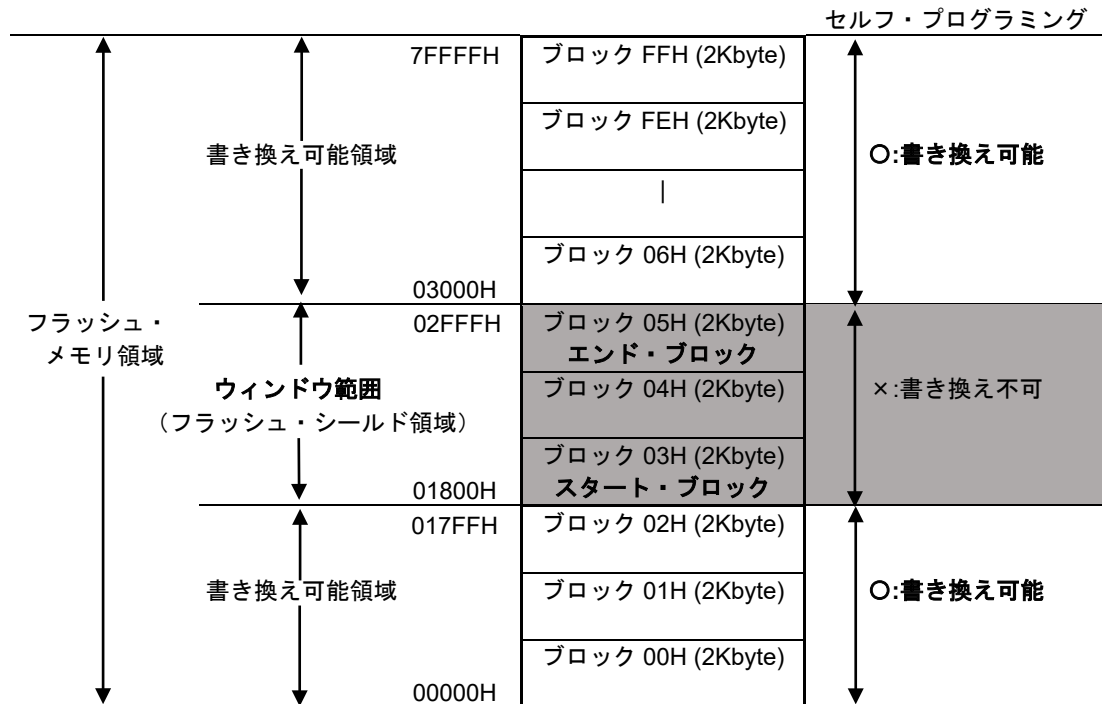


図 4-2 FSW の設定例(インサイド・シールド)

4.6.3.2 フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止(FSW 書き換え禁止)

フラッシュ・シールド・ウィンドウ書き換え禁止(FSW 書き換え禁止)機能は、設定されているフラッシュ・シールド・ウィンドウ範囲とシールド領域設定の書き換えを禁止します。(FSPR = 0)

本操作の対象関数 : R_RFD_SetExtraFSWProtectReq

《操作方法》

- ・ **エクストラ領域**の FSPR に'0'を書き込みます。(FSSE レジスタの ESQMD = 1H)

※FSPR を書き込む際には、**エクストラ領域**の FSWS, FSWE, FSWC には、フラッシュ FSW モニタ・レジスタ(FLFSWE / FLFSWS)の値を反映し、予約ビット[bit14-9]は'1'に設定してください。

《FSW 書き換え禁止の解除方法》

FSW 書き換え禁止を設定した場合、セルフ・プログラミングで解除する方法はありません。シリアル・プログラミング・モードのチップ消去コマンドでのみ、解除が可能です。

※但し、以下のいずれかの禁止が設定されている場合は、シリアル・プログラミング・モードのチップ消去コマンドを実行できません。

- ・ SEPR = 0 (ブロック消去禁止)
- ・ BTPR = 0 (ブート・クラスタ 0 書き換え禁止)
- ・ IFPR = 0 (プログラマ・OCD 接続禁止)

4.7 コード・フラッシュ・プログラミング・モード中の割り込み

4.7.1 概要

RL78 では、割り込みが発生すると ROM 上の割り込みベクタを参照し、割り込みベクタ(16bit)で分岐可能な 64KB までの ROM 空間に配置されている割り込み処理へ分岐して、割り込みを実行します。しかし、コード・フラッシュやエクストラ領域を書き換えが可能なコード・フラッシュ・プログラミング・モードでは、ROM を参照できないため、割り込み処理を実行することができません。

RL78/L23 では、ROM を参照できない場合でも、ROM 上の割り込みベクタ、および ROM 上の割り込み処理を使用せず、全ての割り込みの分岐先を RAM 上の指定アドレスへ変更し、RAM 上で割り込み処理を実行することが可能です。

4.7.2 割り込み分岐先を変更した場合の動作

割り込み分岐先の変更は、割り込みベクタ変更レジスタ(FLSIVC1/FLSIVC0)と割り込みベクタ移動許可レジスタ(VECTCTRL)を設定することで、全ての割り込みの飛び先を RAM 上のアドレスへ分岐するように変更できます。この操作により、コード・フラッシュ・プログラミング・モード中に割り込みが発生した場合でも、ROM 上の割り込みベクタを参照せずに、RAM 上の割り込み処理を実行することが可能です。

FLSIVC1/FLSIVC0 レジスタは、コード・フラッシュやエクストラ領域を書き換え中に発生した全ての割り込み機能の飛び先のアドレスを指定するレジスタです。FLSIVC0 にはアドレスの下位 16bit を FLSIVC1 には上位 4bit を設定します。

FLPMC レジスタ(リセット時:0x08) :

7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	EEEMD	FWEDIS	0	FLSPM	0
R/W	R/W	R	R/W	R/W	R	R/W	R

- FLPMC レジスタの FWEDIS [bit3] =0 に設定している場合に VECTCTRL レジスタを 0x01 に設定することで、セルフ・プログラミング実行中に発生した全ての割り込みをユーザが FLSIVC1/FLSIVC0 レジスタに指定した RAM アドレスへ分岐させることが可能になります。

FLSIVC1 レジスタ(リセット時:0x000F[固定値]) :

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1

FLSIVC0 レジスタ(リセット時:0x0000) : 0x000Fxxxx(RAM 上)の下位 16 ビットを入力します。

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

VECTCTRL レジスタ(リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
-	-	-	-	-	-	-	VECTCTRL
-	-	-	-	-	-	-	R/W

- VECTCTRL レジスタの VECTCTRL [bit0]は、セルフ・プログラミング実行中、発生した割り込みが RAM へ分岐することを制御します。

- ・ VECTCTRL [bit0] = 0(リセット時の値)、または FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3] = 1(リセット時の値) :
割り込みごとに ROM 上のベクタ・アドレスへ分岐します。
- ・ VECTCTRL [bit0] = 1(FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3] = 0 の状態) :
全ての割り込みは、ユーザが FLSIVC1/FLSIVC0 レジスタに指定した RAM 上アドレスへ分岐します。

- 注意
1. 割り込みの種類はユーザ側で割り込みフラグを確認して判断する必要があります。また、本レジスタ設定後は割り込みの種類をユーザ側で判断する必要があるため、割り込みフラグは自動的にクリアされません。割り込み種類の判断後、ユーザ側でクリア処理を行う必要があります。
 2. 割り込み変更先を ROM 側に設定することは出来ません。(0x0Fxxxx のアドレス範囲のみ)
 3. このレジスタで変更した割り込み先はセルフ・プログラミング実行中にのみ有効になります。
 4. これらのレジスタで割り込み先を RAM に変更する場合、割り込み禁止にしてください。

4.7.3 割り込み分岐先を変更する場合の操作

RAM上の割り込み処理を指定するためには、フラッシュ・プログラミング・モード・コントロール・レジスタ (FLPMC) の FWEDIS[bit3] = 0 に設定した状態で、FLSIVC1/FLSIVC0 レジスタと VECTCTRL の [bit0] を更新する必要があります。フラッシュ・メモリ・シーケンサの特定シーケンスを実行して、FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3] を操作し、FLSIVC1 / FLSIVC0 レジスタと VECTCTRL [bit0] を設定して、割り込み分岐先を RAM のアドレスに変更します。

※「4.1.1 特定シーケンス実行手順」を実施した場合のみ、FLPMC レジスタへの書き込みが有効になります。

(1) 割り込み分岐先を RAM アドレスへ変更する場合

全ての割り込みの分岐先を RAM 上の指定アドレスへ変更する場合の操作です。

本操作の対象関数 : R_RFD_ChangeInterruptVector

《操作方法》

- ・それまでの割り込み許可/禁止の設定を退避し、割り込みを禁止に設定します。
- ・特定シーケンスを実行し、FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3] を '0' に設定します。

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x00
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xFF
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x00

- ・ステップ 2,4
FLPMC レジスタ設定値(0x00)
EEEMD[bit4] = 0, FWEDIS[bit3] = 0,
FLSPM[bit1] = 0
- ・ステップ 3
FLPMC レジスタ反転値(0xFF)

- ・FLSIVC1/FLSIVC0 レジスタに RAM アドレスを指定します。
- ・VECTCTRL レジスタを 0x01 に設定し、割り込みを RAM 上の特定アドレスへ分岐する設定にします。
- ・退避していた割り込み許可/禁止の設定を復帰します。

注意 1. RAM 上の割り込み処理を指定している間は、FWEDIS[bit3] = 0 のままにしておいてください。

2. 割り込みの分岐先を saddr 空間(0xFFE20 - 0xFFEFF)に設定しないでください。

3. RAM 領域から命令を実行し、RAM パリティ・エラー・リセット発生を許可する (RPERDIS=0) 場合、「使用する RAM 領域+10byte」の領域を必ず初期化してください。

(2) 割り込み分岐先を RAM アドレスから ROM 上のベクタへ戻す場合

割り込みの分岐先を ROM 上の割り込みベクタが示すアドレスへ戻す場合(初期状態)の操作です。

本操作の対象関数 : R_RFD_RestoreInterruptVector

《操作方法》

- ・それまでの割り込み許可/禁止の設定を退避し、割り込みを禁止に設定します。
- ・特定シーケンスを実行し、FLPMC レジスタの FWEDIS[bit3] を '1' に設定します。

ステップ 1:	PFCMD レジスタ = 0xA5
ステップ 2:	FLPMC レジスタ = 0x08
ステップ 3:	FLPMC レジスタ = 0xF7
ステップ 4:	FLPMC レジスタ = 0x08

- ・ステップ 2,4
FLPMC レジスタ設定値(0x08)
EEEMD[bit4] = 0, FWEDIS[bit3] = 1,
FLSPM[bit1] = 0
- ・ステップ 3
FLPMC レジスタ反転値(0xF7)

- ・VECTCTRL レジスタを 0x00 に設定し、割り込みを ROM 上のベクタ・アドレスへ分岐する設定にします。
- ・退避していた割り込み許可/禁止の設定を復帰します。

4.8 フラッシュ領域書き換え時のコマンドの実行例

4.8.1 コード・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行例

コード・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行フローを図 4-3 に示します。

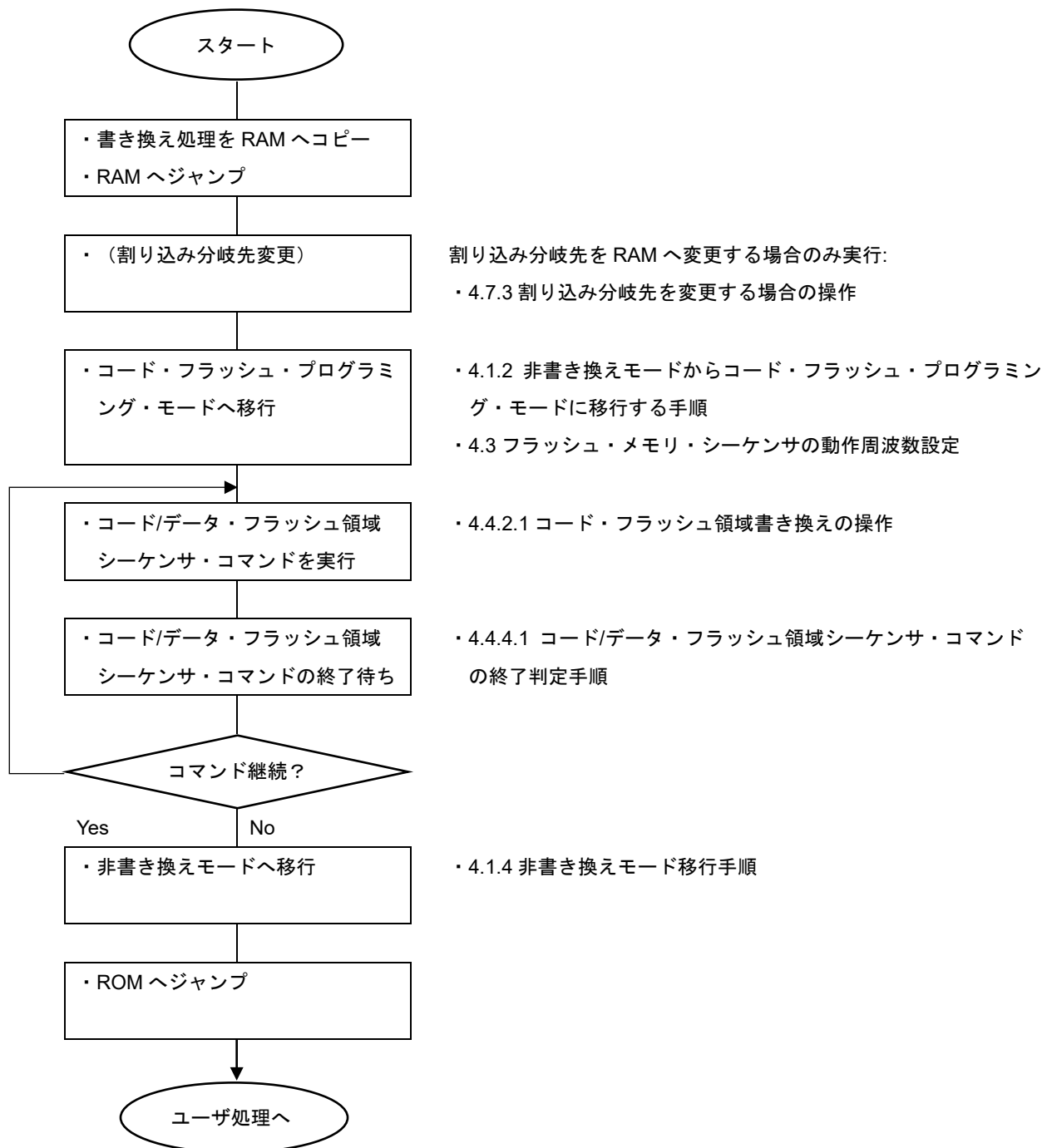


図 4-3 コード・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行フロー

4.8.2 データ・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行例

データ・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行フローを図 4-4 に示します。

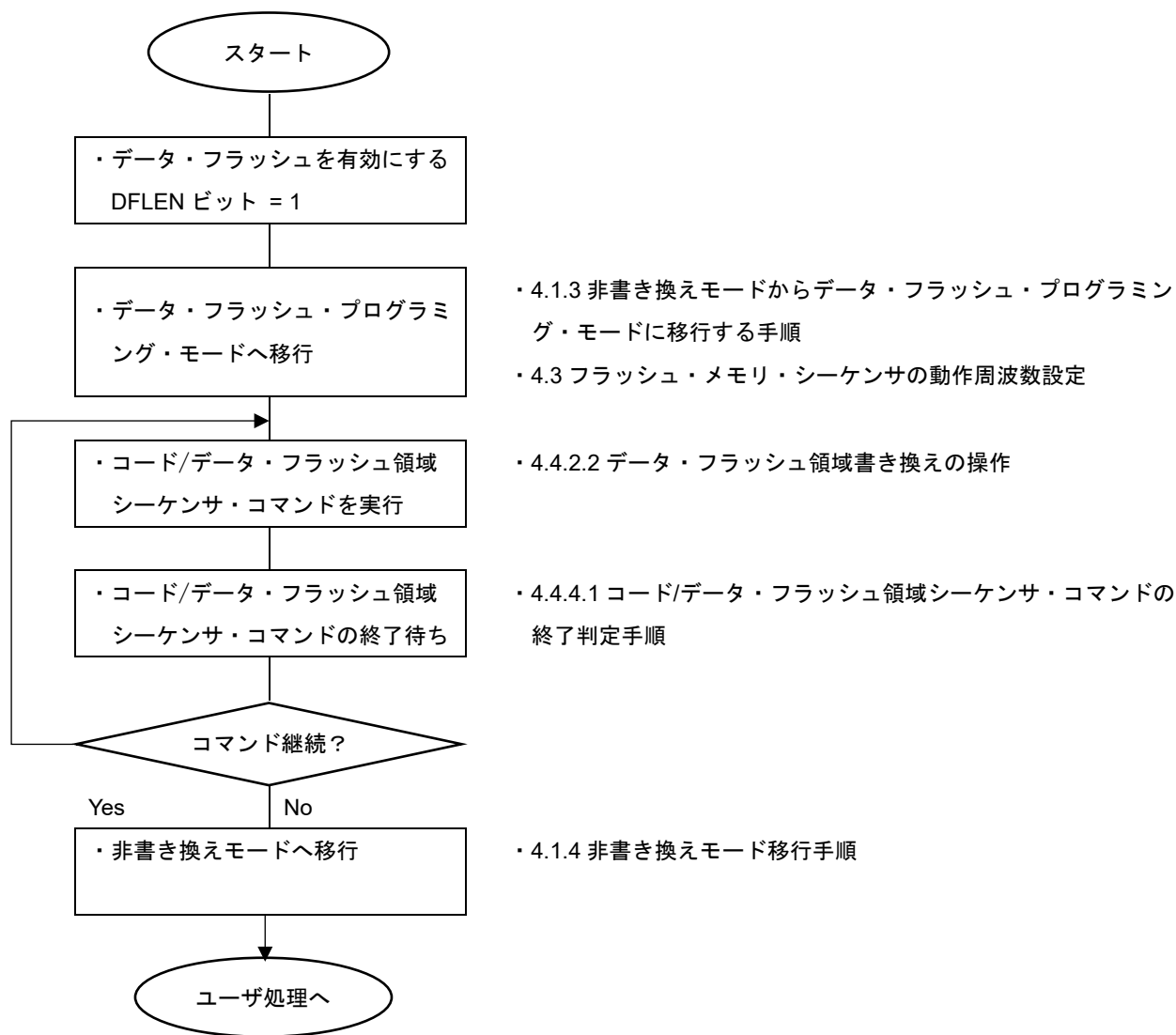


図 4-4 データ・フラッシュ領域書き換え時のコマンド実行フロー

4.8.3 エクストラ領域書き換え時のコマンド実行例

エクストラ領域書き換え時のコマンド実行フローを図 4-5 に示します。

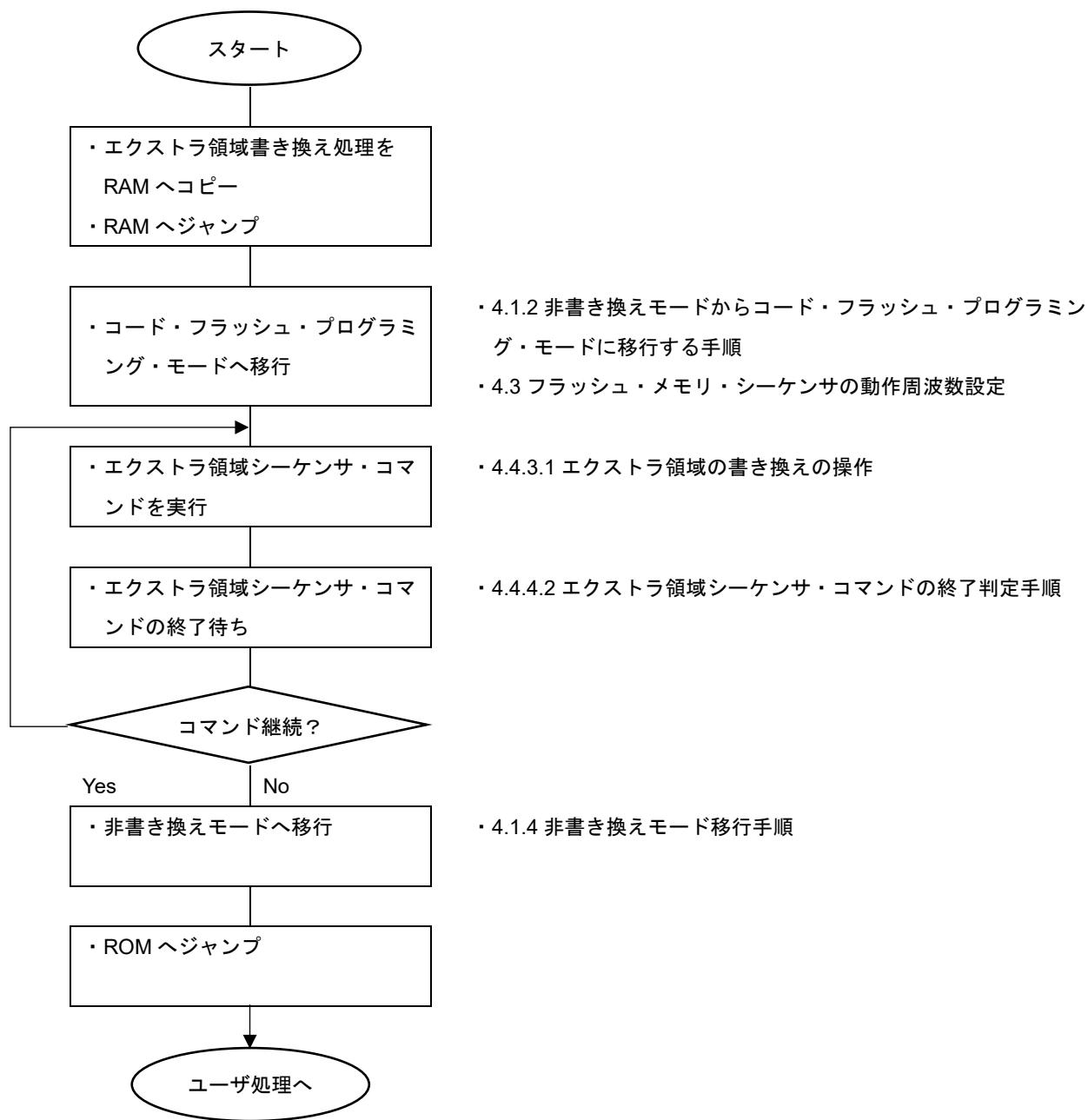


図 4-5 エクストラ領域書き換え時のコマンド実行フロー

4.8.4 バンク・プログラミング時のコマンド実行例

バンク・プログラミング時のコマンド実行フローを図 4-6 に示します。

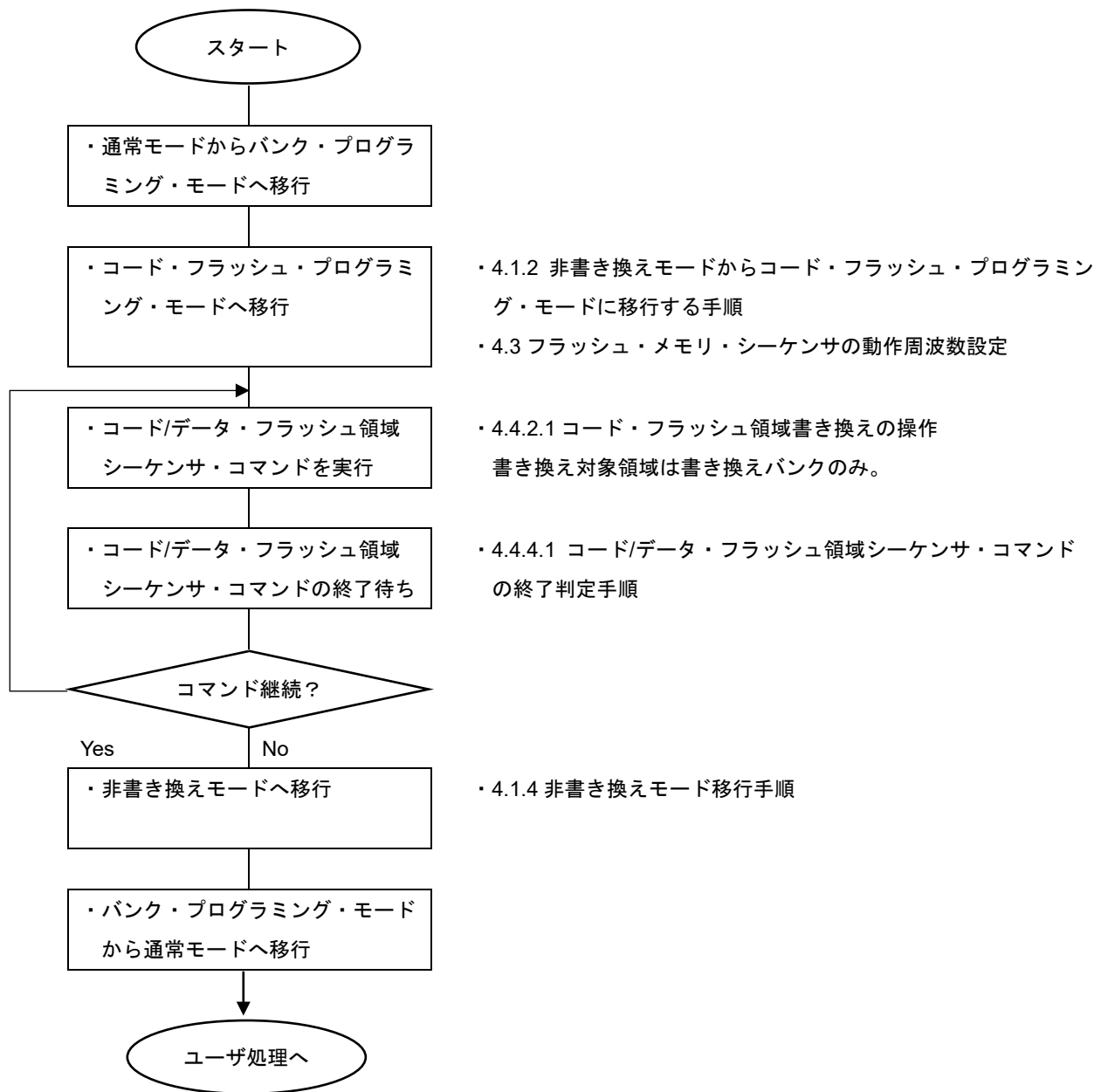


図 4-6 バンク・プログラミング時のコマンド実行フロー

5 サンプル・プログラム

RFD RL78 Type11 に添付しているサンプル・プログラムについて説明します。

5.1 ファイル構成

5.1.1 フォルダ構成

サンプル・プログラムのフォルダ構成を図 5-1 に示します。

図 5-1 は、RL78/L23 を使用する場合の例です。実際にインストールした"sample"フォルダには、デバイスグループごとのサンプル用フォルダが含まれます(例: RL78_L23)。

RL78_L23 フォルダは、RL78/L23 で使用することができます。

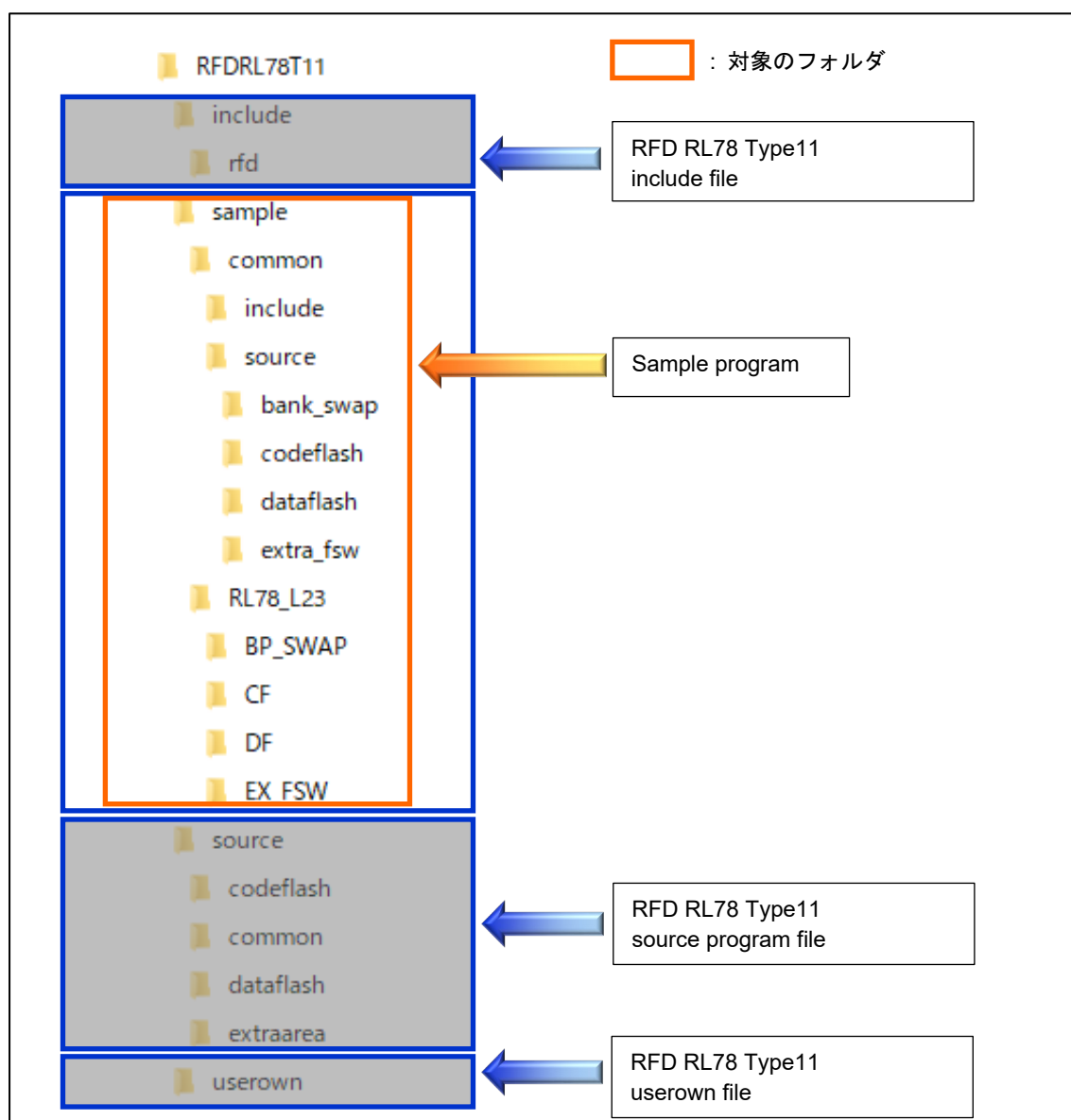


図 5-1 サンプル・プログラムのフォルダ構成

5.1.2 ファイル・リスト

5.1.2.1 ソース・ファイル・リスト

"sample\common\source\dataflash\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 5-1 に示します。

表 5-1 "sample\common\source\dataflash\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	sample_control_data_flash.c	データ・フラッシュ・メモリ制御用関数サンプル・ファイル

"sample\common\source\codeflash\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 5-2 に示します。

表 5-2 "sample\common\source\codeflash\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	sample_control_code_flash.c	コード・フラッシュ・メモリ制御用関数サンプル・ファイル

"sample\common\source\extra_fsw\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 5-3 に示します。

表 5-3 "sample\common\source\extra_fsw\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	sample_control_extra_fsw.c	エクストラ領域 FSW 制御用関数サンプル・ファイル

"sample\common\source\bank_swap\"フォルダ内のプログラム・ソース・ファイルを表 5-4 に示します。

表 5-4 "sample\common\source\bank_swap\"フォルダ内プログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	sample_control_bank_programming.c	バンク・プログラミング用関数サンプル・ファイル
2	sample_control_bank_swap.c	バンク・スワップ用関数サンプル・ファイル

"sample\RL78_L23"フォルダ内のコード・フラッシュ制御[CF]、データ・フラッシュ制御[DF]、エクストラ領域 FSW 制御[EX_FSW]の各メイン処理のプログラム・ソース・ファイルを表 5-5 に示します。

- コード・フラッシュ[CF]のメイン処理 : "sample\RL78_L23\CF\[コンパイラ名]\source"フォルダ
- データ・フラッシュ[DF]のメイン処理 : "sample\RL78_L23\DF\[コンパイラ名]\source"フォルダ
- エクストラ領域 FSW 制御処理[EX_FSW]のメイン処理 :
"sample\RL78_L23\EX_FSW\[コンパイラ名]\source"フォルダ
- バンク・プログラミング/バンク・スワップ制御処理[BP_SWAP]のメイン処理 :
"sample\RL78_L23\BP_SWAP \[コンパイラ名]\source"フォルダ

表 5-5 メイン処理のプログラム・ソース・ファイル

No	ソース・ファイル名	概略(Summary)
1	main.c (for code flash)	コード・フラッシュ制御用メイン処理関数サンプル・ファイル
2	main.c (for data flash)	データ・フラッシュ制御用メイン処理関数サンプル・ファイル
3	main.c (for extra area FSW control)	エクストラ領域(FSW 機能)制御用メイン処理関数サンプル・ファイル
4	main.c (for bank programming and bank swapping control)	バンク・プログラミング/バンク・スワップ制御用メイン処理関数サンプル・ファイル

5.1.2.2 ヘッダ・ファイル・リスト

"sample\common\include"フォルダ内のプログラム・ヘッダ・ファイルを表 5-6 に示します。

表 5-6 "sample\common\include"フォルダ内プログラム・ヘッダ・ファイル

No	ヘッダ・ファイル名	概略(Summary)
1	sample_control_data_flash.h	データ・フラッシュ・メモリ制御用関数サンプルのプロトタイプ宣言を定義したファイル
2	sample_control_code_flash.h	コード・フラッシュ・メモリ制御用関数サンプルのプロトタイプ宣言を定義したファイル
3	sample_control_extra_fsw.h	エクストラ領域 FSW 制御用関数サンプルのプロトタイプ宣言を定義したファイル
4	sample_control_bank_programming.h	バンク・プログラミング用関数サンプルのプロトタイプ宣言を定義したファイル
5	sample_control_bank_swap.h	バンク・スワップ用関数サンプルのプロトタイプ宣言を定義したファイル
6	sample_defines.h	フラッシュ・メモリ制御用関数サンプルのマクロを定義したファイル
7	sample_memmap.h	フラッシュ・メモリ制御用関数サンプルで使用するセクションを記述するためのマクロを定義したファイル
8	sample_types.h	サンプル・プログラム用列挙型返り値を定義したファイル

5.2 データ型定義

5.2.1 列挙型

- e_sample_ret (列挙変数名 : e_sample_ret_t)

フラッシュ・メモリ・シーケンサ実行結果(正常/エラー)と実行後ステータスを表 5-7 に示します。

表 5-7 フラッシュ・メモリ・シーケンサ実行結果(正常/エラー)と実行後ステータス

Symbol Name	Value	Description
SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK	0x00u	ステータス(正常終了)
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_PARAMETER	0x10u	パラメータ・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CONFIGURATION	0x11u	初期設定エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED	0x12u	モード不一致エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA	0x13u	書き込みデータ確認エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CFDG_SEQUENCER	0x20u	コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_EXTRA_SEQUENCER	0x21u	エクストラ領域シーケンサ・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_ERASE	0x22u	消去動作エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_WRITE	0x23u	書き込み動作エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_BLANKCHECK	0x24u	ブランク・チェック動作エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE	0x30u	消去コマンド・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE	0x31u	書き込みコマンド・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK	0x32u	ブランク・チェック・コマンド・エラー
SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_SET_EXTRA_AREA	0x33u	エクストラ領域コマンド設定エラー

5.2.2 マクロ定義

5.2.2.1 RFD RL78 Type11 サンプル・プログラム用ユーザ定義マクロ

- 「アクティブ・バンク・スワップを実行」選択用マクロ

Symbol Name	Description
SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY	「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択時に定義します。

注) コンパイル・オプションを使用してマクロを定義してください。定義していない場合、「リセット後にバンク・スワップを実行」が選択されます。定義方法は、「6.1.3.2 ユーザ定義マクロの設定(CC-RL コンパイラ)」、「6.2.3.2 ユーザ定義マクロの設定(IAR コンパイラ)」、「6.3.3.2 ユーザ定義マクロの設定(LLVM コンパイラ)」を参照してください。

5.3 サンプル・プログラム関数

サンプル・プログラム関数一覧を表 5-8 に示します。

表 5-8 サンプル・プログラム関数一覧

	API Name	Outline
1	main (for code flash)	コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理
2	Sample_CodeFlashControl	コード・フラッシュ・メモリの書き換え処理を実行
3	main (for data flash)	データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理
4	Sample_DataFlashControl	データ・フラッシュ・メモリの書き換え処理を実行
5	main (for extra area FSW control)	エクストラ領域(FSW 機能)書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理
6	Sample_ExtraFSWControl	エクストラ領域(FSW 機能)の書き換え処理を実行
7	main (for bank programming / bank swapping control)	バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラムのメイン処理
8	Sample_BankProgrammingControl	書き換えバンクの書き換え処理を実行 - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、ブランク・チェック、消去、書き込みの各コマンドを実行します。 - 非書き換えモードにおいて、書き込まれたデータを読み出し、正しく書かれたかを確認します。
9	Sample_BankSwapControl	エクストラ領域(ブート領域切り替えフラグ)の書き換え処理とバンク・スワップを実行 - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、エクストラ領域書き込み(ブート領域切り替えフラグ書き換え)コマンドを実行します。 - リセット後、もしくは即時にバンク・スワップを実行します。 「リセット後にバンク・スワップを実行」する場合： 非書き換えモードにおいて、Reset を発生させ、バンク・スワップが実行され、入れ替わった起動バンクのプログラムを実行します。 「アクティブ・バンク・スワップを実行」する場合： 非書き換えモードへ遷移した後、コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ遷移、アクティブ・バンク・スワップが実行された後、非書き換えモードへ遷移し、入れ替わった起動バンクの指定プログラムへ分岐します。
10	Sample_CheckCFSeqEnd	コード・フラッシュ書き換え用コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理
11	Sample_CheckDFSeqEnd	データ・フラッシュ書き換え用コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理
12	Sample_CheckExtraSeqEnd	エクストラ領域書き換え用エクストラ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理

5.3.1 コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム

RFD RL78 Type11 のコード・フラッシュ書き換え制御サンプルでは、コード・フラッシュ領域のブロック 14(0x00007000)を消去し、ブロック 14 の先頭から 16 ワード(64byte)のデータを書き込みます。

注)コード・フラッシュ・プログラミング・モード中は、コード・フラッシュ上のプログラムとデータを参照できないため、Sample_CodeFlashControl 関数、およびその内部で実行される処理と参照するデータは事前に RAM ヘコピーして、RAM 上で実行、参照する必要があります。

バンク・プログラミングを実行する場合は「5.3.4 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラム」を参照してください。

動作条件 (RL78/L23 用サンプル・プログラムの例) :

- ・ CPU 動作周波数: 32MHz(メイン・システム・クロックに高速オンチップ・オシレータ・クロックを使用)
- ・ コード・フラッシュ消去/書き込みアドレス: 0x00007000
- ・ 消去ブロック No.: 0x000E
- ・ 書き込みデータ・サイズ: 16 ワード(64byte)

RFD RL78 Type11 のコード・フラッシュ書き換え制御サンプルのメイン処理実行フローを図 5-2 に示します。

5.3.1.1 main 関数

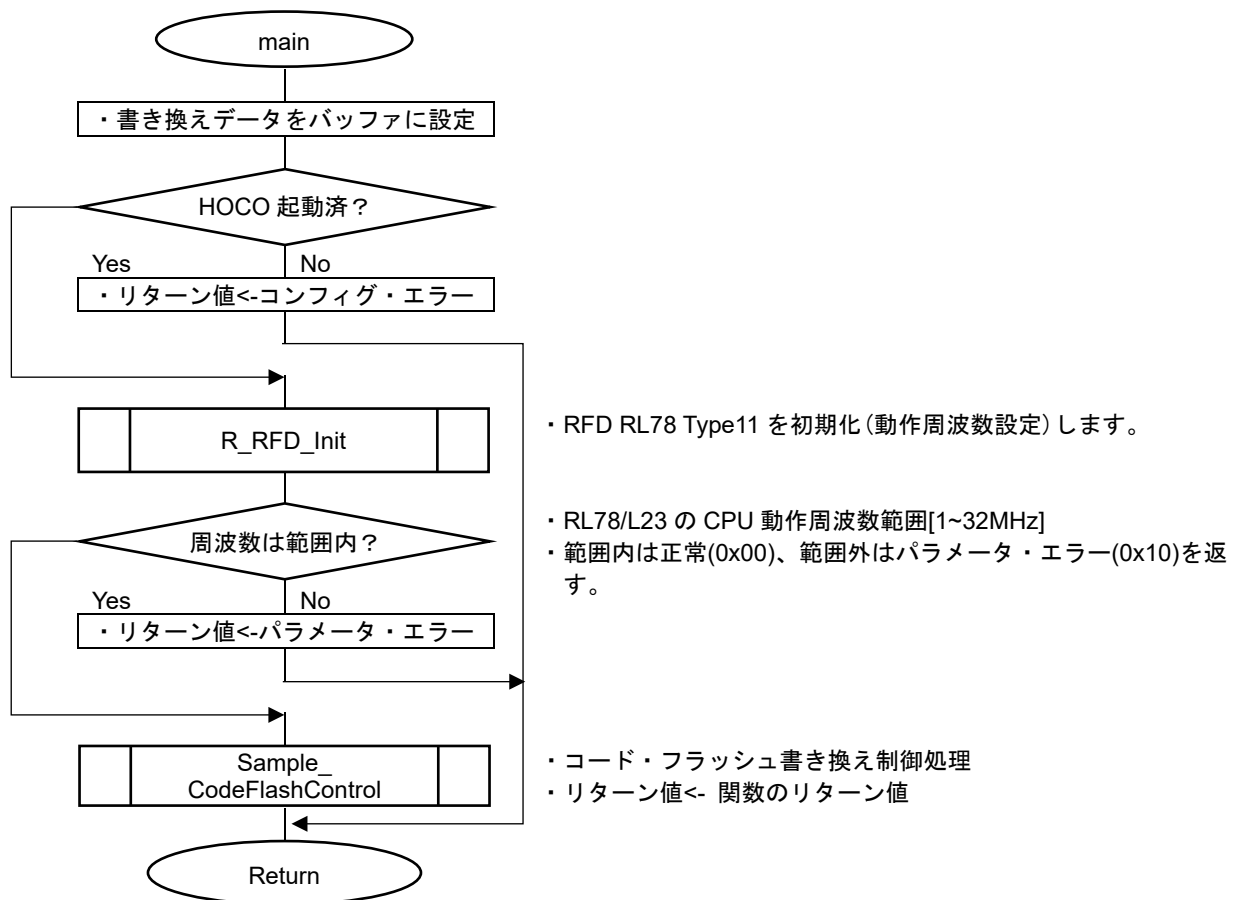


図 5-2 コード・フラッシュ書き換え制御サンプルのメイン処理実行フロー

5.3.1.2 Sample_CodeFlashControl 関数

・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、ブランク・チェック、ブロック消去を実行

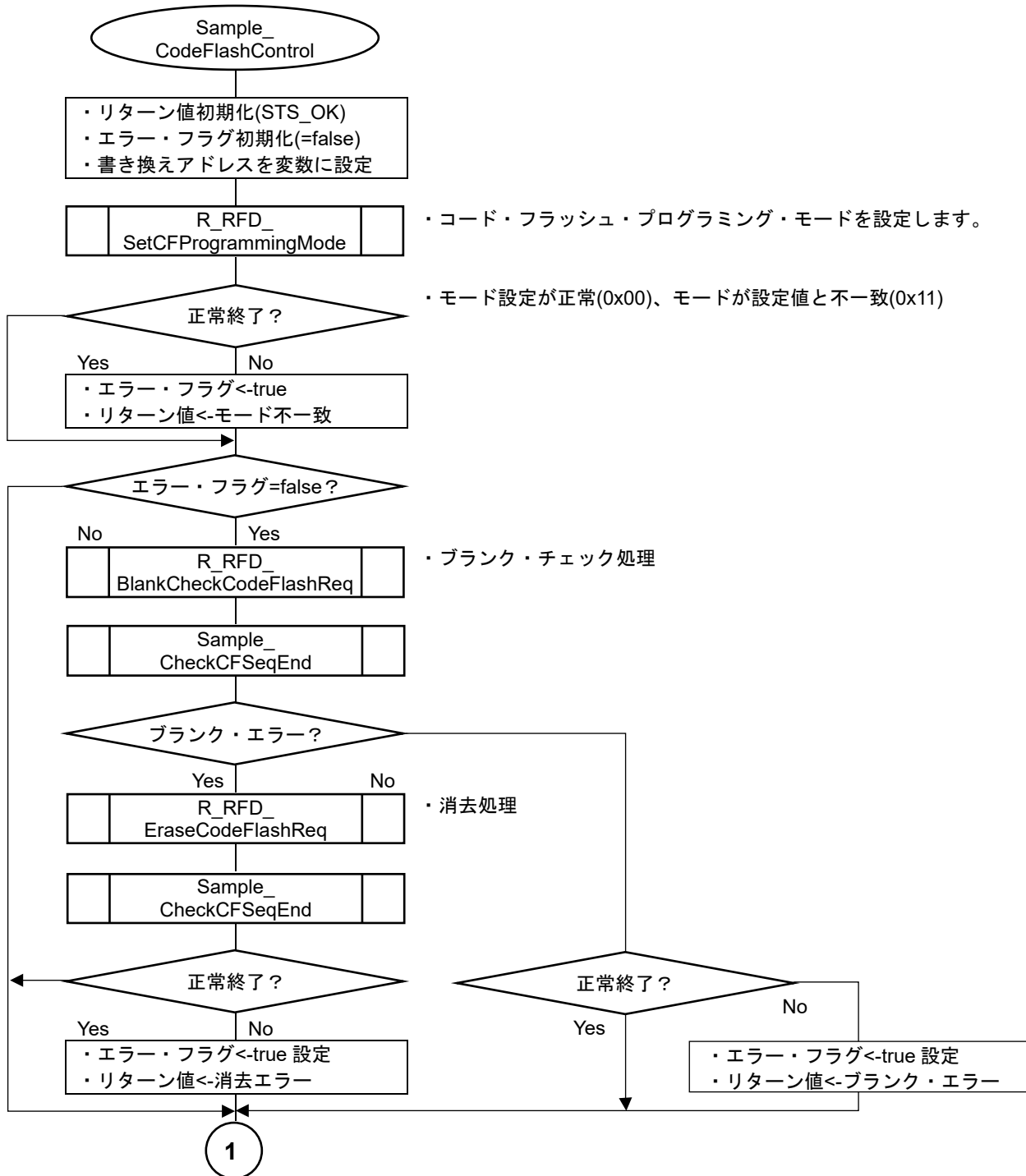


図 5-3 コード・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(1/3)

・書き込みを実行

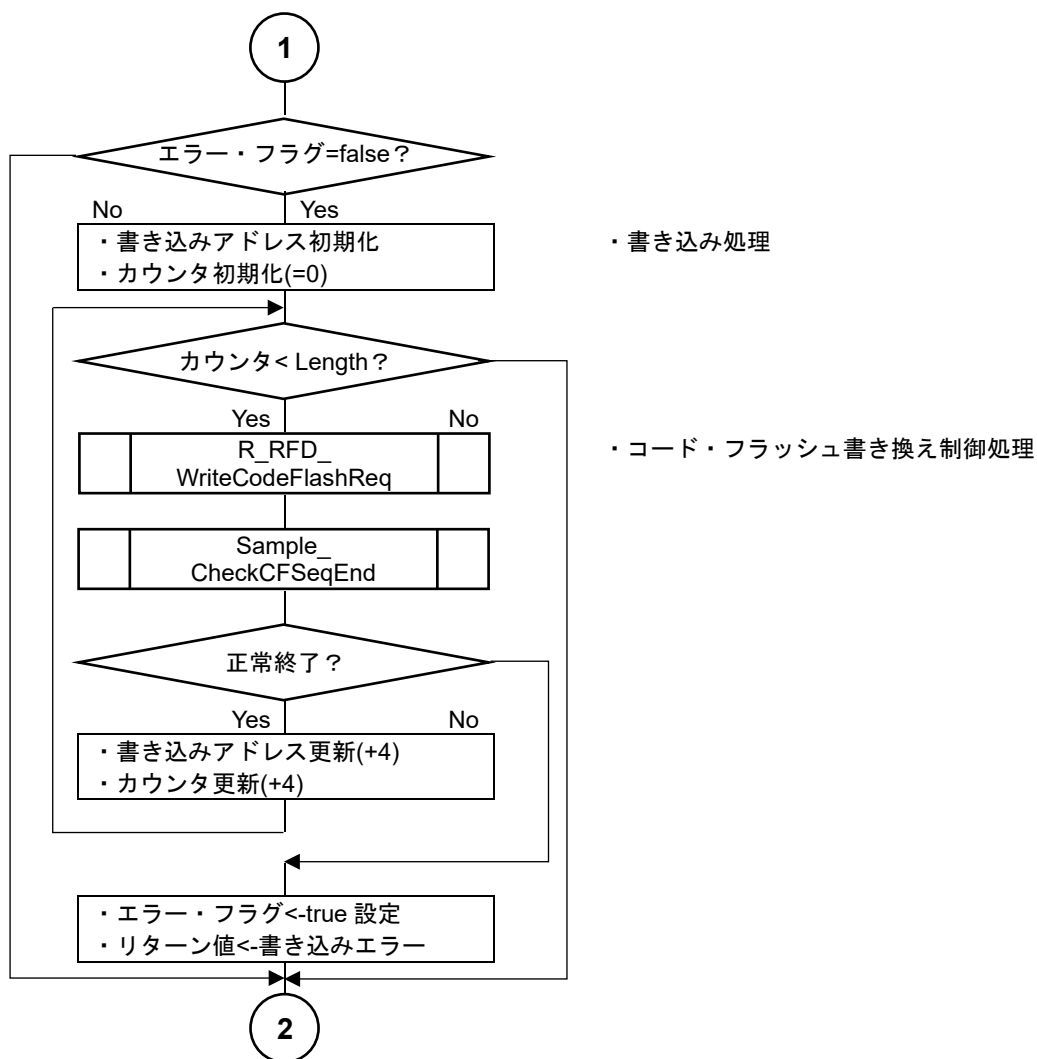
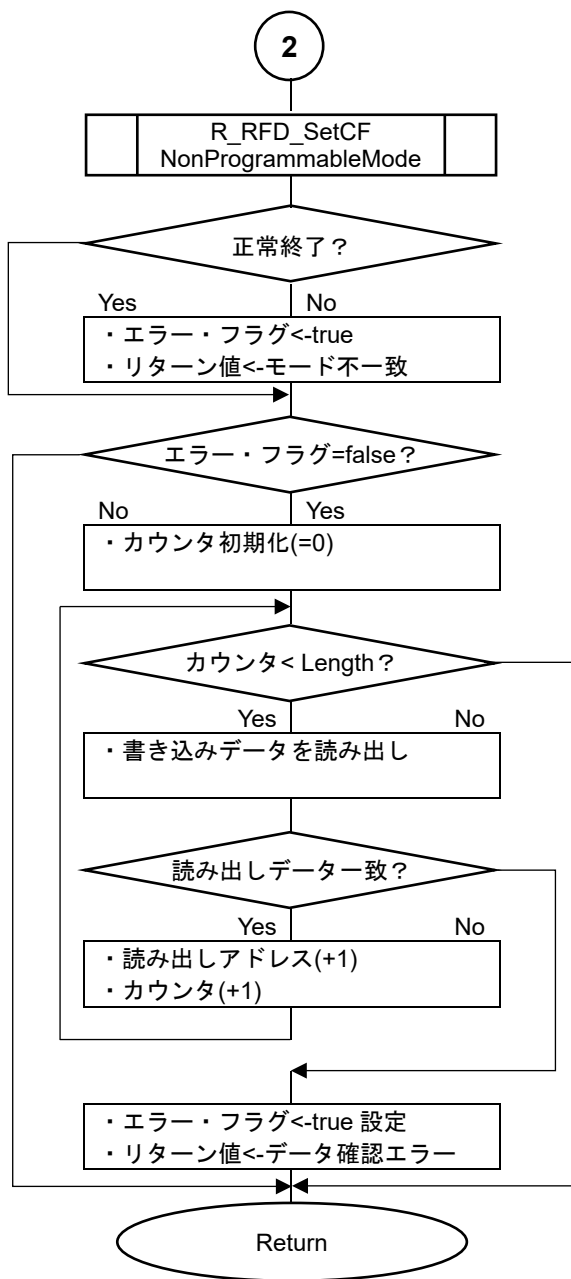


図 5-4 コード・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(2/3)

・非書き換えモードへ移行、CPU 読み出しによるペリファイ・チェックを実行



・非書き換えモードを設定します。

・モード設定が正常(0x00)、モードが設定値と不一致(0x11)

・CPU 読み出しによるペリファイ・チェック

図 5-5 コード・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(3/3)

5.3.2 データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム

RFD RL78 Type11 のデータ・フラッシュ書き換え制御サンプルでは、データ・フラッシュ領域のブロック 0(0x000F1000)を消去し、ブロック 0 の先頭から 64byte のデータを書き込みます。

注)データ・フラッシュ・プログラミング・モード中は、データ・フラッシュ上のデータを参照できないため、**Sample_DataFlashControl** 関数、およびその内部で参照するデータは、事前に RAM へコピーして、RAM 上で参照する必要があります。

動作条件 (RL78/L23 用サンプル・プログラムの例) :

- ・ CPU 動作周波数: 32MHz(メイン・システム・クロックに高速オンチップ・オシレータ・クロックを使用)
- ・ データ・フラッシュ消去/書き込みアドレス: 0x000F1000
- ・ 消去ブロック No.: 0x0000
- ・ 書き込みデータ・サイズ: 64byte

RFD RL78 Type11 のデータ・フラッシュ書き換え制御サンプルのメイン処理実行フローを図 5-6 に示します。

5.3.2.1 main 関数

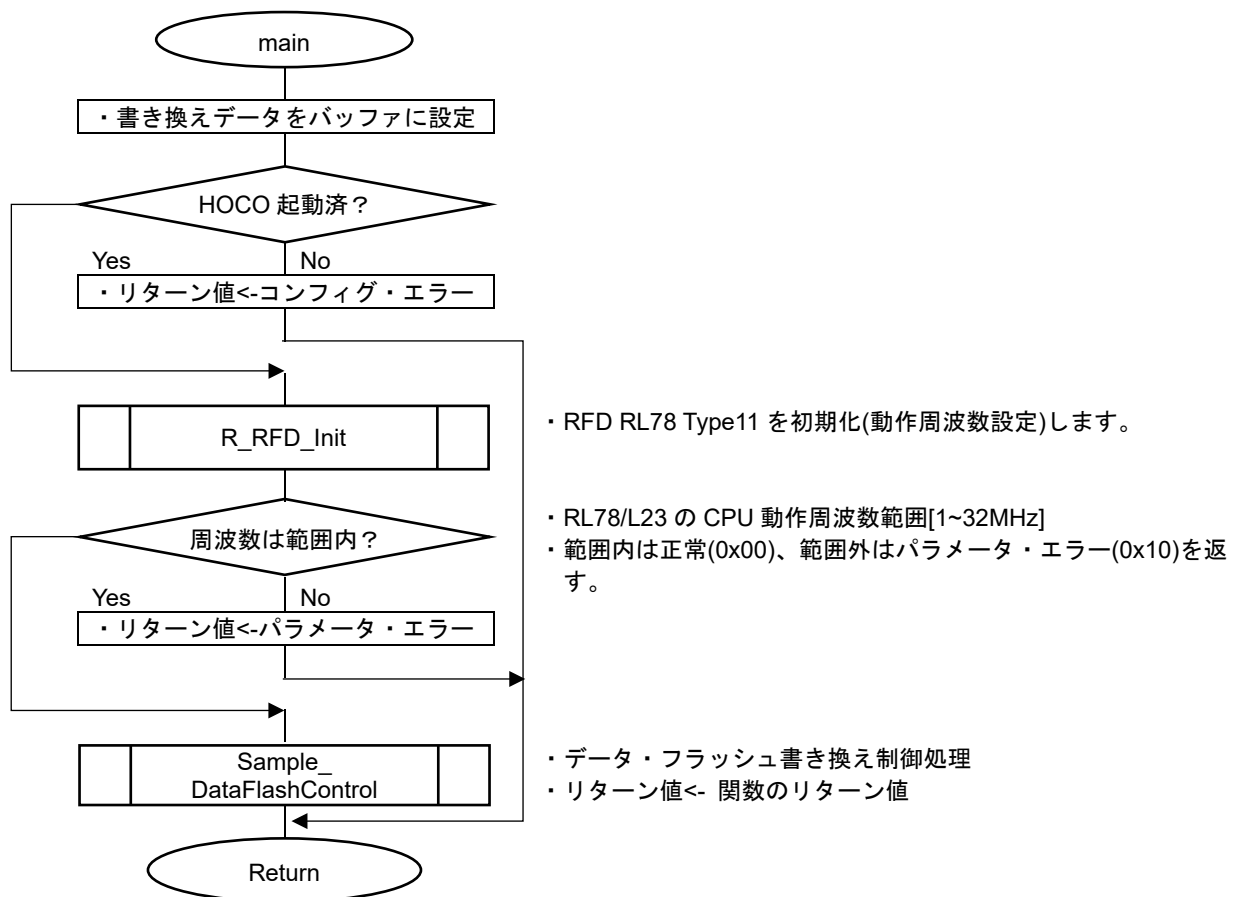


図 5-6 データ・フラッシュ書き換え制御サンプルのメイン処理実行フロー

5.3.2.2 Sample_DataFlashControl 関数

・データ・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、blank・チェック、ブロック消去を実行

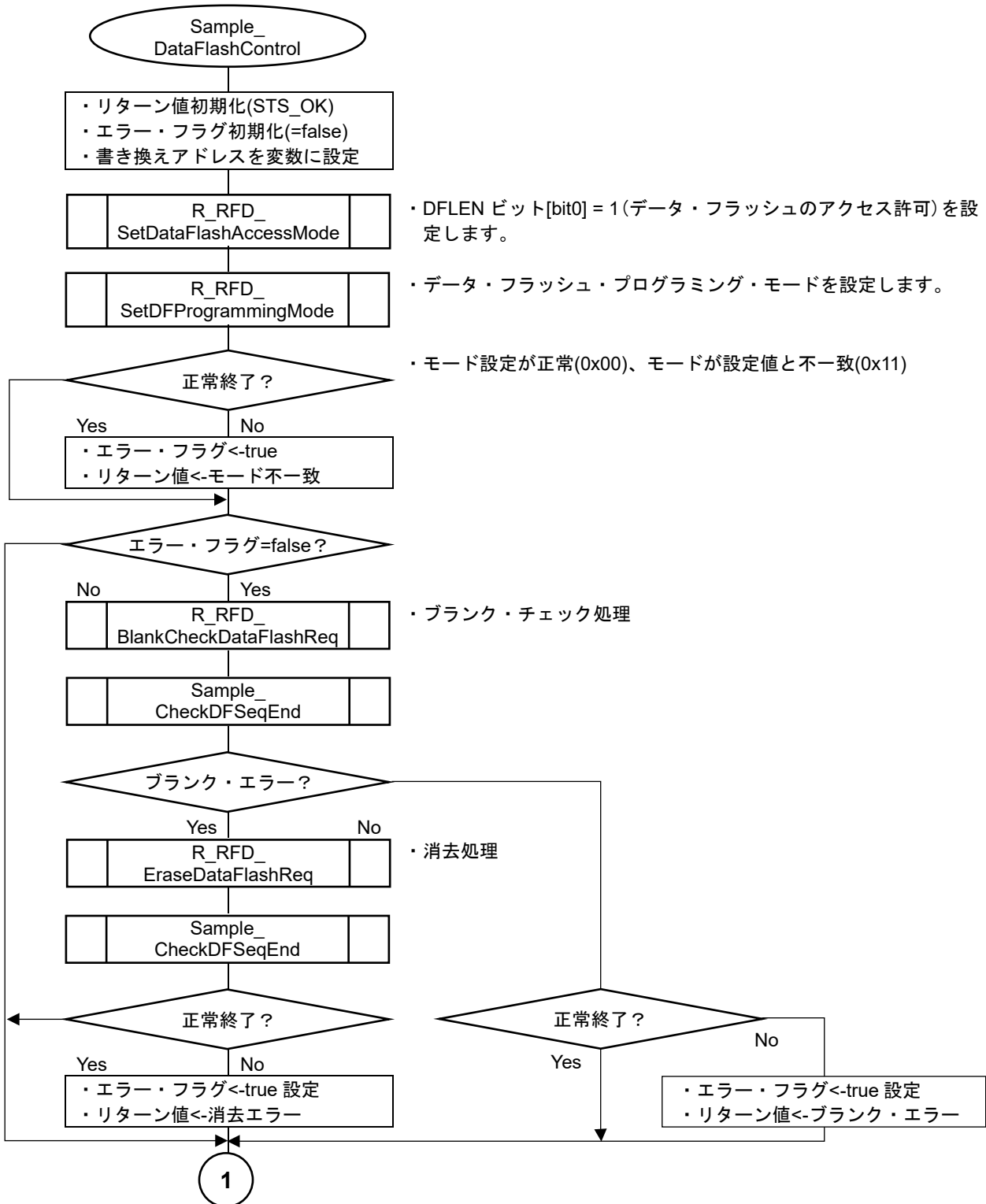


図 5-7 データ・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(1/3)

・書き込みを実行

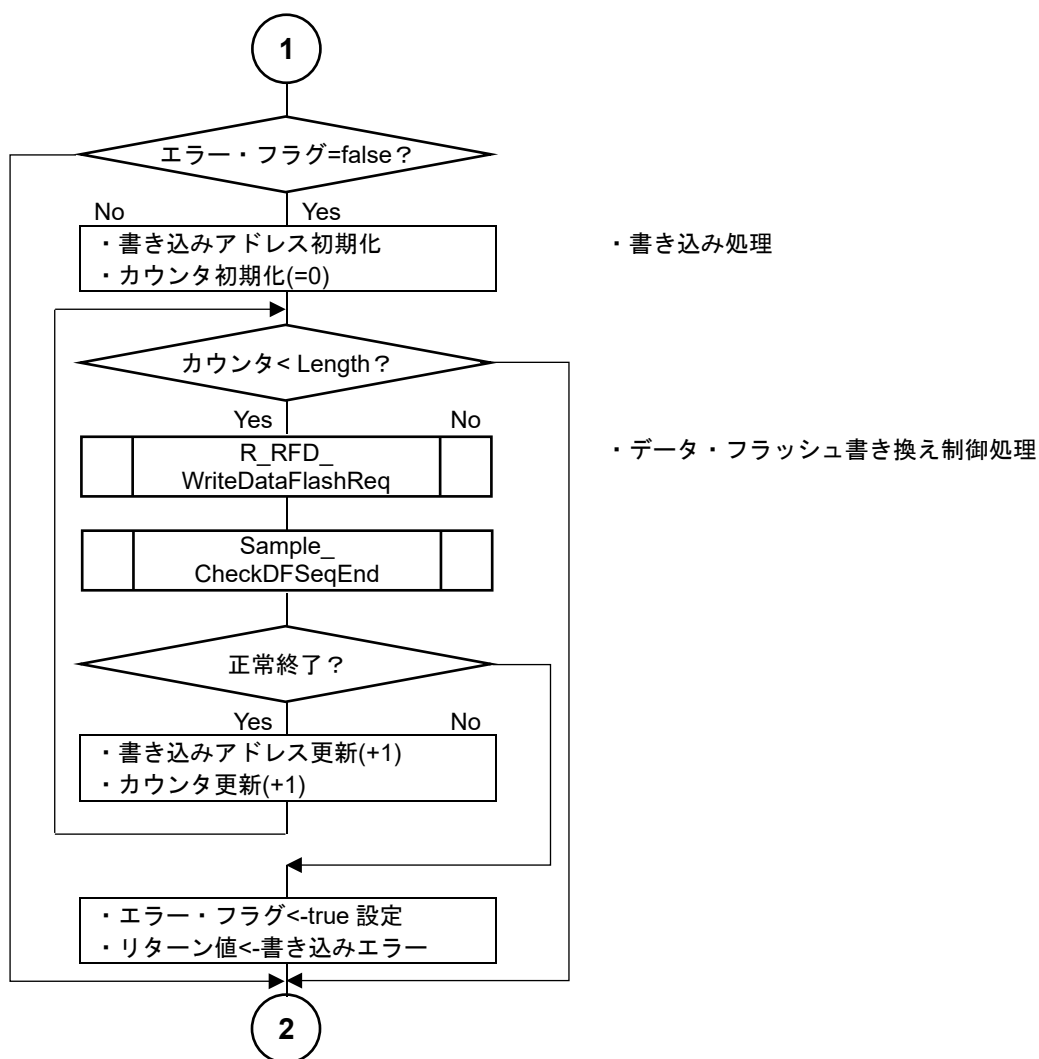


図 5-8 データ・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(2/3)

・非書き換えモードへ移行、CPU 読み出しによるペリファイ・チェックを実行

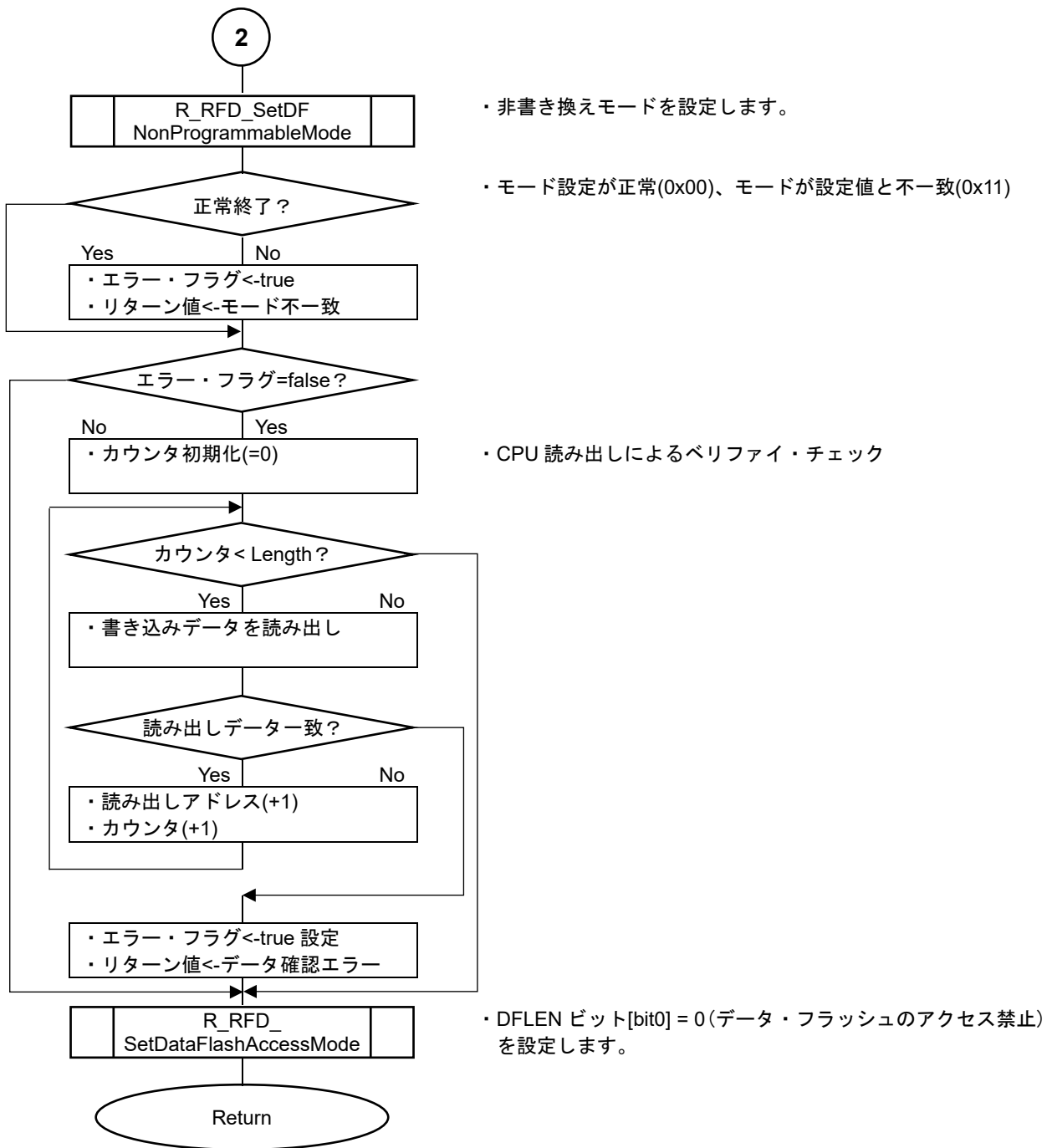


図 5-9 データ・フラッシュ書き換え制御サンプルの処理実行フロー(3/3)

5.3.3.2 Sample_ExtraFSWControl 関数

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、FSW 設定を実行する。

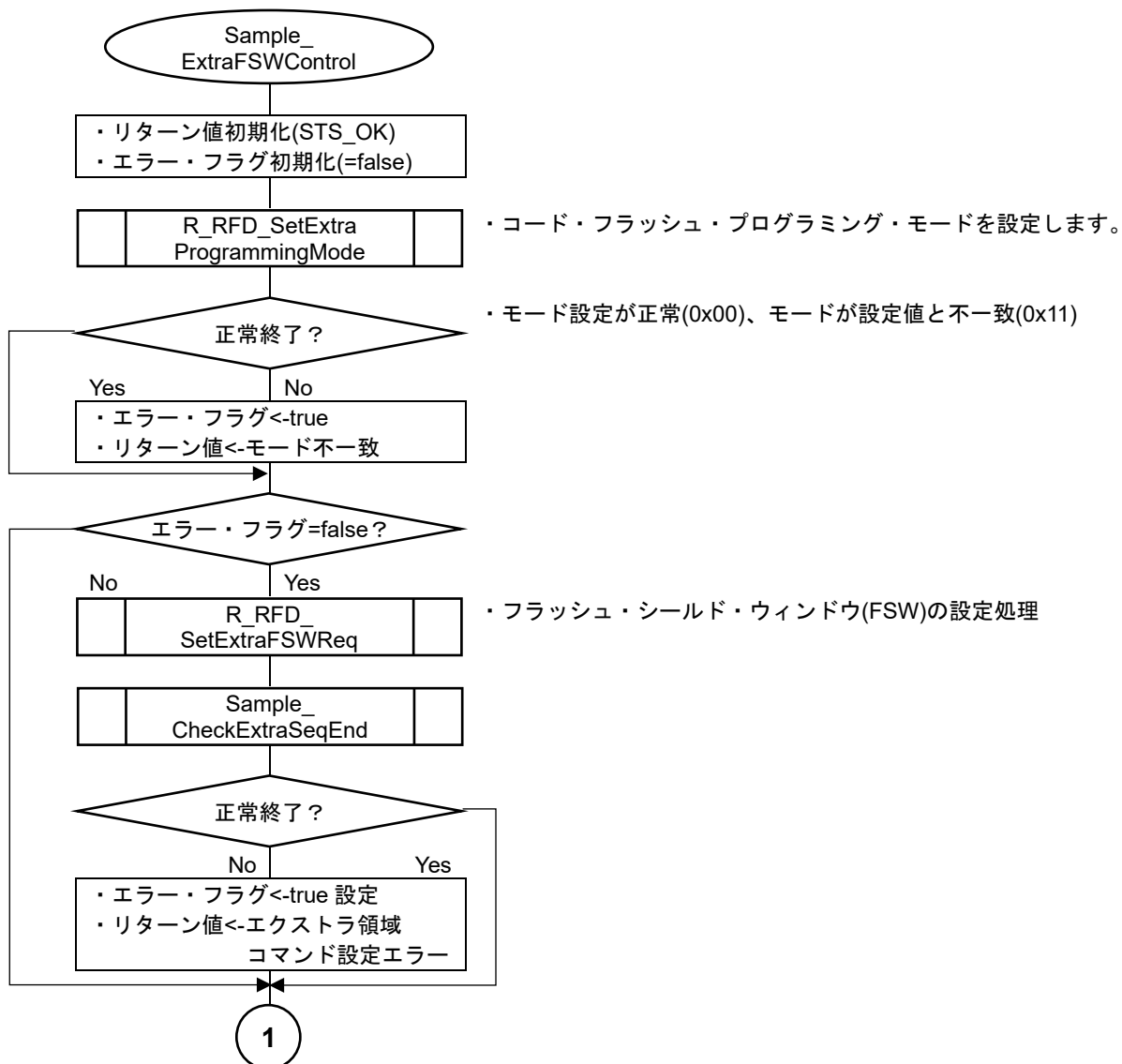


図 5-11 エクストラ領域書き換え(FSW)制御サンプルの処理実行フロー(1/2)

- ・非書き換えモードへ移行、FSW 設定値を読み出し、期待値通りであるかを確認する。

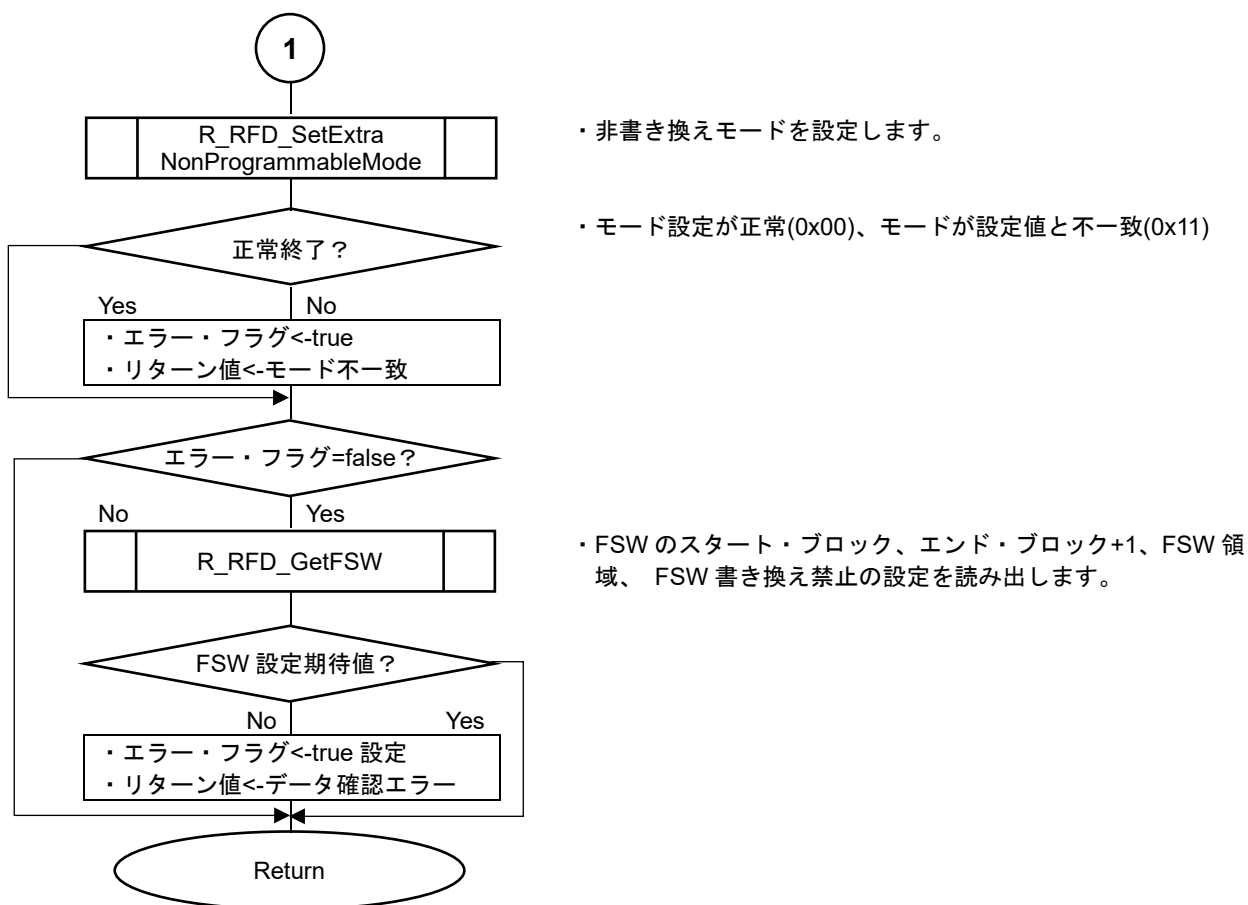


図 5-12 エクストラ領域書き換え(FSW)制御サンプルの処理実行フロー(2/2)

5.3.4 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラム

このサンプルは、バンク・プログラミング制御とバンク・スワップ制御を実行します。

BTBLS ビットは、専用フラッシュ・メモリ・プログラマ等でバンク・スワップ設定にしておく必要があります。

(1)バンク・プログラミング制御

バンク・プログラミング・モードへ移行し、起動バンクへ配置されたユーザ・プログラムを実行して、書き換えバンクを書き換えます。

・バンク・プログラミング・モードへの移行方法

FLMODE レジスタは、フラッシュ動作モードプロテクトレジスタ (**FLMWRP**) の **FLMWEN** ビットが 1 のとき、値を変更できます。また、**FLMODE** レジスタの値を変更した後は **FLMWEN** ビットを 0 に設定してください。**BANKPGEN** ビットの書き込み前に、**FLMWEN** を 1 に設定してください。

FLMWRP レジスタ(リセット時:0x00) :

7	6	5	4	3	2	1	0
-	-	-	-	-	-	-	FLMWEN
-	-	-	-	-	-	-	R/W

- FLMWRP レジスタは、フラッシュ動作モード選択レジスタへのアクセスを制御する 8 ビットのレジスタです。

- ・ FLMWEN [bit0] = 0(リセット時の値) : FLMODE レジスタの書き換え禁止。
- ・ FLMWEN [bit0] = 1 : FLMODE レジスタの書き換え許可。

FLMODE レジスタ(リセット時:0x00/0x80/0xC0) :

7	6	5	4	3	2	1	0
MODE1	MODE0	-	-	-	-	BANKPGEN	-
R/W	R/W	-	-	-	-	R/W	-

- FLMODE レジスタは、フラッシュ動作モードを制御する 8 ビットのレジスタです。

- ・ BANKPGEN [bit1] = 0(リセット時の値) : ユーザ・モード (バンク・プログラミングは不可)。
- ・ BANKPGEN [bit1] = 1 : バンク・プログラミング・モード (バンク・プログラミングは可)。

(2)バンク・スワップ制御

バンク・スワップを実行するには、「リセット後にバンク・スワップを実行」する方法と「アクティブ・バンク・スワップを実行」する方法があります。本サンプルでは、バンク・スワップ実行後に不慮の瞬停やリセットが発生した場合もスワップされた状態を維持するように、エクストラ領域のブート領域切り替えフラグを書き換える処理を実行した後、バンク・スワップが実行されます。「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合は、ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")を設定する必要があります。

ユーザ定義マクロの設定方法については、「6.1.3.2 ユーザ定義マクロの設定(CC-RL コンパイラ)」、「6.2.3.2 ユーザ定義マクロの設定(IAR コンパイラ)」、「6.3.3.2 ユーザ定義マクロの設定(LLVM コンパイラ)」を参照してください。

- リセット後にバンク・スワップを実行 :

エクストラ領域のブート領域切り替えフラグを書き換え、R_RFD_ForceReset 関数処理で CPU の内部リセットを発生させることにより、起動バンクと書き換えバンクを置換します。実行方法については「**4.5.3.3 リセット後にバンク・スワップを実行**」を参照してください。

- アクティブ・バンク・スワップを実行("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY"マクロ設定時) :

指定されたバンクを、起動バンク(0x00000~)に即時設定(バンク・スワップ)します。実行方法については「**4.5.3.4 アクティブ・バンク・スワップ(即時バンク・スワップ)を実行**」を参照してください。

注)エクストラ領域書き換え時のコード・フラッシュ・プログラミング・モード中は、コード・フラッシュ上のプログラムとデータを参照できないため、Sample_BankSwapControl 関数、およびその内部で実行される処理と参照するデータは事前に RAM へ配置して、RAM 上で実行、参照する必要があります。

動作条件 (RL78/L23 用サンプル・プログラムの例) :

- ・ CPU 動作周波数: 32MHz(メイン・システム・クロックに高速オンチップ・オシレータ・クロックを使用)
- ・ 書き込み領域 1(バンク・プログラミング制御実行時):
 - 書き換えバンク先頭アドレス
(Reset Vector[+ 0x0000], Option Byte[+ 0x00C0], OCD Option Byte[+ 0x00C4])
 - 書き換えバンク先頭アドレス + 0x5000(バンク・スワップ後のユーザ・プログラム)
- ・ 書き込み領域 2(バンク・スワップ制御実行時):
 - エクストラ領域(ブート領域切り替えフラグ)

RFD RL78 Type11 のバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプルのメイン処理実行フローを図 5-13 に示します。

5.3.4.1 main 関数

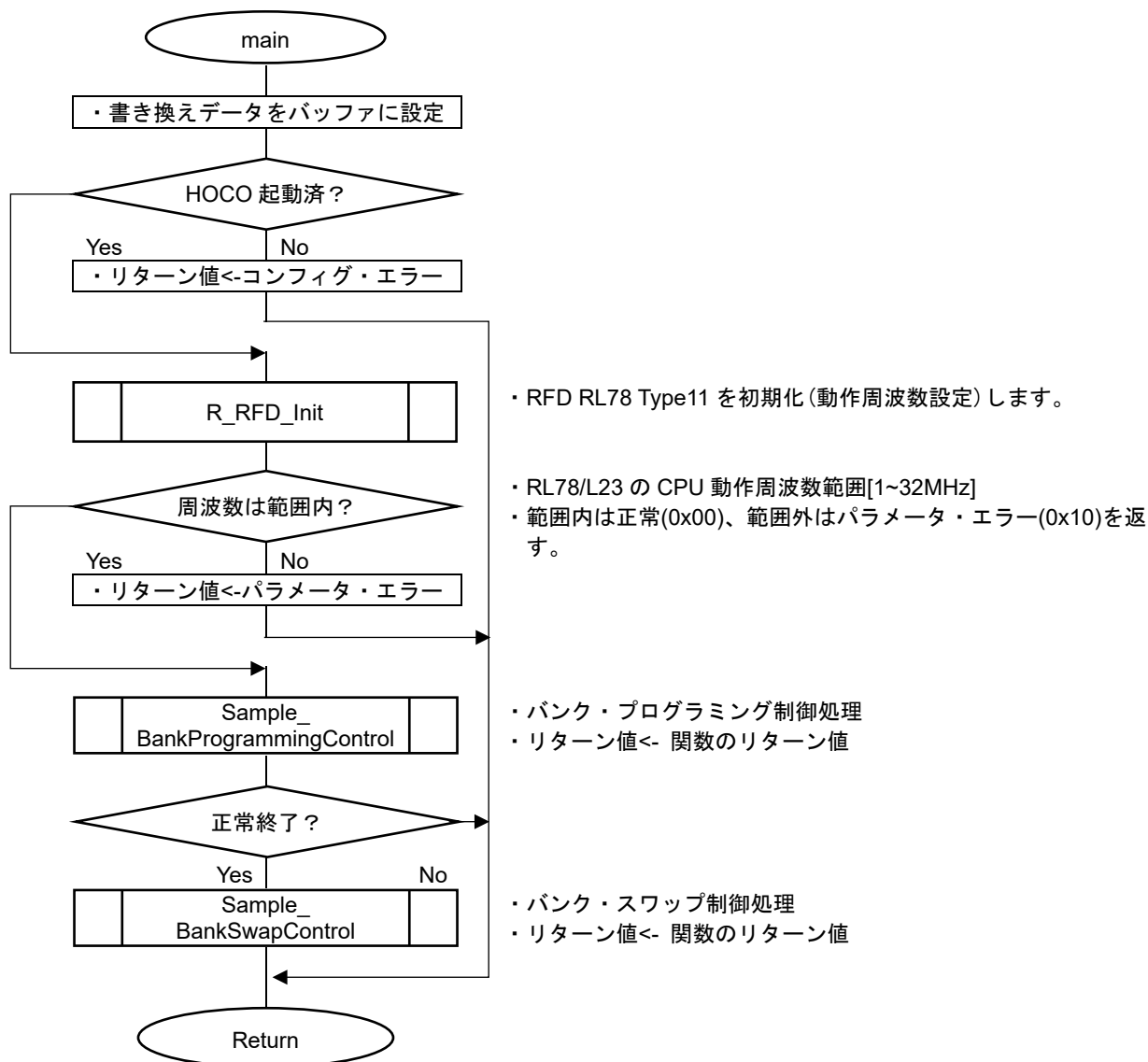


図 5-13 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプルのメイン処理実行フロー

5.3.4.2 Sample_BankProgrammingControl 関数

・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、バンク・チェック、ブロック消去を実行

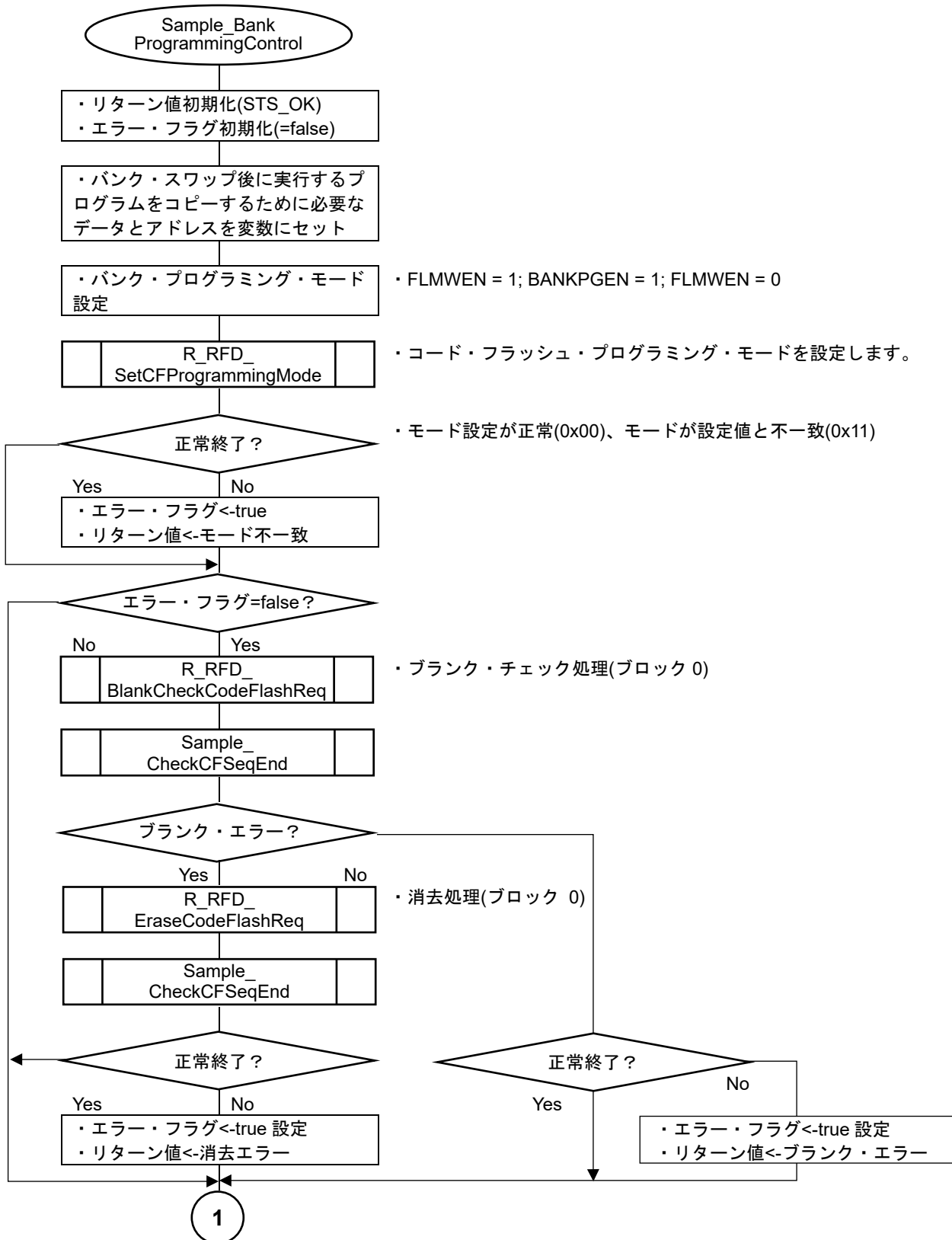


図 5-14 バンク・プログラミング制御サンプルの処理実行フロー(1/5)

・リセット・ベクタとオプション・バイトの書き込みを実行

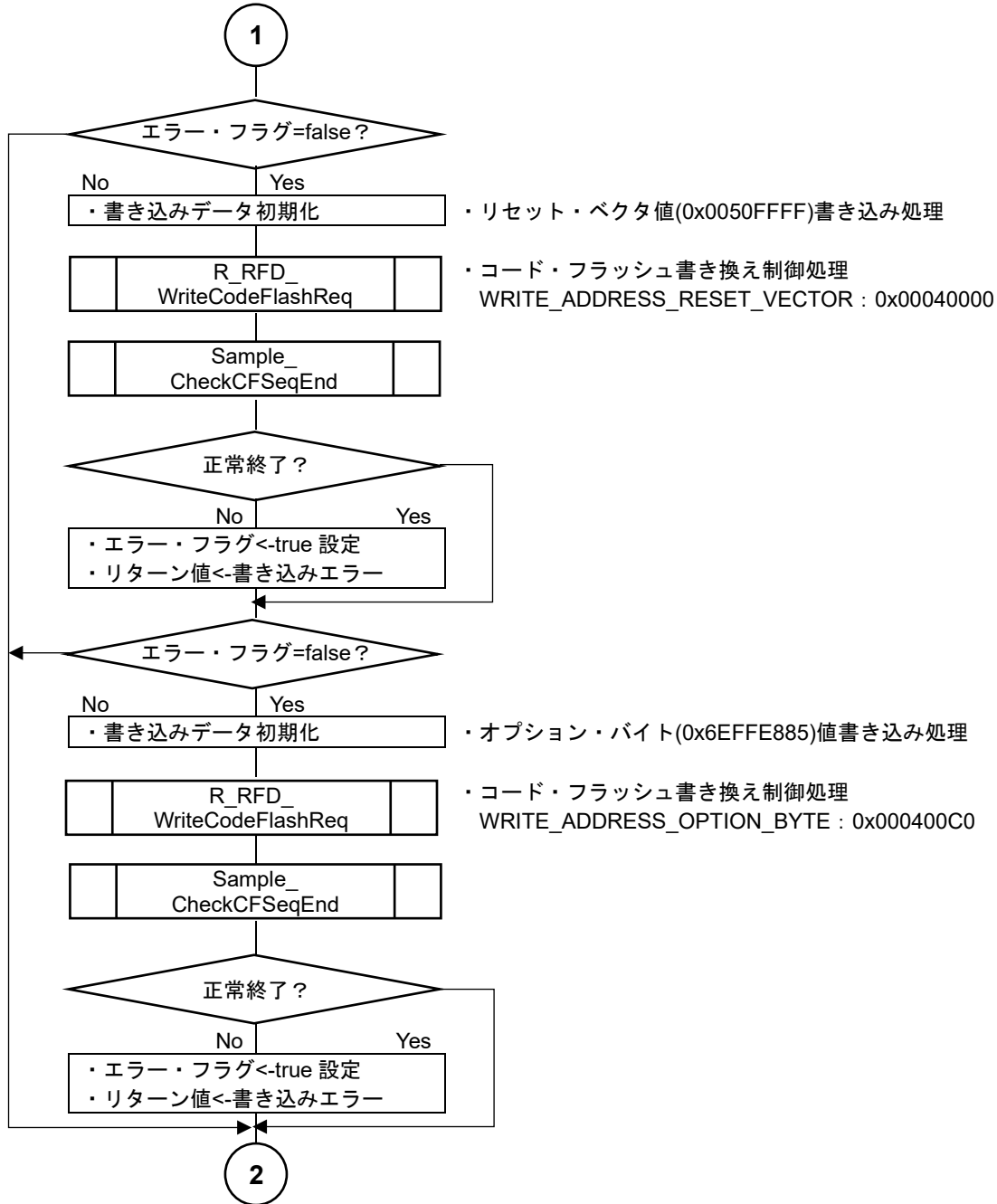


図 5-15 バンク・プログラミング制御サンプルの処理実行フロー(2/5)

- ・ On-Chip Debug ID の書き込みを実行

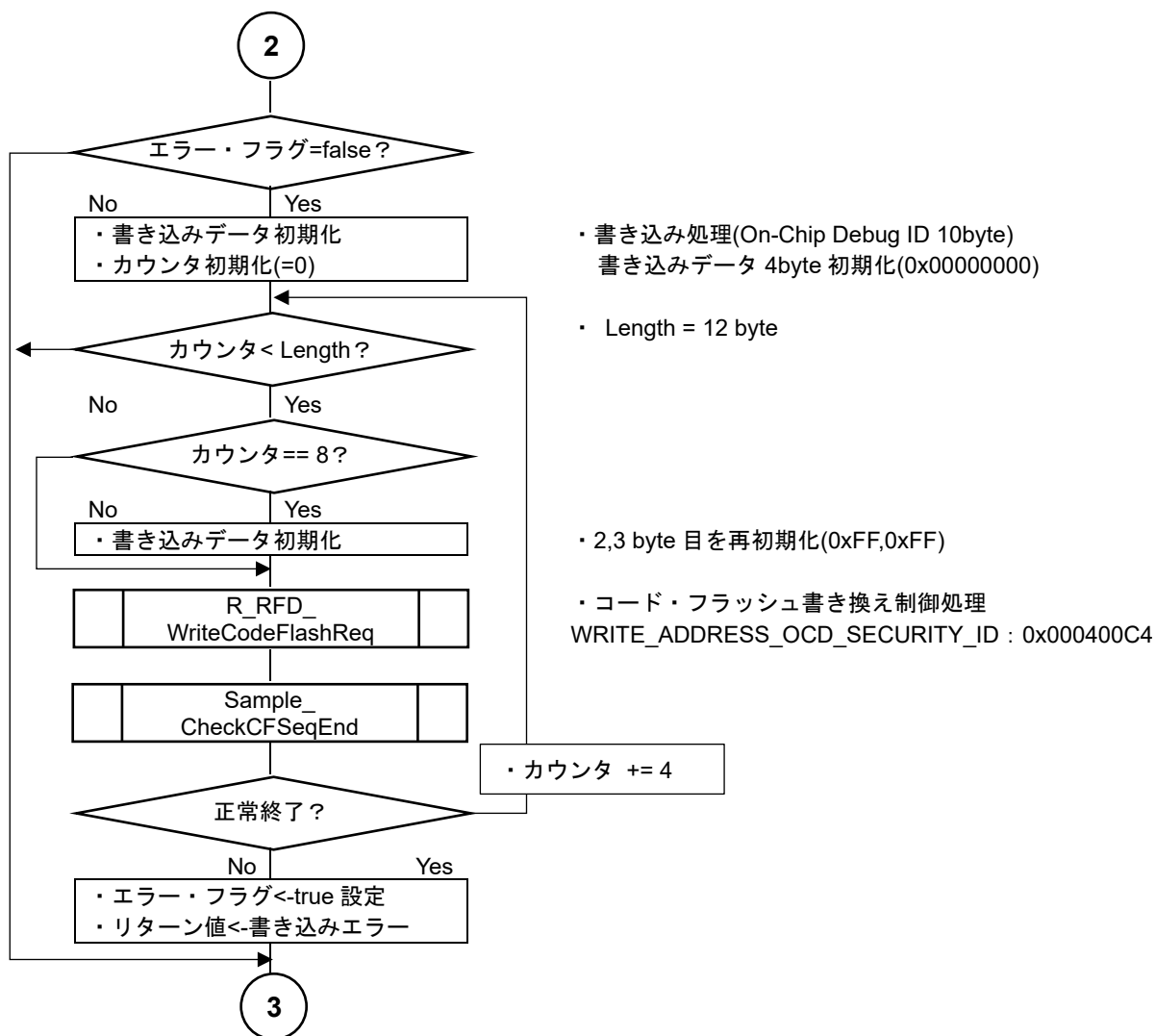


図 5-16 バンク・プログラミング制御サンプルの処理実行フロー(2/5)

・書き換えバンクのユーザ・プログラムを書き換え実行

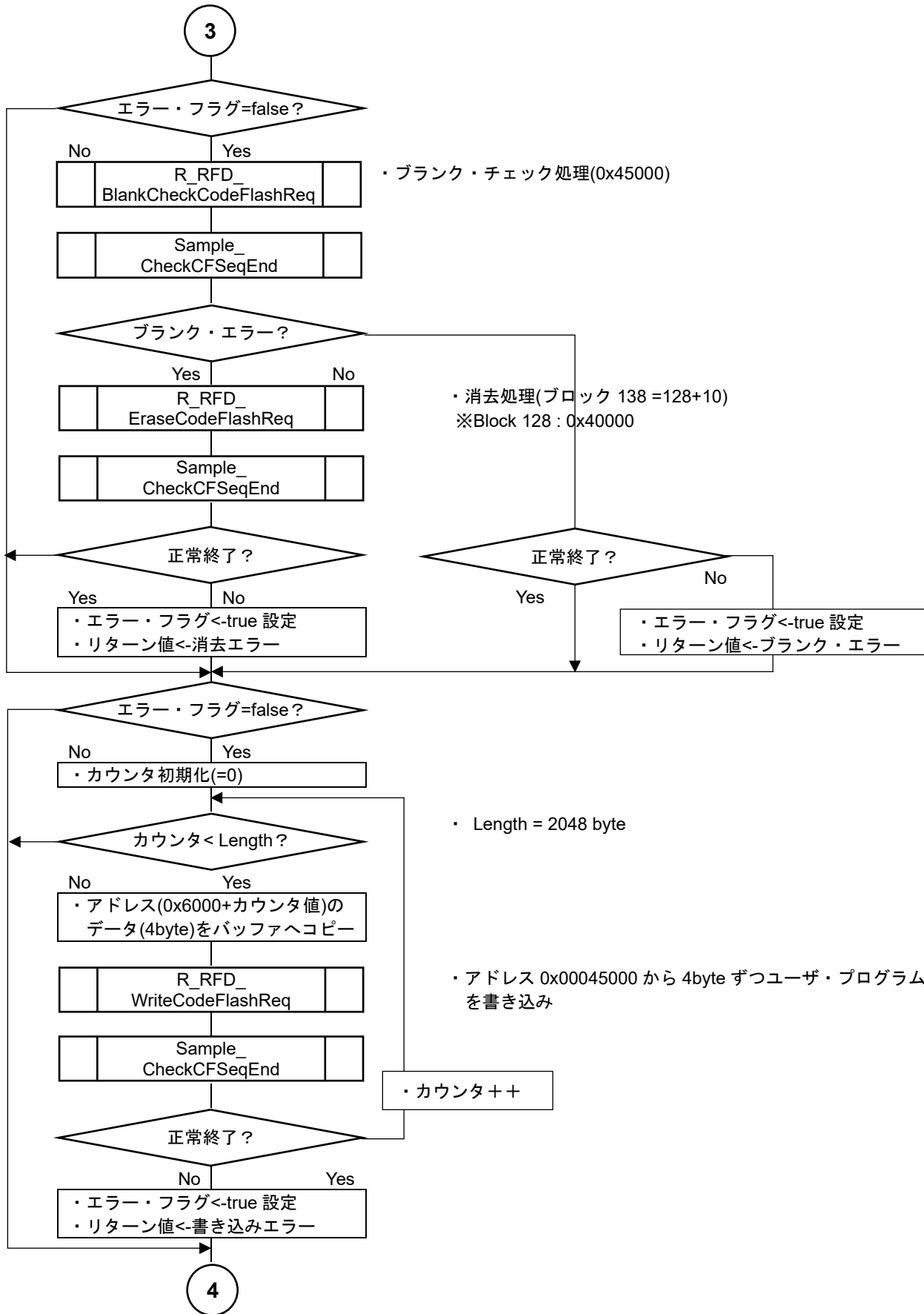
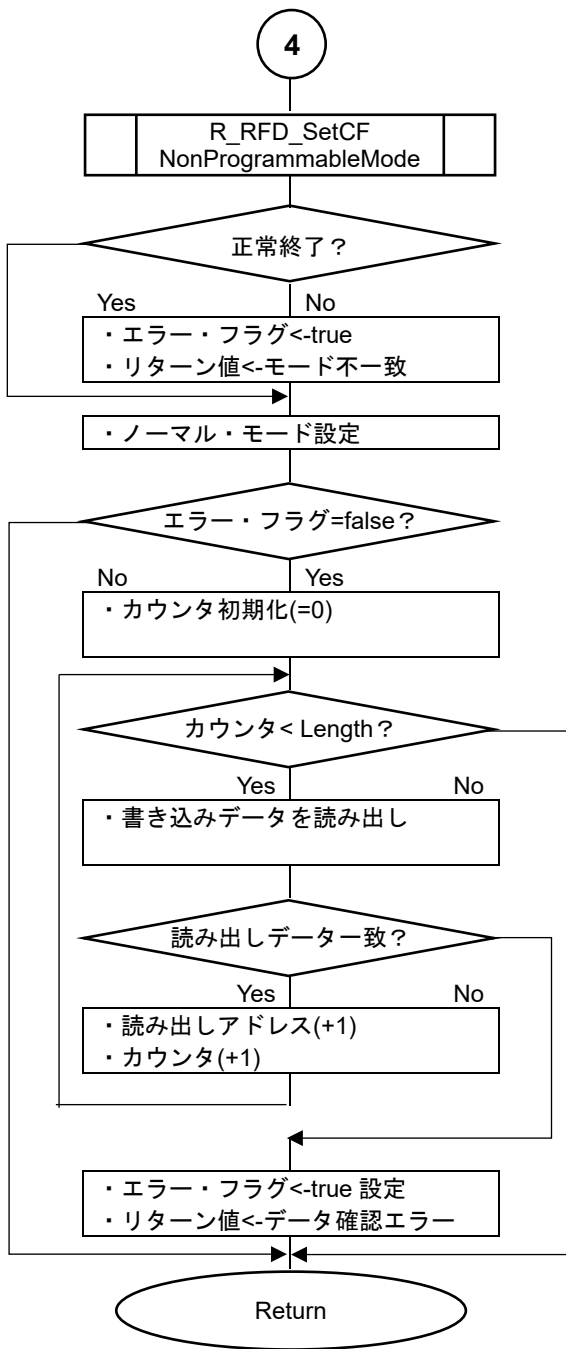


図 5-17 バンク・プログラミング制御サンプルの処理実行フロー(4/5)

・非書き換えモードへ移行、CPU 読み出しによるペリファイ・チェックを実行



・非書き換えモードを設定します。

・モード設定が正常(0x00)、モードが設定値と不一致(0x11)

FLMWEN = 1; BANKPGEN = 0; FLMWEN = 0

・CPU 読み出しによるペリファイ・チェック

図 5-18 バンク・プログラミング制御サンプルの処理実行フロー(5/5)

5.3.4.3 Sample_BankSwappingControl 関数

- ・コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、起動バンク切換設定(ブート領域切り替えフラグ)を実行

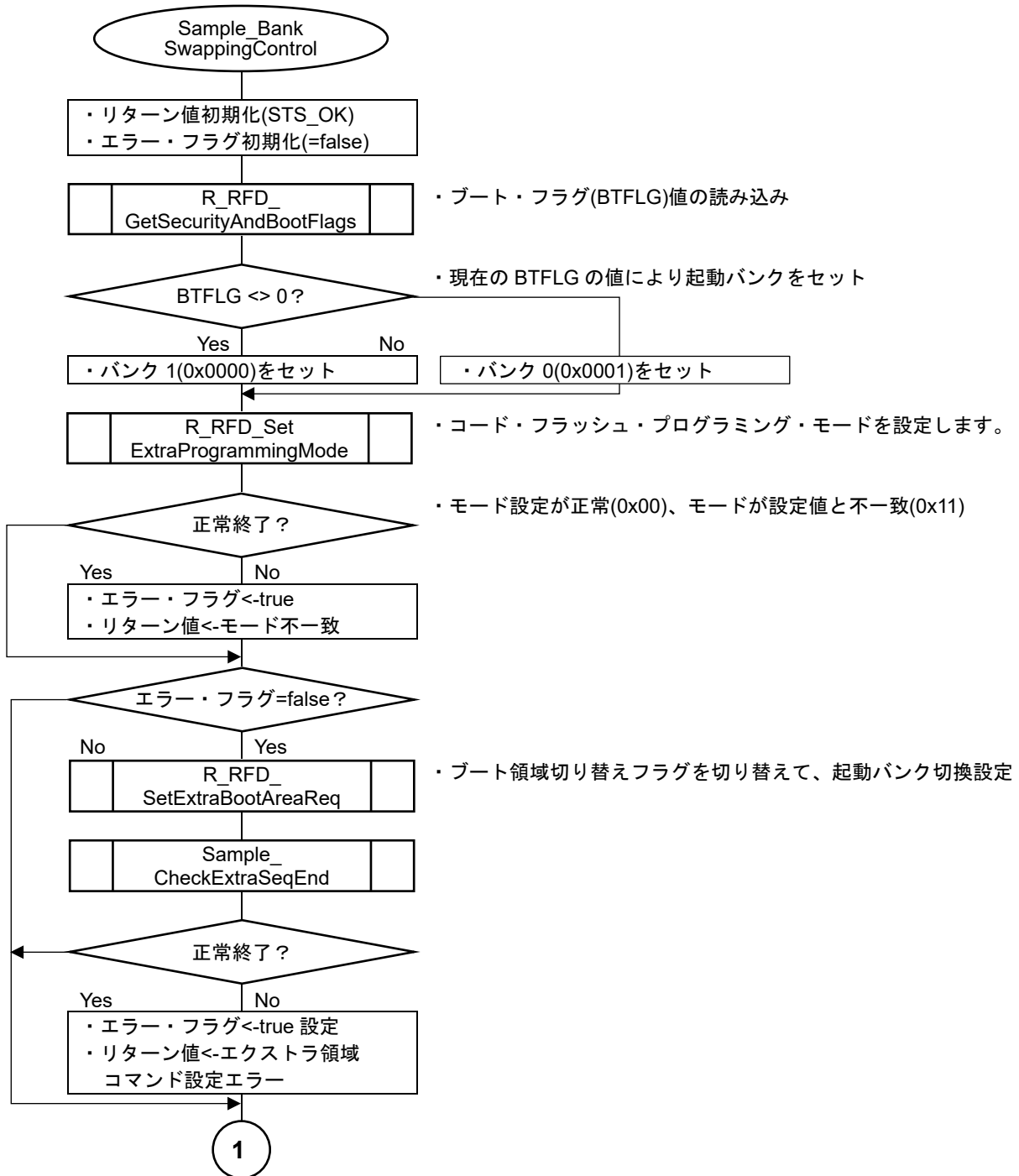


図 5-19 バンク・スワップ制御サンプルの処理実行フロー(1/2)

- ※リセット後にバンク・スワップを実行：ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")非設定時
 ・非書き換えモードへ移行、CPU Reset を発生

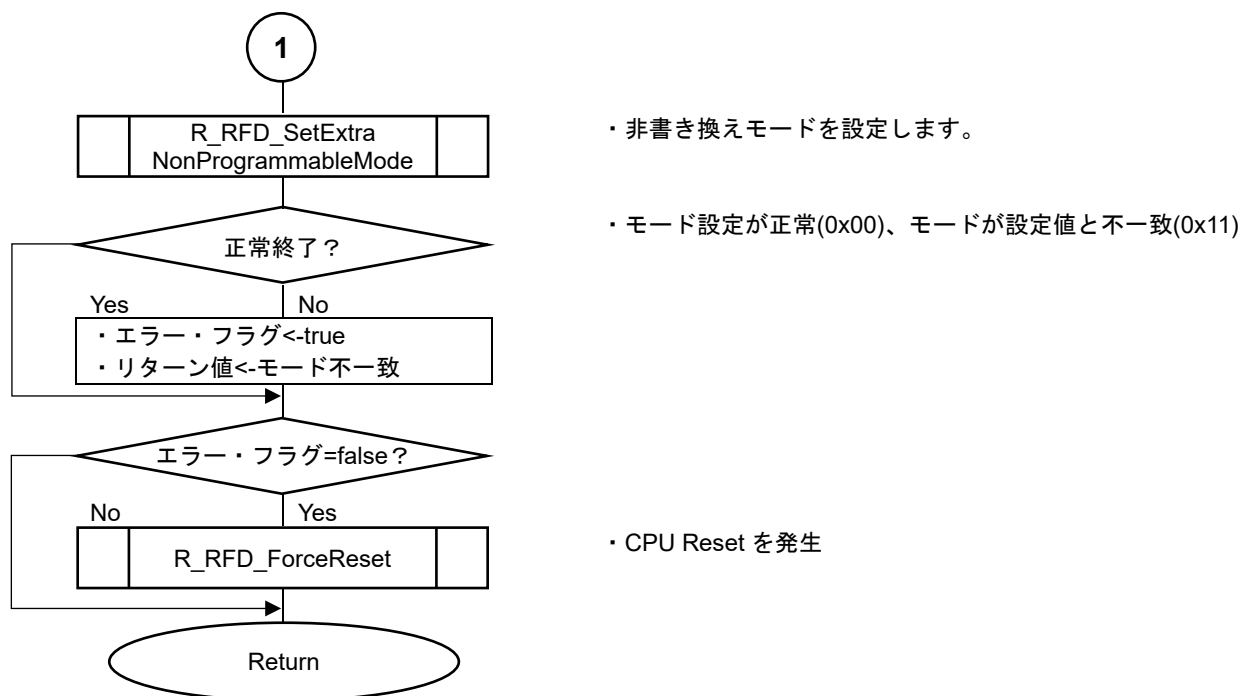


図 5-20 バンク・スワップ制御サンプルの処理実行フロー(2/2 a)

※R_RFD_ForceReset 関数はデバッガ起動中に実行しないでください。(プログラムが暴走する可能性があります。)

※アクティブ・バンク・スワップを実行：ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")設定時)

・非書き換えモード、コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ移行、アクティブ・バンク・スワップを実行する。

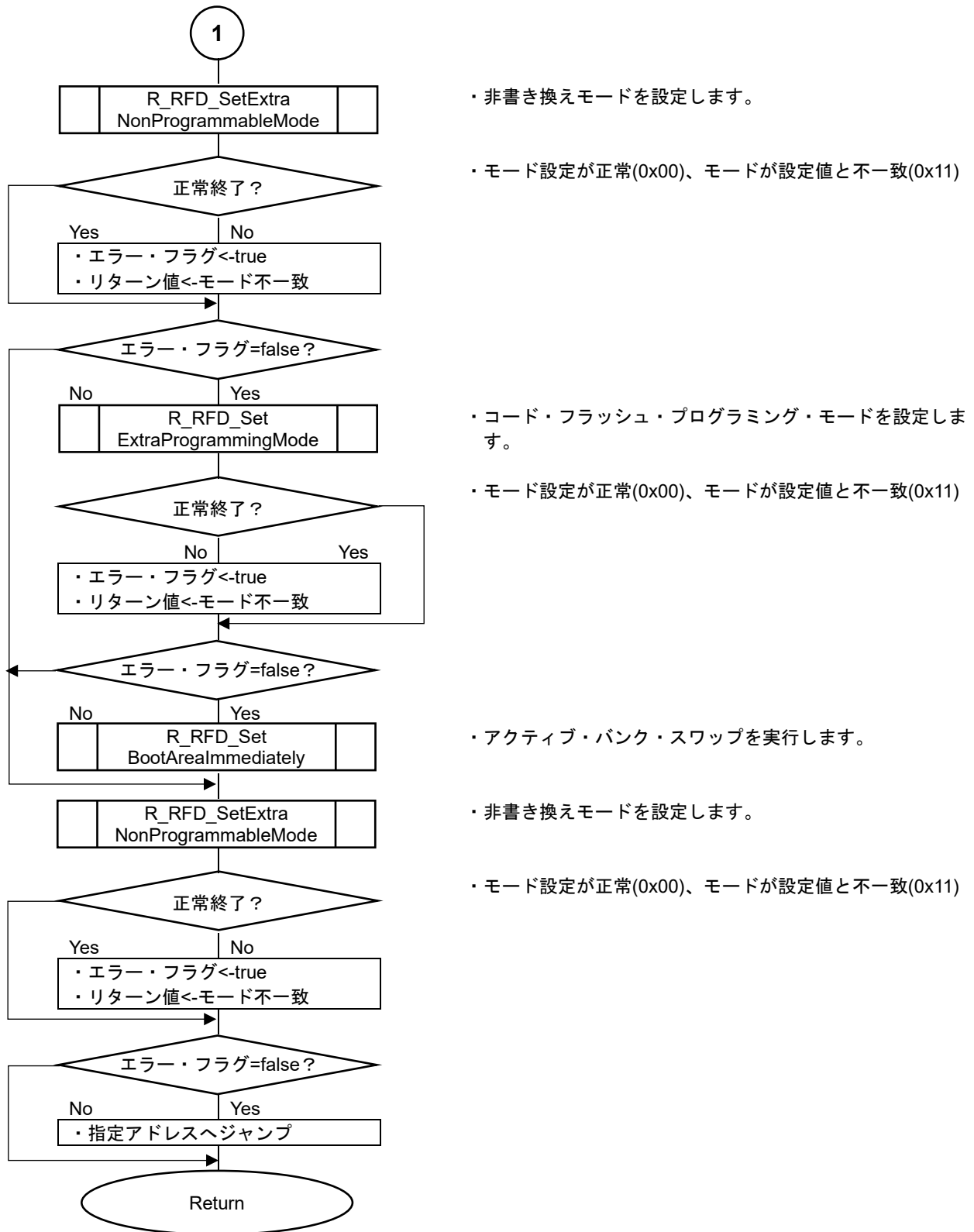


図 5-21 バンク・スワップ制御サンプルの処理実行フロー(2/2 b)

※R_RFD_SetBootAreaImmediately 関数はデバッグ起動中に実行しないでください。(プログラムが暴走する可能性があります。)

5.3.5 共通フラッシュ制御サンプル・プログラム

5.3.5.1 Sample_CheckCFSeqEnd 関数

- ・起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。

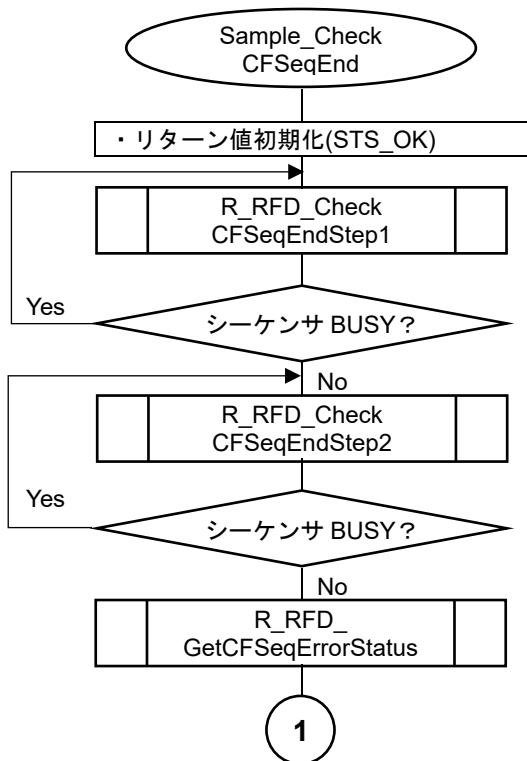


図 5-22 Sample_CheckCFSeqEnd 関数の処理実行フロー(1/2)

・実行結果を返します。

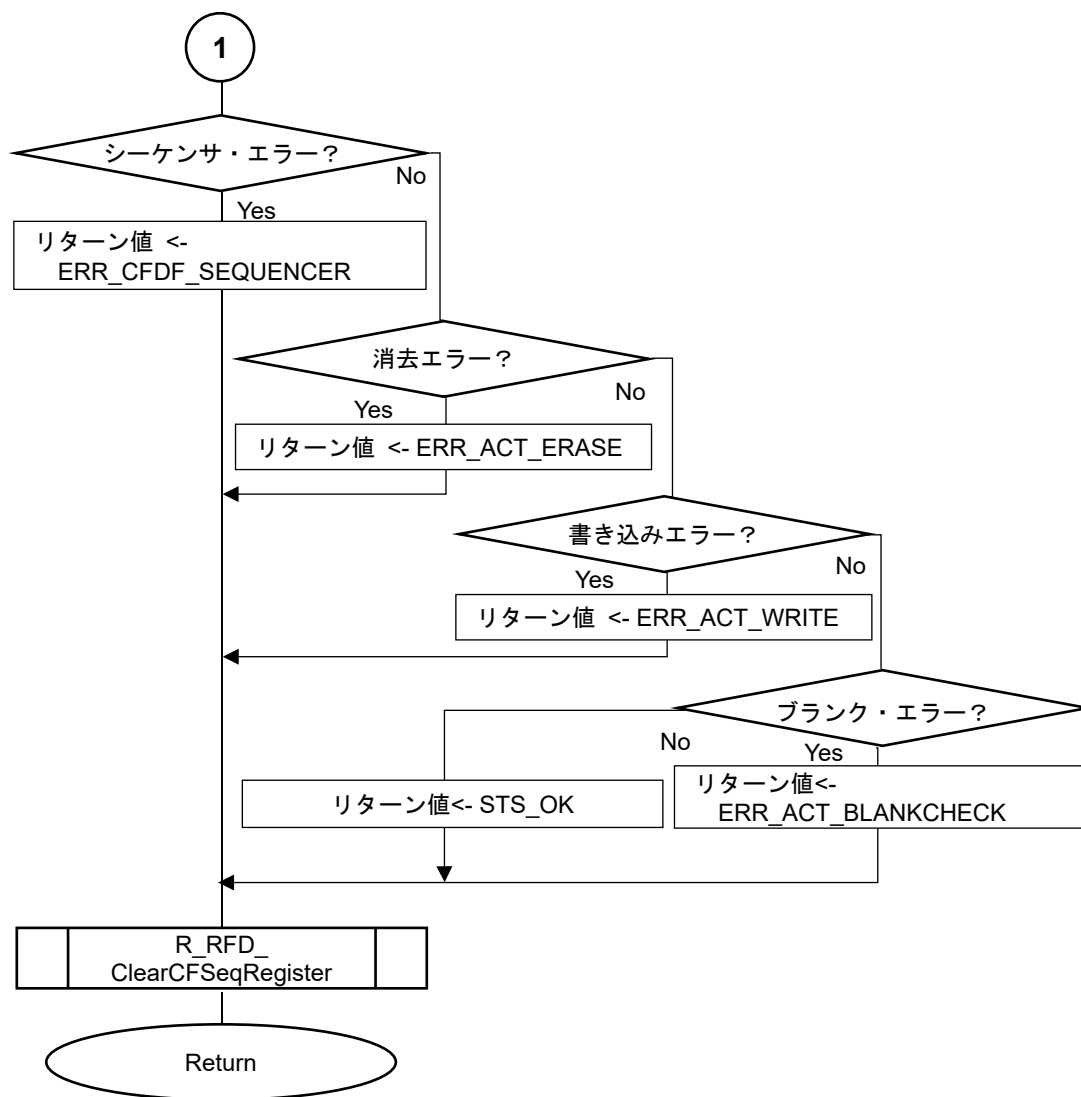


図 5-23 Sample_CheckCFSeqEnd 関数の処理実行フロー(2/2)

5.3.5.2 Sample_CheckDFSeqEnd 関数

- ・起動したコード/データ・フラッシュ領域シーケンサの動作終了を確認します。

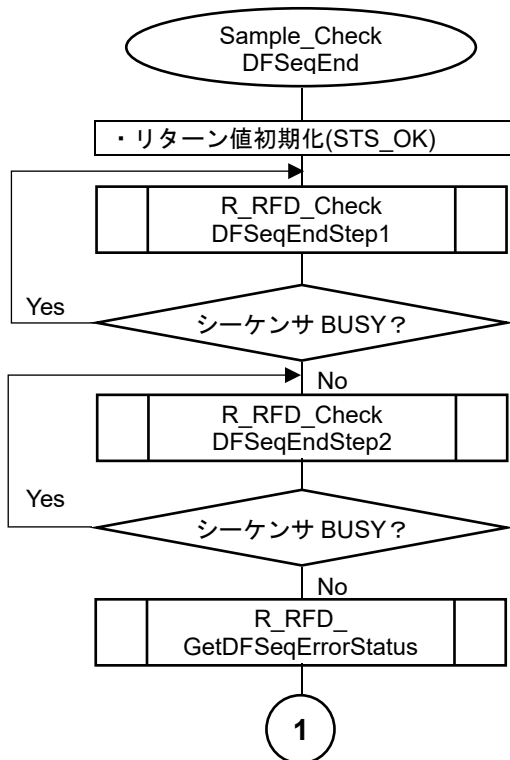


図 5-24 Sample_CheckDFSeqEnd 関数の処理実行フロー(1/2)

・実行結果を返します。

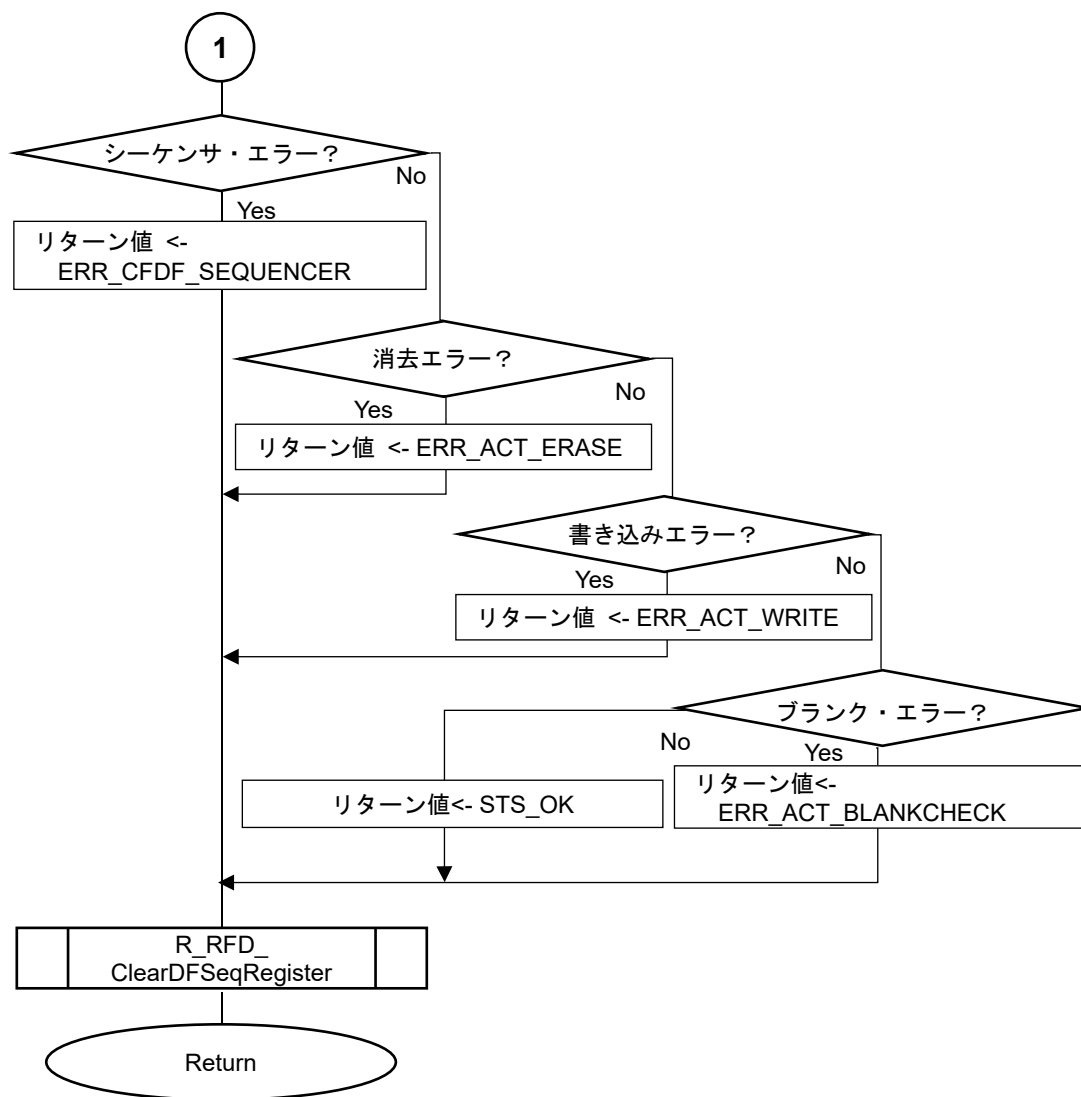


図 5-25 Sample_CheckDFSeqEnd 関数の処理実行フロー(2/2)

5.3.5.3 Sample_CheckExtraSeqEnd 関数

・起動したエクストラ領域シーケンサの動作終了を確認し、実行結果を返します。

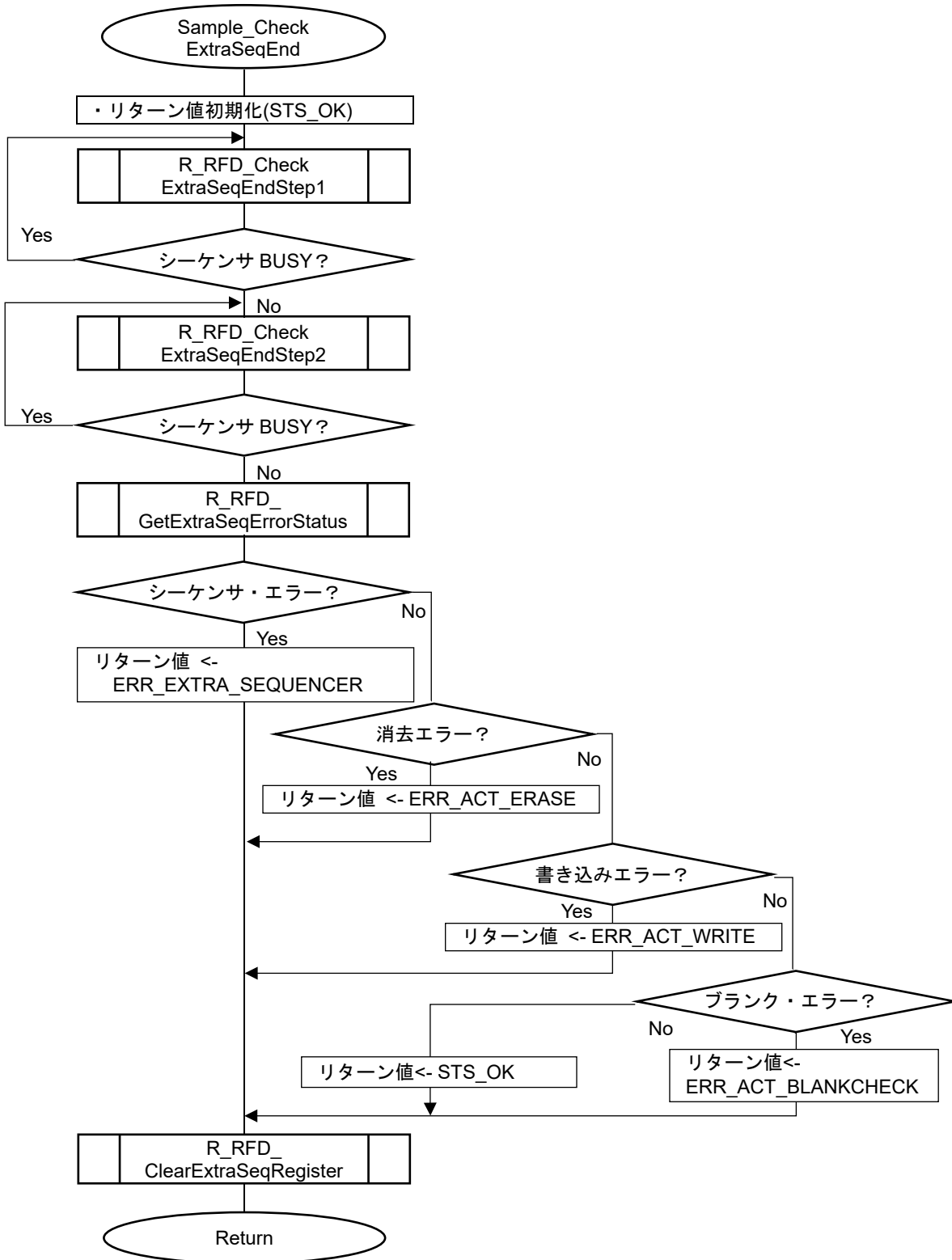


図 5-26 Sample_CheckExtraSeqEnd 関数の処理実行フロー

5.4 サンプル・プログラム関数仕様

この章では、RFD RL78 Type11 のサンプル・プログラム関数仕様について説明します。

RFD RL78 Type11 のサンプル・プログラムは、コード・フラッシュ領域、データ・フラッシュ領域、およびエクストラ領域を書き換える基本的な処理例を示しています。各フラッシュ領域を書き換えるアプリケーションを開発する上で、各サンプル・プログラム関数を参考にしていただくことができます。

開発されたアプリケーション・プログラムについては、お客様自身で必ず十分な動作確認を行ってください。

5.4.1 コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様

5.4.1.1 main

Information

Syntax	<code>int main(void);</code>	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	<code>int</code> <code>(e_sample_ret_t)</code>	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_PARAMETER : 0x10 [パラメータ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CONFIGURATION : 0x11 [初期設定エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー]
Description	コード・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.1.2 Sample_CodeFlashControl

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_CodeFlashControl (uint32_t i_u32_start_addr, uint16_t i_u16_write_data_length, uint8_t __near * inp_u08_write_data);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_start_addr	書き換え領域の先頭アドレス
	uint16_t i_u16_write_data_length	書き換えデータ・サイズ
	uint8_t __near * inp_u08_write_data	書き換えデータ・バッファのポインタ
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー]
Description	コード・フラッシュ・メモリの書き換え処理を実行 - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、ブランク・チェック、消去、書き込みの各コマンドを実行します。 - 非書き換えモードにおいて、書き込まれたデータを読み出し、正しく書かれたかを確認します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.2 データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様

5.4.2.1 main

Information

Syntax	int main(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	int (e_sample_ret_t)	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_PARAMETER : 0x10 [パラメータ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CONFIGURATION : 0x11 [初期設定エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー]
Description	データ・フラッシュ書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.2.2 Sample_DataFlashControl

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_DataFlashControl (uint32_t i_u32_start_addr, uint16_t i_u16_write_data_length, uint8_t __near * inp_u08_write_data);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint32_t i_u32_start_addr	書き換え領域の先頭アドレス
	uint16_t i_u16_write_data_length	書き換えデータ・サイズ
	uint8_t __near * inp_u08_write_data	書き換えデータ・バッファのポインタ
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー]
Description	データ・フラッシュ・メモリの書き換え処理を実行 - データ・フラッシュ・プログラミング・モードで、ブランク・チェック、消去、書き込みの各コマンドを実行します。 - 非書き換えモードにおいて、書き込まれたデータを読み出し、正しく書かれたかを確認します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。 本関数の最初にデータ・フラッシュのアクセスを許可し、データ・フラッシュの書き換え完了後にデータ・フラッシュのアクセスを禁止します。	
Remarks	-	

5.4.3 エクストラ領域書き換え制御サンプル・プログラム関数仕様

5.4.3.1 main

Information

Syntax	int main(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	int (e_sample_ret_t)	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_PARAMETER : 0x10 [パラメータ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CONFIGURATION : 0x11 [初期設定エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_SET_EXTRA_AREA : 0x33 [エクストラ領域コマンド設定エラー]
Description	エクストラ領域 (FSW 機能) 書き換え制御サンプル・プログラムのメイン処理	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.3.2 Sample_ExtraFSWControl

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_ExtraFSWControl (uint16_t i_u16_start_block_number, uint16_t i_u16_end_block_number, e_rfd_fsw_mode_t i_e_fsw_mode);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	uint16_t i_u16_start_block_number	スタート・ブロック番号 例:RL78/L23 では、Max.512Kbyte[0~255]
	uint16_t i_u16_end_block_number	エンド・ブロック番号+1 例:RL78/L23 では、Max.512Kbyte[1~256]
	e_rfd_fsw_mode_t i_e_fsw_mode	フラッシュ・シールド・ウィンドウ領域 R_RFD_ENUM_FSW_MODE_INSIDE : 0x00 [インサイド・シールド] R_RFD_ENUM_FSW_MODE_OUTSIDE : 0x01 [アウトサイド・シールド]
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_SET_EXTRA_AREA : 0x33 [エクストラ領域コマンド設定エラー]
Description	エクストラ領域 (FSW 機能) の書き換え処理を実行 - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、エクストラ領域書き込み (FSW のプログラミング) コマンドを実行します。 - 非書き換えモードにおいて、書き込まれたデータに該当する内蔵レジスタを読み出し、正しく書かれたかをチェックします。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.4 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラム関数仕様

5.4.4.1 main

Information

Syntax	int main(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	int (e_sample_ret_t)	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_PARAMETER : 0x10 [パラメータ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CONFIGURATION : 0x11 [初期設定エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_SET_EXTRA_AREA : 0x33 [エクストラ領域コマンド設定エラー]
Description	バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラムのメイン処理	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.4.2 Sample_BankProgrammingControl

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_BankProgrammingControl(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CHECK_WRITE_DATA : 0x13 [書き込みデータ確認エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_ERASE : 0x30 [消去コマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_WRITE : 0x31 [書き込みコマンド・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_BLANKCHECK : 0x32 [ブランク・チェック・コマンド・エラー]
Description	書き換えバンクの書き換え処理を実行 - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、ブランク・チェック、消去、書き込みの各コマンドを実行します。 - 非書き換えモードにおいて、書き込まれたデータを読み出し、正しく書かれたかを確認します。	
Preconditions	非書き換えモードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.4.3 Sample_BankSwapControl

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_BankSwapControl(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_MODE_MISMATCHED : 0x12 [モード不一致エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CMD_SET_EXTRA_AREA : 0x33 [エクストラ領域コマンド設定エラー]
Description	<p>エクストラ領域(ブート領域切り替えフラグ)の書き換え処理とバンク・スワップを実行</p> <ul style="list-style-type: none"> - コード・フラッシュ・プログラミング・モードで、エクストラ領域書き込み(ブート領域切り替えフラグ書き換え)コマンドを実行します。 - リセット後、もしくは即時にバンク・スワップを実行します。 <p>「リセット後にバンク・スワップを実行」する場合：</p> <p style="padding-left: 20px;">非書き換えモードにおいて、Reset を発生させ、バンク・スワップが実行され、入れ替わった起動バンクのプログラムを実行します。</p> <p>「アクティブ・バンク・スワップを実行」する場合：</p> <p style="padding-left: 20px;">非書き換えモードへ遷移した後、コード・フラッシュ・プログラミング・モードへ遷移、アクティブ・バンク・スワップが実行された後、非書き換えモードへ遷移し、入れ替わった起動バンクの指定プログラムへ分岐します。</p>	
Preconditions	<p>非書き換えモードで実行してください。</p> <p>高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。</p>	
Remarks	-	

5.4.5 共通サンプル・プログラムの関数仕様

5.4.5.1 Sample_CheckCFSeqEnd

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_CheckCFSeqEnd(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CFDI_SEQUENCER : 0x20 [コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_ERASE : 0x22 [消去動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_WRITE : 0x23 [書き込み動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_BLANKCHECK : 0x24 [ブランク・チェック動作エラー]
Description	コード・フラッシュ書き換え用コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

5.4.5.2 Sample_CheckDFSeqEnd

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_CheckDFSeqEnd(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_CFD_SEQENCER : 0x20 [コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_ERASE : 0x22 [消去動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_WRITE : 0x23 [書き込み動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_BLANKCHECK : 0x24 [ブランク・チェック動作エラー]
Description	データ・フラッシュ書き換え用コード/データ・フラッシュ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理	
Preconditions	データ・フラッシュ・プログラミング・モードで使用してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。 データ・フラッシュ書き換え実行時は、データ・フラッシュ・アクセス許可状態で使用してください(DFLEN = 1)。	
Remarks	-	

5.4.5.3 Sample_CheckExtraSeqEnd

Information

Syntax	R_RFD_FAR_FUNC e_sample_ret_t Sample_CheckExtraSeqEnd(void);	
Reentrancy	Non-Reentrant	
Parameters (IN)	N/A	
Parameters (IN/OUT)	N/A	
Parameters (OUT)	N/A	
Return Value	e_sample_ret_t	SAMPLE_ENUM_RET_STS_OK : 0x00 [正常終了] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_EXTRA_SEQUENCER : 0x21 [エクストラ・シーケンサ・エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_ERASE : 0x22 [消去動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_WRITE : 0x23 [書き込み動作エラー] SAMPLE_ENUM_RET_ERR_ACT_BLANKCHECK : 0x24 [ブランク・チェック動作エラー]
Description	エクストラ領域書き換え用エクストラ領域シーケンサ・コマンドの完了待ち処理	
Preconditions	コード・フラッシュ・プログラミング・モードで実行してください。 高速オンチップ・オシレータを起動している状態で実行してください。	
Remarks	-	

6 RFD RL78 Type11 サンプル・プロジェクトの作成

RFD RL78 Type11 は、コード・フラッシュ・メモリ領域とデータ・フラッシュ・メモリ領域の書き換えサンプル・プログラムが含まれます。RFD RL78 Type11 で使用できるコンパイラは、CC-RL コンパイラと IAR コンパイラと LLVM コンパイラです。それぞれのコンパイラに対応する統合開発環境を使用してサンプル・プロジェクトを作成することができます。

この項では、RL78/L23(R7F100LPL)用のサンプル・プログラムを例に説明しています。RL78/L23(R7F100LPL)以外を使用する場合、セクション設定のアドレスなどを、対象デバイスのユーザーズマニュアルを参照いただき、変更する必要があります

注意 対象の統合開発環境、およびコンパイラは、RL78/L23 を対象としたバージョンをご使用いただくことを前提としています。RL78/L23 が対象製品であることをご確認の上、ご使用ください。

6.1 CC-RL コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成

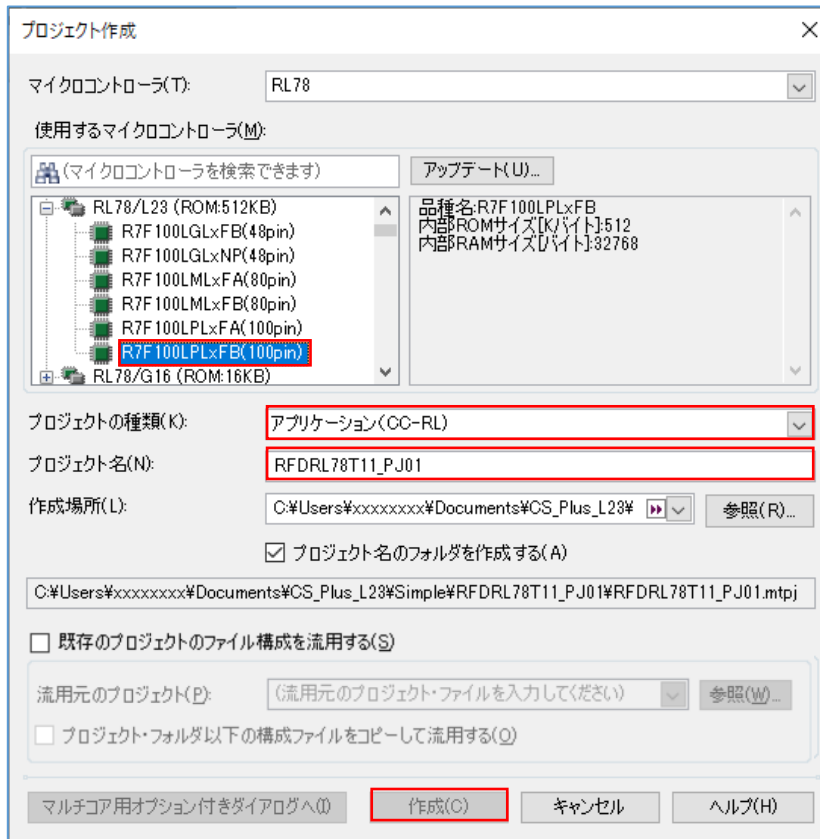
RENESAS 製 CC-RL コンパイラは、統合開発環境として CS+、および e² studio を使用して作成したプロジェクトへ RFD RL78 Type11 を登録し、ビルドすることができます。各統合開発環境を使用した場合のサンプル・プロジェクトの作成例を示します。CC-RL コンパイラ、および各統合開発環境を理解するため、それぞれのツール製品のユーザーズマニュアルを参照してください。

6.1.1 サンプル・プロジェクト作成例

(1) 統合開発環境 CS+を使用したサンプル・プロジェクト作成例

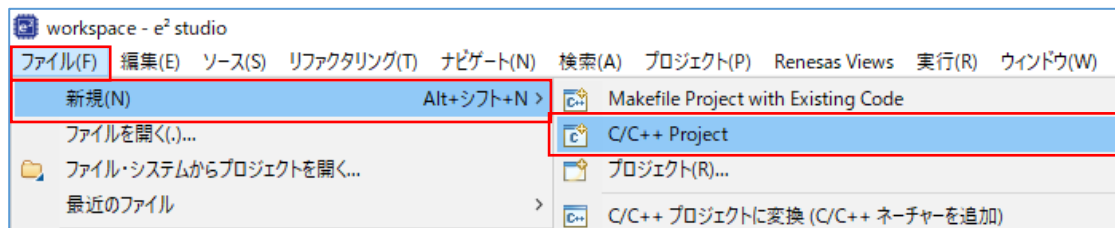
CS+を起動し、[プロジェクト]メニューの[新しいプロジェクトを作成]を選択し、以下に示す "プロジェクト作成"ウィンドウを起動します。

- ・[使用するマイクロコントローラ]は、"RL78/L23 (ROM: 512KB)" - "R7F100LPLxFB (100pin)"を選択します。
- ・[プロジェクトの種類]は、"アプリケーション(CC-RL)"を選択します。
- ・ここでの[プロジェクト名]は、仮に"RFDRL78T11_PJ01"とします。
- ・[作成]ボタンを押すと、新しいプロジェクトが作成されます。

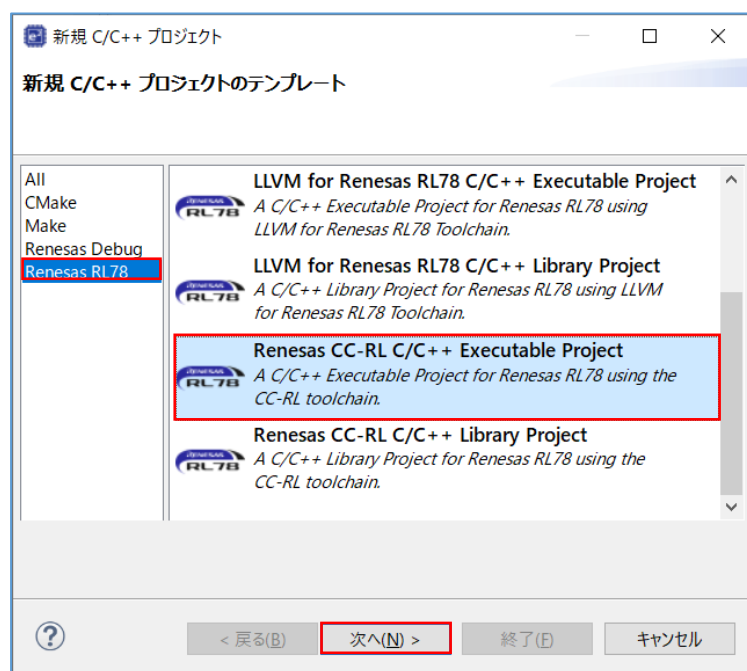


(2) 統合開発環境 e² studio を使用したサンプル・プロジェクト作成例

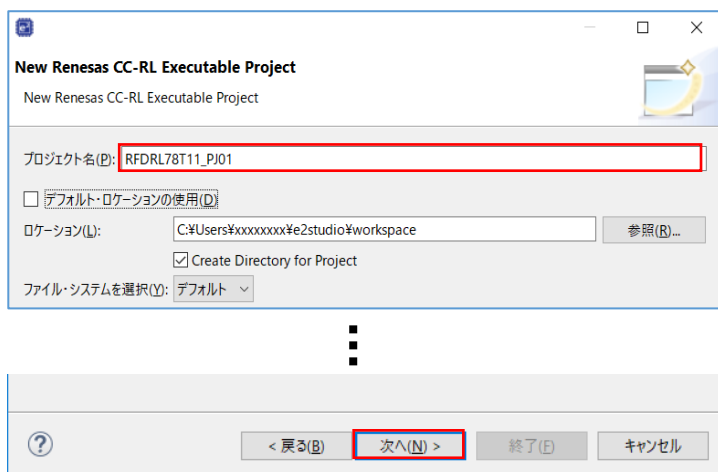
e² studio を起動し、[ファイル]メニューの[新規]から[C/C++ Project]を選択し、"新規 C/C++ プロジェクトのテンプレート"ウィンドウを起動します。



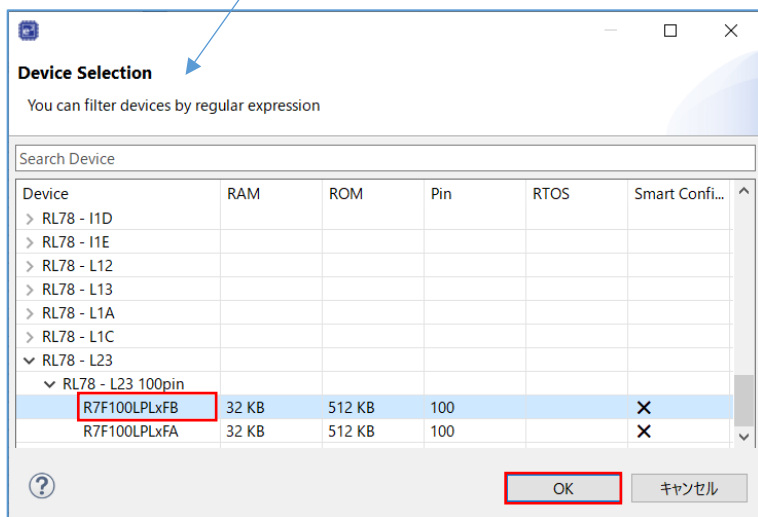
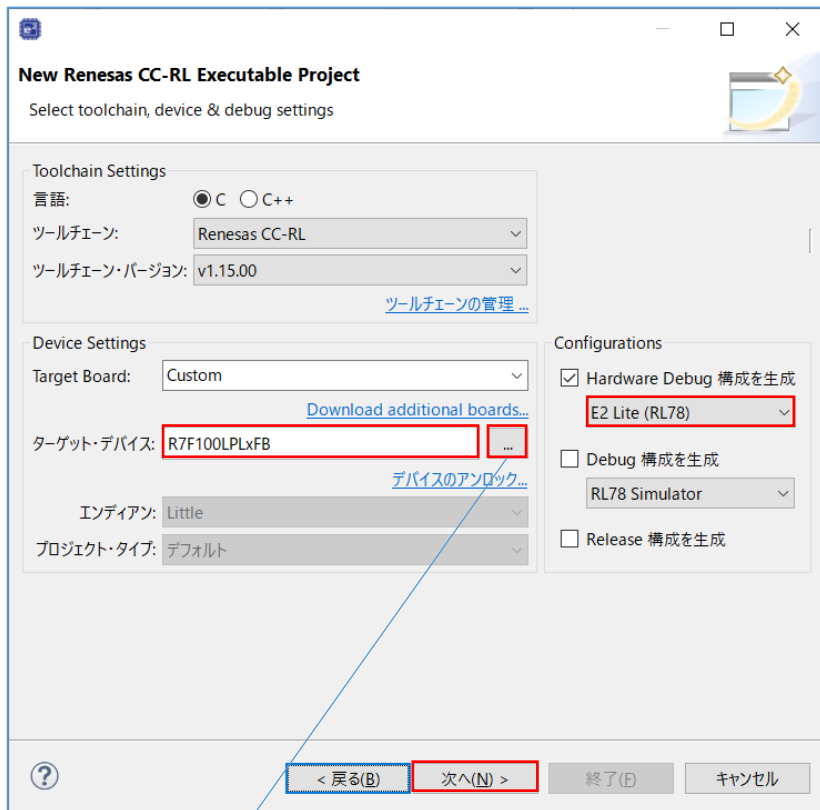
- ・ [Renesas RL78]を選択して表示した[Renesas CC-RL C/C++ Executable Project]を選択し、"次へ"ボタンを押します。



- ・ "New Renesas CC-RL Executable Project"ウィンドウで、プロジェクト名を入力して"次へ"ボタンを押します。(ここでは、仮に"RFDRL78T11_PJ01"とします。)



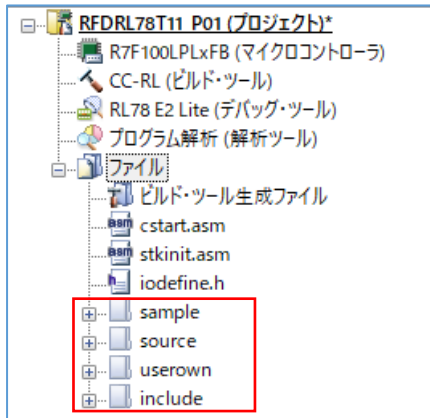
- ・ [Device Settings]の[ターゲット・デバイス]から、"RL78 - L23 100 pin" - "R7F100LPLxFB"を選択します。
 - ・ デバッグ・ツールに E2 Lite を選択し、オンチップ・デバッグを実施することを前提としています。
- [Configurations]で"Hardware Debug 構成を生成"にチェックが入った状態で、E2 Lite (RL78)を選択します。
- ・ [次へ]ボタンを押すと"Select Coding Assistant settings"ウィンドウが表示されるので、[終了]ボタンを押します。



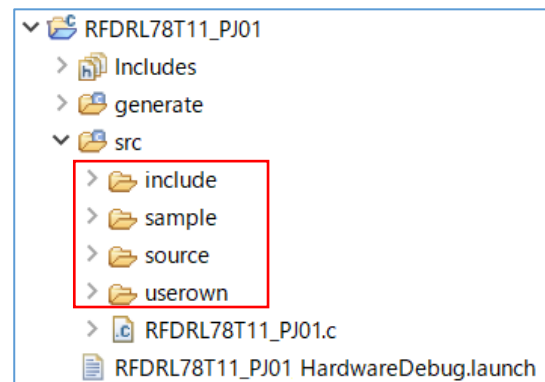
6.1.2 対象フォルダと対象ファイルの登録例

RFD RL78 Type11 を使用して、各領域[(1) コード・フラッシュ・メモリ、(2) データ・フラッシュ・メモリ、(3) エクストラ領域]を書き換える場合、及び(4)バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なファイルの登録例を記述します。RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダは、"include", "source", "userown", "sample"で、書き換える領域により各フォルダ内の対象ファイルを選択して登録します。

その他の手順として、"include", "source", "userown", "sample"の全てのフォルダを登録し、不要なファイルとフォルダを、[プロジェクトから外す] 機能(CS+)、[リソース構成] – [ビルドから除外...]機能(e² studio)により、対象から外すこともできます。



CS+の RFD RL78 Type11 登録時のツリー画面

e² studio RFD RL78 Type11 登録時のツリー画面

- ・統合開発環境で対象製品用に出力された最新の I/O ヘッダ・ファイルの登録

"iodefine.h"は、CS+、または e² studio が対象製品用に出力する I/O ヘッダ・ファイルを使用します。

統合開発環境が I/O ヘッダ・ファイル"iodefine.h"を出力するフォルダ：

- CS+ : [プロジェクト名]フォルダ
- e² studio : [プロジェクト名]/generate フォルダ

- ・統合開発環境の機能により自動的に追加されたファイルの除外

作成されたプロジェクトには、自動的に追加されるファイルがあります。これらと同様のファイルは、RFD RL78 Type11 の"sample"フォルダ内にも存在するため、ツリーで各ファイルを選択し、各統合開発環境の機能を使用して、プロジェクトから外します。

- CS+ではツリーでファイルをマウス右クリック、"プロジェクトから外す"機能で対象ファイルを除外します。

[プロジェクト名]フォルダ内の hdwinit.asm, main.c が対象。

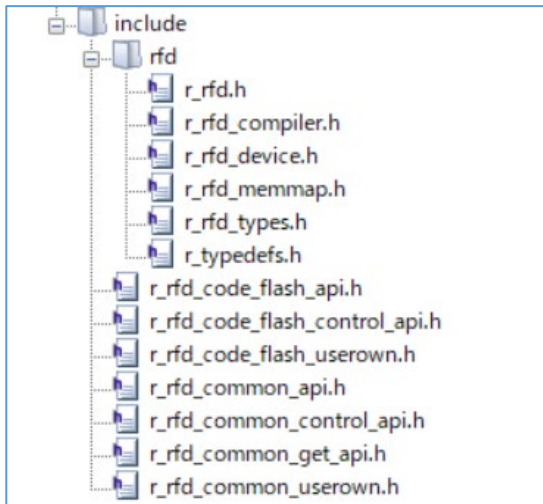
- e² studio ではツリーでファイルをマウス右クリック、"プロパティ"で表示された[設定]画面で、"ビルドからリソースを除外"にチェックを入れ、対象ファイル(対象フォルダ)を除外します。(フォルダから削除も可能)

[プロジェクト名]/generate フォルダ内の hdwinit.asm、および[プロジェクト名]/src フォルダ内の[プロジェクト名].c(ここでは"RFDRL78T11_PJ01.c")が対象。

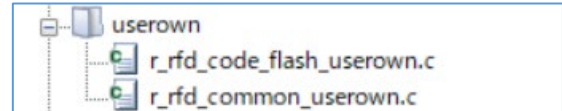
(1) コード・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

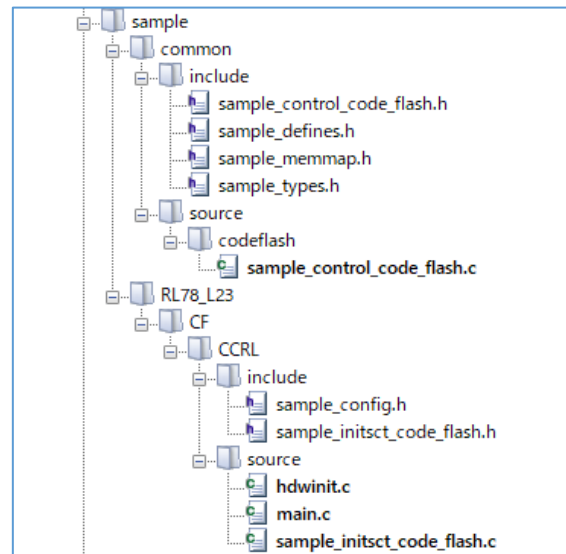
include フォルダ内



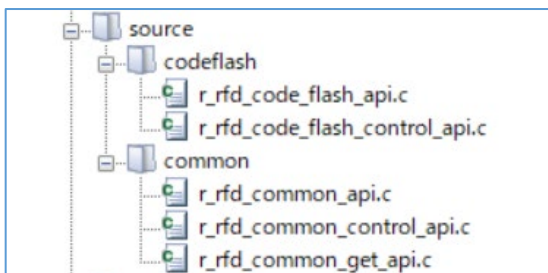
userown フォルダ内



sample フォルダ内



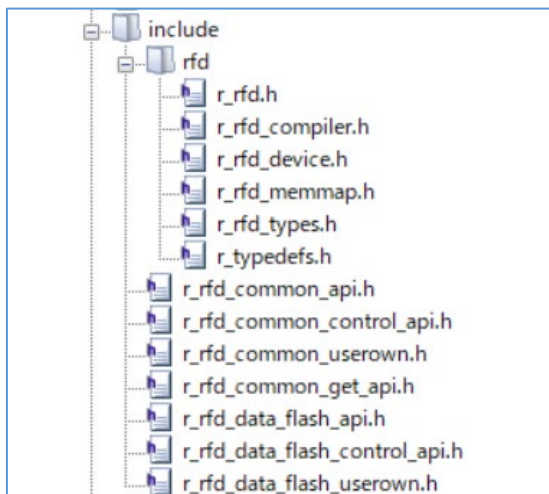
source フォルダ内



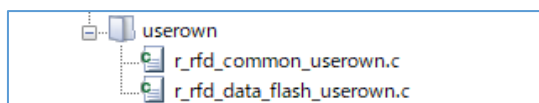
(2) データ・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

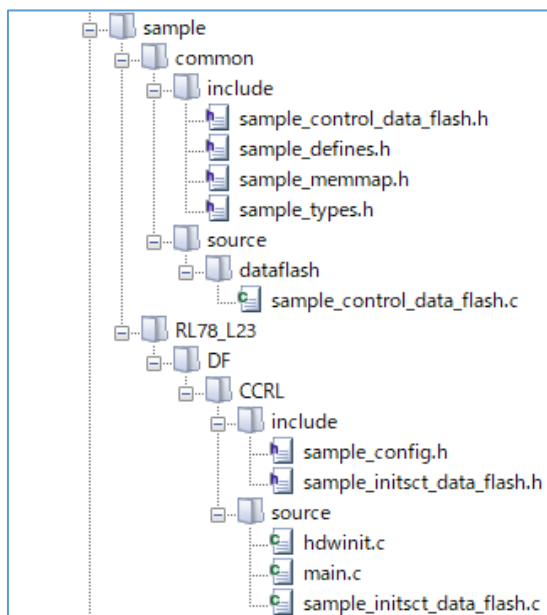
include フォルダ内



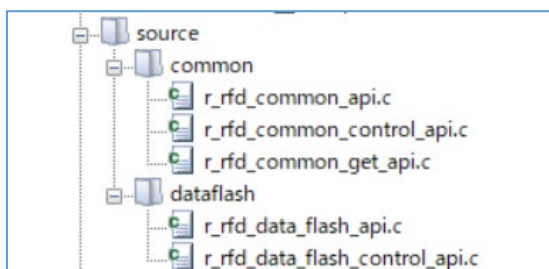
userown フォルダ内



sample フォルダ内



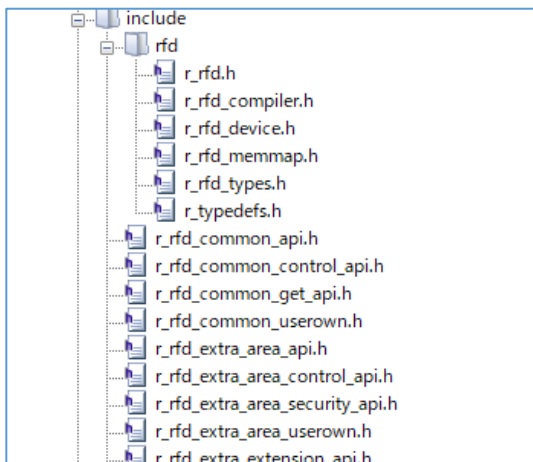
source フォルダ内



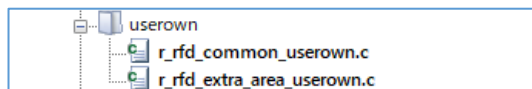
(3) エクストラ領域(FSW 設定)を書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

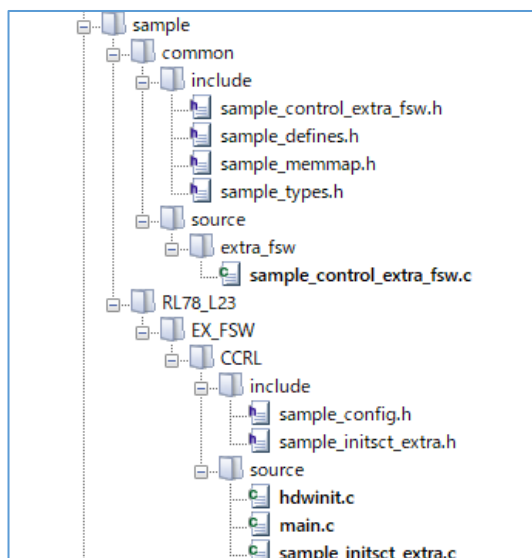
include フォルダ内



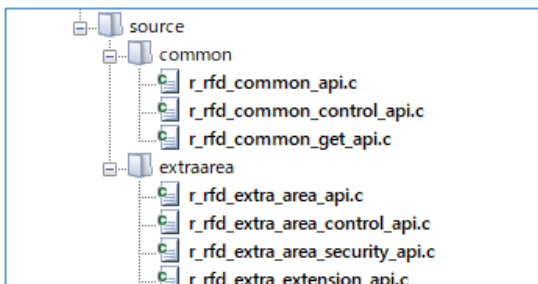
userown フォルダ内



sample フォルダ内



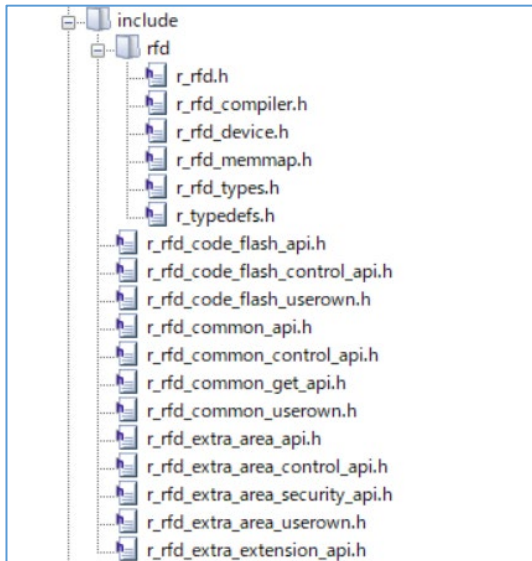
source フォルダ内



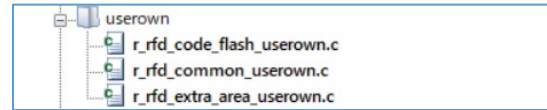
(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御を実行する場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

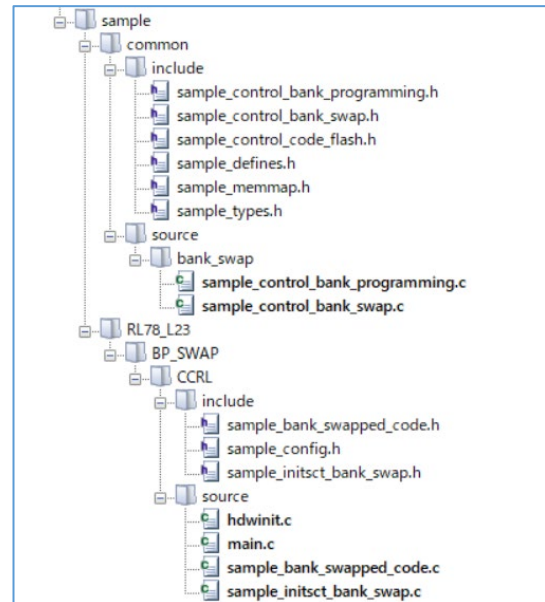
include フォルダ内



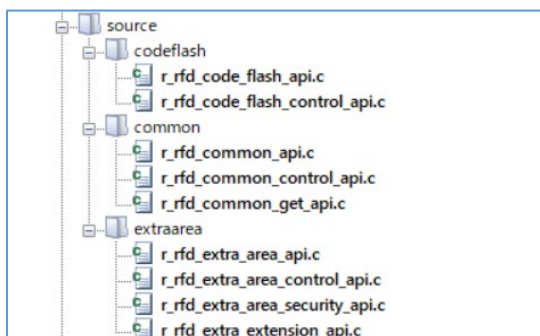
userown フォルダ内



sample フォルダ内



source フォルダ内



6.1.3 ビルド・ツールの設定

CC-RL コンパイラで RFD RL78 Type11 をビルドして実行するための各統合開発環境の設定を行います。

CS+ではツリーで"CC-RL(ビルド・ツール)"のマウス右クリックで"プロパティ"を選択、e²studio ではツリーでプロジェクト(ここでは"RFDRL78T11_PJ01")のマウス右クリックで"プロパティ"を選択することにより、表示された画面内のビルド・ツールの各設定を行います。

6.1.3.1 インクルード・パスの設定

・CS+でのインクルード・パスの設定は、"共通オプション"タブで設定(対象領域により変更)

- [よく使うオプション(コンパイル)] - [追加のインクルード・パス]で"パス編集"ウィンドウを表示して、インクルード・ファイルのパスを設定します。

(1)コード・フラッシュ・メモリ書き換え

```
include\rfd
include
sample\RL78_L23\CF\CCRL\include
sample\common\include
.
```

(2)データ・フラッシュ・メモリ書き換え

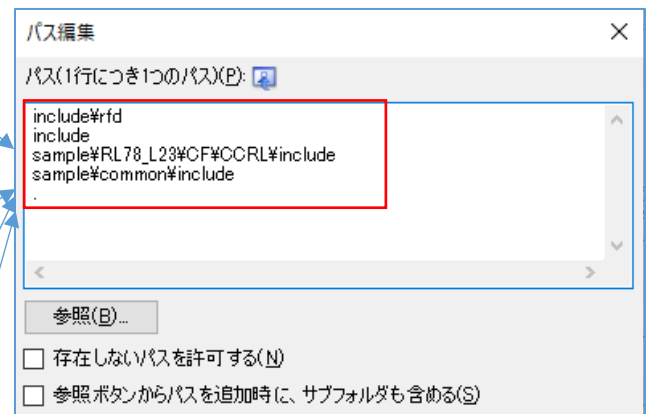
```
include\rfd
include
sample\RL78_L23\DF\CCRL\include
sample\common\include
.
```

(3)エクストラ領域(FSW)書き換え

```
include\rfd
include
sample\RL78_L23\EX_FSW\CCRL\include
sample\common\include
.
```

(4)バンク・プログラミング / バンク・スワッピング制御

```
include\rfd
include
sample\RL78_L23\BP_SWAP\CCRL\include
sample\common\include
.
```



- ・ e² studio でのインクルード・パスの設定は、"プロパティ"ウィンドウで設定 (対象領域により変更)
- "C/C++ビルド" [設定] - "Compiler" [ソース] で表示した画面でインクルード・ファイルのパスを設定します。

(1)コード・フラッシュ・メモリ書き換え

```

${ProjDirPath}\generate
${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\CF\CCRL\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```

(2)データ・フラッシュ・メモリ書き換え

```

${ProjDirPath}\generate
${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\DF\CCRL\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```

(3)エクストラ領域(FSW)書き換え

```

${ProjDirPath}\generate
${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\EX_FSW\CCRL\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

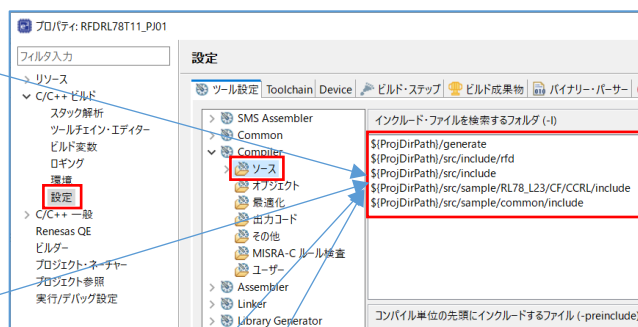
```

(4)バンク・プログラミング / バンク・スワッピング制御

```

${ProjDirPath}\generate
${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\BP_SWAP\CCRL\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```



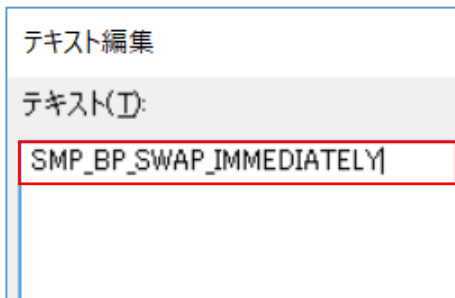
6.1.3.2 ユーザ定義マクロの設定(CC-RL コンパイラ)

バンク・スワップ制御サンプル・プログラム関数において、「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合は、ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")を設定する必要があります。「リセット後にバンク・スワップを実行」を選択する場合、この設定は不要です。

- ・ CS+で「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択するためのマクロを"共通オプション"タブで定義します。
- [よく使うオプション(コンパイル)] - [定義マクロ]で"テキスト編集"ウィンドウを表示して、以下のマクロを定義してください。

「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合に定義するマクロ：

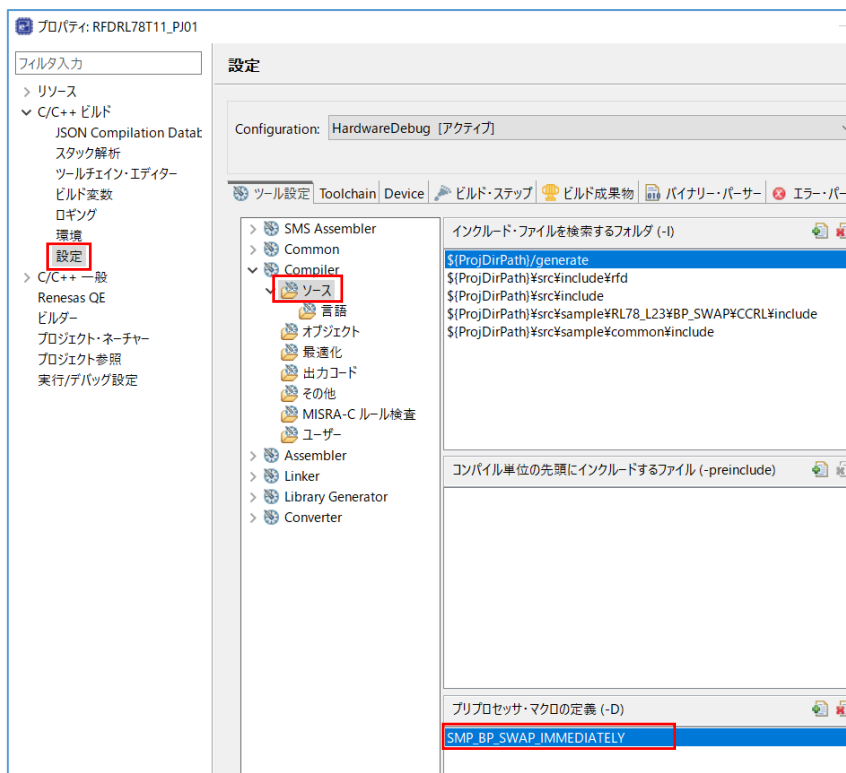
SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY



- ・ e² studio で「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択するためのマクロを"プロパティ"ウィンドウで定義します。
- "C/C++ビルド" [設定] - "Compiler" [ソース] で"プリプロセッサ・マクロの定義(-D)"の欄に以下のマクロを定義してください。

「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合に定義するマクロ：

SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY



6.1.3.3 デバイス項目の設定

・CS+でのデバイス項目の設定は、「リンク・オプション」タブで設定(各領域共通)

-[デバイス] 項目を設定します。

[オンチップ・デバッグの許可/禁止をリンク・オプション設定する]を「はい(-OCDBG)」に設定します。

注) オンチップ・デバッグを実施することを前提とした設定例です。

[オンチップ・デバッグ・オプション・バイト制御値]を「85」に設定します。(オンチップ・デバッグ動作許可の例)

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「オンチップ・デバッグ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、使用する設定値を書き込んでください。

[デバッグ・モニタ領域を設定する]を「はい(範囲指定) (-OCDBG_MONITOR=<アドレス範囲>)」に設定します。

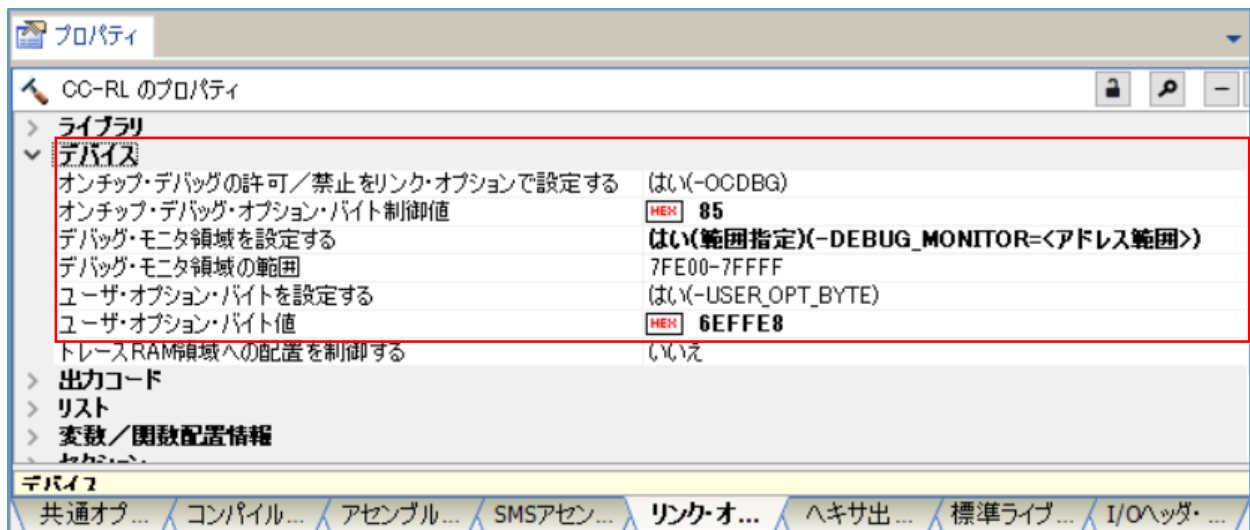
[デバッグ・モニタ領域の範囲]を「7FE00-7FFFF」に設定します。([RL78/L23 の例])

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オンチップ・デバッグ機能」の章の「ユーザ資源の確保」で「デバッグ用モニタ・プログラムが配置されるメモリ空間」をご確認いただき、使用する領域の範囲を書き込んでください。

[ユーザ・オプション・バイトを設定する]を「はい(-USER_OPT_BYTE)」に設定します。

[ユーザ・オプション・バイト値]を「6EFFE8」に設定します。(WDT 停止、LVD(reset モード)、32MHz [RL78/L23 の例])

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「ユーザ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、使用する設定値を書き込んでください。



- ・ e² studio でのデバイス項目の設定は、"プロパティ"ウィンドウで設定(各領域共通)
- "C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [デバイス] で表示した画面でデバイス項目を設定します。

[OCD モニタのメモリ領域を確保する(-debug_monitor)]をチェックします。

注) オンチップ・デバッグを実施することを前提とした設定例です。

[メモリ領域(-debug_monitor=<start address>-<end address>)]を"7FE00-7FFFF"に設定します。([RL78/L23 の例])

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オンチップ・デバッグ機能」の章の「デバッグ用モニタ・プログラムが配置されるメモリ空間」をご確認いただき、使用する領域の範囲を書き込んでください。

[オプション・バイト領域のユーザ・オプション・バイト値を設定する(-user_opt_byte)] をチェックします。

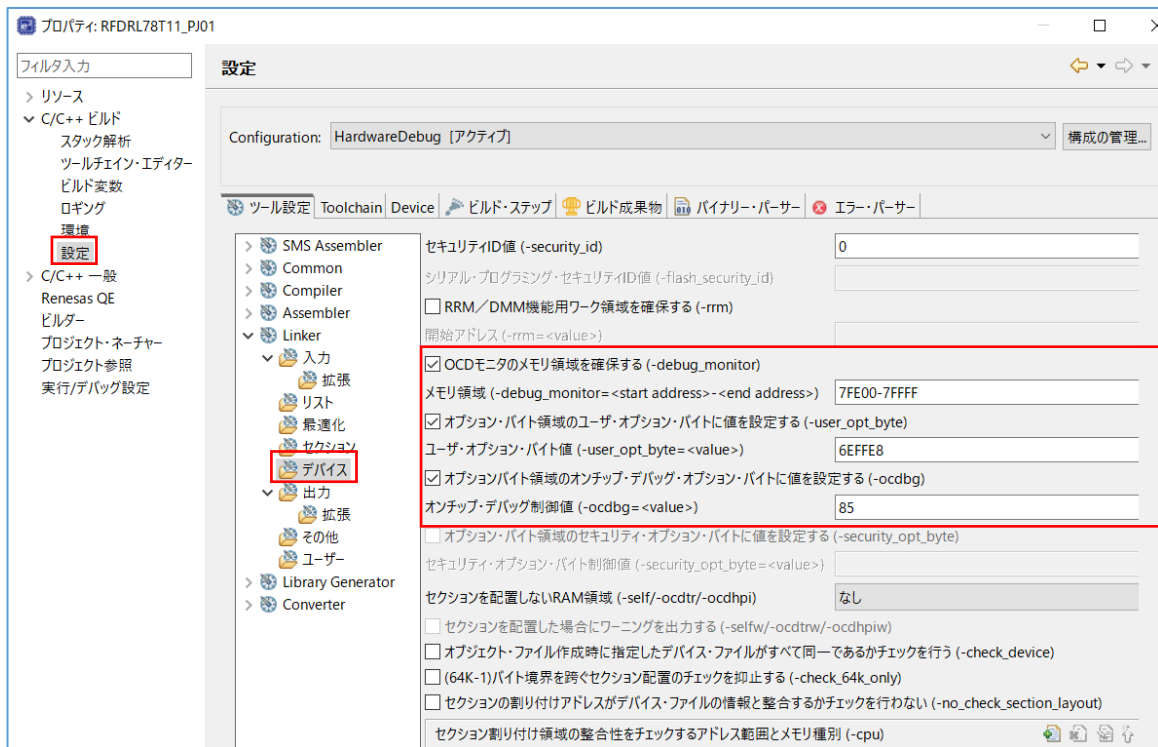
[ユーザ・オプション・バイト値(-user_opt_byte=<value>)]を"6EFFE8"に設定します。(WDT 停止、LVD(reset モード)、32MHz [RL78/L23 の例])

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「ユーザ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、使用する設定値を書き込んでください。

[オプション・バイト領域のオンチップ・デバッグ・オプション・バイトに値を設定する(-ocdbg)] をチェックします。注) オンチップ・デバッグを実施することを前提とした設定例です。

[オンチップ・デバッグ制御値(-ocdbg=<value>)]を"85"に設定します。(オンチップ・デバッグ動作許可の例)

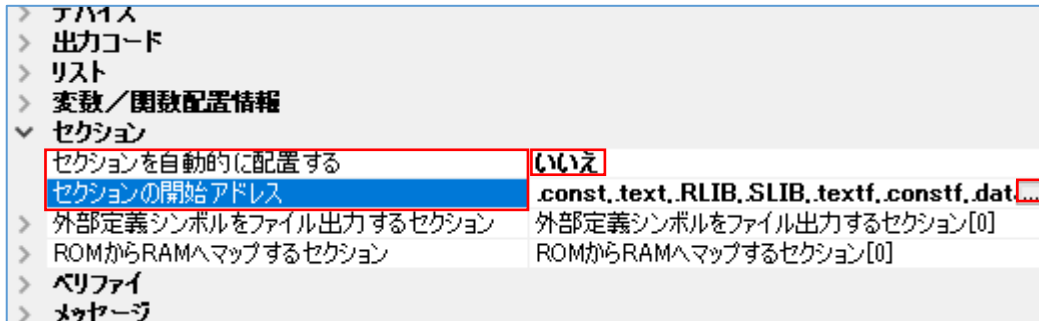
注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「オンチップ・デバッグ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、使用する設定値を書き込んでください。



6.1.3.4 セクション項目の設定

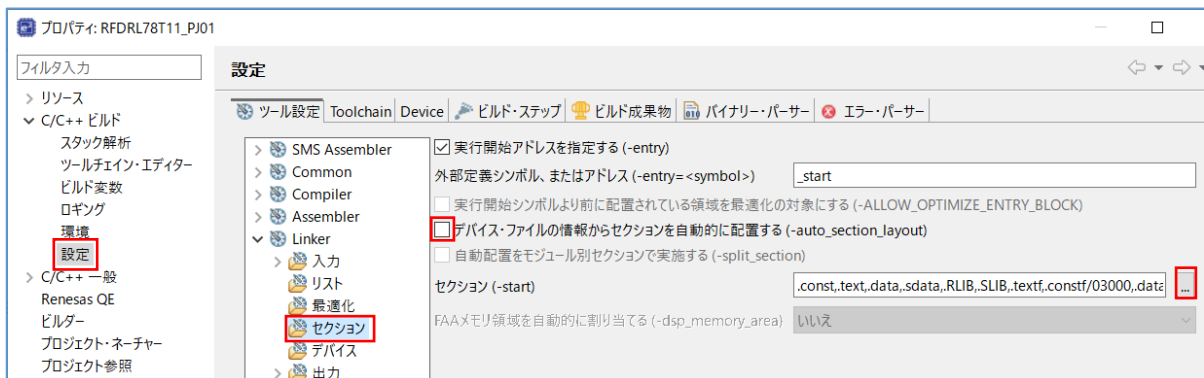
- ・CS+でのセクション項目の設定は、"リンク・オプション"タブで設定(各領域共通)
- [セクション] 項目を設定します。

[セクションを自動的に配置する]を一度"いいえ"に設定すると[セクションの開始アドレス]にセクションが表示されるようになり、表示された最も右の"..."ボタンで、"セクション設定"画面を表示します。



- ・e² studio でのセクション項目の設定は、"プロパティ"ウィンドウで設定(各領域共通)
- "C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [セクション] で表示した画面でセクション項目を設定します。

[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]のチェックを一度外します。ここで、[セクション(-start)]の最も右の"..."ボタンで、"セクション設定"画面を表示します。



- ・ CS+、e² studio のセクション設定操作

先頭アドレスに"0x03000"を設定します。

プログラム領域(コード・フラッシュ・メモリ)と RAM 領域に、RFD RL78 Type11 内の"#pragma section"で定義されたセクションを追加します。各セクションの詳細は「2.3.1 RFD RL78 Type11 使用時のセクション」を参照してください。

※本説明では、[コンパイル・オプション]の[メモリ・モデル]がミディアム・モデル(R7F100LPL での"自動選択"と同じ)であることを前提としています。CC-RL の#pragma section における各プログラムのセクション名は、"__far"の属性で"セクション名+_f"となり、ROM から RAM へマップするセクション名は、"セクション名+_fR"となります。また、"スモール・モデル"を選択した場合の各プログラムのセクション名については CC-RL のユーザーズマニュアルを参照してください。

(1) コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションの追加

- ・CS+でのコード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加

コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション設定"画面で追加します。

プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f

RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_CF_fR, SMP_CF_fR

アドレス	セクション
0x03000	const
	.text
	.RLIB
	.SLIB
	.textf
	.constf
	.data
	.sdata
	.init_array
	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_CF_f
	SMP_CF_f
0xF7F00	.dataR
	.bss
	RFD_DATA_nR
	RFD_CF_fR
	SMP_CF_fR
0xFFE20	.sdataR
	.sbss

追加セクション

RFD_DATA_n

RFD_CMN_f

RFD_CF_f

SMP_CF_f

RFD_DATA_nR

RFD_CF_fR

SMP_CF_fR

"OK"ボタン押下後、[セクションを自動的に配置する]を"はい"に戻して下さい。

リスト	変数/関数配置情報
セクション	
セクションを自動的に配置する	<input checked="" type="checkbox"/> (はい) (-AUTO_SECTION_LAYOUT)
自動配置をモジュール別セクションで実施する	<input type="checkbox"/> いいえ
セクションの開始アドレス	.const, .text, .RLIB, .SLIB, .textf, .constf, .data, .sdata, RFD_DATA_n
外部定義シンボルをファイル出力するセクション	外部定義シンボルをファイル出力するセクション[0]
ROMからRAMへマップするセクション	ROMからRAMへマップするセクション[2]

[ROM から RAM へマップするセクション]の最も右の"..."ボタンで、"テキスト編集"画面を表示して、ROM から RAM へマップするセクションを追加します。

ROM から RAM へマップするセクション

.data=.dataR

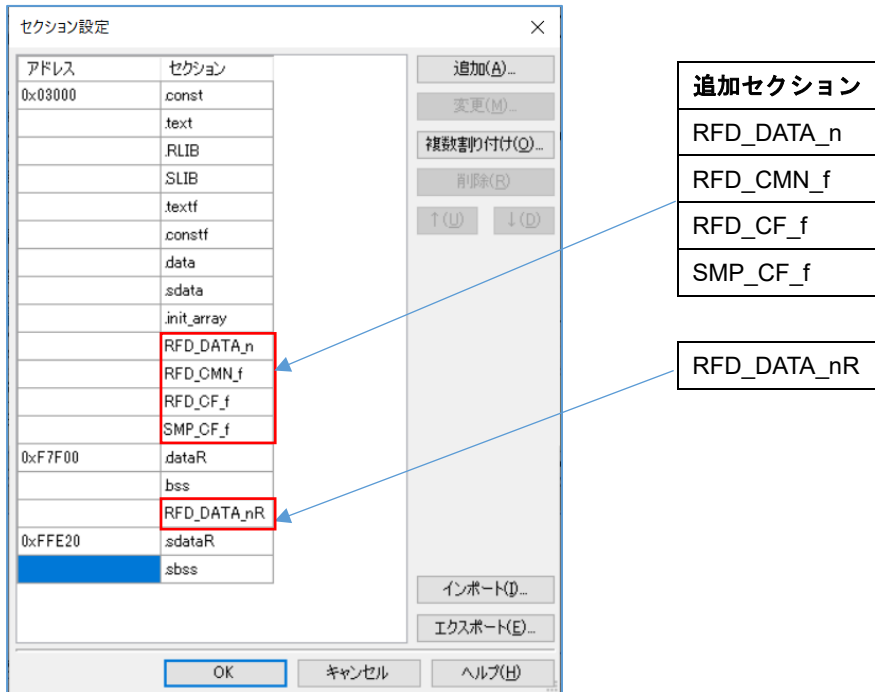
.sdata=.sdataR

RFD_DATA_n=RFD_DATA_nR

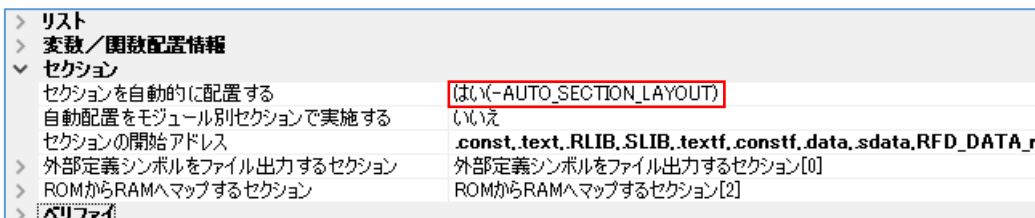
RFD_CF_f=RFD_CF_fR

SMP_CF_f=SMP_CF_fR

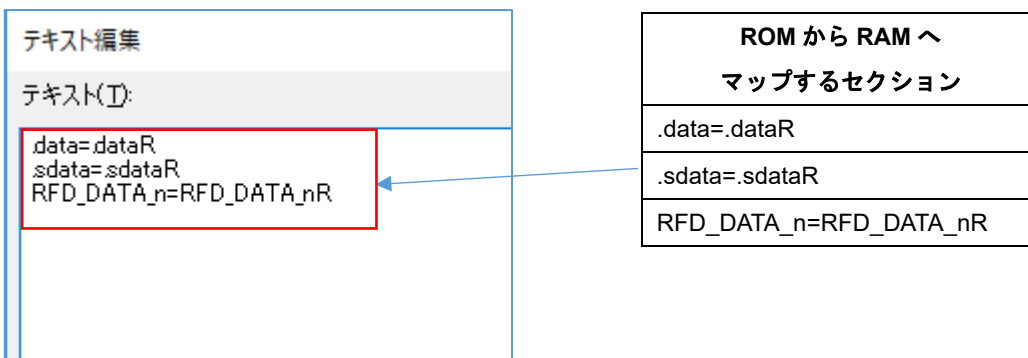
- ・CS+でのコード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加(バンク・プログラミング)
コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション設定"画面で追加します。
プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f
RAM へ追加 : RFD_DATA_nR



"OK"ボタン押下後、[セクションを自動的に配置する]を"はい"に戻して下さい。



[ROM から RAM へマップするセクション]の最も右の"..."ボタンで、"テキスト編集"画面を表示して、ROM から RAM へマップするセクションを追加します。

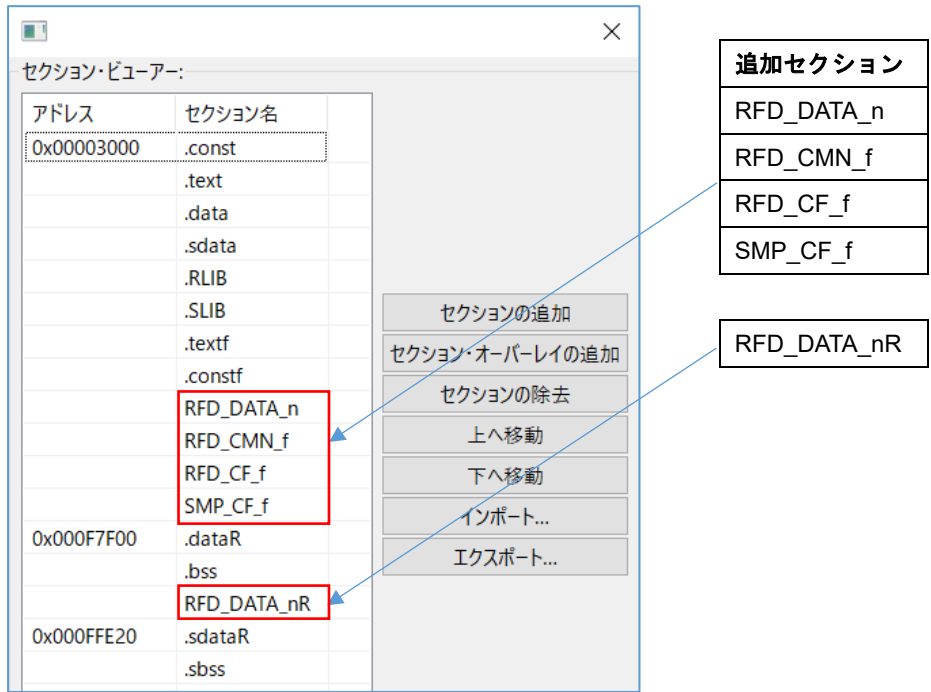


- ・ e² studio でのコード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加
- コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション・ビューアー"で追加します。
- プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f
- RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_CF_fR, SMP_CF_fR

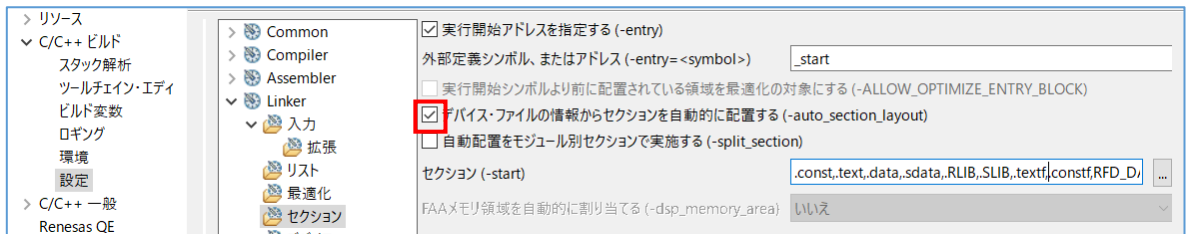
"OK"ボタン押下後、[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]を
チェックして下さい。

"C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [出力] で表示した画面で[ROM から RAM へマップするセクション(-rom)]を
設定します。

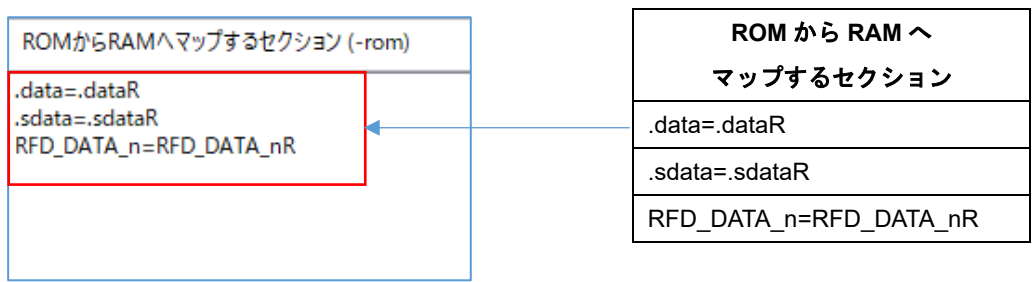
- ・ e² studio でのコード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加(バンク・プログラミング)
コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション・ビューアー"で追加します。
プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f
RAM へ追加 : RFD_DATA_nR



"OK"ボタン押下後、[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]を
チェックして下さい。



"C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [出力] で表示した画面で[ROM から RAM へマップするセクション(-rom)]を
設定します。



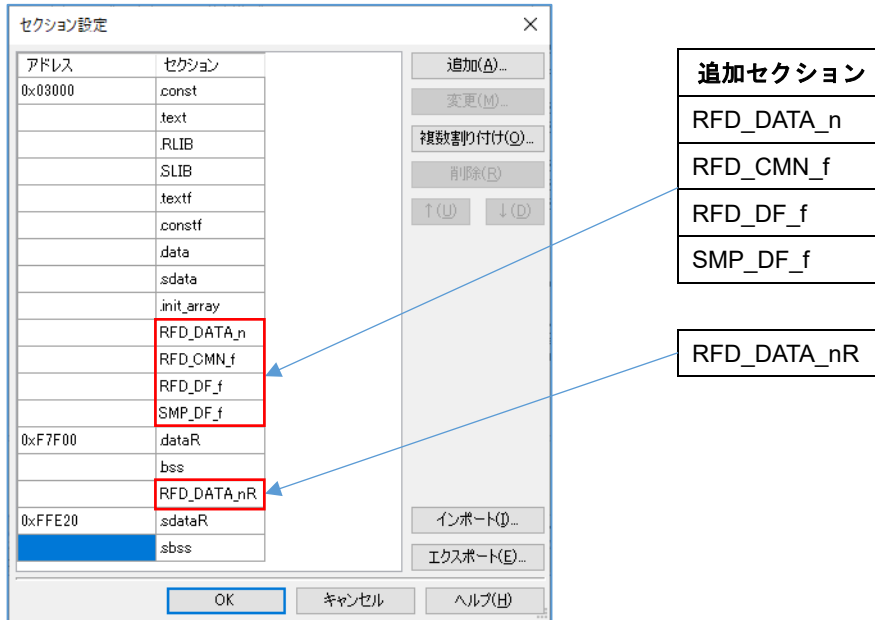
(2) データ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションの追加

- ・CS+でのデータ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加

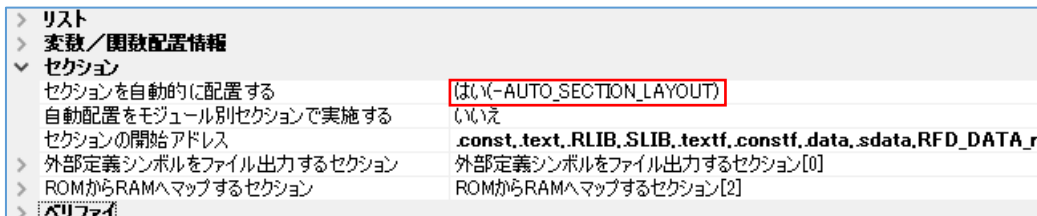
データ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション設定"画面で追加します。

プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_DF_f, SMP_DF_f

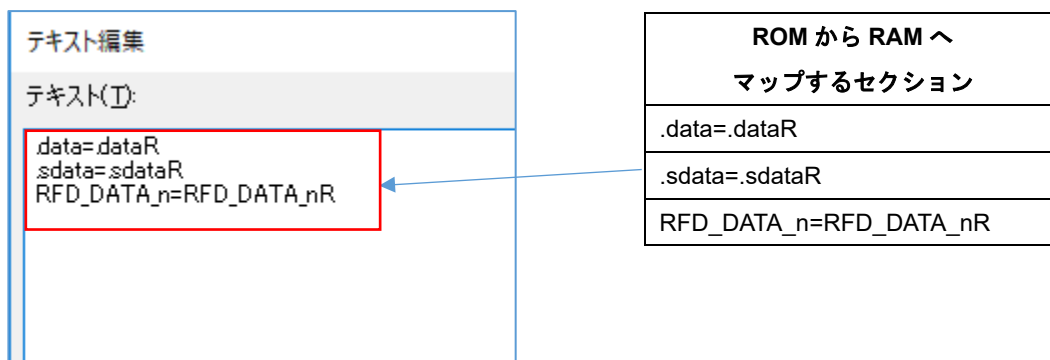
RAM へ追加 : RFD_DATA_nR



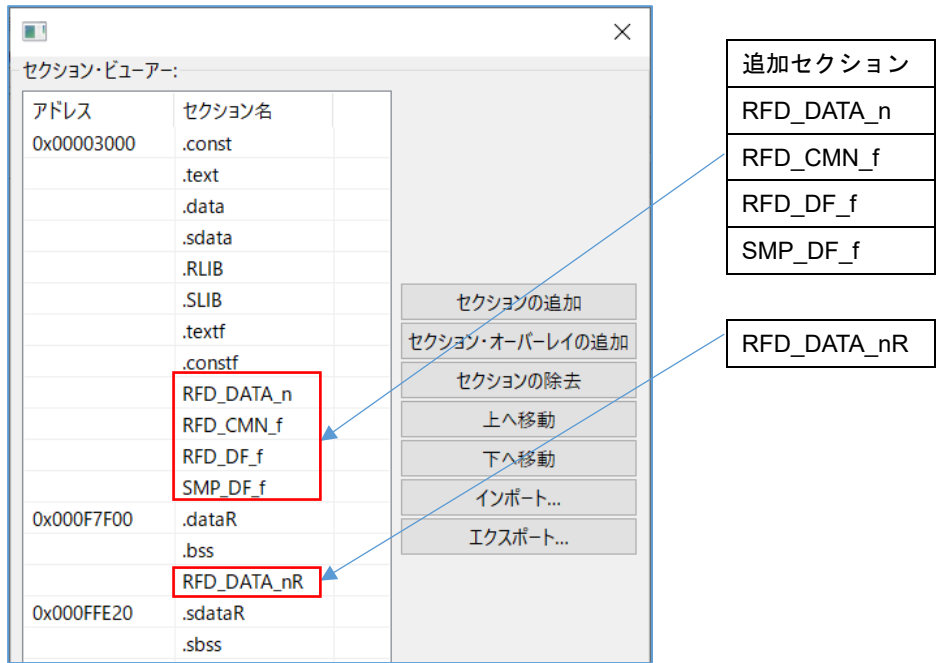
"OK"ボタン押下後、[セクションを自動的に配置する]を"はい"に戻して下さい。



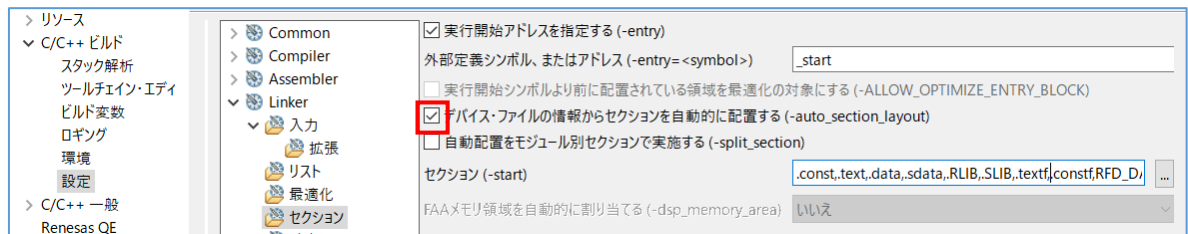
[ROM から RAM へマップするセクション]の最も右の "... "ボタンで、"テキスト編集"画面を表示して、ROM から RAM へマップするセクションを追加します。



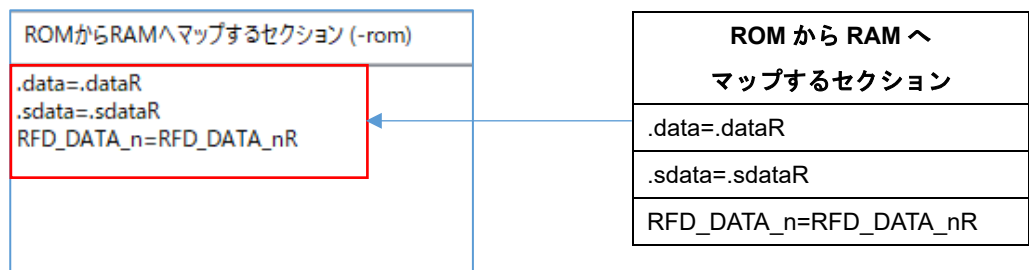
- ・ e² studio でのデータ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクション追加
- データ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションを"セクション・ビューアー"で追加します。
- プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_DF_f, SMP_DF_f
- RAM へ追加 : RFD_DATA_nR



"OK"ボタン押下後、[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]をチェックして下さい。



"C/C++ビルド" [設定] - "Linker" [出力] で表示した画面で[ROM から RAM へマップするセクション(-rom)]を設定します。



(3) エクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクションの追加

- ・ CS+でのエクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクションの追加

エクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクションを"セクション設定"画面で追加します。

プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_EX_f, SMP_EX_f

RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_EX_fR, SMP_EX_fR

アドレス	セクション
0x03000	.const
	.text
	.RLIB
	.SLIB
	.textf
	.constf
	.data
	.sdata
	.init_array
	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_EX_f
	SMP_EX_f
0xF7F00	.dataR
	.bss
	RFD_DATA_nR
	RFD_EX_fR
	SMP_EX_fR
0xFFE20	.sdataR
	.sbss

追加セクション

RFD_DATA_n

RFD_CMN_f

RFD_EX_f

SMP_EX_f

RFD_DATA_nR

RFD_EX_fR

SMP_EX_fR

"OK"ボタン押下後、[セクションを自動的に配置する]を"はい"に戻して下さい。

> リスト

> 変数/関数配置情報

> **セクション**

- セクションを自動的に配置する はい(-AUTO_SECTION_LAYOUT)
- 自動配置をモジュール別セクションで実施する いいえ
- セクションの開始アドレス .const, .text, .RLIB, .SLIB, .textf, .constf, .data, .sdata, RFD_DATA_n
- > 外部定義シンボルをファイル出力するセクション 外部定義シンボルをファイル出力するセクション[0]
- > ROMからRAMへマップするセクション ROMからRAMへマップするセクション[2]

> **バリエーション**

[ROM から RAM へマップするセクション]の最も右の"..."ボタンで、"テキスト編集"画面を表示して、ROM から RAM へマップするセクションを追加します。

ROM から RAM へマップするセクション

.data=.dataR

.sdata=.sdataR

RFD_DATA_n=RFD_DATA_nR

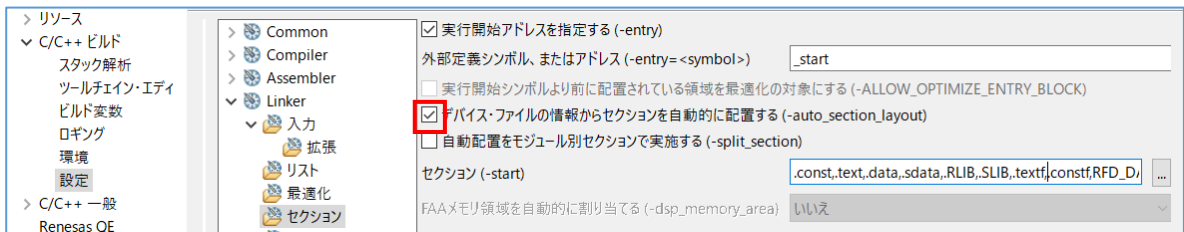
RFD_EX_f=RFD_EX_fR

SMP_EX_f=SMP_EX_fR

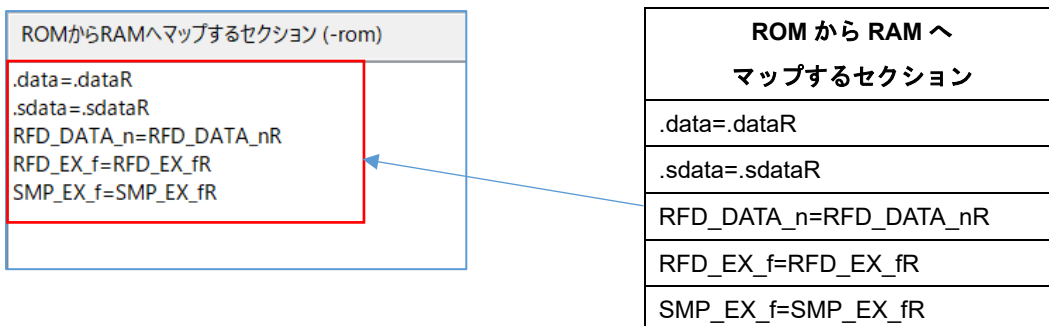
- ・ e² studio でのエクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクション追加
- エクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクションを"セクション・ビューア"で追加します。
- プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_EX_f, SMP_EX_f
- RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_EX_fR, SMP_EX_fR



"OK"ボタン押下後、[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]をチェックして下さい。



"C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [出力] で表示した画面で[ROM から RAM へマップするセクション(-rom)]を設定します。



(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なセクションの追加

・CS+でのバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なセクションの追加

バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なセクションを"セクション設定"画面で追加します。

プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f, RFD_EX_f, SMP_EX_f

バンク・スワップ後のプログラム・コード : SMP_BPS_f (本サンプルでは、ROM の 0x6000 に配置)

RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_EX_fR, SMP_EX_fR

"OK"ボタン押下後、[セクションを自動的に配置する]を"はい"に戻して下さい。

[ROM から RAM へマップするセクション]の最も右の"..."ボタンで、"テキスト編集"画面を表示して、ROM から RAM へマップするセクションを追加します。

- ・ e² studio でのバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なセクション追加
- バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なセクションを"セクション・ビューアー"で追加します。
- プログラム領域へ追加 : RFD_DATA_n, RFD_CMN_f, RFD_CF_f, SMP_CF_f, RFD_EX_f, SMP_EX_f
- バンク・スワップ後のプログラム・コード : SMP_BPS_f (本サンプルでは、ROM の 0x6000 に配置)
- RAM へ追加 : RFD_DATA_nR, RFD_EX_fR, SMP_EX_fR

"OK"ボタン押下後、[デバイス・ファイルの情報からセクションを自動的に配置する(-auto_section_layout)]を
チェックして下さい。

"C/C++ビルド" [設定] - "Linker" [出力] で表示した画面で[ROM から RAM へマップするセクション(-rom)]を
設定します。

6.1.4 デバッグ・ツールの設定

ここでは、デバッグ・ツールに E2 Lite を選択してオンチップ・デバッグを行う場合のターゲット・ボードとの接続の設定について説明します。その他のデバッグ・ツール設定の詳細については、各統合開発環境のユーザーズマニュアルを参照してご確認ください。

CS+では、ツリーで"RL78 シミュレータ(ビルドツール)"[初期設定]でマウス右クリックし、表示された"使用するデバッグ・ツール"で"RL78 E2 Lite"を選択します。この時、"RL78 E2 Lite のプロパティ"画面が表示されます。ここで各タブを選択して、デバッグ・ツール設定を行います。

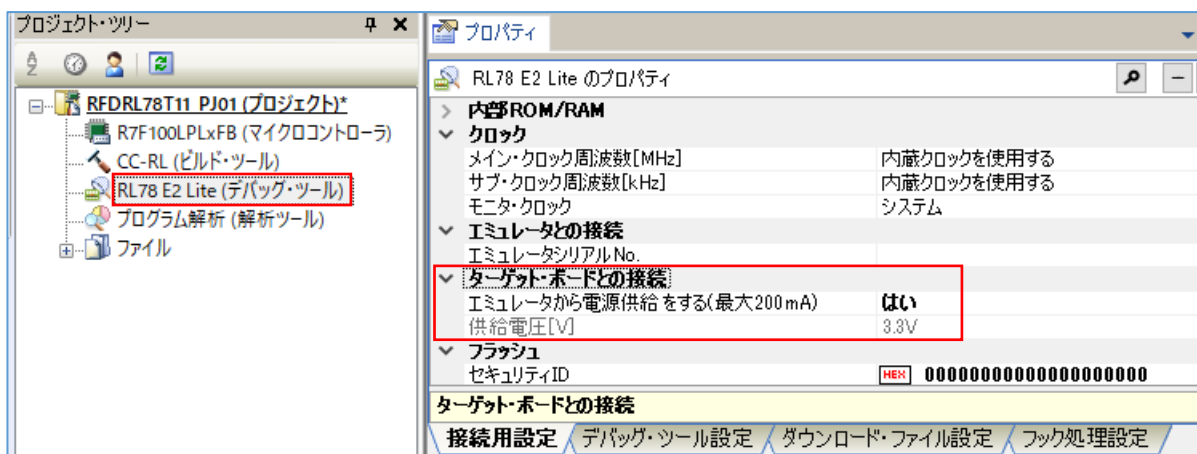
e²studio では、ツリーで対象プロジェクトをマウス右クリックし、[デバッグ]-[デバッグの構成]を選択して表示された"デバッグ構成"画面のツリーで、[Renesas GDB Hardware Debugging]の対象プロジェクト(ここでは、"RFDRL78T11_PJ01 HardwareDebug")を選択し、表示された"Debugger"タブで、デバッグ・ツール設定を行います。

注) ターゲット・ボードに他の電源が供給されている場合や電源供給容量が不足するなど、E2 Lite を含むエミュレータからターゲット・ボードへの電源供給ができない場合があります。必ず、対象デバイス用のエミュレータのユーザーズマニュアル、およびユーザーズマニュアル別冊(RL78 接続時の注意事項)をご参照の上、ご使用ください。

6.1.4.1 ターゲット・ボードとの接続の設定

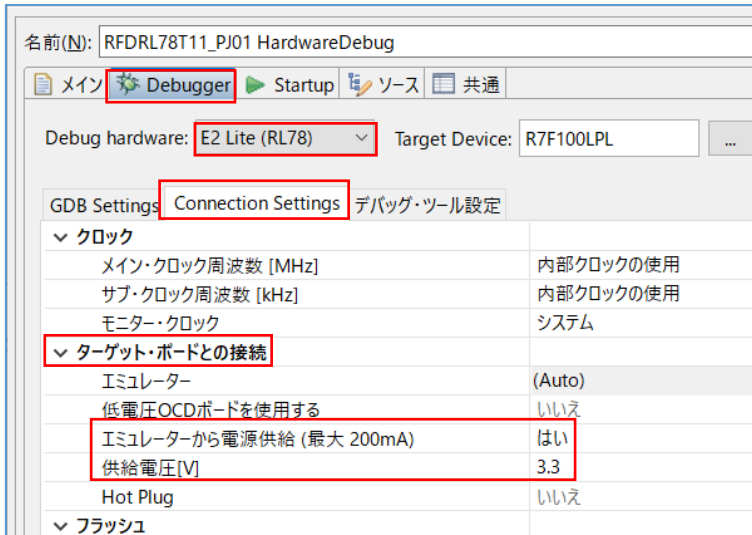
- ・ CS+でのターゲット・ボードとの接続(E2 Lite 経由)は、"接続用設定"タブで設定(各領域共通)
- [ターゲット・ボードとの接続] 項目

[エミュレータから電源供給をする(最大 200mA)]を"はい"に設定することで、E2 Lite からターゲット・ボードに電源供給(供給電圧:3.3V)することが可能です。



- ・ e² studio でのターゲット・ボードとの接続 (E2 Lite 経由) の設定は、"Connection Setting" タブで設定 (各領域共通)
- [ターゲット・ボードとの接続] 項目

[エミュレータから電源供給 (最大 200mA)] を "はい" に設定することで、E2 Lite からターゲット・ボードに電源供給 (供給電圧: 3.3V) することが可能です。



6.2 IAR コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成

IAR コンパイラは、統合開発環境として IAR Embedded Workbench を使用して作成したプロジェクトへ RFD RL78 Type11 を登録し、ビルドすることができます。IAR Embedded Workbench を使用した場合のサンプル・プロジェクトの作成例を示します。IAR コンパイラ、および統合開発環境を理解するため、IAR Systems のツール製品のユーザーズマニュアルを参照してください。

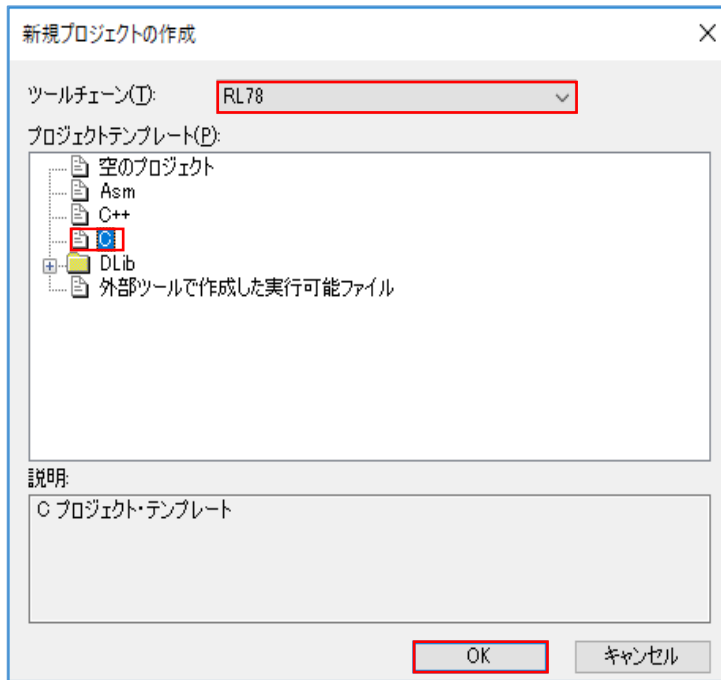
IAR Systems、IAR Embedded Workbench、C-SPY、IAR および IAR システムズのロゴタイプ は、IAR Systems AB が所有権を有する商標または登録商標です。

6.2.1 サンプル・プロジェクト作成例

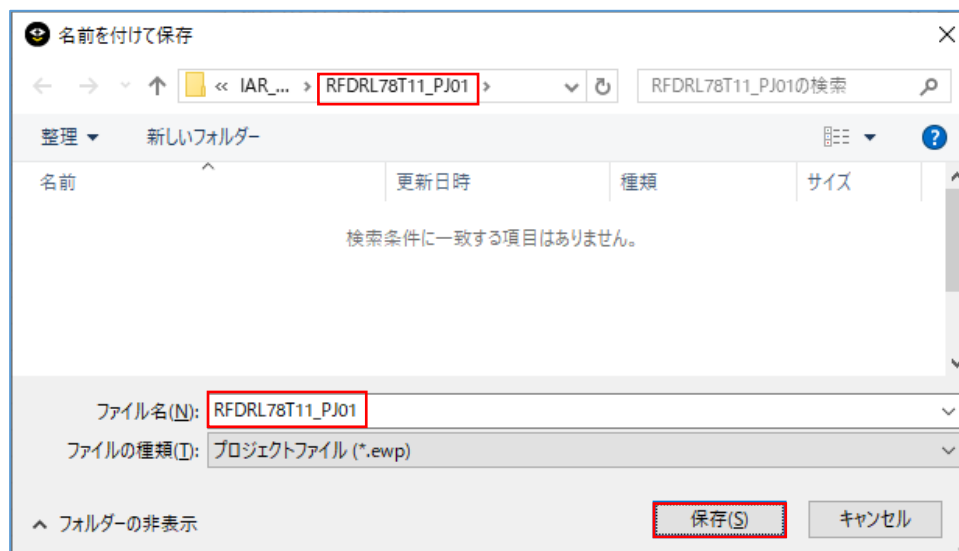
(1) 統合開発環境 IAR Embedded Workbench を使用したサンプル・プロジェクト作成例

IAR Embedded Workbench を起動し、[プロジェクト]メニューの[新規プロジェクトの作成]を選択し、以下に示す "新規プロジェクトの作成"ウィンドウを起動します。

- ・[プロジェクトテンプレート]で、"C"を選択します。
- ・[OK]ボタンを押すと、[名前を付けて保存]ウィンドウが表示されます。

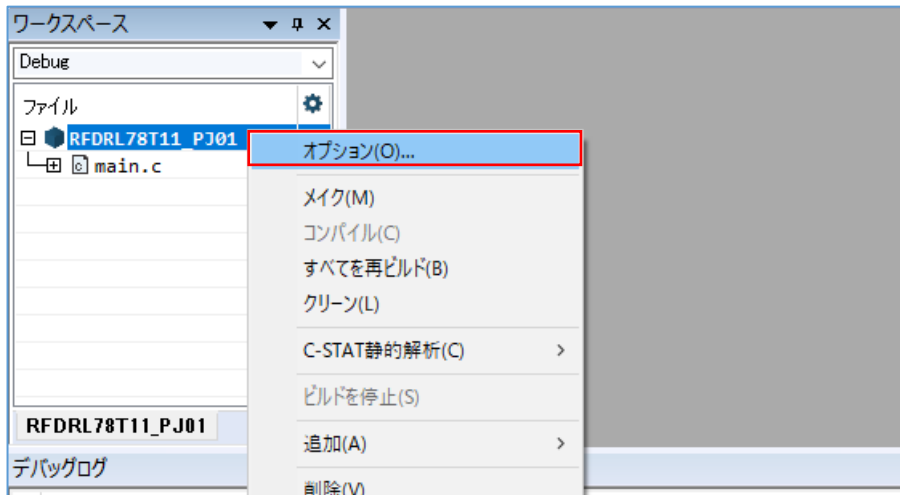



- ・ここでは、仮に"RFDRL78T11_PJ01"フォルダを作成し、フォルダ内へ移動します。
- ・ここでの[プロジェクト名]は、仮に"RFDRL78T11_PJ01"として保存します。

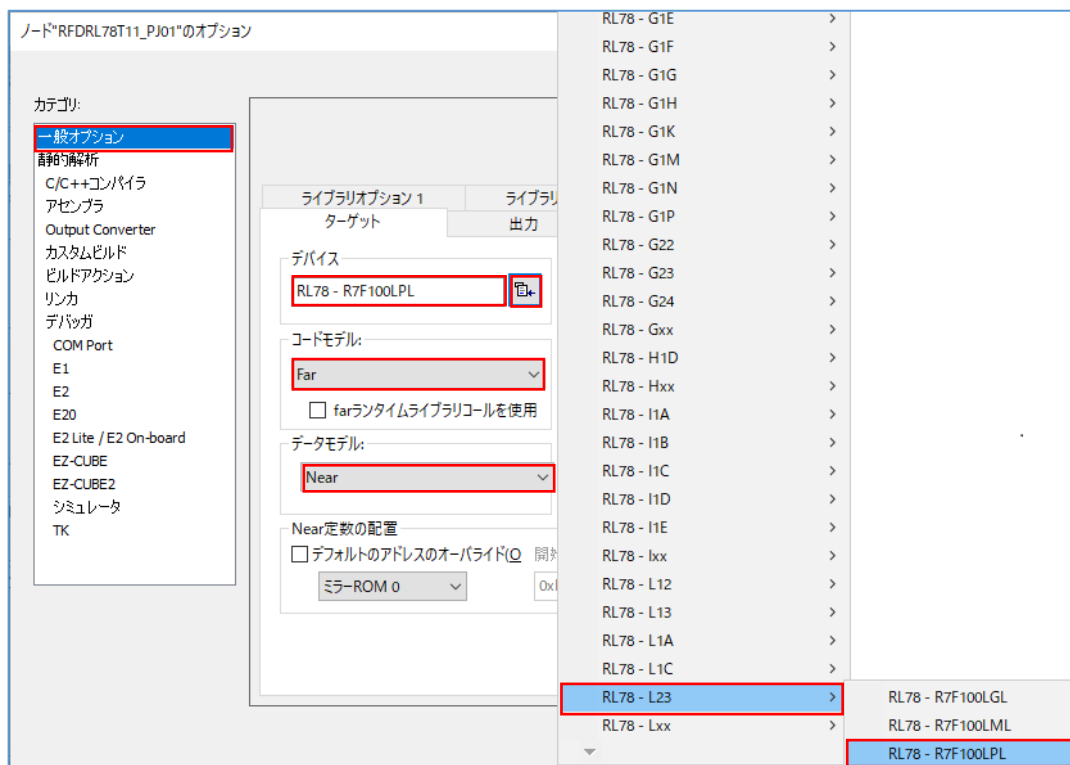


(2) 対象デバイスの選択

IAR Embedded Workbench ではツリーでプロジェクト(ここでは"RFDRL78T11_PJ01 - Debug")のマウス右クリックで"オプション"を選択することにより、"オプション"の画面を表示します。



- ・"オプション"の画面内の[一般オプション]-[ターゲット]タブの各設定を行います。
- [デバイス]の  "ボタンで"RL78 - L23" - "RL78 - R7F100LPL"を選択します。
- ここでは、[コードモデル]に"Far"を選択し、[データモデル]に"Near"を選択します。



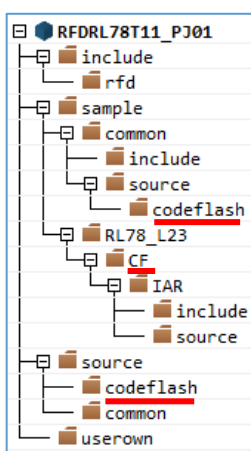
6.2.2 対象フォルダと対象ファイルの登録例

RFD RL78 Type11 を使用して、各領域[(1) コード・フラッシュ・メモリ、(2) データ・フラッシュ・メモリ、(3) エキストラ領域]を書き換える場合、及び(4)バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なファイルの登録例を記述します。RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダは、"include", "source", "userown", "sample"で、書き換える領域により各フォルダ内の対象ファイルを選択して登録します。

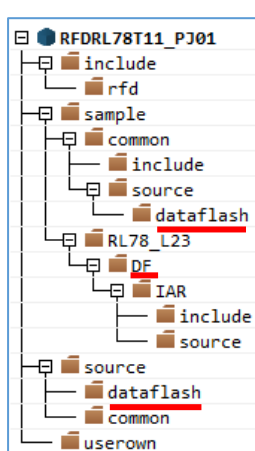
ここでは、IAR Embedded Workbench でフォルダを登録する代わりに、[プロジェクト]メニューの[グループの追加]を選択し、RFD RL78 Type11 のフォルダ構成と同様のグループを追加してファイルを登録する例を示します。

(グループを作らずに登録することも可能です。)

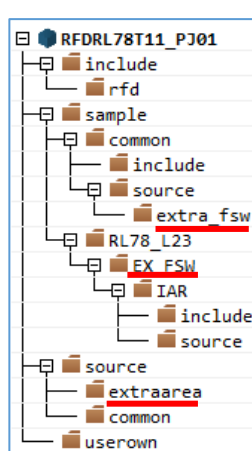
各領域[(1)コード・フラッシュ・メモリ、(2)データ・フラッシュ・メモリ、(3)エキストラ領域、(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御]のグループを追加した例を示します。(領域ごとに異なるグループ名を"■"で示しています。)



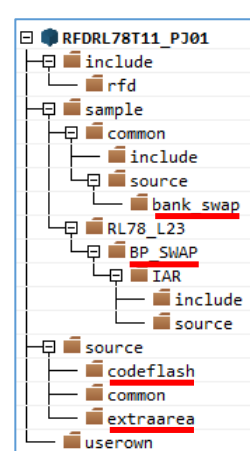
(1) コード・フラッシュ・メモリ



(2) データ・フラッシュ・メモリ



(3) エキストラ領域



(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御

・統合開発環境の機能により自動的に追加されたファイルの除外

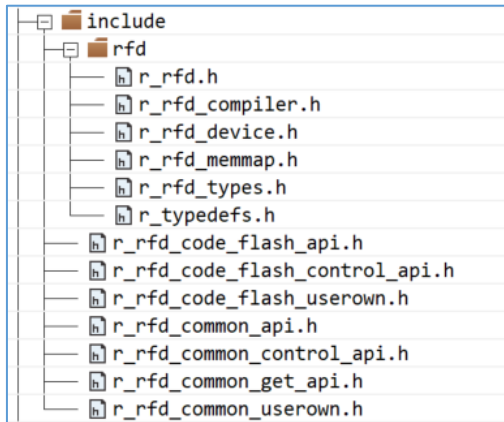
作成されたプロジェクトには、自動的に追加されるファイルがあります。これらと同様のファイルは、RFD RL78 Type11 の"sample"フォルダ内にも存在するため、ツリーで各ファイルを選択し、各統合開発環境の機能を使用して、プロジェクトから外します。

- IAR Embedded Workbench では、ツリーでファイルをマウス右クリック、「削除」機能で対象の"main.c"ファイルを除外します。

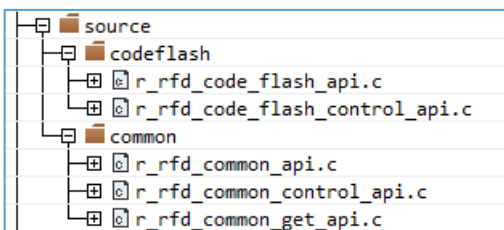
(1) コード・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象グループと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各グループ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

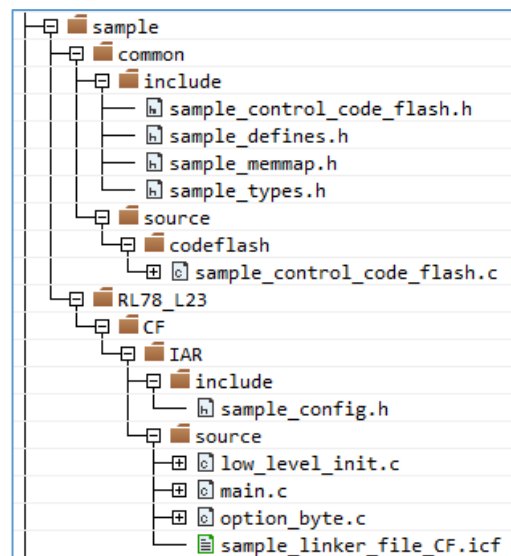
include グループ内



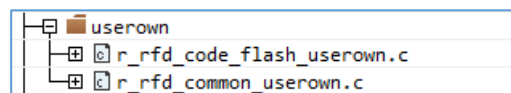
source グループ内



sample グループ内



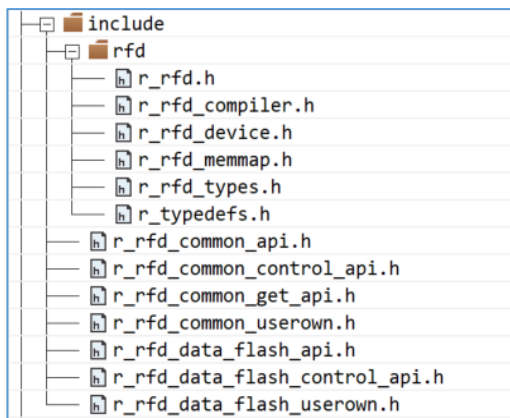
userown グループ内



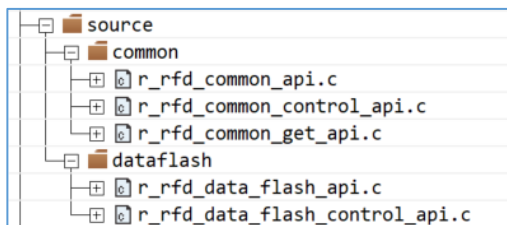
(2) データ・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象グループと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各グループ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

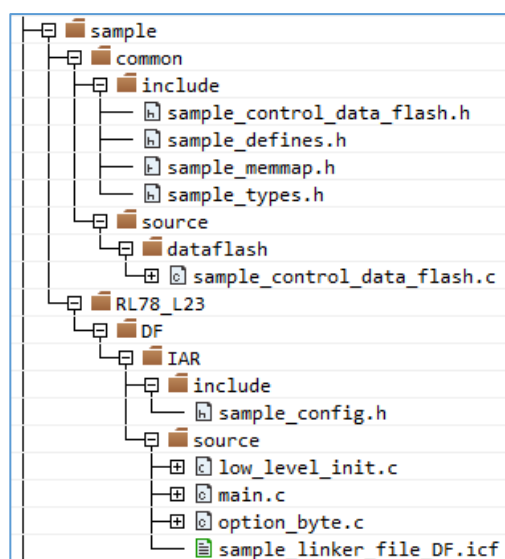
include グループ内



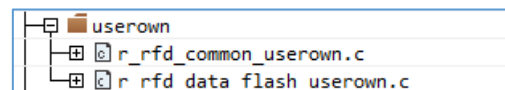
source グループ内



sample グループ内



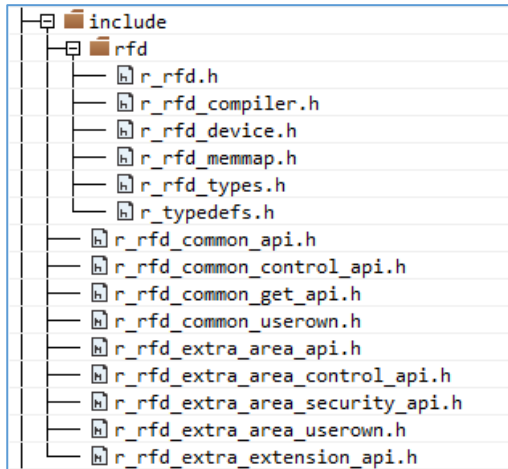
userown グループ内



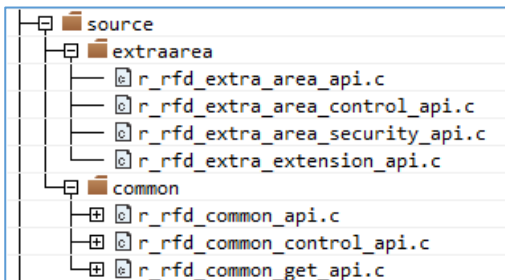
(3) エクストラ領域(FSW 設定)を書き換える場合の対象グループと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各グループ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを以下に示します。

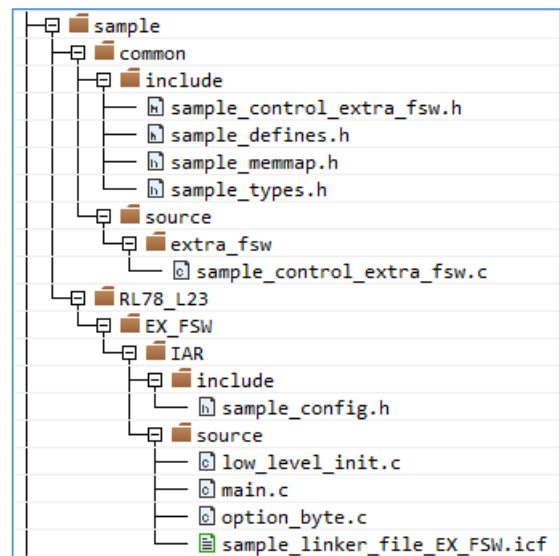
include グループ内



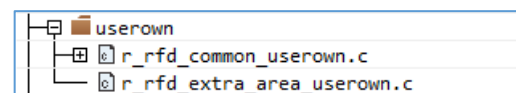
source グループ内



sample グループ内



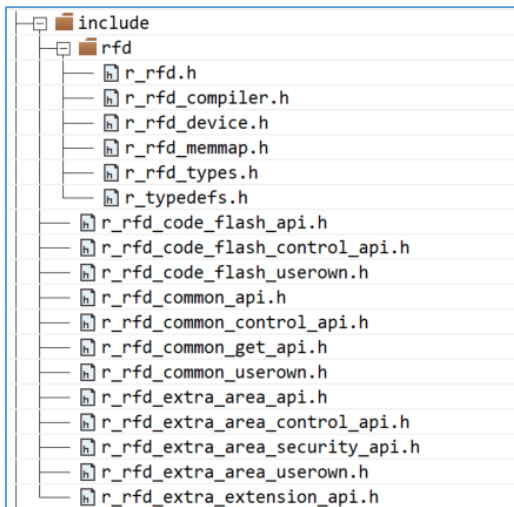
userown グループ内



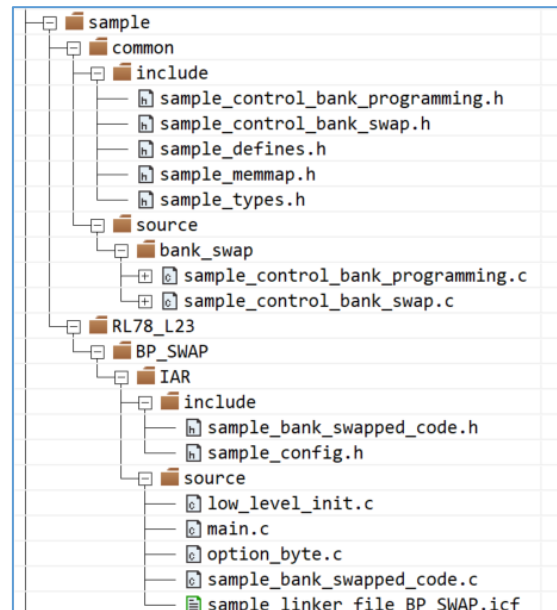
(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御を実行する場合の対象グループと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各グループ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを示します。

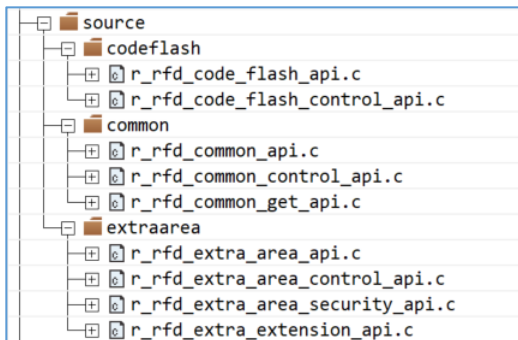
include グループ内



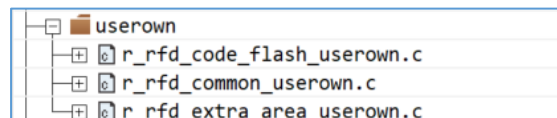
sample グループ内



source グループ内



userown グループ内



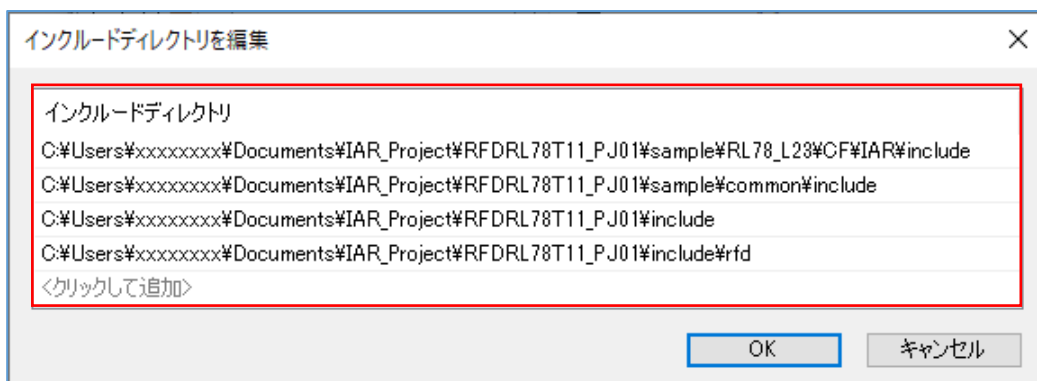
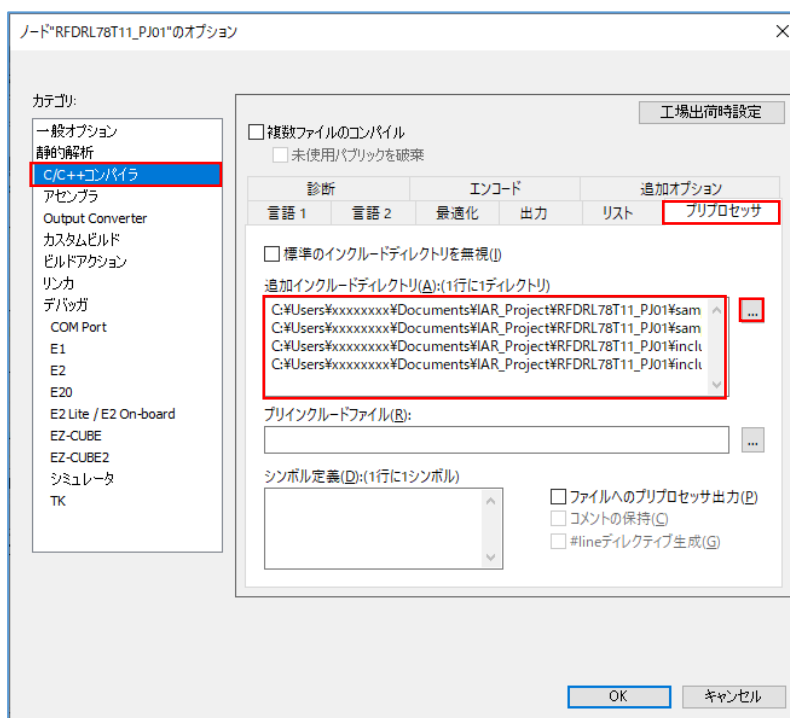
6.2.3 統合開発環境の設定

IAR コンパイラで RFD RL78 Type11 をビルドして実行するための統合開発環境の設定を行います。IAR Embedded Workbench ではツリーで[プロジェクト]をマウス右クリックして"オプション"を選択、表示された画面内の"カテゴリ"を選択して各設定を行います。

6.2.3.1 インクルード・パスの設定

IAR Embedded Workbench でのインクルード・パスの設定は、カテゴリの"C/C++コンパイラ"を選択し、"プリプロセッサ"タブで設定します（対象領域により変更）。

- [追加インクルードディレクトリ(A): (1 行に 1 ディレクトリ)]で"パス編集"ウィンドウを表示して、インクルードディレクトリのパスを設定します。



- 設定するディレクトリパスの例

"C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\"に、RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")を置いた場合の例です。

(1) コード・フラッシュ・メモリ書き換え

```
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\RL78_L23\CF\IAR\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\common\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include\rfd
```

(2) データ・フラッシュ・メモリ書き換え

```
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\RL78_L23\DF\IAR\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\common\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include\rfd
```

(3) エクストラ領域(FSW)書き換え

```
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\RL78_L23\EX_FSW\IAR\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\common\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include\rfd
```

(4) バンク・プログラミング / バンク・スワッピング制御

```
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\RL78_L23\BP_SWAP\IAR\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\sample\common\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include
C:\Users\xxxxxxx\Documents\IAR_Project\RFDRL78T11_PJ01\include\rfd
```

注) インクルードディレクトリのパス設定については、絶対パスで指定しているとプロジェクトをコピーした時に再設定が必要になります。プロジェクトをコピーしても使用できるように相対パス(\$PROJ_DIR\$)を指定することも可能です。指定方法については、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをいただき、必要に応じて設定してください。

6.2.3.2 ユーザ定義マクロの設定(IAR コンパイラ)

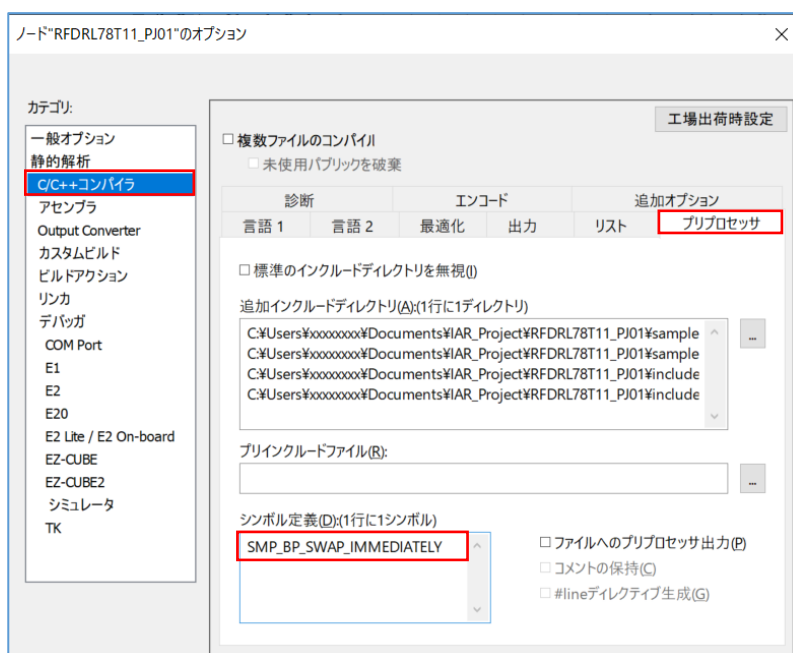
バンク・スワップ制御サンプル・プログラム関数において、「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合は、ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")を設定する必要があります。「リセット後にバンク・スワップを実行」を選択する場合、この設定は不要です。

- ・ IAR Embedded Workbench で「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択するためのマクロを“プリプロセッサ”タブで定義します。

- [シンボル定義(D) : (1 行に 1 シンボル)] 欄に以下のマクロを定義してください。

「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合に定義するマクロ :

SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY

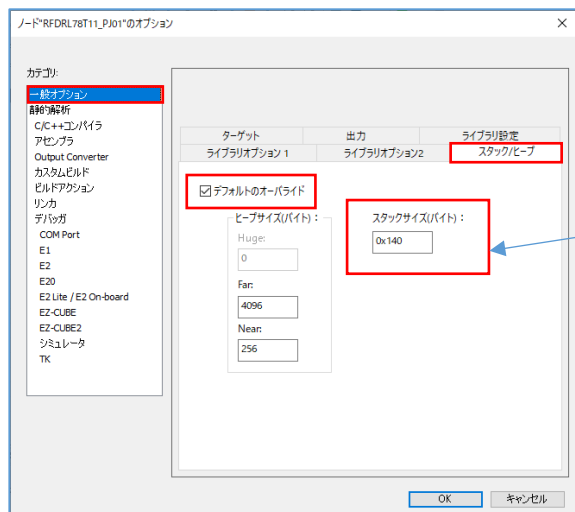
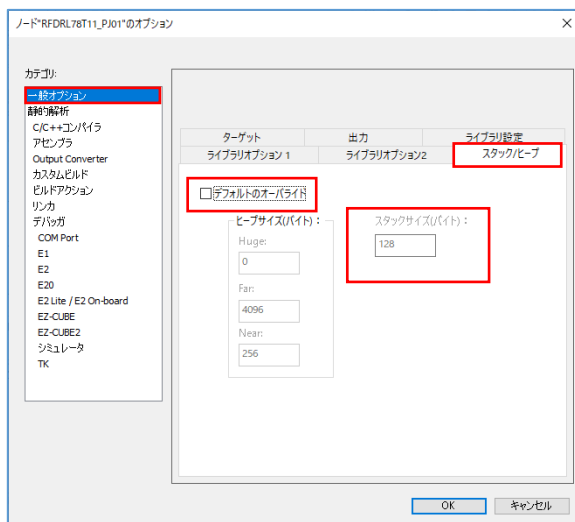


6.2.3.3 スタックの設定

RL78 用 IAR Embedded Workbench を使用する場合のスタック・サイズの初期値は 128 バイトが設定されています。そのため、ユーザ・プログラムや RFD RL78 Type11 で使用するスタックがこのサイズを超える場合に、使用スタック・サイズを変更する必要があります。

RFD RL78 Type11 でコード・フラッシュ書き換えサンプル・プログラムを使用する場合は、0x40(64byte)を書き換えるためのデータ・バッファをスタックに確保するため、0x140(64 + 256)byte 程度のスタック・サイズを設定することを推奨します。データ・フラッシュ書き換えサンプル・プログラム、またはエクストラ領域の書き換えサンプル・プログラムを使用する場合、ユーザ処理を追加することを考慮し、0x100(256)byte 程度のスタック・サイズを設定することを推奨します。バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラムを使用する場合は、1 ブロック(2KB)を書き換えるためのデータ・バッファをスタックに確保するため、0x900(2048 + 256)byte 程度のスタック・サイズを設定することを推奨します。

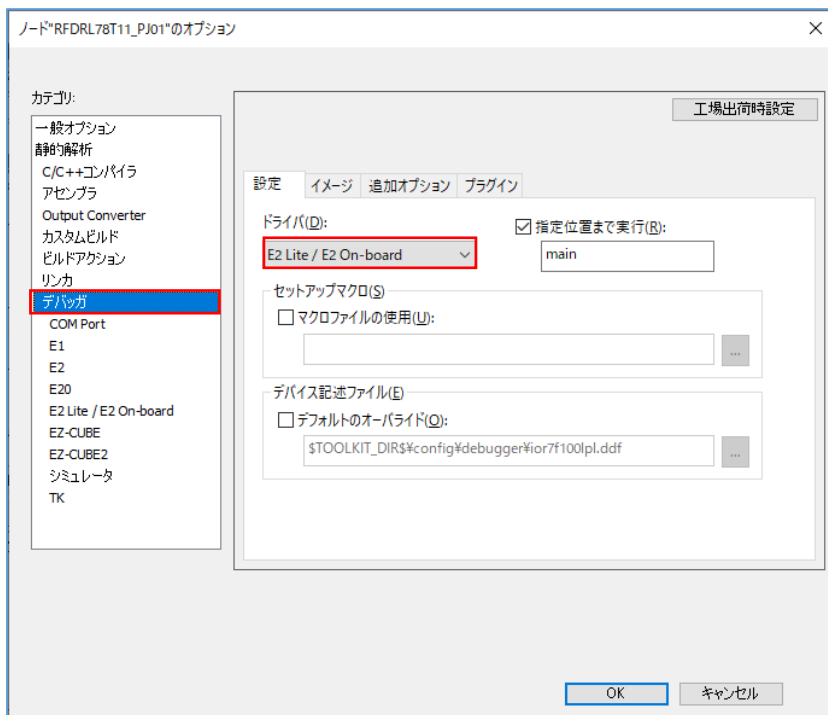
《スタックの設定例》



コード・フラッシュ書き換え : 0x140 (64+256)byte
 データ・フラッシュ書き換え : 0x100 (256)byte
 エクストラ領域書き換え : 0x100 (256)byte
 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御 :
 0x900(2048 + 256)byte

6.2.3.4 デバッガの設定

- ・ オンチップ・デバッグを実施することを前提として、[デバッガ] – [設定] タブの[ドライバ]で"E2 Lite / E2 On-board"を選択します。

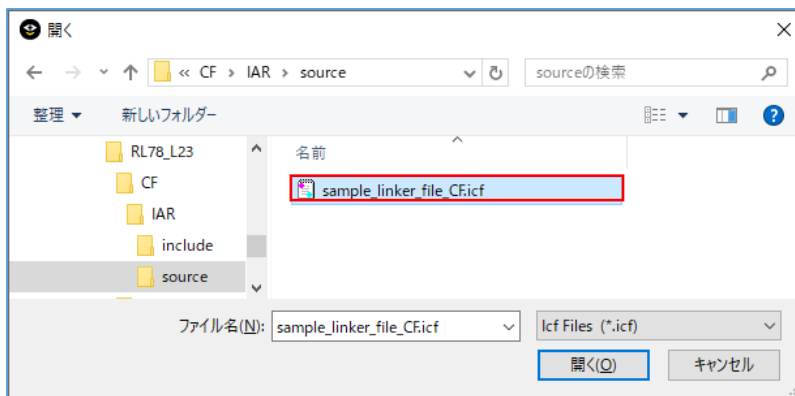
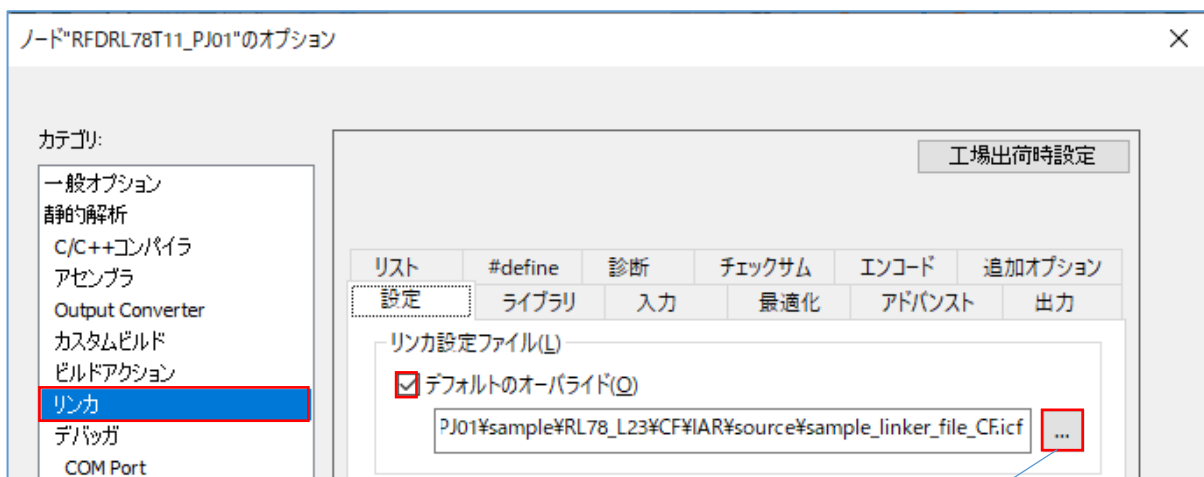


注) その他の設定項目については、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをご参照いただき、必要に応じて設定してください。

6.2.4 リンカ設定ファイル(.icf)の設定

IAR Embedded Workbench では、ビルドで実行するリンク設定をリンク設定ファイル(*.icf)に記述します。ツリーで[プロジェクト]のマウス右クリックで"オプション"を選択、表示された画面内の[リンク]で、[設定] – [デフォルトのオーバーライド(O)]にチェックを入れ、"ボタン"の"開く"画面でリンク設定ファイル(*.icf)を選択します。ここでは、RFD RL78 Type11 用に準備されている"sample_linker_file_(領域名).icf"ファイルを選択します。書き換え領域ごとのリンク設定用ファイル(*.icf)は以下の通りです。

- コード・フラッシュ書き換え用 : sample_linker_file_CF.icf (\Sample\RL78_L23\CF\IAR\source\)
- データ・フラッシュ書き換え用 : sample_linker_file_DF.icf (\Sample\RL78_L23\DF\IAR\source\)
- エクストラ領域(FSW)書き換え用 : sample_linker_file_EX_FSW.icf (\Sample\RL78_L23\EX_FSW\IAR\source\)
- バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御用 :
sample_linker_file_BP_SWAP.icf (\Sample\RL78_L23\BP_SWAP\IAR\source\)



注)リンク設定ファイルの記述内容、及び記述方法の詳細については、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをご参照ください。

6.2.4.1 セクション項目の設定

RFD RL78 Type11 で準備されているリンカ設定ファイル(*.icf)で追加しているセクションの概要を記述します。

注)リンカ設定ファイルのセクション項目の設定、及び機能の詳細は、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをご参照ください。

・ RFD RL78 Type11 の"リンカ設定ファイル"で記述しているセクション項目の設定概要

(1) コード・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションの追加

RFD_DATA, RFD_CF, SMP_CF の各セクションの初期値と RFD_CMN を ROM 領域(ROM_far)へ追加、RAM 領域(RAM_near, RAM_code)で使用するセクションを RAM へコピーする必要があります。

- ROM_far 領域の追加セクション(プログラムと RAM 領域へコピーするためのデータとプログラム初期値) : RFD_DATA_init, RFD_CMN, RFD_CF_init, SMP_CF_init
- RAM_near 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるデータ) : RFD_DATA
- RAM_code 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるプログラム) : RFD_CF, SMP_CF

(2) データ・フラッシュ・メモリ書き換えに必要なセクションの追加

RFD_DATA の初期値と RFD_CMN, RFD_DF, SMP_DF の各セクションを ROM 領域(ROM_far)へ追加し、RFD_DATA は RAM 領域(RAM_near)のセクションへコピーする必要があります。

- ROM_far 領域の追加セクション(プログラムと RAM 領域へコピーするためのデータ) : RFD_DATA_init, RFD_CMN, RFD_DF, SMP_DF
- RAM_near 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるデータ) : RFD_DATA

(3) エクストラ領域(FSW)書き換えに必要なセクションの追加

RFD_DATA, RFD_EX, SMP_EX の各セクションの初期値と RFD_CMN を ROM 領域(ROM_far)へ追加、RAM 領域(RAM_near, RAM_code)で使用するセクションを RAM へコピーする必要があります。

- ROM_far 領域の追加セクション(プログラムと RAM 領域へコピーするためのデータとプログラム初期値) : RFD_DATA_init, RFD_CMN, RFD_EX_init, SMP_EX_init
- RAM_near 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるデータ) : RFD_DATA
- RAM_code 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるプログラム) : RFD_EX, SMP_EX

(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時 :

RFD_DATA, RFD_EX, SMP_EX の各セクションの初期値と RFD_CMN, RFD_CF, SMP_CF を ROM 領域(ROM_far)へ追加、RAM 領域(RAM_near, RAM_code)で使用するセクションを RAM へコピーする必要があります。また、SMP_BPS はバンク・プログラミングで書き込むコードで、ROM 領域(ROM_far)の BPS_CODE block として 0x6000 へ配置します。

- ROM_far 領域の追加セクション(プログラムと RAM 領域へコピーするためのデータとプログラム初期値) : RFD_DATA_init, RFD_CMN, RFD_CF, SMP_CF, RFD_EX_init, SMP_EX_init
- ROM_far 領域の BPS_CODE block への追加セクション(プログラム) : SMP_BPS
- RAM_near 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるデータ) : RFD_DATA
- RAM_code 領域の追加セクション(ROM 領域からコピーされるプログラム) : RFD_EX, SMP_EX

6.2.4.2 オプション・バイトの設定

RL78 のオプション・バイト定義は、IAR Embedded Workbench 付属のリンカ設定ファイル(*.icf)、及び RFD RL78 Type11 用に準備されている "sample_linker_file_(領域名).icf" ファイルに記述されています。RFD RL78 Type11 でのオプション・バイト値は、"option_byte.c" ファイルに記述されています。

注) リンカ設定ファイルのオプション・バイトの設定については、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをご参照ください。

RFD RL78 Type11 用リンカ設定ファイル(*.icf)のオプション・バイトの定義例

```
define block OPT_BYTE with size = 4 { R_OPT_BYTE,
                                     ro section .option_byte,
                                     ro section OPTBYTE };
                                     |
place at address mem:0x000C0         { block OPT_BYTE };
```

"option_byte.c" ファイル内のオプション・バイト値の記述例

```
#pragma location = "OPTBYTE"
__root const unsigned char option_bytes[4] = {
    0x6E, /* 01101110 */
         /* ||| ||| */
         /* ||| |||+-- Watchdog timer */
         /* ||| ||| operation stopped */
         /* ||| ||| in HALT/STOP mode */
         /* ||| |||+--- Watchdog timer */
         /* ||| ||| overflow time is */
         /* ||| ||| 2^17 / fIL = */
         /* ||| ||| 3478.26 ms */
         /* ||| |||+----- Watchdog timer */
         /* ||| ||| operation disabled */
         /* ||| |||+----- 100% window open */
         /* ||| ||| period */
         /* ||| |||+----- Interval interrupt */
         /* ||| ||| is not used */
    0xFF, /* 11111111 */
         /* | */
         /* +-- LVD reset mode */
    0xE8, /* HS mode 32 MHz */
    0x85 /* OCD: enables on-chip debugging function */
};
```

- ユーザ・オプション・バイト値の説明 :

"option_byte.c" ファイル内のユーザ・オプション・バイト(000C0H-000C2H)の値は"6EFFE8"です。
(WDT 停止、LVD (reset モード)、32MHz [RL78/L23 の例])

"option_byte.c" ファイル内のオンチップ・デバッグ・オプション・バイト(000C3H)の値は"85"です。
(オンチップ・デバッグ動作許可の例)

注) 対象デバイスのユーザーズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「ユーザ・オプション・バイト」、「オンチップ・デバッグ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、ユーザ・アプリケーションで使用する設定値を書き込んでください。

6.2.5 オンチップ・デバッグの設定

プロジェクトのビルド実行後、E2 Lite を接続した状態で、[プロジェクト]メニューから[ダウンロードしてデバッグ]を選択して、デバッグを開始します。

6.2.5.1 接続エラーに関する対処の例

ここでは、オンチップ・デバッグを実行時の接続エラーに関する対処(よくある例)として、"ID コード"の不一致や"電源"が正しく設定されていない場合について説明します。

注) その他の原因によりターゲットに接続できない場合は、IAR Embedded Workbench の[Help]から各リファレンスマニュアルをご確認ください。

[ダウンロードしてデバッグ]を選択して、デバッグを開始するときに、"E2 Lite ハードウェア設定"画面が表示される場合があります。原因として、"ID コード"の不一致や"電源"が正しく設定されていない場合が考えられます。

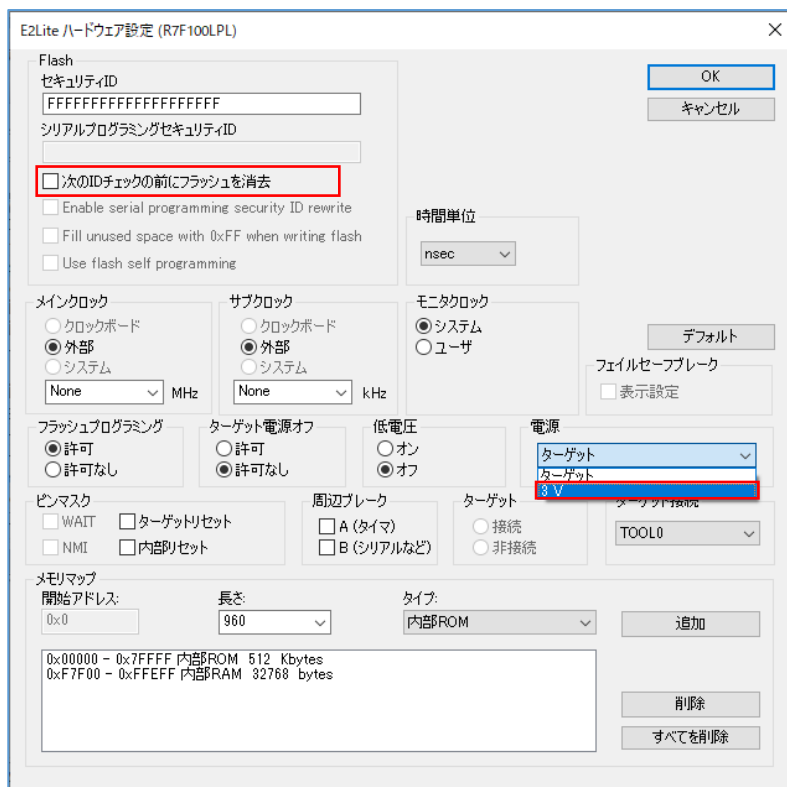
- ID コードが不一致の場合 :

"ID コードをベリファイできない。"等のメッセージが表示されることがあります。この場合は、"E2 Lite ハードウェア設定"画面で、"次の ID チェックの前にフラッシュを消去"をチェックし、一度フラッシュ・メモリを消去することで、接続できる場合があります。

- 電源が設定されていない場合 :

"電源"の初期状態は、"ターゲット"ですが E2 Lite から電源を供給する場合は、プルダウン・メニューで"3V"を選択します。

注) ターゲットに電源が供給されている場合、絶対に"3V" (E2 Lite から電源を供給) に設定しないでください。



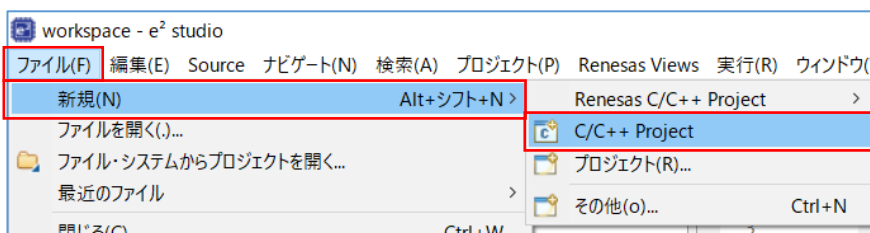
6.3 LLVM コンパイラを使用する場合のプロジェクトの作成

LLVM コンパイラは、統合開発環境として e² studio を使用して作成したプロジェクトへ RFD RL78 Type11 を登録し、ビルドすることができます。e² studio を使用した場合のサンプル・プロジェクトの作成例を示します。LLVM コンパイラ、および e² studio を理解するため、それぞれのツール製品のユーザーズマニュアルを参照してください。

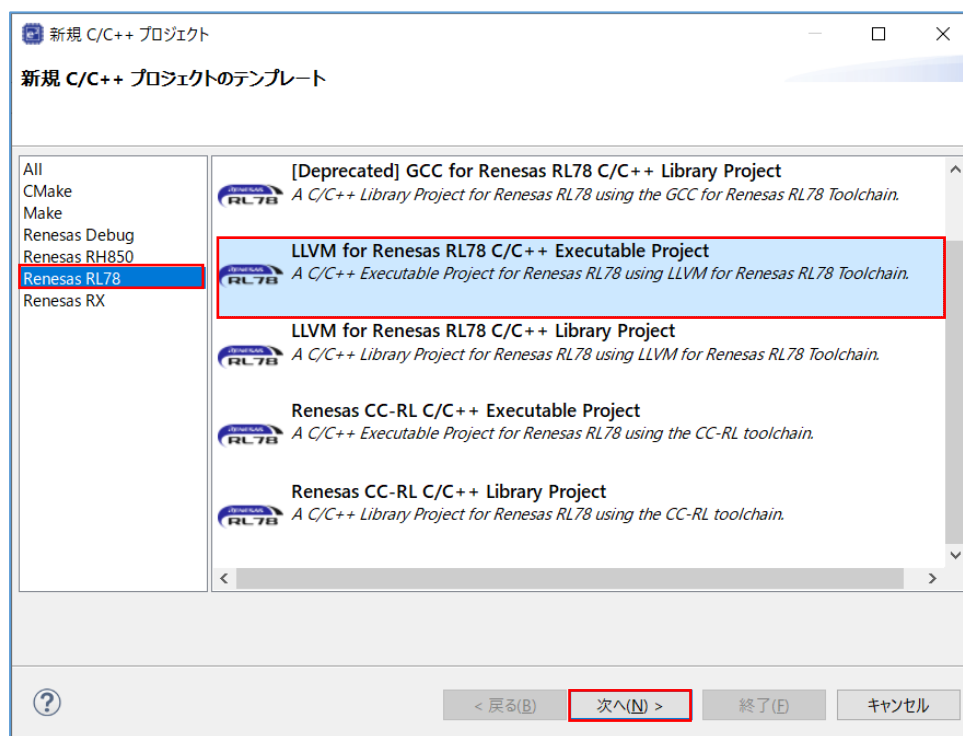
6.3.1 サンプル・プロジェクト作成例

統合開発環境(e² studio)を使用したサンプル・プロジェクト作成例

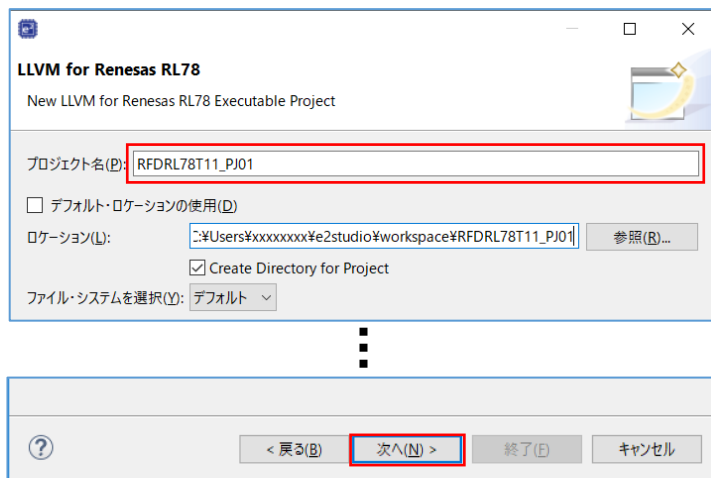
e² studio を起動し、[ファイル]メニューの[新規]から[C/C++ Project]を選択し、"新規 C/C++プロジェクトのテンプレート"ウィンドウを起動します。



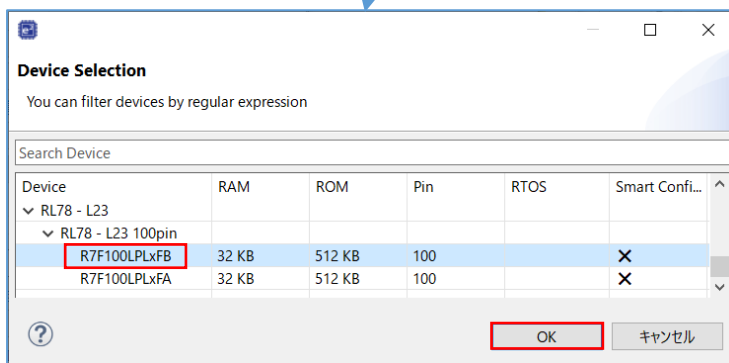
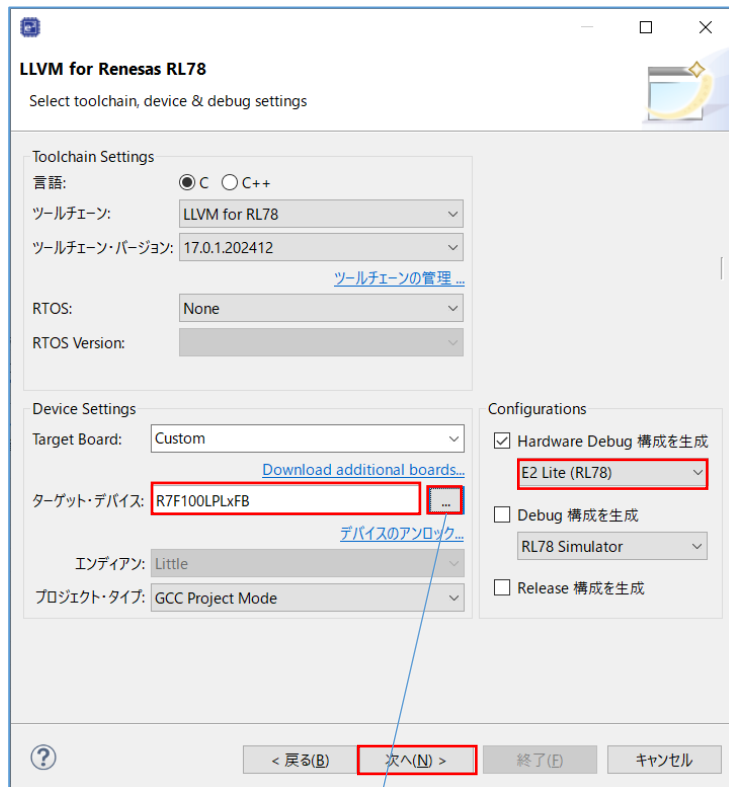
- ・ [Renesas RL78]を選択して表示した[LLVM for Renesas RL78 C/C++ Executable Project]を選択、"次へ"ボタンを押します。



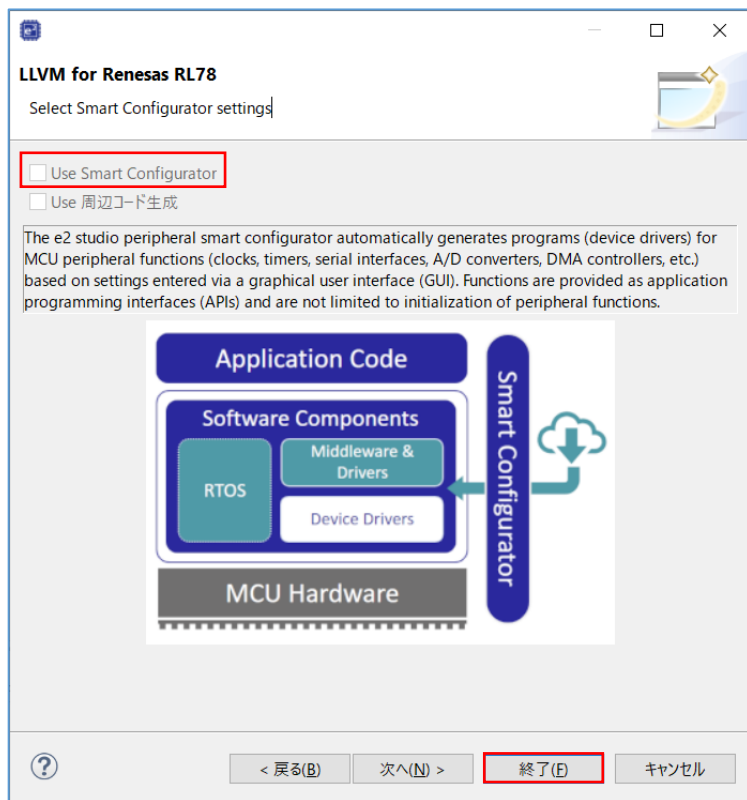
- ・ "New LLVM for Renesas RL78 "ウィンドウで、プロジェクト名を入力して"次へ"ボタンを押します。(ここでは、仮に"RFDRL78T11_PJ01"とします。)



- ・ [Device Settings]の[ターゲット・デバイス]で、"RL78 - L23" - "RL78 - L23 100pin" - "R7F100LPLxFB"を選択し[OK]ボタンを押します。
- ・ [Configurations]で"Hardware Debug 構成を生成"にチェックが入った状態で、E2 Lite (RL78)を選択します。オンチップ・デバッグを実施することを前提としています。
- ・ [次へ]ボタンを押します。



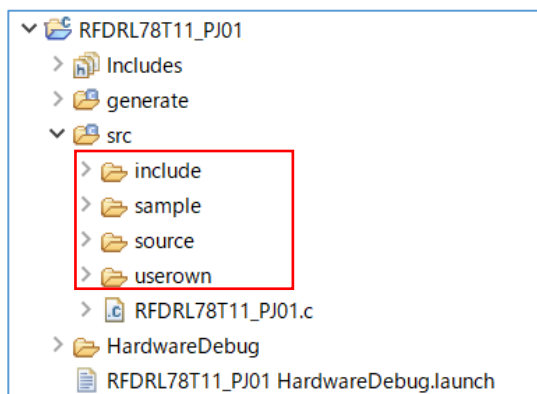
- ・ [Use Smart Configurator]のチェックを外します。
- ・ [終了]ボタンを押します。



6.3.2 対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 を使用して、各領域[(1)コード・フラッシュ・メモリ、(2)データ・フラッシュ・メモリ、(3)エクストラ領域]を書き換える場合、及び(4)バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御に必要なファイルの登録例を記述します。RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダは、"include", "source", "userown", "sample"で、書き換える領域により各フォルダ内の対象ファイルを選択して登録します。

その他の手順として、"include", "source", "userown", "sample"の全てのフォルダを登録し、不要なファイルとフォルダを、[リソース構成]-[ビルドから除外...]機能により、対象から外すこともできます。



e² studio の RFD RL78 Type11 登録時のツリー画面

注) e² studio が出力する"generate"フォルダは、必要に応じて登録してください。

・ e² studio から対象製品用に出力された最新の I/O ヘッダ・ファイルの登録

"iodefine.h"と"iodefine_ext.h"は、e² studio が対象製品用に出力する I/O ヘッダ・ファイルです。RFD RL78 Type11 に含まれている"iodefine.h", "iodefine_ext.h"の代わりに置き換えてご使用頂くことを推奨いたします。e² studio から出力された"iodefine.h", "iodefine_ext.h"を RFD RL78 Type11 内の"iodefine.h", "iodefine_ext.h"と入れ替える、もしくは上書きしてください。

・ e² studio から対象製品用に出力されたベクタテーブルファイルの登録

"interrupt_handlers.h"と"inthandler.c"と"vects.c"は、e² studio が対象製品用に出力するベクタテーブルが記載されているファイルです。製品によって異なるため、RFD RL78 Type11 に含まれている"interrupt_handlers.h", "inthandler.c", "vects.c"の代わりに置き換えてご使用ください。置き換えた場合、"vects.c"のオプション・バイト値を変更してください。オプション・バイト値の設定については、"6.3.4 オプション・バイトの設定"をご参照ください。

e² studio が"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h", "inhandler.c", "vects.c"を出力するフォルダ :

- "[プロジェクト名]/generate"

"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h"ファイルを入れ替え、もしくは上書きするフォルダ :

- コード・フラッシュ書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\CFLLVM\include"

- データ・フラッシュ書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\DFLLVM\include"

- エクストラ領域(FSW)書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\EX_FSW\LLVM\include"

- バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時 :

"\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\BP_SWAP\LLVM\include"

"inhandler.c", "vects.c"ファイルを入れ替え、もしくは上書きするフォルダ :

- コード・フラッシュ書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\CFLLVM\source"

- データ・フラッシュ書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\DFLLVM\source"

- エクストラ領域(FSW)書き換え時 : "\\[プロジェクト名]src\sample\RL78_L23\EX_FSW\LLVM\source"

- バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時 :

"\\[プロジェクト名]sample\RL78_L23\BP_SWAP\LLVM\source"

・ e² studio の機能により自動的に追加されたファイルの除外

作成されたプロジェクトには、自動的に追加されるファイルがあります。これらと同様のファイルは、RFD RL78 Type11 の"sample"フォルダ内にも存在するため、プロジェクト・ツリーから各ファイルを選択し、e² studio の機能を使用してプロジェクトから外します。

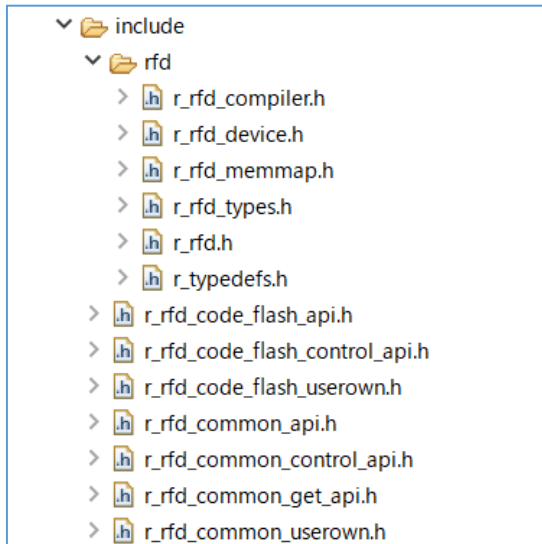
- e² studio ではツリーでファイルをマウス右クリックしメニューから"削除"、もしくは"プロパティ"で表示された[設定]画面で、[ビルドからリソースを除外]にチェックを入れ、対象ファイル(対象フォルダ)を除外します。

[プロジェクト名]/generate フォルダ内の"hwininit.c", "linker_script.ld", "start.S"、および[プロジェクト名]/src フォルダ内の[プロジェクト名].c (ここでは"RFDRL78T11_PJ01.c")については、RFD RL78 Type11 では未使用なのでプロジェクトから除外します。

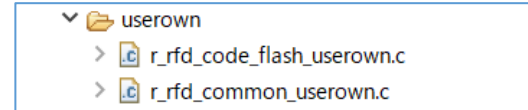
(1) コード・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを以下に示します。

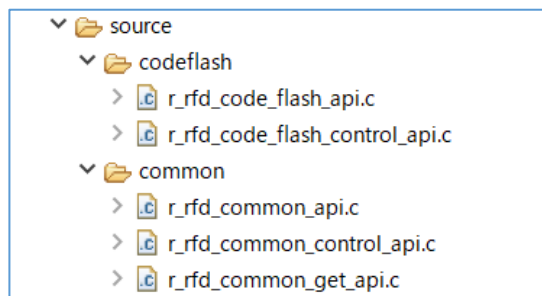
include フォルダ内



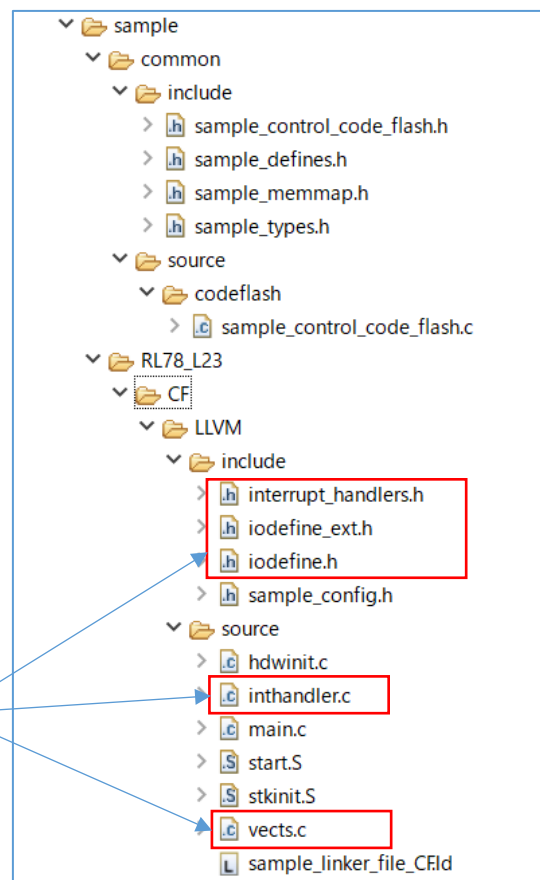
userown フォルダ内



source フォルダ内



sample フォルダ内

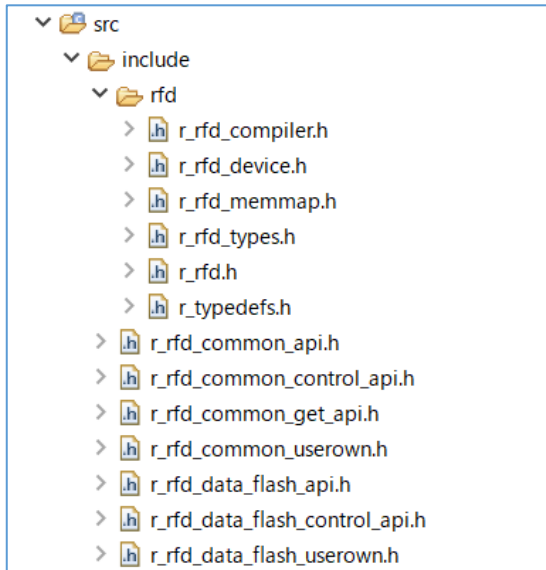


e² studio で出力した"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h", "inthandler.c", "vects.c" に置き換えてください。
※"vects.c"は、オプション・バイト値を変更してください。

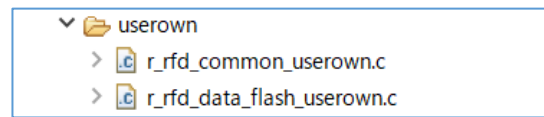
(2) データ・フラッシュ・メモリを書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを以下に示します。

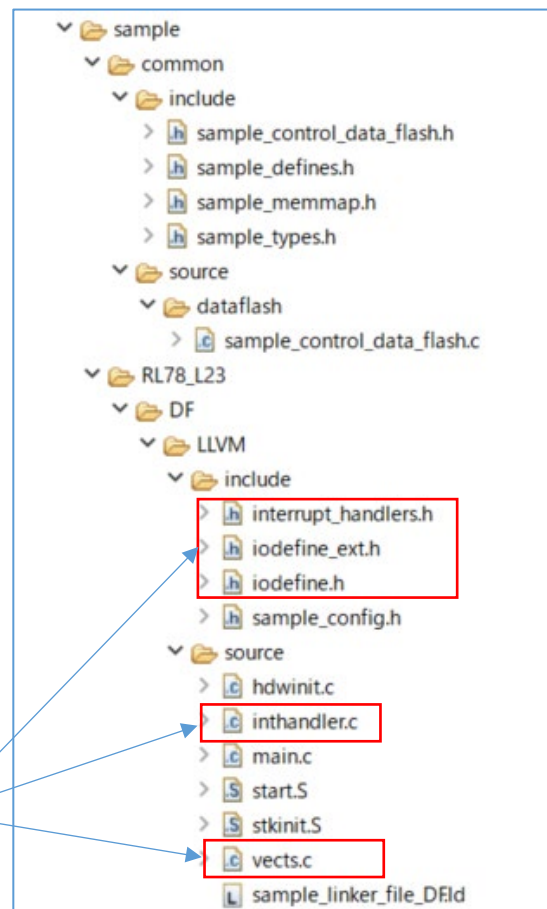
include フォルダ内



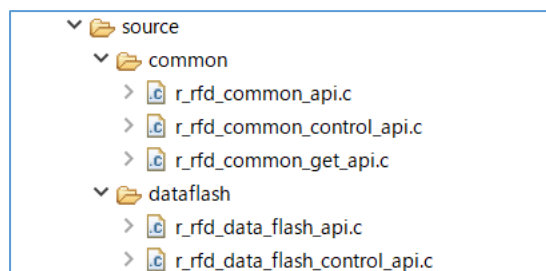
userown フォルダ内



sample フォルダ内



source フォルダ内

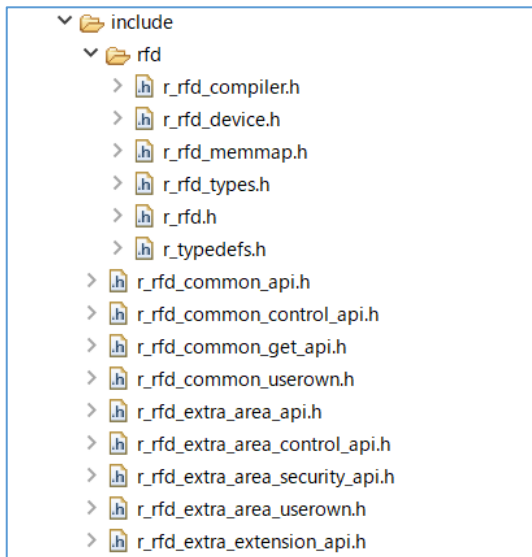


e² studio で出力した"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h", "inthandler.c", "vects.c" に置き換えてください。
※"vects.c"は、オプション・バイト値を変更してください。

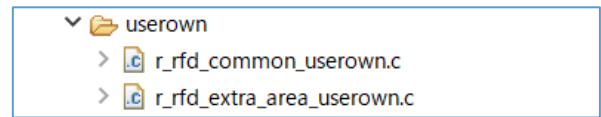
(3) エクストラ領域(FSW 設定)を書き換える場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを以下に示します。

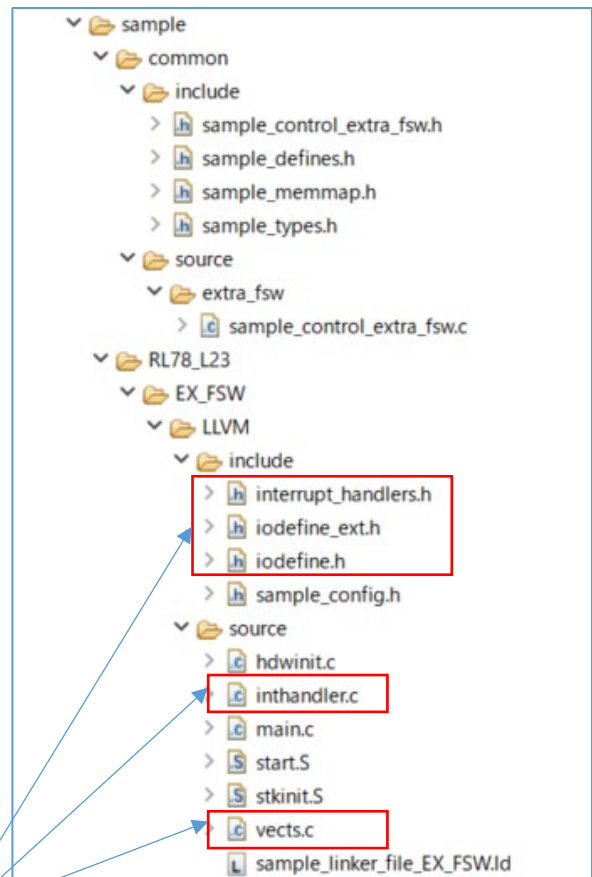
include フォルダ内



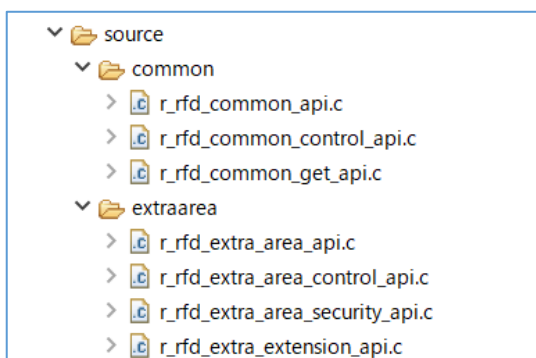
userown フォルダ内



sample フォルダ内



source フォルダ内



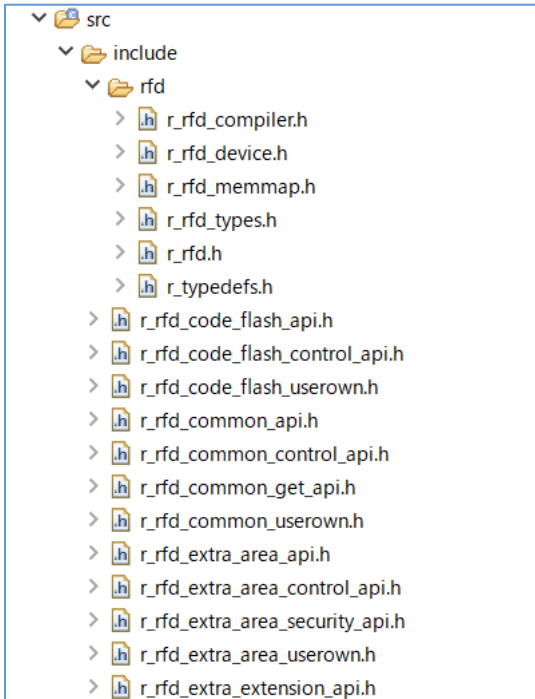
e² studio で出力した"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h", "inthandler.c", "vects.c" に置き換えてください。

※"vects.c"は、オプション・バイト値を変更してください。

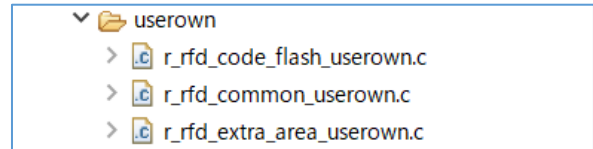
(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御を実行する場合の対象フォルダと対象ファイルの登録

RFD RL78 Type11 ソースプログラムファイルの各フォルダ("include", "source", "userown", "sample")と登録ファイルを以下に示します。

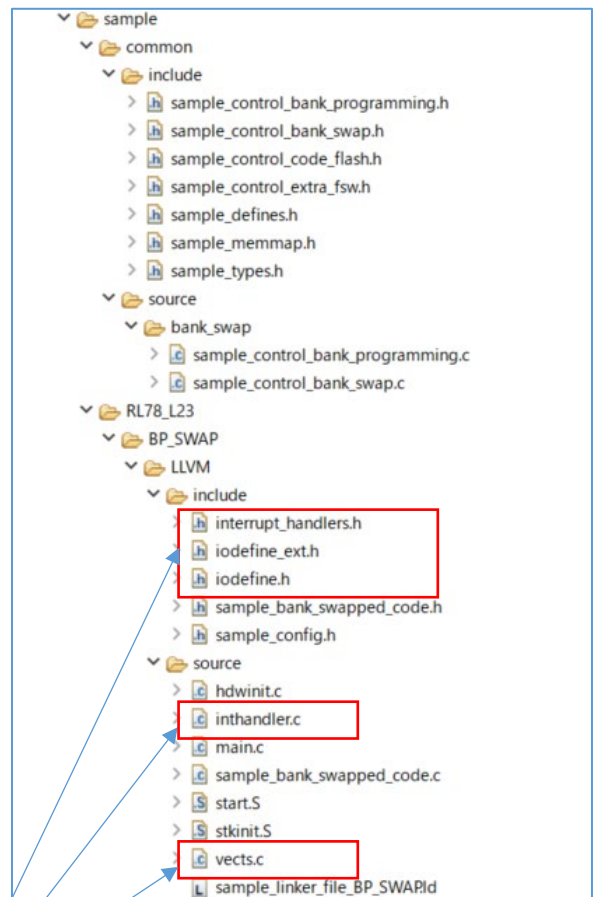
include フォルダ内



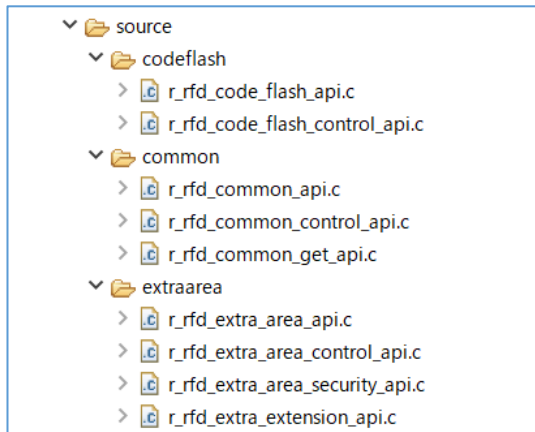
userown フォルダ内



sample フォルダ内



source フォルダ内



e² studio で出力した"iodefine.h", "iodefine_ext.h", "interrupt_handlers.h", "inthandler.c", "vects.c" に置き換えてください。
 ※"vects.c"は、オプション・バイト値を変更してください。

6.3.3 ビルド・ツールの設定

LLVM コンパイラで RFD RL78 Type11 をビルドして実行するための e² studio の設定を行います。

e² studio ではツリーのプロジェクト(ここでは"RFDRL78T11_PJ01")をマウスの右クリックで"プロパティ"を選択することにより、表示された画面内のビルド・ツールの各設定を行います。

6.3.3.1 インクルード・パスの設定

e² studio でのインクルード・パスの設定は、"プロパティ"で表示されたウィンドウで設定(対象領域により変更)。

- "C/C++ビルド" [設定] - "Compiler" [Includes]で表示された画面でインクルード・ファイルのパスを設定します。

(1) コード・フラッシュ・メモリ書き換え

```

${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\CF\LLVM\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```

(2) データ・フラッシュ・メモリ書き換え

```

${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\DF\LLVM\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```

(3) エクストラ領域(FSW)書き換え

```

${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\EX_FSW\LLVM\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

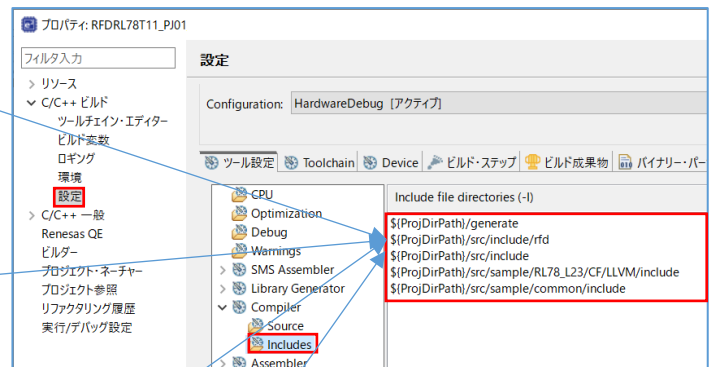
```

(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ

```

${ProjDirPath}\src\include\rfd
${ProjDirPath}\src\include
${ProjDirPath}\src\sample\RL78_L23\BP_SWAP\LLVM\include
${ProjDirPath}\src\sample\common\include

```



6.3.3.2 ユーザ定義マクロの設定(LLVM コンパイラ)

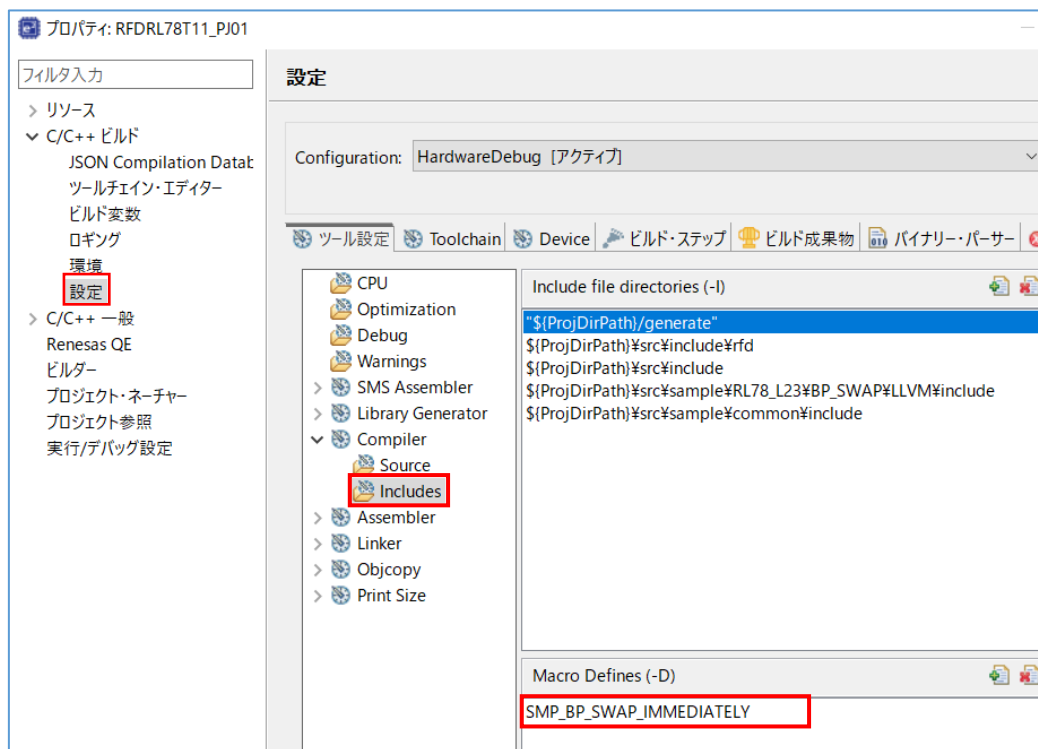
バンク・スワップ制御サンプル・プログラム関数において、「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合は、ユーザ定義マクロ("SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY")を設定する必要があります。「リセット後にバンク・スワップを実行」を選択する場合、この設定は不要です。

e² studio で「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択するためのマクロを"プロパティ"ウィンドウで定義します。

- "C/C++ビルド" [設定] – "Compiler" [Includes] で表示された"Macro Defines (-D)"の欄に以下のマクロを定義してください。

「アクティブ・バンク・スワップを実行」を選択する場合に定義するマクロ：

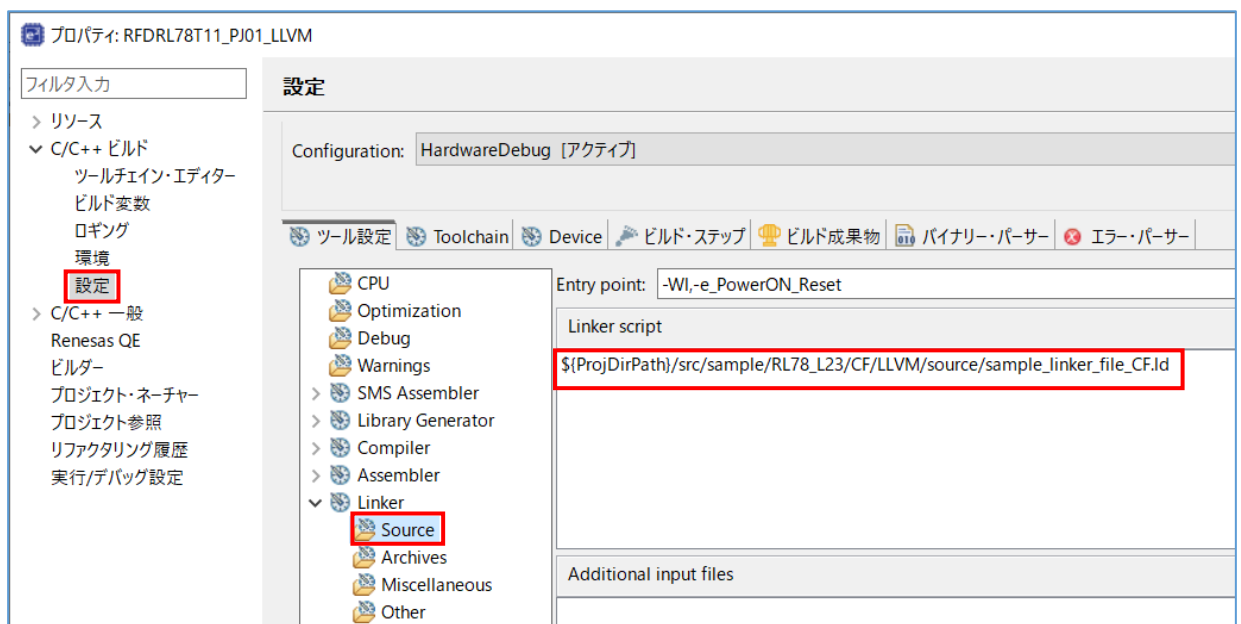
SMP_BP_SWAP_IMMEDIATELY



6.3.3.3 リンカ・スクリプトファイル(.ld)の設定

LLVM では、ビルドで実行するリンク設定をリンカ・スクリプトファイル(*.ld)に記述します。ツリーの[プロジェクト]上でマウスの右クリックで"プロパティ"を選択、"C/C++ビルド" [設定] – "Linker" [Source]で表示された画面の"Linker script"欄に、リンカ・スクリプトファイルのパスを設定します。ここでは、RFD RL78 Type11 用に準備されている"sample_linker_file_(領域名).ld"ファイルを選択します。書き換え領域ごとのリンカ・スクリプトファイル(*.ld)は以下の通りです。

- コード・フラッシュ書き換え用: sample_linker_file_CF.ld (\sample\RL78_L23\CF\LLVM\source\)
- データ・フラッシュ書き換え用: sample_linker_file_DF.ld (\sample\RL78_L23\DF\LLVM\source\)
- エクストラ領域(FSW)書き換え用: sample_linker_file_EX_FSW.ld (\sample\RL78_L23\EX_FSW\LLVM\source\)
- バンク・プログラミング / バンク・スワップ用:
sample_linker_file_BP_SWAP.ld (\sample\RL78_L23\BP_SWAP\LLVM\source\)



注) リンカ・スクリプトファイル(*.ld)の記述内容、及び記述方法の詳細については、LLVM のリファレンスマニュアルをご参照ください。

6.3.3.4 セクション項目の設定

RFD RL78 Type11 で準備されているリンカ・スクリプトファイル(*.ld)で追加しているセクションの概要を記述します。

(1) コード・フラッシュ(CF)領域書き換え時のセクション

- ROM 領域に配置されるコードのセクション(RFD_ROM_CODE) : RFD_CMN,
- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるコードのセクション(RFD_RAM_CODE) : RFD_CF, SMP_CF
- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるデータのセクション : RFD_DATA

(2) データ・フラッシュ(DF)領域書き換え時のセクション

- ROM 領域に配置されるコードのセクション(RFD_ROM_CODE) : RFD_CMN, RFD_DF, SMP_DF
- ROM 領域から RAM 領域にコピーされるデータのセクション : RFD_DATA

(3) エクストラ(EX_FSW)領域書き換え時のセクション

- ROM 領域に配置されるコードのセクション(RFD_ROM_CODE) : RFD_CMN
- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるコードのセクション(RFD_RAM_CODE) : RFD_EX, SMP_EX
- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるデータのセクション : RFD_DATA

(4) バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時のセクション

- ROM 領域に配置されるコードのセクション(RFD_ROM_CODE) : RFD_CMN, RFD_CF, SMP_CF
(RFD_ROM_BANK_CODE) : SMP_BPS

※SMP_BPS は、バンク・プログラミングで書き込むコードのセクションとして、0x6000 へ配置します。

- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるコードのセクション(RFD_RAM_CODE) : RFD_EX, SMP_EX
- ROM 領域から RAM 領域へコピーされるデータのセクション : RFD_DATA

注) LLVM コンパイラ使用時は、同一セクション内での共通処理が検出された場合に、コンパイラが自動的に別名のサブセクションを追加するような場合があるため、sample_linker_file_XX.ld ファイル("XX" = "CF" or "DF" or "EX_FSW" or "BP_SWAP")内の記述に"RFD_YYYY.*"、"SMP_YYYY.*"("YYYY" = "CF" or "DF" or "EX" or "BPS" or "DATA" or "CMN")を追加しています。

追加される可能性があるサブセクションの例 : RFD_CF.outlined-functions 等

その他、リンカ・スクリプトファイル(*.ld)の記述内容、及び記述方法の詳細については、LLVM のリファレンスマニュアルをご参照ください。

6.3.4 オプション・バイトの設定

LLVM コンパイラ使用時のオプション・バイトの設定は、"sample"フォルダに含まれる"vects.c"ファイルに記述します。

対象ファイル名: vects.c

"\[プロジェクト名]\src\sample\RL78_L23\[領域名]\LLVM\source\"

サンプル・プログラムで提供されている"vects.c"ファイルでは、オプション・バイト値とユーザ・オプション・バイト値を"Option_Bytes"に次のように設定しています。

"0x6e, 0xff, 0xe8, 0x85" (WDT 停止, LVD(reset モード), HS モード/32MHz/, オンチップ・デバッグ動作許可 [RL78/L23 の例])

```
#include "interrupt_handlers.h"

extern void PowerON_Reset (void);

const unsigned char Option_Bytes[] __attribute__((section(".option_bytes"))) = {
    0x6e, 0xff, 0xe8, 0x85
};
```

注) オンチップ・デバッグを実施することを前提とした設定例です。

対象デバイスのユーザズマニュアルで「オプション・バイト」の章の「ユーザ・オプション・バイト」「オンチップ・デバッグ・オプション・バイト」の内容をご確認いただき、設定値を書き込んでください。

6.3.5 デバッグ・ツールの設定

ここでは、デバッグ・ツールに E2 Lite を選択してオンチップ・デバッグを行う場合のターゲット・ボードとの接続の設定について説明します。デバッグ・ツール設定の詳細については、e² studio のユーザーズマニュアルを参照してご確認ください。

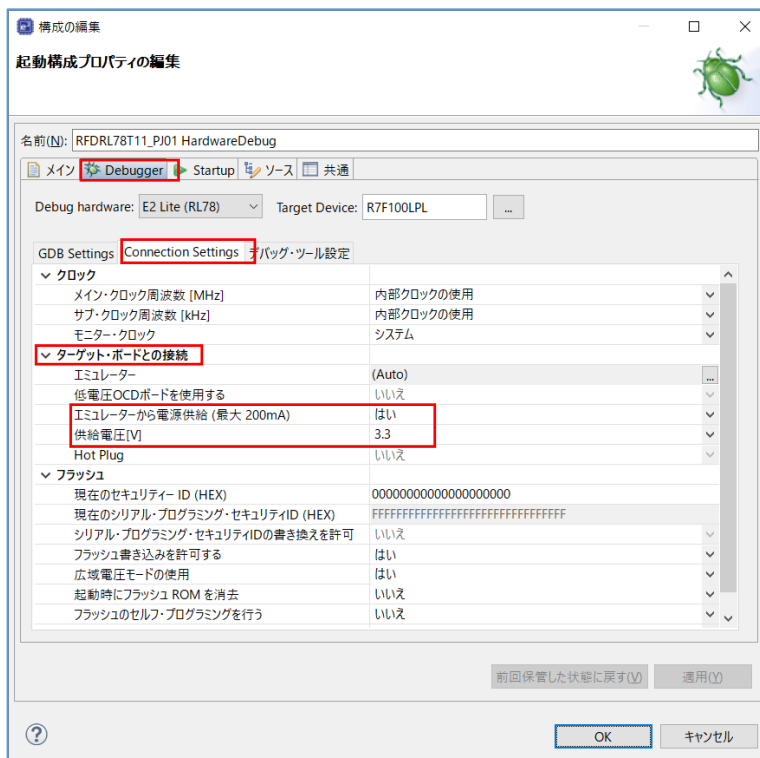
e² studio では、ツリーで対象プロジェクトをマウス右クリックし、[デバッグ]-[デバッグの構成]を選択して表示された"デバッグ構成"画面のツリーで、[Renesas GDB Hardware Debugging]の対象プロジェクト(ここでは、"RFDRL78T11_PJ01 HardwareDebug")を選択し、表示された"Debugger"タブで、デバッグ・ツール設定を行います。

注) ターゲット・ボードに他の電源が供給されている場合や電源供給容量が不足するなど、E2 Lite を含むエミュレータからターゲット・ボードへの電源供給ができない場合があります。必ず、対象デバイス用のエミュレータのユーザーズマニュアル、およびユーザーズマニュアル別冊(RL78 接続時の注意事項)をご参照の上、ご使用ください。

・ e² studio でのターゲット・ボードとの接続(E2 Lite 経由)の設定は、"Connection Settings"タブで設定

- [ターゲット・ボードとの接続] 項目

[エミュレータから電源供給(最大 200mA)]を"はい"に設定することで、E2 Lite からターゲット・ボードに電源供給(供給電圧:3.3V)することが可能です。



6.3.6 注意事項

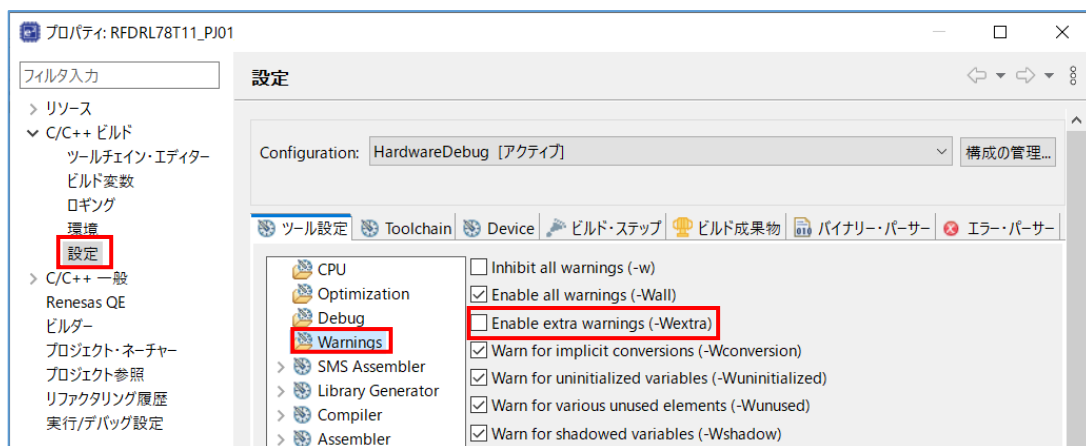
- ・ビルド時に出力される"warning"について

ビルドを実行すると r_rfd_wait_count 関数、または r_rfd_xx_wait_count 関数(xx_ = cf_ or df_ or extra_)で下記の "warning"が出力される場合があります。これは、引数"i_u08_count"が関数内で使用されていないと判断され出力されています。

r_rfd_wait_count 関数、及び r_rfd_xx_wait_count 関数はアセンブリ言語で記述され、引数"i_u08_count"は汎用レジスタで関数内に渡されているため、変数名が使用されていなくても問題がないことを確認しています。

"warning"は、e²studio の下記プロパティ設定で出力されないように設定できますが、他の"warning"も出力されなくなる可能性があるため、開発完了時に設定することを推奨します。

- "C/C++ Build" [設定] – "Warning"で表示された"Enable extra warnings (-Wextra)"のチェックを外します。



6.4 デバイス変更に伴う設定

RL78/L23(R7F100LPL) 以外のデバイスを使用する場合、ROM や RAM、データ・フラッシュ・メモリのサイズが異なるため、セクションのアドレス設定やサンプル・プログラムの一部を変更する必要があります。この項では変更手順、および変更箇所について説明しています。

設定値などの変更には以下に示す"RL78/L23 用 MCU リスト"を参照し、使用しているデバイスにあわせて設定値などを変更します。下記に、RL78/L23 用 MCU リストの参照例と変更箇所の記載例を示します。

・ RL78/L23 用 MCU リスト

MCU Group	Code Flash memory		User RAM		Data Flash memory		Target MCU name
	Size (bytes)	Start/End Address	Size (bytes)	Start/End Address	Size (bytes)	Start/End Address	
RL78/L23	64K	0x00000 - 0x0FFFF	16K	0xFBF00 - 0xFFEFF	8K	0xF1000 - 0xF2FFF	R7F100LxE (x = F, G, J, L)
	128K	0x00000 - 0x1FFFF	16K	0xFBF00 - 0xFFEFF	8K	0xF1000 - 0xF2FFF	R7F100LxG (x = F, G, J, L, M, P)
	256K	0x00000 - 0x3FFFF	32K	0xF7F00 - 0xFFEFF	8K	0xF1000 - 0xF2FFF	R7F100LxJ (x = F, G, J, L, M, P)
	512K	0x00000 - 0x7FFFF	32K	0xF7F00 - 0xFFEFF	8K	0xF1000 - 0xF2FFF	R7F100LxL (x = F, G, J, L, M, P)

MCU Group	[R-1]	[R-2]	[R-3]	[R-4]	[R-5]	[R-6]	[R-7]	Target MCU name
	RAM Start Address	ROM End Address 1	ROM End Address 2	Data Flash End Address	OCD_ROM	Trace_RAM	END_BLOCK	
RL78/L23	0xFBF00	0x0FFFF	-	0xF2FFF	0xFE00	0xFC300	32	R7F100LxE (x = F, G, J, L)
	0xFBF00	0x0FFFF	0x1FFFF	0xF2FFF	0x1FE00	0xFC300	64	R7F100LxG (x = F, G, J, L, M, P)
	0xF7F00	0x0FFFF	0x3FFFF	0xF2FFF	0x3FE00	0xF8300	128	R7F100LxJ (x = F, G, J, L, M, P)
	0xF7F00	0x0FFFF	0x7FFFF	0xF2FFF	0x7FE00	0xF8300	256	R7F100LxL (x = F, G, J, L, M, P)

- RL78/L23 用 MCU リストの参照例

例えば、次の図のように[R-1] が指している箇所の設定値 (RAM の先頭アドレス) を変更するとします。ここでは、RL78/L23 用 MCU リストに記載されている RAM の先頭アドレス [R-1] (RAM Start Address) の設定値を参照して、RL78/L23(R7F100LLG) の値を設定します。

例) RAM の先頭アドレス変更箇所 : RL78/L23(R7F100LPL RAM: 32KB)

	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_CF_f
	SMP_CF_f
[R-1] →	0xF7F00
	.dataR
	bss
	RFD_DATA_nR

例) RL78/L23(R7F100LLG RAM: 16KB) を使用する場合の RAM の先頭アドレス値を設定

	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_CF_f
	SMP_CF_f
	0xFBF00
	.dataR
	bss
	RFD_DATA_nR

[R-1] に設定する値は、RL78/L23 用 MCU リストを参照して対象デバイスの RAM の先頭アドレスを設定します。対象 MCU Group の Target MCU name の列から、R7F100LxG の行を検索します。次に、[R-1] の列から R7F100LxG の行と交わるセルを検索します。

"0xFBF00" が該当するので、RL78/L23(R7F100LxG) における [R-1] の設定値に "0xFBF00" を設定します。

MCU Group	[R-1]	[R-2]	[R-3]	[R-4]	[R-5]	[R-6]	[R-7]	Target MCU name
	RAM Start Address	ROM End Address 1	ROM End Address 2	Data Flash End Address	OCD_ROM	Trace_RAM	END_BLOCK	
RL78/L23	0xFBFB00	0x0FFFF	-	0xF2FFF	0xFE00	0xFC300	32	R7F100LxE (x = F, G, J, L)
	0xFBFB00	0x0FFFF	0x1FFFF	0xF2FFF	0x1FE00	0xFC300	64	R7F100LxG (x = F, G, J, L, M, P)
	0xF7F00	0x0FFFF	0x3FFFF	0xF2FFF	0x3FE00	0xF8300	128	R7F100LxJ (x = F, G, J, L, M, P)
	0xF7F00	0x0FFFF	0x7FFFF	0xF2FFF	0x7FE00	0xF8300	256	R7F100LxL (x = F, G, J, L, M, P)

- 変更箇所の記載例

「6.3.1 CC-RL コンパイラ環境の設定」以降に、RL78/L23(R7F100LPL)の設定値から変更が必要な箇所を記載しています。その変更が必要な箇所には、"[R- x] →" のように示しているので、RL78/L23 用 MCU リストから使用しているデバイスに該当する[R- x] の設定値を検索し、[R- x] に設定値を入力します。(x = 1, 2, 3...)

- コード・フラッシュ(CF)書き換え時のセクション設定 (RAM の先頭アドレス) の変更箇所の例 :

CS+ (CC-RL コンパイラ)

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 RAM: 32KB

例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 RAM: 16KB

The image shows two side-by-side screenshots of the 'Section Settings' dialog box. Both windows have a table with columns for 'アドレス' (Address) and 'セクション' (Section).
 The left window is for 'RL78/L23(R7F100LPL)'. The 'dataR' section is listed with address '0xF7F00'. This row is highlighted with a red box, and a red label '[R-1]' is placed to its left. An arrow points from this label to the right window.
 The right window is for 'RL78/L23(R7F100LLG)'. The 'dataR' section is listed with address '0xFBFB00'. This row is also highlighted with a red box.
 Both windows have buttons for '追加(A)...', '変更(M)...', '複数書き付け(O)...', '削除(R)', '↑(U)', '↓(D)', 'インポート(I)...', and 'エクスポート(E)...'. At the bottom are 'OK', 'キャンセル', and 'ヘルプ(H)' buttons.

6.4.1 CC-RL コンパイラ環境の設定

CC-RL コンパイラ環境(CS+, e² studio)を使用する場合の変更箇所と変更例を記載します。

6.4.1.1 セクション設定

セクション設定で使用する製品の RAM 領域の先頭アドレスを設定します。

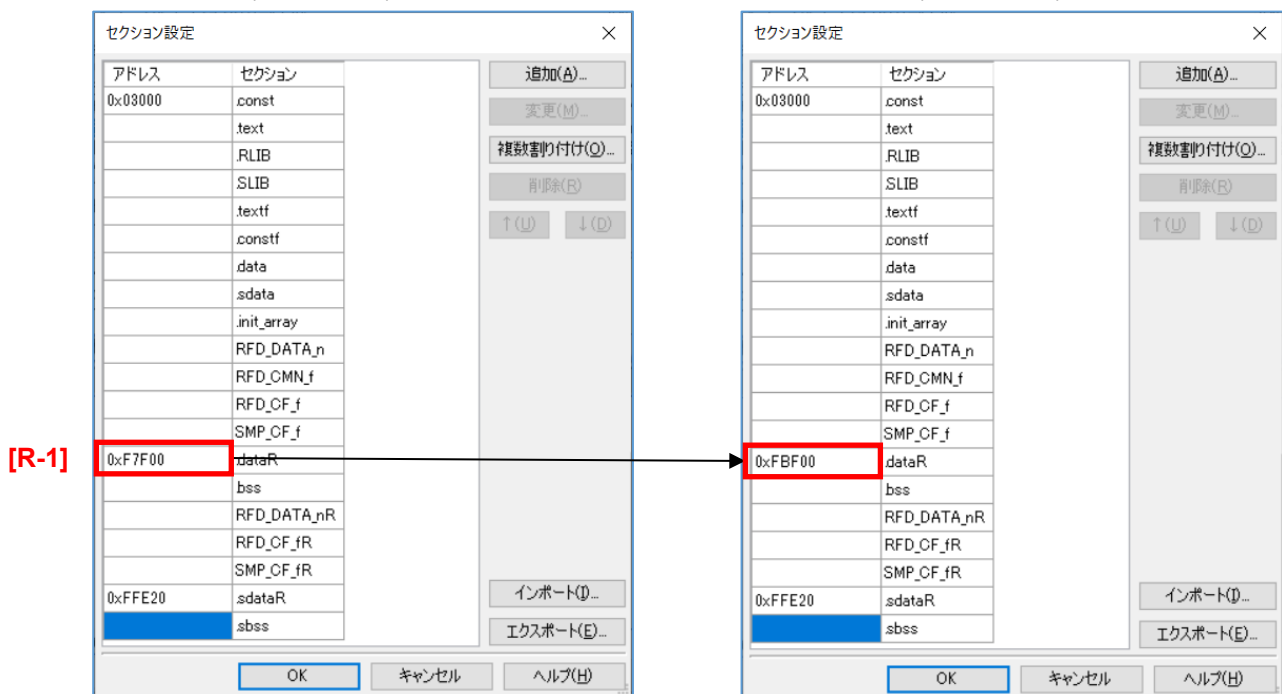
RL78/L23(R7F100LPL)から RL78/L23(R7F100LLG)へ変更する場合を例として示します。RAM のサイズが 32KB から 16KB へ変更されるため、RAM の先頭アドレスを"0xF7F00"から"0xFBF00"へ変更します。各製品の RAM の先頭アドレスについては、RL78/L23 用 MCU リストの[R-1] 列をご確認ください。

- ・ CS+での CF/DF/EX 書き換え時のセクション設定 (RAM の先頭アドレス) の変更箇所の例

- コード・フラッシュ(CF)書き換え時

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 RAM: 32KB

例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 RAM: 16KB



注) 他のサンプルも同様に RAM の先頭アドレスを"0xF7F00"から"0xFBF00"へ変更します (データ・フラッシュ書き換え時、エクストラ領域書き換え時、及びバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時[バンク機能搭載のデバイスのみ使用可能]) 。

・ e² studio での CF/DF/EX 書き換え時のセクション設定 (RAM の先頭アドレス) の変更箇所の例

- コード・フラッシュ(CF)書き換え時

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 RAM: 32KB

例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 RAM: 16KB

セクション・ビューア:

アドレス	セクション名
0x00003000	.const
	.text
	.data
	.sdata
	.RLIB
	.SLIB
	.textf
	.constf
	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_CF_f
	SMP_CF_f
0x000F7F00	dataR
	.bss
	RFD_DATA_nR
	RFD_CF_fR
	SMP_CF_fR
0x000FFE20	.sdataR
	.sbss

セクション・ビューア:

アドレス	セクション名
0x00003000	.const
	.text
	.data
	.sdata
	.RLIB
	.SLIB
	.textf
	.constf
	RFD_DATA_n
	RFD_CMN_f
	RFD_CF_f
	SMP_CF_f
0x000FBF00	dataR
	.bss
	RFD_DATA_nR
	RFD_CF_fR
	SMP_CF_fR
0x000FFE20	.sdataR
	.sbss

注) 他のサンプルも同様に RAM の先頭アドレスを"0xF7F00"から"0xFBF00"へ変更します (データ・フラッシュ書き換え時、エクストラ領域書き換え時、及びバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御時[バンク機能搭載のデバイスのみ使用可能]) 。

6.4.1.2 デバッグ設定

RFD RL78 Type11 を RL78/L23 で使用する場合、デバッグ使用時のデバッグ・モニタ領域の範囲が異なります。

- デバッグ・モニタ領域の先頭アドレスは、ROM 領域の終了アドレスから"511byte(0x1FF)"を減算したアドレスを設定します。終了アドレスが"0x7FFFF"なら、"0x7FE00"を設定します。

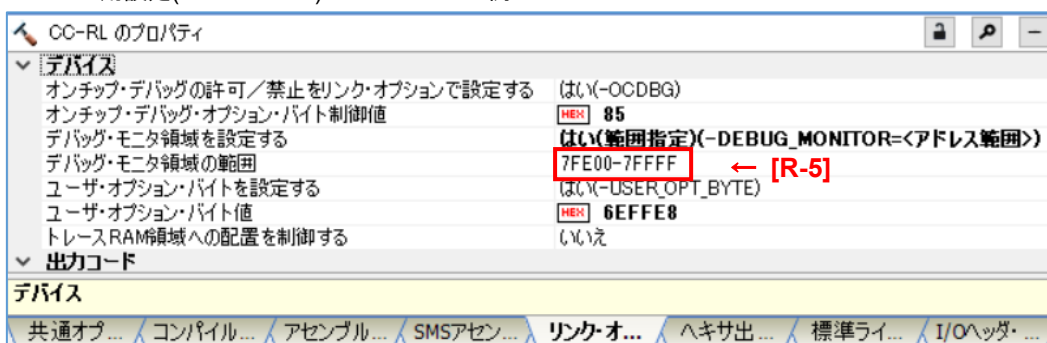
RL78/L23(R7F100LPL)から RL78/L23(R7F100LLG)へ変更する場合を例として示します。

- RL78/L23(R7F100LLG)用にデバッグ・モニタ領域の範囲を[0x1FE00 - 0x1FFFF]に設定します。

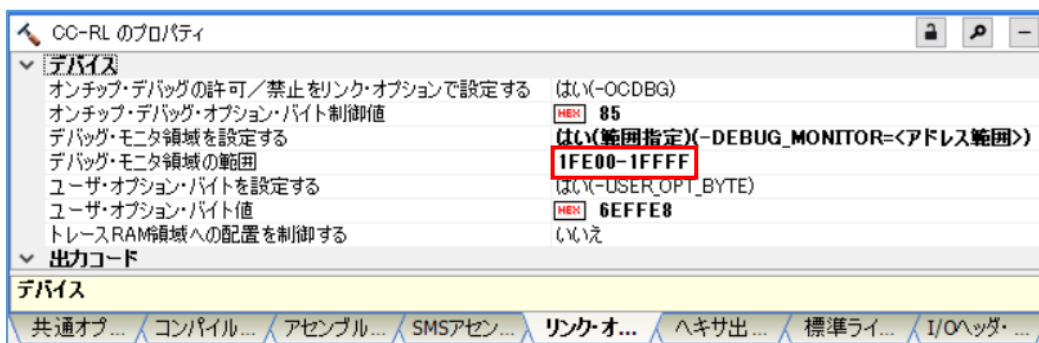
各製品のデバッグ・モニタ領域の先頭アドレスについては、RL78/L23 用 MCU リストの[R-5] 列をご確認ください。

- ・CS+でのデバッグ・モニタ領域の設定は、"リンク・オプション"タブで[デバイス]項目を選択します。

RL78/L23 用設定(ROM:512KB) R7F100LPL の例



RL78/L23 用設定(ROM:128KB) R7F100LLG の例



- ・ e² studio での OCD ・ モニタのメモリ領域の設定は、“Linker”から[デバイス]を選択します。

RL78/L23 用設定(ROM:512KB) R7F100LPL の例

ツール設定	Toolchain	Device	ビルド・ステップ	ビルド成果物	バイナリー・パーサー	エラー・パーサー
<ul style="list-style-type: none"> リソース C/C++ ビルド <ul style="list-style-type: none"> JSON Compilation Databas スタック解析 ツールチェイン・エディター ビルド変数 ロギング 環境 設定 C/C++ 一般 Renesas QE ビルダー プロジェクト・ネーチャー プロジェクト参照 実行/デバッグ設定 	<ul style="list-style-type: none"> SMS Assembler Common Compiler Assembler Linker <ul style="list-style-type: none"> 入力 拡張 リスト 最適化 セクション デバイス 出力 その他 ユーザー Library Generator Converter 		セキュリティID値 (-security_id) <input type="text" value="0"/>	シリアル・プログラミング・セキュリティID値 (-flash_security_id) <input type="text"/>	<input type="checkbox"/> RRM/DMM機能用ワーク領域を確保する (-rrm)	<input type="text"/>
	開始アドレス (-rrm=<value>)	<input type="text"/>	<input checked="" type="checkbox"/> OCDモニタのメモリ領域を確保する (-debug_monitor)	<input type="text"/>		
	メモリ領域 (-debug_monitor=<start address>-<end address>)	<input type="text" value="7FE00-7FFFF"/> ← [R-5]	<input checked="" type="checkbox"/> オプション・バイト領域のユーザ・オプション・バイトに値を設定する (-user_opt_byte)	<input type="text" value="6EFFE8"/>		
	ユーザ・オプション・バイト値 (-user_opt_byte=<value>)	<input type="text" value="6EFFE8"/>	<input checked="" type="checkbox"/> オプションバイト領域のオンチップ・デバッグ・オプション・バイトに値を設定する (-ocdbg)	<input type="text" value="85"/>		
	オンチップ・デバッグ制御値 (-ocdbg=<value>)	<input type="text" value="85"/>	<input type="checkbox"/> オプション・バイト領域のセキュリティ・オプション・バイトに値を設定する (-security_opt_byte)	<input type="text"/>		
	セキュリティ・オプション・バイト制御値 (-security_opt_byte=<value>)	<input type="text"/>	RAM領域から除外する領域 (-self/-ocdtr/-ocdhpi)	<input type="text" value="なし"/>		
	RAM領域から除外する領域 (-self/-ocdtr/-ocdhpi)	<input type="text" value="なし"/>	<input type="checkbox"/> RAM領域から除外する領域にセクションを配置したらワーニングを出力する (-selfw/-ocdtrw/-ocdhpiw)	<input type="checkbox"/>		



RL78/L23 用設定(ROM:128KB) R7F100LLG の例

ツール設定	Toolchain	Device	ビルド・ステップ	ビルド成果物	バイナリー・パーサー	エラー・パーサー
<ul style="list-style-type: none"> リソース C/C++ ビルド <ul style="list-style-type: none"> JSON Compilation Databas スタック解析 ツールチェイン・エディター ビルド変数 ロギング 環境 設定 C/C++ 一般 Renesas QE ビルダー プロジェクト・ネーチャー プロジェクト参照 実行/デバッグ設定 	<ul style="list-style-type: none"> SMS Assembler Common Compiler Assembler Linker <ul style="list-style-type: none"> 入力 拡張 リスト 最適化 セクション デバイス 出力 その他 ユーザー Library Generator Converter 		セキュリティID値 (-security_id) <input type="text" value="0"/>	シリアル・プログラミング・セキュリティID値 (-flash_security_id) <input type="text"/>	<input type="checkbox"/> RRM/DMM機能用ワーク領域を確保する (-rrm)	<input type="text"/>
	開始アドレス (-rrm=<value>)	<input type="text"/>	<input checked="" type="checkbox"/> OCDモニタのメモリ領域を確保する (-debug_monitor)	<input type="text"/>		
	メモリ領域 (-debug_monitor=<start address>-<end address>)	<input type="text" value="1FE00-1FFFF"/>	<input checked="" type="checkbox"/> オプション・バイト領域のユーザ・オプション・バイトに値を設定する (-user_opt_byte)	<input type="text" value="6EFFE8"/>		
	ユーザ・オプション・バイト値 (-user_opt_byte=<value>)	<input type="text" value="6EFFE8"/>	<input checked="" type="checkbox"/> オプションバイト領域のオンチップ・デバッグ・オプション・バイトに値を設定する (-ocdbg)	<input type="text" value="85"/>		
	オンチップ・デバッグ制御値 (-ocdbg=<value>)	<input type="text" value="85"/>	<input type="checkbox"/> オプション・バイト領域のセキュリティ・オプション・バイトに値を設定する (-security_opt_byte)	<input type="text"/>		
	セキュリティ・オプション・バイト制御値 (-security_opt_byte=<value>)	<input type="text"/>	RAM領域から除外する領域 (-self/-ocdtr/-ocdhpi)	<input type="text" value="なし"/>		
	RAM領域から除外する領域 (-self/-ocdtr/-ocdhpi)	<input type="text" value="なし"/>	<input type="checkbox"/> RAM領域から除外する領域にセクションを配置したらワーニングを出力する (-selfw/-ocdtrw/-ocdhpiw)	<input type="checkbox"/>		

6.4.2 IAR Embedded Workbench(IAR コンパイラ)を使用する場合の変更箇所

以降、IAR Embedded Workbench (IAR コンパイラ)を使用する場合の変更箇所と変更例を記載します。

6.4.2.1 デバイス用ヘッダ・ファイルの設定

RFD RL78 Type11 で用意している main.c, low_level_init.c では、RL78/L23(R7F100LPL)用のヘッダ・ファイルをインクルードしています。その他の RL78/L23 製品や RL78/L23 製品を使用する場合は、インクルードするヘッダ・ファイルを使用するデバイス用のヘッダ・ファイルに変更する必要があります。

ここでは、RL78/L23(R7F100LLG)を使用する場合の例を記載します。

対象ファイル名 : main.c, low_level_init.c

- RL78/L23(R7F100LPL)用:

```
< main.c >
#include "ior7f100pl.h"
< low_level_init.c >
#include "ior7f100pl.h"
#include "ior7f100pl_ext.h"
```

- RL78/L23(R7F100LLG)を使用する場合の例:

```
< main.c >
#include "ior7f100llg.h"
< low_level_init.c >
#include "ior7f100llg.h"
#include "ior7f100llg_ext.h"
```

※ 製品のデバイス型名については、RL78/L23 用 MCU リストの"Target MCU name" 列をご確認ください。

6.4.2.2 リンカ設定ファイルの設定

RFD RL78 Type11 で提供しているサンプル・プログラムでは、RL78/L23(R7F100LPL)のセクション (ROM, RAM, Data flash の範囲) が設定されています。RL78/L23(R7F100LPL)以外のデバイスを使用する場合は、セクション設定や、デバugg使用時の TraceRAM 領域、デバugg・モニタ領域の範囲が異なるため、RFD RL78 Type11 の RL78/L23 用に提供されているリンカ設定ファイル"sample_linker_file_xx.icf (xx = CF or DF or EX_FSW or BP_SWAP)"の内容を変更します。下記に変更箇所を赤字で示していますので、RL78/L23 用 MCU リストを参照し、設定値を対象デバイス用に変更します。

対象ファイル名 : sample_linker_file_xx.icf (xx = CF or DF or EX_FSW or BP_SWAP)

RL78/L23(R7F100LPL)から RL78/L23(R7F100LLG)へ変更する場合を例として示します。

- ROM 領域を 128KB[0x00000 - **0x1FFFF**]の範囲に設定します。
- RAM 領域が 16KB[0x0FBF00 - 0x0FFEFF]のため、開始アドレスを"**0x0FBF00**"に変更します。
- Data flash 領域が 8KB[0x0F1000 - 0x0F2FFF]のため、終了アドレスを"**0x0F2FFF**"に変更します。

(1) セクション設定

ROM, RAM, Data Flash のサイズの変更箇所[sample_linker_file_xx.icf (xx = CF or EX_FSW or BP_SWAP の場合)]

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 ROM: 512KB, RAM: 32KB, Data Flash: 8KB

```
define region ROM_near = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF]; ← [R-2]
define region ROM_far = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF] | mem:[from 0x10000 to 0x1FFFFF]
    | mem:[from 0x20000 to 0x2FFFFF] | mem:[from 0x30000 to 0x3FFFFF] | mem:[from 0x40000 to 0x4FFFFF]
    | mem:[from 0x50000 to 0x5FFFFF] | mem:[from 0x60000 to 0x6FFFFF] | mem:[from 0x70000 to 0x7FFFFF];
define region ROM_huge = mem:[from 0x000D8 to 0x7FFFFF]; ← [R-2] or [R-3] 注2    ↑ [R-2], [R-3] 注1
define region SADDR = mem:[from 0xFFE20 to 0xFFEDF];
define region RAM_near = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region RAM_far = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region RAM_code = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region RAM_huge = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region VECTOR = mem:[from 0x00000 to 0x0007F];
define region CALLT = mem:[from 0x00080 to 0x000BF];
define region EEPROM = mem:[from 0xF1000 to 0xF2FFF]; ← [R-4]
```

注1 ROM サイズが 64KB よりも大きい場合、ROM サイズが増加するごとに記載を変更する必要があります。

注2 RL78/L23 用 MCU リストの[R-3] にアドレス値が入力されている場合は[R-3] の値を使用し、“-”の場合は[R-2] の値を設定してください。



例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 ROM: 128KB, RAM: 16KB, Data Flash: 8KB

```
define region ROM_near = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF];
define region ROM_far = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF] | mem:[from 0x10000 to 0x1FFFFF];
define region ROM_huge = mem:[from 0x000D8 to 0x1FFFFF];
define region SADDR = mem:[from 0xFFE20 to 0xFFEDF];
define region RAM_near = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region RAM_far = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region RAM_code = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region RAM_huge = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region VECTOR = mem:[from 0x00000 to 0x0007F];
define region CALLT = mem:[from 0x00080 to 0x000BF];
define region EEPROM = mem:[from 0xF1000 to 0xF2FFF];
```

ROM, RAM, Data Flash のサイズの変更箇所[sample_linker_file_xx.icf (xx = DF の場合)]

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 ROM: 512KB, RAM: 32KB, Data Flash: 8KB

```
define region ROM_near = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF]; ← [R-2]
define region ROM_far = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF] | mem:[from 0x10000 to 0x1FFFFF]
    | mem:[from 0x20000 to 0x2FFFFF] | mem:[from 0x30000 to 0x3FFFFF] | mem:[from 0x40000 to 0x4FFFFF]
    | mem:[from 0x50000 to 0x5FFFFF] | mem:[from 0x60000 to 0x6FFFFF] | mem:[from 0x70000 to 0x7FFFFF];
define region ROM_huge = mem:[from 0x000D8 to 0x7FFFFF]; ← [R-2] or [R-3] 注2 ↑ [R-2], [R-3] 注1
define region SADDR = mem:[from 0xFFE20 to 0xFFEDF];
define region RAM_near = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region RAM_far = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region RAM_huge = mem:[from 0xF7F00 to 0xFFE1F]; ← [R-1]
define region VECTOR = mem:[from 0x00000 to 0x0007F];
define region CALLT = mem:[from 0x00080 to 0x000BF];
define region EEPROM = mem:[from 0xF1000 to 0xF2FFF]; ← [R-4]
```

注1 ROM サイズが 64KB よりも大きい場合、ROM サイズが増加することに記載を変更する必要があります。

注2 RL78/L23 用 MCU リストの[R-3] にアドレス値が入力されている場合は[R-3] の値を使用し、“-”の場合は[R-2] の値を設定してください。



例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 ROM: 128KB, RAM: 16KB, Data Flash: 8KB

```
define region ROM_near = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF];
define region ROM_far = mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFFF] | mem:[from 0x10000 to 0x1FFFFF];
define region ROM_huge = mem:[from 0x000D8 to 0x1FFFFF];
define region SADDR = mem:[from 0xFFE20 to 0xFFEDF];
define region RAM_near = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region RAM_far = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region RAM_huge = mem:[from 0xFBF00 to 0xFFE1F];
define region VECTOR = mem:[from 0x00000 to 0x0007F];
define region CALLT = mem:[from 0x00080 to 0x000BF];
define region EEPROM = mem:[from 0xF1000 to 0xF2FFF];
```

・ ROM_far の記載例

ROM サイズごとの ROM_far への記載例を示します。対象デバイスと同じ ROM サイズの行を参考に設定してください。色を付けている箇所は、[R-2]、または[R-3] に該当する値を示しています。

- ROM サイズが 64KB 以下の場合 ([R-3] が“-"の場合)

ROM	[R-2]の値	mem:[from 0x000D8 to [R-2]];
64KB	0x0FFFF	mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFF];

- ROM サイズが 64KB 超の場合 ([R-3] が“-"以外の場合)

ROM	[R-3]の値	mem:[from 0x000D8 to [R-2]] mem:[from 0x10000 to 0x1FFFF] . . . 省略 . . . mem:[from 0xX0000 to [R-3]];
128KB	0x1FFFF	mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFF] mem:[from 0x10000 to 0x1FFFF];
256KB	0x3FFFF	mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFF] mem:[from 0x10000 to 0x1FFFF] mem:[from 0x20000 to 0x2FFFF] mem:[from 0x30000 to 0x3FFFF];
512KB	0x7FFFF	mem:[from 0x000D8 to 0x0FFFF] mem:[from 0x10000 to 0x1FFFF] mem:[from 0x20000 to 0x2FFFF] mem:[from 0x30000 to 0x3FFFF] mem:[from 0x40000 to 0x4FFFF] mem:[from 0x50000 to 0x5FFFF] mem:[from 0x60000 to 0x6FFFF] mem:[from 0x70000 to 0x7FFFF];

(2) デバッグ設定

- デバッグ・モニタ領域の先頭アドレスは、ROM 領域の終了アドレスから"511byte(0x1FF)"を減算したアドレスを設定します。終了アドレスが"0x7FFFF"なら、"0x7FE00"を設定します。
- TraceRAM 領域の先頭アドレスは、RAM 領域の先頭アドレスに"1KB(0x400)"を加算したアドレスを設定します。先頭アドレスが"0xF7F00"なら、"0xF8300"を設定します。
- オンチップ・デバッガでセルフ・プログラミングのデバッグ実行時に RAM の先頭アドレスから 128byte の領域を使用するため、RAM 領域の先頭アドレスと"127 バイト(0x7F)"を加算したアドレスを設定します。先頭アドレスが"0xF7F00"なら、"0xF7F00"と"0xF7F7F"を設定します。

RL78/L23(R7F100LPL)から RL78/L23(R7F100LLG)へ変更する場合を例として示します。

- デバッグ・モニタ領域の範囲を[from 0x1FE00 size 0x0200]に設定します。
- TraceRAM 領域の範囲を[from 0xFC300 size 0x0400]に設定します。
- セルフ・プログラミングのデバッグをするために必要な領域を[from 0xFBF00 to 0xFBF7F]に設定します。

デバッグ使用時の TraceRAM 領域、デバッグ・モニタ領域、セルフ・プログラミングのデバッグに必要な RAM 領域の変更箇所

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 ROM: 512KB, RAM: 32KB

```
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_OCD_ROM))
{
    if (__RESERVE_OCD_ROM == 1)
    {
        reserve region "OCD ROM area" = mem:[from 0x7FE00 size 0x0200]; ← [R-5]
    }
}
|
(一部省略)
|
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_OCD_TRACE_RAM))
{
    if (__RESERVE_OCD_TRACE_RAM == 1)
    {
        reserve region "OCD Trace RAM" = mem:[from 0xF8300 size 0x0400]; ← [R-6]
    }
}
|
(一部省略)
|
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM))
{
    if (__RESERVE_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM == 1)
    {
        reserve region "RESERVED_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM" = mem:[from 0xF7F00 to 0xF7F7F];
    }
}
↑ [R-1]
```



例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 ROM: 128KB, RAM: 16KB

```
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_OCD_ROM))
{
    if (__RESERVE_OCD_ROM == 1)
    {
        reserve region "OCD ROM area" = mem:[from 0x1FE00 size 0x0200];
    }
}
|
(一部省略)
|
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_OCD_TRACE_RAM))
{
    if (__RESERVE_OCD_TRACE_RAM == 1)
    {
        reserve region "OCD Trace RAM" = mem:[from 0xFC300 size 0x0400];
    }
}
|
(一部省略)
|
if (isdefinedsymbol(__RESERVE_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM))
{
    if (__RESERVE_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM == 1)
    {
        reserve region "RESERVED_FLASH_SELF_PROGRAMMING_RAM" = mem:[from 0xFBF00 to 0xFBF7F];
    }
}
```

6.4.3 LLVM コンパイラを使用する場合の変更箇所

LLVM コンパイラ環境(e² studio)を使用する場合の変更箇所と変更例を記載します。

6.4.3.1 リンカ・スクリプトファイルの設定

RFD RL78 Type11 で提供しているサンプル・プログラム(RL78_L23 フォルダ)では、RL78/L23(R7F100LPL)のセクション(ROM, RAM, MIRROR 領域の範囲)が設定されています。また、その他の RL78/L23 製品を使用する場合は、セクション設定や、デバッグ使用時の TraceRAM 領域、デバッグ・モニタ領域(OCDROM)の範囲が異なるため、RFD RL78 Type11 の RL78/L23 用に提供されているサンプル用リンカ・スクリプトファイル(sample_linker_file_xxx.ld : xxx = CF or DF or EX_FSW or BP_SWAP)の内容を変更します。下記に変更箇所を赤字で示していますので、RL78/L23 用 MCU リストを参照し、対象デバイス用に設定値を変更してください。

対象ファイル名 : sample_linker_file_xxx.ld (xxx = CF or DF or EX_FSW or BP_SWAP)

RL78/L23(R7F100LPL)から RL78/L23(R7F100LLG)へ変更する場合を例として示します。

- OCDROM(デバッグ・モニタ領域)の先頭アドレスは、ROM 領域の終了アドレスから"511byte(0x1FF)"を減算したアドレスを設定します。ROM 領域の終了アドレスが"0x1FFFF"なら、OCDROM の ORIGIN には"0x1FE00" [R-5]を設定します。
- ROM 領域のサイズは、"0xD8"から OCDROM の開始アドレスまでの領域を設定します。OCDROM の開始アドレスが"0x1FE00"であれば、ROM の LENGTH には、OCDROM の開始アドレス"0x1FE00"から"0xD8"を減算した値を 10 進数にした"130344"を設定します。
- MIRROR(ミラー領域)の先頭アドレス([R-4]+1)、およびサイズは、デバイスによって異なります。RL78/L23(R7F100LLG)の場合は、MIRROR の ORIGIN には、ミラー領域の先頭アドレスである"0xF3000"を設定し、LENGTH には、ミラー領域の先頭アドレス"0xF3000"からミラー領域の終了アドレス"0xFBEFF"([R-1]-1)までの値を 10 進数にした"36608"を設定します。ミラー領域の詳細は、デバイスのハードウェアマニュアルをご確認ください。
- RAM 領域の ORIGIN には、RAM の先頭アドレス"0xFBF00" [R-1]を設定し、LENGTH には 16KB を 10 進数にした"16384"を設定します。
- TRACERAM 領域は、RAM の先頭アドレスに 1024 バイトを加算したアドレスから 1024 バイトの領域を使用するため、ORIGIN には"0xFC300" [R-6]を設定します。
また、トレース機能を使用しない場合や、デバイスによっては使用できない場合があるため、TRACERAM 領域の詳細は、デバイスのハードウェアマニュアルをご確認ください。

(1) MEMORY 設定 (CF, DF, EX_FSW, BP_SWAP 共通)

RL78/L23 用設定(ROM:512KB, RAM:32KB,DF:8KB) R7F100LPL の例

```

MEMORY
{
  VEC : ORIGIN = 0x0, LENGTH = 4
  IVEC : ORIGIN = 0x4, LENGTH = 188
  CALLT0 : ORIGIN = 0x80, LENGTH = 0x40
  OPT : ORIGIN = 0xC0, LENGTH = 4
  SEC_ID : ORIGIN = 0xC4, LENGTH = 10
  OCDSTAD : ORIGIN = 0xCE, LENGTH = 10
  OCDROM : ORIGIN = 0x7FE0, LENGTH = 512 ← [R-5]
  ROM : ORIGIN = 0xD8, LENGTH = 523560
  MIRROR : ORIGIN = 0xF3000, LENGTH = 20224 ← [R-4] + 1
  SADDR : ORIGIN = 0xFFE20, LENGTH = 0x000a0
  RAM : ORIGIN = 0xF7F00, LENGTH = 32768 ← [R-1]
  TRACERAM : ORIGIN = 0xF8300, LENGTH = 1024 ← [R-6]
}

```



RL78/L23 用設定(ROM: 128KB, RAM: 16KB, DF: 8KB) R7F100LLG の例

```

MEMORY
{
  VEC : ORIGIN = 0x0, LENGTH = 4
  IVEC : ORIGIN = 0x4, LENGTH = 188
  CALLT0 : ORIGIN = 0x80, LENGTH = 0x40
  OPT : ORIGIN = 0xC0, LENGTH = 4
  SEC_ID : ORIGIN = 0xC4, LENGTH = 10
  OCDSTAD : ORIGIN = 0xCE, LENGTH = 10
  OCDROM : ORIGIN = 0x1FE0, LENGTH = 512
  ROM : ORIGIN = 0xD8, LENGTH = 130344
  MIRROR : ORIGIN = 0xF3000, LENGTH = 36608
  SADDR : ORIGIN = 0xFFE20, LENGTH = 0x000a0
  RAM : ORIGIN = 0xFBF00, LENGTH = 16384
  TRACERAM : ORIGIN = 0xFC300, LENGTH = 1024
}

```

(2) RAM 領域の開始アドレス設定

RL78/L23 用設定(ROM:512KB, RAM:32KB,DF:8KB) R7F100LPL の例

```
.data 0xF7F00 : AT(__mdata) ← [R-1]
{
    . = ALIGN(2);
    PROVIDE (__datastart = .);
    __data = .;
    *(.data)
    *(.data.*)
    . = ALIGN(2);
    /*INPUT_SECTION_FLAGS(!SHF_EXECINSTR,SHF_WRITE,SHF_ALLOC)>(*_*_n)*/
    __edata = .;
} >RAM
```



RL78/L23 用設定(ROM:128KB, RAM: 16KB,DF: 8KB) R7F100LLG の例

```
.data 0xFBF00 : AT(__mdata)
{
    . = ALIGN(2);
    PROVIDE (__datastart = .);
    __data = .;
    *(.data)
    *(.data.*)
    . = ALIGN(2);
    /*INPUT_SECTION_FLAGS(!SHF_EXECINSTR,SHF_WRITE,SHF_ALLOC)>(*_*_n)*/
    __edata = .;
} >RAM
```

6.4.4 サンプル・プログラムの変更箇所(コンパイラ共通)

6.4.4.1 Extra 領域[FSW 範囲]書き換えサンプル・プログラムの変更

RFD RL78 Type11 のサンプル・プログラムで対象としている RL78/L23(R7F100LPL)と RL78/L23(R7F100LLG)では、コード・フラッシュ・メモリのブロック数が異なります。そのため、Extra 領域用"sample_config.h" の FSW 範囲エンド・ブロック用マクロ[END_BLOCK]の設定値を変更します。[END_BLOCK]は、FSW 範囲の"エンド・ブロック番号+1"を示しています([R-7])。また、コメント内では、FSW 範囲のエンド・ブロック番号([R-7]-1) と、FSW 範囲の"エンド・ブロック番号+1"([R-7]) を示しています。

例) RL78/L23(R7F100LPL)の場合、[R-7] が 256 で、[R-7]-1 は 255 です。

対象ファイル名 : sample_config.h

ファイルパス : \sample\RL78_L23\EX_FSW\IAR\include

例) RL78/L23(R7F100LPL)用設定 ROM: 512KB

```

/*****
User configurable parameters
*****/

/**** CPU frequency (MHz) ****/
/* It must be rounded up digits after the decimal point to form an integer (MHz). */
#define CPU_FREQUENCY (32u)

/**** Block numbers for FSW ****/
/* Start block number for FSW */
#define START_BLOCK (0u)
/* End block number for FSW */
/* It must be the block number points one block past the end of range for FSW. */
/* If the block number 255 is the end of range for FSW, please specify 256. */ ← [R-7]-1, [R-7]
#define END_BLOCK (256u) ← [R-7]

```



例) RL78/L23(R7F100LLG)用設定 ROM: 128KB

```

/*****
User configurable parameters
*****/

/**** CPU frequency (MHz) ****/
/* It must be rounded up digits after the decimal point to form an integer (MHz). */
#define CPU_FREQUENCY (32u)

/**** Block numbers for FSW ****/
/* Start block number for FSW */
#define START_BLOCK (0u)
/* End block number for FSW */
/* It must be the block number points one block past the end of range for FSW. */
/* If the block number 63 is the end of range for FSW, please specify 64. */
#define END_BLOCK (64u)

```

6.4.4.2 バンク・プログラミング / バンク・スワップ制御サンプル・プログラムの変更

RFD RL78 Type11 のバンク・プログラミング / バンク・スワップ制御のサンプル・プログラムにおいて、RL78/L23 のバンク・プログラミング・モード対応製品の R7F100LxL(CF:512KB)と R7F100LxJ(CF:256KB)では、分割されているコード・フラッシュ・メモリのバンク・サイズが異なります。そのため、"sample_config.h" のバンク・プログラミング用先頭ドレス("START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING")の値を変更します。

"START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING"は、" $([R-3]+1) / 2$ "で求めることができます。

例) RL78/L23(R7F100LPL)の場合、 $[R-3]$ が 0x7FFFF、 $[R-3] + 1$ は 0x80000、 $([R-3] + 1) / 2$ は 0x40000 です。

対象ファイル名 : sample_config.h

ファイルパス : \sample\RL78_L23\BP_SWAP\CCRL\include

\sample\RL78_L23\BP_SWAP\IAR\include

\sample\RL78_L23\BP_SWAP\LLVM\include

例) RL78/L23(R7F100LxL)用設定 ROM: 512KB

```

/*****
User configurable parameters
*****/

|

/**** Option byte data for swapped bank ****/
#define OPTION_BYTE_OCD_SWAPPED_BANK      (0x85u)

/**** Start address of bank programming area ****/
/* It should be the head address of the bank programming area. */
#define START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING    (0x00040000uL) ←  $([R-3]+1) / 2$ 

/**** Address to write reset vector data for swapped bank ****/
#define WRITE_ADDRESS_RESET_VECTOR        (START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING + 0x0000u)

```



例) RL78/L23(R7F100LxJ)用設定 ROM: 256KB

```

/*****
User configurable parameters
*****/

|

/**** Option byte data for swapped bank ****/
#define OPTION_BYTE_OCD_SWAPPED_BANK      (0x85u)

/**** Start address of bank programming area ****/
/* It should be the head address of the bank programming area. */
#define START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING    (0x00020000uL)

/**** Address to write reset vector data for swapped bank ****/
#define WRITE_ADDRESS_RESET_VECTOR        (START_ADDRESS_BANK_PROGRAMMING + 0x0000u)

```

7 改定記録

7.1 本版で改定された主な箇所

Rev.	発行日	改定内容	
		Page	概要
1.00	2025.4.25	-	新規作成
1.01	2025.11.10	-	一部記述の改善、名称変更、誤記修正

Renesas Flash Driver RL78 Type11 ユーザーズマニュアル

発行年月日 2025年11月10日 Rev.1.01

発行 ルネサス エレクトロニクス株式会社
〒135-0061 東京都江東区豊洲3-2-24 (豊洲フォレシア)

Renesas Flash Driver
RL78 Type11